
正にその義は煌く拳

本間 一平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正にその義は煌く拳

【Nコード】

N7690W

【作者名】

本間 一平

【あらすじ】

私は変人である。だけど目指すは正義のヒーロー。どんな困難が来てもどんなに辛くてもそれをやめることは絶対に無いとここに断言しよう。

計画的なのか臆病なのかそれとも単なる思い付きでしかないのか分からない自他共に認める変わり者、木堂正志の奮闘記。

プロローグ

話をしよう。俺こと木堂正志の形を色を、そしてアホさ加減を、その脳裏に描いてもらうためのそんな話。

日本生まれで日本育ちな良き父と母のたゆまぬ愛の結果、俺は特に問題もなくポンツとこの世に生まれでた。その後もママ、ダダと初めての言葉を発して父に微妙な顔をさせ、ほふく前進と直立不動を経て、いたずらが恒例行事となった第一次反抗期も終えてすくすく育った俺。

まあ言ってしまうとどこにでもいる子供といえばそうなんだろう。順風満帆、このまま進めば平凡ながらも確実な幸せに向かって邁進すること間違い無しな人間だったに違いない。

しかしそれは小学一年生の夏休みの事だ。暑く素晴らしい休日を楽しむために、俺は朝からテレビをつけて寝転がってアイス食べながら、グダグダと実に有意義に過ごしていた。そしてなんとなく見ていたテレビだったのだが、ある番組が再放送で始まったのだ。その時のことを一言で表すならばそうだな……

「震えた」

まさに頭のとっぺんからつま先、指の爪から一本一本の髪の毛に至るまで、全身全てに電撃が落ちたような衝撃と、全ての血管と心の臓が破裂するかと思うような興奮と鼓動が俺に襲いかかってきた。

その番組は古い特撮物でかなりの有名どころではあったが、物作りという唯一の楽しみを除けばそれ以外にまったく興味を持っていなかった当時のおれは名前すら知らないものだった。

今考えれば予め知っていればあれほどの衝撃はなかったのかなとも思う。百までしかない計測器がいきなりゼロから一瞬で上がってくればその枠外まで飛び出して限界を突き抜けてしまっただけで壊れてしまふのは仕方なかったのかもしれない。

そう俺は憧れてしまったのだ正義のヒーローに。

その日から始まったアホもとい自他共に認める変人街道猛進撃。

ヒーローに憧れるどこが変人なんだよ、そんな男の子なら割と普通じゃないのか？ という疑問をお持ちの男子諸君は多いだろう。

その感覚がわからない女子でも、小さい頃に一度はお姫様や魔法少女に憧れた事を思い出せばなんとなく想像はつくだろう。

確かにヒーローに憧れるなんてのはある種の本能レベルで刻み込まれたようなもので、ごくごくありふれた話だろう。しかし俺の場合憧れ方がそもそもおかしかったのだ。

それは成りたいと思ったのではなく成ると決断してしまったことにある。

テレビの向こうにいるミュージシャンみたいになりたいとかスポーツ選手を見てあんな活躍をしてみたい。そういう憧れはかなり悪い言い方になるかもしれないが、一種の願望と言えるだろう。

俺はあろうことが初めて見て感動した架空上の人でしかないヒーローに成ることを自分の中で決定してしまったのだ。……………自分

自身の事を振り返ってみてはいるが本当にアホだな、むしろ俺が親ならば頭おかしいんじゃないかと疑って、病院に連れて行くほどだろこれは。

だが俺の両親はよっぽど懐が広かったのか底が抜けていたのか、いきなり体を鍛えだし、さらに趣味であった物作りを眼の色を変えながら本格化させていった小学生を暖かく見守ってくれた。むしろ勤勉だと喜んでいたような気がする。初めて見た機械は直ぐにバラバラにして、庭に手製のサンドバック作って毎日パンチやキックの練習していたのを勤勉と呼ぶのは無理があったと思うんだけどなあ。ある時なぜそんなに頑張るのかと母に聞かれた事があった。その理由については説明した記憶はあるが……もしかして見守られたたんじゃないくて遠い目で見ら——いや考えるのはやめておこう。なんだか触れてはならない物がある気がする。

そんなこんなな紆余曲折を経て、俺は迷うこと無く工業高校に進学。なぜ工業高校なのかといえば話は簡単。ヒーローといえば、スーッ！ ギミック！ そしてバイク！ 有り体にいうならマッシー——ン！ が重要極まりないものと思ったからだ。改造人間は流石に無理かと思ったが、ヒーローに成るためには圧倒的な強さが必要だと思っただし、人間の肉体だけでは限界なんて直ぐ来てしまうことも良く分かっていた。だが残念ながらテレビの向こう側に写っていたような機械は未だ実現の域に達している物は少なかった。しかし諦めるという思考なんて持ち合わせていなかった俺は「無ければ作ればいい」という安直な発想で進路を決定したのだ。

青春の大半を物作りに割いていた俺の技能と知識はすでにかなり

の領域に達していて、一年生の間にはロボ研（ロボット研究会）の先輩からは『機械の鬼』なんて呼ばれるほどになっていた。ゆくゆくは自衛隊の開発部あたりに入ってパワードスーツや装甲バイクやヒーローギミックの数々を作っていきたいと真剣に計画していた。

俺はヒーローになるという事に関してだけは無理という言葉を一切使わなかった、というか欠片ほどでもないもなかった。スーツが無ければ作ればいい、体が弱けりゃ鍛えればいい、正義なんて幻想だ？　なら本物にすればいい。まさに一心不乱な男であった。だが友人曰くそれって盲目で言ったほうがいいんじゃない？　と返されさらに。

「普段そんなに喋らないお前はヒーロー絡みの話になると途端にテンションがマックスまで駆け上がる。端から見てたらまるで二重人格だぜ。おもしろいけど」

盲目に対しては一言物申さしてもらったが、二重人格の部分は……心当たりがなくもない、というかなりある。分類で言えばあまり目立たない方に入る俺だが、ヒーローや特撮物の話になった時の長舌ぶりでドン引きされた事は数知れず。いじめの現場やカツアゲ恐喝なんかを目撃し不良をぶん殴る様子を見た知り合い達の「お前誰だ!？」という一様に変わった同じ顔など何回見たことか。

まあ驚かしたのは悪かったとは思うけど、いやこの程度の刺激はむしろ人生のいいスパイスではないだろうか？　そうだ！　そうに違いない！　自分を貫き、かつ人まで喜ばしてしまうなんて俺は良い奴だ！　はっはっはっはっはあー……ははは……。ホントすみません心の底から反省しております。だがしかし後悔はしていない！

人生を道に例えるならば、人はよく変人は他の人とは違う道を行くなんて表現をする。みんなはまっすぐ歩いているのに一人だけ右に向いて歩いていくって感じだね。でも人の人生なんて様々だ、三百六十度、どんな方向に向かったって同じような人生を歩んでいる人はどこかにはいる。右や左を向いたくらいでは変人なんて呼ぶのはまだまだ甘い。

変人は道を曲げてるわけでも、ましてや踏み外しているわけでもない。

俺たちは自分の道を空に向けて新たに作っているのだよ。空中を歩く発想をして、さらに実行してしまうような奴こそが本物の変人だ。

順風満帆であった船を複雑怪奇に改造し、空飛ぶ海賊船にして乗り回した人生を送ってきた俺に大きな、それはそれは大きな転機が訪れた。乗り回したというよりは転がして遊んでたともいえなくも

ないかもしれないが。

高校二年生になった17歳の俺は健康優良児に育った。身長は175センチとやや大きめ、体は幼少から習っている空手のおかげで引き締まったものだ。無駄に多くの筋肉を付けたくないと思いながら鍛えたものだが希望通りそこまで太い腕と足にはならず鍛え上げられたその四肢には、我ながら絶賛したい肉体だった。髪型は黒髪で前髪を残してオールバックにして頭の後ろで結んでいた。もしかしてオシャレさん？ と思った人、残念！ ぶっちゃけ散髪に行くのが面倒くさいだけです。限界まで伸ばしたあとは見事な坊主への早変わりが見れます。

そしてお顔はというと……まあ上の下ってどこじゃない？ いや自分採点だから更に一段下げて中の上かな。色恋沙汰やら服装とか流行なんてものにはまったく興味を示さず生きてきた俺には正直わかりません。時折――

「優しそうな顔をしてるわ」

っていうふうに褒められることはあったな。近所のおばちゃん達からだけどな！

そんな俺は高2の冬休みを使い家族と共に海外旅行へと繰り出していた。行き先は某ハンバーガー大国にある国立航空宇宙博物館、もちろん俺の提案だ。歴史において革新的な発明品やら乗り物などが展示されたあの場所は機械オタクの俺から見れば誇張抜きに、ヨダレ物である。実際パンフレットを見ているだけでヨダレが垂れた。

もうすぐ眼の前にお宝の山が現れる！　なんて欲望を滲み出しさせていたのかいけなかったのかも知れない。

「全員手を頭の後ろに回してその場に座れ！」

某国に降り立った空港でなんと空港ジャックに巻き込まれた。おまけに逃げ遅れた俺は人質になってしまふ。ちなみに両親はその時離れた場所にいたので逃げ延びていた。

ここでヒーローの出番か！？　なんて思ったがさすがに銃を装備した10名以上の手練を相手に素手で勝てるわけもなく、無抵抗のままにおとなしく従っていた。だいたい30名ほどが人質に囚われていたが、そんな中でいた小さは少女、たぶんまだ小学生であろうその子が震えて俺の隣うずくまっていたわけだ。

自分でいうのもなんだが俺は無類の子供好きだ。おっとロリータコンプレックス、略してロリコンでは決してないからな。違うからな！！ 絶対違うからな！！ 男であろうが女の子であろうがヤンチャであろうが根暗であろうが、俺は子供が好きだった。そして元から持ちあわせていた正義感も相まって強盗達の支持した位置から手を離して俺は少女の頭をそつとなでていた。一瞬驚いたのかビクツと体を震わしていたが、なるべく優しい笑みを心がけていた俺の顔を見て安心したのか、綺麗な金髪の少女は俺に抱きついてきた。ああよほど怖かったんだろうな、この状況じゃ当たり前な話だけど。だがその様子を強盗に見つけられ、咎められた……と思うたぶん。いやだってここ日本じゃねえし、相手は英語でしかもすっげえ早口で迫ってくるんですよ？ わかるわけないじゃん。

! ! ? ! ! !

しかしわからない為に無言だった俺をシカトされたと勘違いしたのか、激昂した強盗はその手に持った拳銃で俺の頬を思いっきり打

ち付けてきた。いわば鉄の塊で顔を打つ叩かれたわけだから、かな
くくく痛かった。その衝撃で2つほど歯が折れるくらいだった
しね。

俺のうめき声に周りの空気が静まりかえっていた。その静かな場
所に隣にいた少女の泣き声が大音量で響き渡った。まずいと思っ
たよ。目の前にいる強盗の男は実に短気だ。そして今は更に緊張も相
まって、子供だからなんて言い訳すら通用しない状態だろう。おそ
らく「黙れ」とか「静かにしろ」と何回も言い放っていたけど、少
女は更に泣き続け、男は平手までかましやがった。

いやいや痛みで子供が泣き止むわけないだろう。と意識朦朧とし
ていた俺はツツコミを心の中で入れていたが予想通り少女の泣き声
は絶叫の域にまで跳ね上がった。当然の結果ではあったがなんと強
盗は拳銃を真上に発泡してその銃口を少女に向けてみせた。

「――！！！」

錯乱する少女に恫喝なんてしても黙るはずないだろうに。だが焦
りを見せる強盗はその引き金を引いてもおかしくない。いまだに激
痛走る体を起こしておれは少女を抱きしめる。子供をあやすには万
国共通、抱擁が一番有効だろうことは明白だ。母親の愛を忘れてし
まったであろう強盗では思いつきもしないのは仕方ないのかもしれ
ませんがね。

俺は左手で少女を抱え、右手を強盗へと突き出して牽制する。こ
れ以上しても少女が泣きわめくだけだと悟ったのか舌打ちを残して
強盗は離れていってくれた。

ああダメだねって心底確認できたよ、悪はやっぱりだめだね。

こういう大きな人質事件は時間が掛かってしまうものだが、なぜかその日の夕方には話が付いたらしく俺たちは開放されることになったらしい。どうやら強盗達は身代金を受け取りそのまま飛行機で海外に逃走するようだ。人質もすでに何人が開放されており、残りは老人と子供の10名ほどとなっていた。この残し方から察するに犯人の首謀者はかなり頭が切れるらしい。もしも警官が突撃を敢行した際にろくに動けない老人は助けづらく、指示も聞けずに混乱するであろう子供は邪魔にすらなる。

開放されていく人質達と、逃走の用意をする強盗たちを俺は隣の少女と手を繋ぎないで見つめていた。助かると思ってやっと安堵していた俺は周りの様子に気をかけれるほどには落ち着くことができていた。そして気づいた、強盗の内の一人の視線が隣の少女に度々向けられているということ。

その目の色を見た時、あることを思い出す。おみやげに買ってきた評判のショートケーキを食い入るように見つめる母の目を。そうあれは欲望に駆られてそれを見ずにはいられない、獲物を狙う目だ。完全に肉食系の顔をしていましたよ母上。

それに気付いた時、その男はリーダーらしき男と何かを話した。リーダーがこちらを一瞥し首を縦に振ると、男はこちらに向かってきた。

ああわかる、わかってしまった。こいつがロリータでコンプレックスなお方で、今まさに隣の少女をその歯牙にかけることを決めたことが。迫り来る足音に動悸が早まり、流れ出る汗が冷えていき、口の中は一滴も残さず乾いていた。

「スタンドアップ」

ゆっくりと立てと少女に命令しその腕を掴むロリコン野郎。それを見て俺の脳裏には少女にとって最悪の結果が浮かび上がる。

そして俺にそれを見過ごしてしまうなんて選択肢は無かった。

「うおおおおおお」

自分を奮いたたせる為に吠え、男の顔面に鉄拳を食らわせてやった。なかなか良いあたりを出したはずだったが、男を気絶させるには至らなかった。急な痛みにも焦りながらもこちらを認識した強盗は右の腰にぶら下げた拳銃を引き抜こうとする。すぐさま俺は接近し左手で男の右手を持って構えようとしたピストルを押さえ込んだ。そして右手で相手の襟首を持って体勢を崩し3メートルほど向こうにあった壁へと走る速度で押し付ける。銃への恐怖で無我夢中であつたが背中を強打した男はその衝撃に僅かに怯むのを見て、その隙に掴んだ右腕の手首に親指をめり込めせる。あまりの激痛に男は思わず拳銃を地面に落とした。

絶好のチャンスに空手の奥義、短くではあるが息吹をあげて右手を引き戻す。

「セイヤツ!!!」

全身全霊渾身の正拳突きは男の喉に命中し、その生命活動を停止させた。残心を取る俺の目の前の鬼畜野郎は地面へと崩れ落ちた。それは開始から5秒ほどの出来事だったはずだが、俺にはまるでスローモーションな世界に迷い込んだようだった。

そして3発の銃声が響き渡る。

人一人、その身一つでできることなんてたかがしれてる。そして俺が出来たのはこのロリコン野郎を再起不能にして少女にせまる辱めを退けるので精一杯だ。

わかってたとも、その結果、死ぬことになるとは。

仲間をやられた他の強盗はすぐさま俺を拳銃で撃ちぬいた。急所には当たらず、即死はしなかったものの右胸と左足に二発命中して俺はすでに一応立ってはいるが瀕死の状態。まあ満足……かな、目的は達成できたさ。俺に銃口を向ける男を睨み返す。止めを刺すために引き金を引く様がとてもスローモーションに見えていた。

（これが走馬灯ってやつなのかな）

両親と友人に謝罪の念を抱きながら目を閉じて行く。しかしその寸前に男との射線上に金髪の少女が立ちはだかる。

いやいやいやいやいや、せっかく助けたのに何やってんのよこの子！ 終えようとした思考と消えかけた体の力が一瞬にしてマグマのように湧き上がる。細い腕を引いて体の位置を入れ替える。最後に放たれた弾丸は首を僅かに削っていった。知ってた？ 銃で撃たれるとすごい熱いんだぜ。ちなみに俺が首を打たれた瞬間に考えていたことは――

（女の子って柔らかいんだな）

である。さっきまでロリコン野郎死ね！ って頑張ってたはずだが俺にも疑惑が……。もはや半死半生の身にしてはやけに心に余裕

があるな。

抱きしめていた少女の無事を確認して映画のワンシーンとしては悪くない位置だな、なんて思いながら笑顔でその場に倒れる俺。

「——！？——！！」

いやイタイイタイ痛いよ若者よ。少女が俺をゆすりながら何かを必死に叫んでいる。すまんもつと英語の授業真面目に聞いてりやよかったな、まったくわからん。

そんな声と一緒に遠方からけたたましく銃声が聞こえてくる。この量からして、たぶん警察がさっきの銃声を聞いて突撃してきたかな。よかった、どうやら少女は無事に帰れそうだ。

意識が消えて行くのを感じる。木堂正志の終わり、それを実感して心配そうに涙を流して声をかけてくれる少女の頭を撫でて、最後に先に逝く者から言葉を送っておこう。

そう、偉大な偉人が残した俺の好きな英語の格言。

「Boys, be……ambitious……（少年よ、大志を抱け）」

そうやって俺こと木堂正志の第一幕は終了したのである。

「って相手は少女やないかーーーーーい!!!」

最後にやってしまった大間違いにエセ関西弁風にツツコミを入れた場所は、真っ白でありながら揺れているのがみてとれる不思議な不思議な空間だった。

ブローグ（後書き）

思いついて書き出したら二日間の記憶が消えたでござる。

第一話 木堂と愉快な神様

「おめでとう」

「おめでとう」

「おめでとう」

「おめでとう」

「おめでとう」

「拍手をやめろ！ 拍手されながらおめでとうとか俺はどこぞの人造アニメの主人公か！」

死んだはずの俺は謎の白く揺れる謎の空間で馬鹿でかいおっさんやら女性やら爺さんやらに囲まれていた。

「おお、死んでからツツコミの才能が開花するとはおもしろい」

何が流石なのかわからない。というか今のツツコミを褒めたということは確信犯かよ。あつなるほどこれは夢か、にしてはリアルだ。夢だとすると俺はもしかして助かったのか？

「心を読まれた！？」

いやそんな事は些細なことでは無い。俺の遠近感覚が狂ったのでなければ、目の前にいる5人は全員十メートルを超える巨人ということになる。

「ではまず貴殿の疑問をお答えしよう。簡潔に言えば君は死んだ」

まあそうだと思っただ、あの時死んでいく感覚があったしな。にしてもこの爺さんだけは真面目そうだな。他のやつはソワソワしすぎだろマジで。その巨体に一瞬恐怖を感じたが、その人間臭さになんだか和んでしまったよ。

「そして我らは君たちで言う所の神だ」

「え、あ、もしかしてこれから天国か地獄かを決める的な？」

さすがに神様の名を出されたらビビる。天使とか閻魔様のような方々かと思えばまさかご本人とは。

「まあよく似たものだがその話はまた後だ」

いや、さすがに神様。風格も言葉も威厳があるな。ってその他大勢がこつち見てクスクス笑ってやがる。なんだかむかついてきたぞ。

「地球の神よ、そろそろ本題に入ろうではないか。我らはそろそろ待ちきれんぞ」

さっき最初に声を掛けてきたちよつと軽そうな兄ちゃん風の巨大な神様の一人が満面の笑みのまま、こちらに乗り出してきそうな勢いで全身真っ白の神様の話に割り込んでくる。いや軽く見て30メートルはあるからね君たち。こつちにきちゃったら私は踏まれてお陀仏ですよ。あれ？死んでからも死ぬのかな？

「まあわからんでもないな。では簡潔にいこうか。木堂よ、此度こ

のように特別に呼び出した事には訳がある。貴殿が最後に成し遂げた偉業についての話だ」

「最後に成し遂げた？ …… あっ！ あの女の子どうなりましたか！？」

「そう、まさしくそれだ」

どれだよ。

「君は命を賭して彼女を救ってみせた自己犠牲の精神は素晴らしいものだ。しかしそれだけでは偉業とは呼ばない。無事帰還した彼女は自分を守る貴殿の姿をその身に焼付けて人生を歩んだ」

そうか無事だったんだ…… 本当によかった。

「その結果、あの少女は世界平和機構のトップにまでなり、世界紛争や飢餓、病疫を解決し、さらには第三次世界大戦をも未然に防いでみせ聖女と呼ばれる存在にまでなったのだ」

なん…… だと？ 俺の目指した先とは少し違うがまるで正義の味方。ヒーローじゃないか……。ん？ あれ？ なぜに過去形？

「おつと言い忘れておったな。今は君が死んでからすでに100年が過ぎておる」

「……………」

「まあどうでもいいじゃないか！ 確かに少女へと多大な影響を与えた事は偉大な功績だ。しかし我らアトレアの神々は君そのものに

賞賛を与えたい」

むむむ、よくわからないことになってまいりました。てか衝撃の事実を軽く流された！

「地球の神はかの少女の始まりであることを褒めたが、我々は君自身の人生を諸手を上げる喝采を送るほどに感動しているのだよ」

アトレア？ 地球？

「そう我らは君の世界とは違う場所の神だ」

薄々感じてたけど心読まれています？

「神ならそれぐらい当然だ。とくにここ神界ではな」

「オウフウ……恥ずかしい……」

「まあここまで我らを喜ばした異界の民である君に、褒美を上げた
いと思つてな」

「あげるって俺死んでますけど？」

「そう、だからその先の人生を歩んでみないかな？ 我らの統べる
アトレアで、だ」

「……アトレアとはどんな世界ですか？」

「いきなり乗り気になったわ、思ったとおり面白い男ね」

「期待に胸が高まるな」

「一緒に酒を酌み交わしたいわい」

やる気の一端をみせたためか今まで会話に加わっていなかった、グラマラスでセクシー路線の姉ちゃんと髭モジヤの酔っぱらい爺と筋肉隆々なやたらと怖いおっさんが話に加わりだした。いやだから乗り出さないでってば近いよ顔が！　でかくて怖い！

「怖いとは失敬ね。えつと私たちの世界がどんな場所だったかしら。そうね中世ヨーロッパ風で剣と魔法の世界って言えばあなたなら判るでしょ？」

「なるほど、把握できた」

ゲーム好きだった俺からすれば剣と魔法の世界と言われれば、簡単に想像できてしまう。

満足のいく死に際ではあったが、やり残したことはいくつもある。もし剣と魔法の世界ならばそのやり残しは地球よりも叶う可能性は高いんじゃないだろうか。

「そうじゃの。科学はそこまで進歩したらんが、魔法に関してはそこそこ進んだ物を持っておるからお主の願いは叶うかもしれん」

「受けます」

「うつひゃー！　即決とかオットコマエー！」

「ほんといい男ね」

「危険度さえ聞かんとは潔し」

「今夜の酒は美味そうじゃ」

なんだろう俺のイメージする神様からどんどんかけ離れていくぞこの四人。

「では」

グラマラス姉ちゃんが手から光の球を俺に飛ばしてきた。それが俺の手の中に収まると何かが握られている感触が現れる。

「え！？ この後ろに羽根がついて前に針があるこの形状は……」

「それではールールーーレットオオーー！」

「スタート！」

えええええええーなにこれなにこれ！？

「アテレアの世界の人種はオレら神からの恩恵としての力を受けるんだよね。それで君に似合いそうな者を四人で選出してルーレットで決めることにしましたー」

なんか重要そうなことだけどいいのかこの決め方。

「全部あげちゃうと世界のバランスが崩れかねないし、四神とも譲らなかったでこの形なんだよね」

「内容が重いよ！」

ほとんどヤケクソ気味にダーツをルーレットに投げつける。不覚にもツツコミの勢いで投げてしまった。ルーレットが止まり、ダーツの刺さった部分が見える、のだが読めん！？ 向ここの文字なのだろうかまったくわからない。

「ほほっ」

「へえ」

「ふむ」

「フォッフォッフォ」

それを注視していた四人の神がそれぞれに反応を示しているのだが、その様子を見ても良いのか悪いのかすら想像がつかない。なんか怖くなってきたな。

「じゃあこのギフトと呼ばれる力とは別に我々四神からそれぞれ特典をあげるけど……説明がめんどくさいから向こうに行ってから自分で確認してね」

おいちよつと待てダメ神さま。なんだよこの雑い説明っぷりわ。
一から十までの一すら説明してないじゃないか。あつ、目から星な
んか出して誤魔化そうとするんじゃないやつて、うああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
あ。

「おお我が世界の子羊よ、そっちの世界でも達者でな」

奈落の穴に引き込まれながら一つ気付いたよ。アトレアの神は完全
に面白がつて俺を呼び込んだってことがな！　おお、神は死んだ。

第二話 仕様なの？ ワザなの？

はいどうも、神々に弄ばれた木堂 正志だよー。

「はあ、」

いやため息の一つも出るっしょ普通。確かに悪くない話で願ったり叶ったりなわけですが、まさかあんな大雑把なままの説明でこの世界に産み落とされるとは思いませんでしたよ。

もしこの世界にあの神様の像があつたら絶対ラクガキしてやる。まあ切り替えよう、もし今度話せる機会があつたらなにかせびつてやるとしてだ。

「どこだよこっ……」

ボツシュート最中に気を失い、次に目を覚ましたのはどこかの森の中。アトレアに無事着いたのはなんとなくわかったよ、だって紫とかなり黄色い太陽が空に2つ見えてますからね。だが地理の知識も世界の常識も知らない状態でこんな深い森の中に居るのは。

「遭難スタートとか難易度高いよ……」

無闇に歩くのも体力消耗の危険を伴うのでとりあえずそこらにあった岩に腰掛けて思考する。地球ですらアウトドアに行ったことがない俺にとってはまさに大ピンチ。持ちうる知識を使って解決策を導き出す。

考える像そっくりなポーズで考え出してからだいたい20分くらいしてだろうか、近くにあった茂みが揺れ動く。瞬間に立ち上がり準備していた木の棒で構えをとる。

剣と魔法の世界なんて単純に説明されたが、俺の知るなかではほぼ確実に魔獣やらモンスターなんて呼ばれる人を襲う化物がもれなくセツトでついてくるのがごくあたり前だ。たとえそうでなくても狼などの肉食動物がいる可能性は高い。その危険性を一番先に思い立ち、先の尖ったそれなりに太さのある木の棒と幾つかの大きな石をポケットに忍び込ませてある。元から体を鍛えていたから大型犬程度ならなんとかなる……はず。だがなるべくなら今は出会いたくは――。

「グルルルルル」

なかった。てかデケエ！　なんか頭が妙にでかいが熊っぽいそれは茂みを出た時には既に俺のほうに視線を向けていた。俺の美味しそうな匂いがしたから来たんですねわかります。

こいつを体長2メートルの熊と同じ戦闘力と仮定して一瞬でシミレーションしてみるが、ダメ。まったく勝てる要素が見当たらない。

「難易度高いどころか無理ゲーじゃないか」

脳裏には俺が四神に囲まれていじめられている図が浮かびがるが、

信憑性が妙に高い可能性があるものの直ぐに否定しておく。あの神様をデイスツた回数ごとに不運度が上がっている気がする。ならもしかしてあの神様達を崇めれば幸運度が上がるのでは……とおもったがあの神様を崇める部分がないので諦める。

「グオーーーーー！！！」

組み易しとみたのか熊公がこちらに迫ってくる。獣の見た目ほどは早くないなこいつと思いつつ右側に大きく回避。命のやり取りで緊張したのか踏み込みすぎて若干よろけるものの回避は成功。熊に目をやるとおれに向けて放った右爪が座っていた岩を砕いていた。

「熊ってどころじゃねえ！」

それを見てすぐさま木の入り組んでいる方の森へと逃げこむ。こいつはパワーのわりには早くは見えない。ならば足の速さと小回りさを活用して逃げきるまでよ。

「あばよ、とつつあゝん」

人生で一度は言ってみたい俺語録、第4位の台詞を置き土産にスタコラサッサですよ。5分ほど走った後であることを思い出す。無闇矢鱈に走るのがまずいからあそこで留まって考え事をしていたという事を。

ということとで現在崖にぶつかり、しかも二匹増えた熊さんが前と左右を見事なチームワークで塞いでおられます。

「困難どころか詰んでるじゃねえか……」

もちろん愚痴が言えているあたりはまだ若干の余裕がある。この

熊の攻撃は俺からすれば遅く、避けるだけなら簡単だったからだ。まあ一匹だけならの話だけど。そこでおそらく同時にしかつてくるであろう熊の右手側の顔面に石礫を投擲、ひるんだところでその脇から再び逃走する算段だ。え？ 倒さないのかだって無茶言っなよ人間が素手で熊を殺せるか！ 手に持った木の武器はつてか？ そんなもんはさつき走りだした時に真っ先にぶん投げたわ！

「グワツ！！！」

予想通り三匹同時に掛かってくる動作を見て右側に全力で石を投げつける。よっしゃいいコース直撃間違いない――。

カアアアアンと厚めのガラスが砕けたような音と共に右の熊さんの頭が跡形もなく弾け飛ぶ。

「は、はいいいい！？」

投げつけたと同時に走りだすつもりではあったのだが、あまりにもショッキングな映像に足を止めてしまう。

「グワアアアア！！！」

俺と同じように真ん中の熊も驚きのあまり動きを止めていたが、左側の熊はそれに気付いてないのか俺に襲いかかる。隙だらけではあったが熊の攻撃は所詮のろくて単純、軽々と避けてみせる。

投擲のとんでもない結果と、さっきから感じる壮大な違和感を照らし合わせて、その答えを得るために避けたあと熊の横に回りこみ、速さを重視して軽く突きを打つ放つ。触れたと同時に即退避。だがその軽いはずの突きで俺の体重の数倍はあろうという熊の体が、僅かに揺れた。

「うつわぁマジですかい」

「グウウウ」

苦悶の表情を浮かべてこちらを睨む熊。その隣に気を取り戻した中央の熊が並んでこちらに身構える。あっちも驚いた様子だが確実に俺の方がおどろいてるから！ だってさっき熊を揺らした正拳は俺の全力からみれば2割程の突きだ。さっきから熊が遅く見えることと、走ってきたのにまるで切れない息。そしてさっきの石投げと突きから考えるに……。

「いや答え合わせはこいつらで試すか」

ニヤリと笑って見せると足元にあつた拳大の石を持ち上げる。そして全力で振りかぶって熊の片割れに投げつける。受け止めようと腕を突き出すがそれごと熊は数メートルふっ飛ばされていた。

「はい大正解でしたー」

ふつとぶ熊に振り返ってしまった、もう一匹の熊の足元に駆け寄り、その胴体に正拳三段突きをお見舞いする。殴られた場所が風呂桶ほど凹んで血反吐を吐きながら熊は転倒していった。

「これは……神さんの言ってた特典の一つか？」

非現実的である身体能力であるにも関わらず今の今まで違和感なく受け入れられていた事を考えるに、これが神の仕業と考えたほうが辻褄が合う。正直度肝を抜かれたが、まあそのおかげで助かったんだ感謝はしとこうかな。なーんて思いながらニヤついて、手を開いたり閉じたりして異界で不思議な魔法の世界。元の世界の常識で

は有り得ない事が平気で起こる世界なんだという実感を確かめていた。

がそれが油断大敵雨あられ、って古いか。

「ウキヤーーーー」

熊の血の匂いに釣られてか崖の上から大きな猿型の怪物が襲いかかってきた。気づくのが遅すぎてその爪が体にあたりそうになる、正直こんな森では軽傷だって下手をすれば命取りだ。

「ヤバッ」

しかし猿はその爪が俺の服に当たった所で細切れに切り裂かれた。……おうショッキング映像の次はスプラッター映像かよ……今空腹でよかった。胃酸だけ逆流しそうになったがしっかり飲みました。

「油断大敵雨あられ、遅らせながら風の妖精フィリー主の名によりここに馳せ参じました」

こっちも古い。血の舞い散る森の中、羽根の生えた手乗り少女が満面の笑みでおれにお辞儀をしていた。スプラッター+美少女……これはまさかヤンデレフラグか！？ やだー。

第二話 仕様なの？ ワザとなの？（後書き）

八白万の神々の中にもふざけた神様っていらっしやるんだろっか？

第三話 本当には大丈夫なのかこの世界

「大変遅くなつて申し訳ありません。なにせこの広大なヨルガの森のどこかに居るとだけしか主人は教えて下さりませんでしたので」

何だか申し訳なさそーに俺に謝る自称妖精。頭を下げて真摯に謝罪する少女を360度グルグル周りながら観察する不審者極まりない俺。

「あの〜なにをなさつてるのでしょう？」

「いや、ごめんね。妖精って言われてついね」

なんせフィリーは見た目は幼い少女だがその大きさは十センチほど、薄く透明な小さな羽根を四枚背中を持ち、フリフリの可愛い服を着たまさに可憐な西洋の昔話に出る妖精そのものだ。

「あはつ。つまり一目で私の可愛さの虜になつてしまったわけですね〜うつふつどうしましょ〜」

中身は若干残念なようである。

「おつと自己紹介を改めてさせてもらいます。私は風と歌の神ナーブ様が使徒、春風の妖精フィリーでございます。この度は主の命により木堂様の案内役として遣わされました」

風と歌の神……いやそもそも神様の知り合いなんてあの四神しかないし、すると風……歌……ああ、あの軽そうで一番喋ってた兄ちゃんか。弦楽器っぽいもの持ってたしな。

「それってもしかして、えーっとナーブ様？　が付けてくれた特典ってことなのかな？」

「それに関してナーブ様より伝言が「事情を知って、なおかつ理解する子が一人くらいいてもいいじゃない」だそうです」

軽っ！　ほんと軽いわあの神様。でもまあ氣をつかってくれた事には感謝しとこうかな、明日の朝ぐらいまでは。

「じゃあ単なるサービスっばいね」

「それとご質問や疑問は多いと思いますけど、その前に」

何やら背中を向けてゴソゴソと何かを探すフィリー。

「はい。この世界で初めての達成記念です」

大きな球を取り出し嬉しそうに笑いかけてくれる——のはいいいけどどう考えてもその球の体積あなたの体より大きいよね！？　どこから出した！？

「私が支えますので、ぶら下がった紐を引っ張ってくださいか？」

「え？　これ？」

パッパカパーン、とどこからとも無く聞こえるラッパのファンファレ。

「おめでとunggざいます。木堂様は一つ目の特典に気付かれました

「――！」

くす玉から垂れ幕が降り、金と銀の紙吹雪が綺麗に舞い散る。ル
レットにくす玉とか俗物すぎるぞこの神は――！――！！
！ という心の声は純粹に祝ってくれているフィリーの手前、心の
泉に沈めておく。

「なになに、『よくぞ我が特典にたどり着いた。我、火と武の神で
あるバーダグノミスの特典は肉体強化常時三倍である。これを使い
こなし一層の武の励みとせよ』か……うむ計算が合わんぞバーグさ
ん」

さっきの戦闘から肉体が強化されたのはなんとなく想像はついて
はいたが、元の肉体の三倍程度で、あんな芸当はとてでもないが
できない。

「あつ納得できませんか？ その場合の伝言を地球の魂と肉体の神
様から承っています。『地球とアトレアの人間では元から三倍ほど
肉体の成長に差がある、そこで元の肉体から換算してそっちに合わ
せて作り替えてあるから安心するように』だそうです」

ああ成程、3倍ではなく3×3で九倍なんですね。………確か空
手で瓦割りが最高で12枚だから9倍だと108枚か……八八八
……………って笑えねよ！ 怖いわ！ やりすぎだろこれは！ ハッ
今気づいたが他の特典もこれ並みなのか？ 例の特別なギフトとや
らはもつと上？

「よし俺は考えるのをやめます」

「ど、どうしました!？」

「気にしないでいいよ」

神様の上でコロコロ遊ばれてる気がするが、心労が増すだけなので忘れる事にする。うん、それがいい。そんな問題の先送りではないじゃないですか！ と問責されそうな話だが決して俺のせいではないと弁解しておく。

だつてさ、死んでしまつてからこつち驚きとか衝撃とかで心労がかかつてない時のほうが時間的に短いんだよ。死んだと思ったら神様がいて、なんだかよく分からないままに居世界へと飛ばされ、森で熊さんとお猿さんに会ったらヒヤッハーですよ！？ いいじゃないかちよつとぐらい現実から目を背けたつて。こんな力オスすぎる状況は変人の俺でも噛み砕いて飲み込むにはすごく時間がかかりますよ。

「それでは質問に答えていきましょう」

「…………じゃあまず一つ、アトレアの言葉って地球とは全然違うよね？　なんで俺は君と会話できてるの？」

神様ルーレットに書いて会った文字は見たこともない文字だったし、言語形体が一緒なんて偶然は流石にないだろうし。

すると質問を聞いた妖精さんは、パツと花が咲いたように笑顔なり再びくす玉を取り出した。

血生臭い場所で会話をするのもアレだし、夕暮れも迫って来ていたよなので今晚を過ごす場所を探して移動する。幸い熊と一戦かました近場に縦穴の洞窟を発見してそこに陣取ることにした。発見した後、あの熊を一匹引きずってきて石切包丁を作って皮を剥いで焼いて食った。正直なかなかのグロテクスな作業であったが、フリーがバラバラにした猿の映像のほうが遙かにすごかった為か吐かずにすんだ。身につけて来た常識と倫理観が音をたてて崩れる音が聞こえてきそうだ。しかし俺は目的の為なら苦労も心労も厭わない男。これぐらいわ……いややっぱちょっとキツイわ。

そしてこの日の夜と、次の日一日を掛けてフリーとの問答は続いた。その結果いろいろとまずいになってことがわかって直ぐには人里には向かわず、しばらくこの森で生活することになった。

あつ、ちなみにさっきのくす玉は風と歌の神ナーブからの特典でこの世界の言語を理解できるようにするというものだった。コメントは正直むかついたので略してやる。

問題点その一。戦闘力の安定化。

身体能力と空手の技である程度はなんとかなるが、ここは剣（拳）と魔法の世界。それだけはまだ半分だ、そこでフリーに魔法の基礎を学ぶことになった。魔法ってのは簡単に言えば生命に流れる魔力をつかって火の玉を飛ばしたり水をどこからともなく出したり風を起こしたり地面の形を変えたりする、そうあれだ不思議パワーだ。まあ一応科学で代用出来るのがほとんどだな。『発達した科学は魔法と見分けがつかない』なんてのは誰の言った言葉だったか。まあこの世界はそれなりに魔法が発展していて科学では代用できないような事もできるらしいが実際見る機会は来る日はあるだろうか。

フィリーの説明は感覚的な話だったのでいつかその構造やらの詳細を調べてみたいものだ。早速自分で使ってみたら小石ほどの炎が出たので才能が無いわけではないようなので安心した。強さを手に入れる事は俺の目的であるヒーローに成るためには必須条件なのでいくらあっても困らないし。

問題点その二。金が無い。

完全無一文の俺が人と生活をしていく上では金が必要不可欠となる。もちろん俺の目標を達成するためにも金はあればあるほど都合だ。ていうか絶対いる。そこでこの森で取れて、金に成るものがある程度集めることにした。どれぐらいで売れるのかまではフィリーも分からなかったが。間違いなく金に成るものはなんとなくわかるらしいので協力してもらおうことにする。あの熊達の毛皮はいい値段になってくれるといいな！。

問題点その三。常識が無いどころかマイナス値。

常識が無いのは当たり前なのだが、俺には地球での常識が存在しているわけで、それをこちらの常識などと捉えればどんな問題が起るか分かったものではない。おそらく悪いことだらけの、イベント盛りだくさんなのは眼に見えている。まあ妖精であるフィリーも人間の常識を持ちあわせているかと言われれば、そこまであるわけではないけれど、最低ラインはあるらしいので参考にさせてもらうことにする。

これらがある程度までクリアーしてから街に繰り出すことと相成ったわけだ。西洋ファンタジーに突入したのに最初のイベントが山籠りとは色気がないな〜と思いつながらなんとかフィリーの癒し成分で耐えることにしよう。しかしずっと熊ばっか食うのは辛いな〜と

零した翌日にフィリーが食べれる果実やきのこを持って来てくれた時は彼女が女神に見え、俺の中ではあの四神よりもランクが上になりました。傷心の魂が清められるーーーーー。

「ひれ伏せって言われれば喜んでひれ伏しますよフィリー様！」

って心の声が漏れてしまい、フィリーにドン引きされ。

「そんな趣味があつたの？」

と聞き返されたのはクリティカルヒットで俺のハートを砕いていました。

はい、そんなこんなで三十日が経過しましたー。えっ修行風景は？
ねえよそんなもん。俺様のパーフェクトかつなんの困難もない華麗なる風景を延々と見たってつまらないだろう？ フフン。

はい嘘です。正直なところ問題点二と三は順調だったんですがね。一に問題がありまして。魔法の習得は大分難儀しましたよ。フィリー曰く。

「想像力は凄い！ 全属性をここまでのはつきりイメージできるのは

大したもんだと思うよ。でもって覚えもいいしね。でもキドーは魔力の制御が下手すぎるよ」

だそうです。ちなみに敬語と様付けは気持ち悪かったんで初日に変えてもらいました。フリーも慣れない言葉遣いは気持ち悪かったそうです。向こうの世界には魔法が使えるゲームなんて腐るほどあったから、イメージすること自体はしやすかった、使い方もなんか儀式とかいろんな図形や文字を書いて作る円陣を書くやつとか難しいのがあるらしいが、習ったのは初級だけ。イメージと魔法の燃料である魔力を頭で編み込んで呪文を唱えるだけと至って簡単なものだった。

しかしおれは魔力を注ぐ行程がかなり下手というかめちゃくちゃで、一滴の水でいいのにコップ一杯の水を汲んでくるほどだそうです。自分でもアホだと思うよ。だが魔力は感覚で操る物でいまだその感覚はあやふやなままだ。この世界基準で言えば生まれた時からこの感覚をもっているのだろうが、おれは残念なことに一ヶ月前にそれを持ったばかりだ。年季が違うのだよ年季が！ 悪い意味でな！ 赤ん坊にお箸を持てとか、そりゃ無茶ですよ。なんでも中級に進むには魔力制御を完全に身につける必要があるそうなので道はほんとうに遠そうだ。

だがなんとか初級の魔法はいくつか治めることには成功した。

「まあ慣れだな、慣れ」

魔法は今後に期待である。期待して、期待できる？ いや期待しよう。……現実としてはどうなるのか分からんの一言だ。

そんでもって俺の様相も凄く変わりようだった。最初は向こうで死んだ時に着ていた長袖のシャツにパーカーとGパンといった格好で過ごしていたのだが、いかにせん汚れやら傷やらが目立って仕方ない。正直なところこれが地球を思い出す唯一の品だけに、破損と

か捨てるといふ状況は意地でも迎えたくなかった。つまりその結果、森で倒した鹿っぽい何かの皮で作った服を来た、原始人ルツクな男の完成なわけですよ。フリーがいたのももちろん上下完備である。毛皮を来て石を投げたりして戦う俺の姿はまさに教科書に載っていた北京原人そのものである。俺的にはこれが一番きつかったよ、精神的な意味で。

さらに俺らは10日かけて人里に降りる準備を整える。フリーがナーブから託されていた地図によりこれから最も近い村は判明していたが、そこに立ち寄るつもりは無かった。東にあるその村から更に東南東にある大きな街、ブローナスそこが俺の目的地だ。理由は色々あるのだが、最も大きな理由はそのブローナスが現在居るブローナスという国の首都で最も大きな街であるというのがその要因だ。

もしも、せめて、もしかして、であるならば、かもしれない。俺なりに色んな可能性を考えての一案である。まあ何か問題を起こしてしまっても、またこの洞窟まで逃げればすむ話しさ。40日をすごした洞窟は既に入り口が設置されており、中には木で作ったベッドと熊の皮で出来た布団が設置されたちよつとした小屋状態になっていた。やっぱ野宿とはいえ人間なんだから環境がいい方がいいじ

やん？ 夜の間は暇だったからつい凝ってしまいましたよ。やっぱり趣味、物作りは魂の洗浄だね。一人夜中に越に浸りながらの作業風景は、一度見たら毎晩うなされること請け合いの光景だろう。俺にはごくごく普通の日常の光景の一つなんだけどね。

さて全ての準備が整い、いざ出発の時が来た。これまた木で作った背負籠に、ありったけの荷物を積み込んで背負い込む。その形はそうだな、二メートルくらいのごついタンスってのが一番近い形かな。重さは八十キログラム弱ってところだと思う。大きさのわりには大分軽いのは獣の皮と薬草の類が大半を占めているからだ。体積的に一番思いののは道中で俺とフィリーが食べる食料だろう。しかも八十キロと言っても筋力が九倍に膨れ上がったおれには九キロ相当の荷物でしかなちよっとおもいくらいにしか感じない。

さて目的地のブローナスはここから大体馬車で十日はかかるらしい。俺的予測に基づいた計算によるとだいたいその距離三百キロの道のりのはず。もちろん俺は馬車など使う予定はない。というか金が無いのが問題点なんだから買えるはずもないし、そんなゆっくり旅をする気も毛頭ない。この世界を知りたいという知的欲求は、すでに限界を超えて精神全体を両手で揺らし続けている。

そこで俺は自分で走ることにした。実験的に同じくらいの岩を担いでジョギングのペースで走ったところ問題なく走れた。しかもジョギングといっても、おなじみ強化がついて回るのでその速度はかなり速い。そしてフィリー直伝の森の薬草から作った疲労回復薬を補給しながらだと、たぶん一日六間くらいは走れるはずだ。順調にいけば五日程でブローニアに到着する計算になる。

だが問題点もあった。フィリーにこの重さの物を持って走り回れるのは普通か？ と聞いたところ。常識の勉強やり直す？ と聞き返されてしまった。まあなんとなくそうだと思っていましたとも。俺だって自分の身体能力にはドン引きしているんですから。そこで俺は舗装された街道はから外れて直線上に平原や森を突っ切る予定だ。川を渡る際はフィリーの風の魔法で運んでもらう。この重量を

風で運べるフィリーの魔法も大概なものだと思っただけだな。でもフィリーからすれば最初に猿を細切れにした風の魔法もまるで本気ではないらしいので、まさしく可愛い顔して怖い奴である。……街に着いたら飴でも買ってあげようかな。

「さあしゅっぱーっ!!」

フィリーは最近位置と化しているおれの右胸ポケットに入って出発の音頭を取っていた。

「ヨッシャー――冒険の始まりだ――!!」

苦節40日、長いようで短いようなお試し期間を乗り越えて、遂に俺の念願を叶える冒険が始まった。

「おお、やっと出発したか。サバイバル生活もなかなかよかったが、やっぱり君は波乱万丈な人生が一番輝く男だよ。さあしゅっかり活躍して躍動して奮闘して僕達を楽しませておくれ正志君、いや僕達期待の正義のヒーロー」

第三話 本当に大丈夫なのかこの世界（後書き）

いい意味でも悪い意味でも適当です。

第四話 ややしやー

さて道中はなんの問題もなく進行した。人に会わない場所をあえて通って来たのだ、問題があってもらってはこまるが。あえていうなら化物、この世界では魔獣と呼ばれるやつらに何回か襲撃されたがヨルガの森にいたやつに比べれば実に雑魚極まりなかった為、戦闘シーンは大幅カットだ。

そして目的地プロニアス王国首都、ブローナスに二度目の侵入を、出発して3日目に行った。

なにを言ってるのかわからねえと思うが俺もなんでこうなったかわからない。

まず問題としては俺のジョギングのペースは、体感よりかなり速かったというのが一点。あとフリー直伝の疲労回復薬が予想よりかなり優秀で、一日八時間も走れてしまったのが一点。問題及び、迷子の可能性を考えての日程だったのだが、それらもほぼ無しの行程となったのを合わせての合計三点だ。これらのことからブロー

ナス到着はなんと二日目の夕方になったのだ。正直街が見えた時は違う場所に出てしまったと勘違いしたほどで、フリーがその姿を知っていなければ通り過ぎてしまふところだったほど、信じれなかったよ。

まあまあ速いことは悪いことじゃない、むしろ良い事だろうからとりあえず置いておく。そして俺は街から少し離れた森に荷物一式を隠して街へと向かった。なんでそんな面倒な事をするかというと俺には一つの懸念があった。それはフリーにも解決し得ない事でもあった物価の把握だ。

俺が持ってきた荷物はそのほとんどを金にするために運んで来たもののだが、それが安い場合は問題ない。しかし高すぎた場合が問題だ。そうで合った場合出所を聞かれたり、有名になってしまう危険性があるのだが、それは今は全力で回避したい。街道を逸れて走ってきたこともそうなのだが俺は極力目立ちたくはない。これは性格的な問題ではなく、俺が叶えたい目標のためにはわりと必要なことだからだ。そして俺が持ってきた中で魔獣を倒して得たものはフリーの常識でいうならば安いとは全く思えないものだ。

その内約はクマ型の魔獣の皮四爪五、猿型の皮と爪八セット、狼の皮が二十一に虎の皮が一だ。常識的に言えばたぶん熊と虎はかなり強い部類で希少性も高いはずだ。熊の皮はかなりの強度を持っていて、俺の全力の投球にも頭の部分以外だと破れることもなかった。まあ衝撃を受けてめきれずに内蔵がひどい事になってたけど。そして問題の虎だ。こいつは森で会ったなかでもダントツで強かった。正直なところ魔法を習得し切れていない俺ではかなりの苦戦を強いられ、森で唯一フリーの助力を借りて倒して獲物だ。その見た目は虎を二回りぐらいでかくして、その頭からは1メートルほどの曲刀が生えていると言った魔獣だ。しかも俺命名のサーベルタイガーは見事にその大木をバターのようになり裂く曲刀をつかいこなして攻撃してくる、厄介極まりないやつだった。爪、噛み付き、曲刀の三段攻撃まじめんどくさい。

え？ サーベルタイガーは安易すぎるって？ いや曲刀を使う虎とかそれ以外ありえないだろ、ネーミングセンスの問題じゃなく見たらそう思っつて。

剥ぎとったその曲刀は森での私生活に大きな実りと、幅を俺にもたらしてくれた。おもに工作的な意味で。

「問題が山積みになっていくのが見えてくる」

そうフィリーにこぼしながら街に入り、一日を掛けて街を練り歩き物価を調査して、たぶん問題ないと踏んでいた狼の皮を売払い宿を確保。ちなみに狼の皮も予想よりは大分高かった。そして改めて荷物をとりに戻って現在にいたるのである。

調査の結果俺の心配は杞憂に終わ——らなかった。狼と薬草の類は大丈夫そうだが、その他は軒並みやばかった。猿と熊はそれなりに流通しているが、個人でまとめて売りに来るやつなどほばいない。商団が他の街で買い集めて売りに来るのが普通だった。そして懸念どおり虎はやばかった。素材どころか倒しただけでもかなりの懸賞金が得られるほど凶悪な奴だったようで、その懸賞金2万デイクス、曲刀にいたっては5万デイクス（1デイクス約100円）という合わせて700万円相当の破格さである。あぶないあぶない、この腰に下げた刃を売ったらたちまち有名な仲間入りしてまうとこだったぜ。確かにあいつは強かったな、フィリーと協力してなければ俺もやばかったし。

「さて忍び込みますか」

現在みなさんは夢の中へと旅立った丑三つ時の真夜中だ。なぜ忍び込む必要があるのかと言われれば、この街は城壁に囲まれている、南北東西にそれぞれ大きな門が設置されている。街の人以外の人は入国審査ならぬ入街検査が行われるのだ。つまり荷物もチェックさ

れてしまうわけで、そうすると荷の内容がバレる可能性があるのだ。今思えば腰に下げた虎の曲刀は、一回目の審査でよくバレなかったものだ。まあ元からのレアさに加えおれはそれに柄と鞘を作って加工しているのだぶんわからなかったのである。ただおれの服装を見て奇異の目を向けていたのはどうかと思う。

森の頃の原人ルックは勿論卒業している。現在はGパンになぜか袖が無くなってしまったシャツと、その上に原人時代にお世話になった鹿の毛皮で作ったベストを着ている。一応この世界で違和感を感じられないように着こなしたと思ったんだが。

もしかしたらまた俺の常識が合っていない部分があるのかも知れないし、いつか調べておこう。

「ではフィリー頼んだよ」

「ぬっふっふ。首都に忍びこむとかなかなかスリルがあつていいね」

敬語をやめるようになってから気付いたがフィリーはかなり遊び心が強い、といか満載だ。イタズラやら遊戯といった物に目がないさすがあの神にしてこの妖精ありだな、と凄く納得できるものがあった。

「見つからないようにね」

「大丈夫よ。私くらいの妖精だと許可した相手が、よっぽど特別な力を持った人以外には私の姿は見えないもの」

ほほう実に妖精っぽいすな、てか実際妖精なんだけどね。

「じゃあ、風よ吹き荒れよ！ 『ワールウインド』」

呪文を唱えてフィリーは街壁の方へと飛んでいく。ちなみに現在フィリーさんの呪文により一部街壁が暴風圏に陥っており大変危険です。一般市民の皆様はおとなくお家に帰りましょう。

「よし、行きますか『ライトプラス』」

俺が使った魔法は光を強化するものだ。簡単に言えば元からある光を更に明るくするという至極単純なものだ。この世界の魔法は、こうこう、こういう効果がこういふふうに出る。なんていふふうに決められているのだが、対象とか出力とか、例えば飛ばす時はどれぐらいの速度でどこに飛ばすか、などの効果以外の部分はわりと自由だ。どこまで自由なのかフィリーに聞いた事もあるのだが「さあ？」なんて可愛く首を傾げた仕草で返されて、壮絶に悶絶せられた。うむ、話がそれたね。ええつとフィリーの可愛さについてだっけ？ よろしい三日三晩語り明かしてくれ。え？ 違う？ チツ。とにかく俺は初級の魔法しかまだ使えなかったので、それらを色んな方法で工夫を凝らして使っている。そこから生まれた俺式ライトプラス。プラスシリーズは元からある火とか水なんかを多くしたり出力を上げたりするものだ。ライトプラスの場合マッチの光を松明替わりにしたりするために使われる魔法なのだが、俺は俺の目に入る光を少しだけ強化するように使った。

「うむバッチシ見えるな」

目ってというのは光を取り込むことで風景を見てるわけだ。暗い所でなにも見えなくなるのはその光の量が少なくなっているわけで、しかし基本的に全く光がないなんて場面はそうはない。だからほんの少しだけ目に入る光を増やしてやれば真夜中だって結構視界は良好だ。

準備万端整えて俺は南西の街壁を登りロッククライミングよろし

く登りだした。事前調査の結果ここがわりと手薄な警備でこの時間が最も忍び込み易いと予測した。まあほとんど勘ですけど。

そして作戦はまず強めの風を起こすことで、俺の足音とか背中荷物の音を悟られないようにする。そして俺の進路に合わせてフィリが、兵隊の持つランプの灯をそつとけしていくというものだった。文化的にも進んでおらず明かりが街を一日中覆っているわけではない。正門とお城は明るかったが、たぶん高いんだろうな維持費とか色々。ましてや今夜は三日月。例えば地球と違ってその数、三倍もある月ではあるがそこまで大きくはないので、明るさは大したことがない。そんな中で手元の灯りを消されては足元すら確認するのは困難だろう。

さすがに隠密行動なんてやったことなかったので、ある種の力技で押し通ることにしたのだ。……気配を察知するなんてスキルを一般兵が持つてないでしょうね？　ないよね？　大丈夫だよな？

すでに二人ほどやり過ぎて現在壁のほぼ上段。そんなとこまで来て若干の不安を抱いていた。

「我ながら大胆なんだか臆病なんだかな」

この間抜けめ！　と自分を^{なぶ}蹴りつつ上辺に登り着く。左右確認をすると、少し距離のある場所で兵士が急にランプが消えてしまつてあわてて火種を探している様が見える。どうやら上手く行きそうだ。

「あーあー、えーつと南西ブロックのリー１区画になにか入ったぞ
周辺の兵は至急確認求む」

突然周辺に誰からかの声が響き渡る。学校の校内放送を思い出す
それではあったが、それが俺の事をさしているのはすぐに察しがつ
いた。

「探知魔法とかあったりするのかな」

さすがに首都の街壁に容易く侵入できるというのは公算が甘かったか。よし、うむ、仕方ない。必死に自分を鼓舞する。

え？ 何をするのかだって？ 決まってるじゃん逃げるんだよ！
なんで気合が居るかというとな。

「ソ——イ」

高さ30メートルの壁から飛び降りなきゃいけなかったからだよ！

「ぬおおおおお」

身体は強化されてるが現在巨大な荷物を背負い中。下手すりゃ両足骨折の見るも無残なことになること受け合い、良くても背中のはバラバラチリジリなのは目に見えてるぜ。だからおれは奥の手、プランBを使うぜ！

「『ウィンドボール！』」

下級魔法のボールシリーズの風版。それは各種の火水風土光闇の属性の球、サッカーボール大のそれを相手にぶつける攻撃魔法だ。いや光属性のライトボールは単なる光の球だから攻撃はできないか…… まあいいや。それをなぜ今出したかと申しますと、これも俺式に工夫もとい改造して使うわけですよ。

下方向にそれを出現させ、俺はそれを四肢を使ってガツチリキヤツチした。つまりウィンドボールはぶつかった相手を吹き飛ばす風の塊。その力で俺の落下速度を相殺、吹き飛ばされる力は俺の四肢で抑えこみ、そんなでもっておれが球を地面まで移動させれば万事解決だ！

「ぐおおお」

はつきり言つて、実際に掴んで降りるなんて使い方をやってみるのはコレが初めてだった。ウインドボールは衝撃で相手を吹っ飛ばす魔法で、その威力を最小限に抑えてはいるつもりなだけ。凄く痛かった。素肌で接触している部分は、まるで平手打ちを連続で叩きこまれている痛みが襲いかかっていた。

二、三秒の出来事だったが、奥歯を噛み締めてその激痛をやり過ぎ、なんとか着地に成功した。すぐさま俺は近くに予め取っていた宿へと向かい、開けておいた窓から無事に帰還を果たす。

「ハアハアハアハア、いやゝなんとかなるもんだ」

そう一息付いているところにフリーがやってくる。なにやら機嫌の悪そうな顔をしているが……もしや俺の身を案じてくれているのか！？「無茶ばかりして心配したんだからね」的な。

「……………私は今まで風の魔法は、優雅で綺麗なものだと思つて生きてきたけど……………キドーの風術は無理やり過ぎてなんだか……………汗臭いよ」

どうやら自分の属性の魔法のイメージを傷付けられたらしたための不機嫌さのようだ。確かに力技極まりないのは、端から見てもそうだろうし、何よりダサさは自分でもどうかと思えるレベルだった……………あれ？ 目から汗が溢れてクルヨ。

ちなみにプランBの意味は何も無い、行き当たりばったりでどうにかする、だ。

第四話 ややこしやー（後書き）

頭の良さとしてはいいところと悪いところの差が酷い木堂君でした。

第五話 想定外デース

さて侵入劇から一夜明け、傷心な俺は激痛と共に目が覚めた。

「おお、これはひどい」

昨晚のプランBで俺はウィンドボールに掴まるという凶行に出た。

「まるで病気のようにだ」

「わー気持ち悪い」

その結果、素肌で触れていた腕の内側の部分が、内出血の為青い斑点がアチラコチラに浮かび上がっていた。多少まじだろうが服の下にも何個かはあるだろう。だってすでに痛いんだもん。気持ち悪いと言いながらも、フィリーがおもしろがって斑点をつついてくる。その嬉しそうな表情は、傷心の俺への最高の妙薬ではあるが。

「ヒギイ！」

壮絶に痛いのだよフィリーさん。空手で打ち身などは数えれないほどしてきたが、これはその中でもひどい部類に入る。それが全身にあるのだ、一つの痛みが連鎖的に全身を駆け巡る状態は、さすがに苦悶せざるおえない。

「キャツキャ」

フィリーさんもしかして俺が痛がるのを見て喜んでる！？ いかん！ 俺の癒し系妖精がドS系妖精に様変わりしてしまう！

俺は痛みを堪え立ち上がり、食事にしようと言を逸らした。

「朝飯でも食べますか」

「ねえキドー」

「なんだいフィリー」

穏やかな笑顔でフィリーに振り向く。そんな仕草も激痛が走り、笑顔の反面服の中では冷や汗が吹き出していた。

「なんで傷薬飲まないの？」

「あ」

以前疲労回復薬なるものの作り方をフィリーに習ったと言ったと思うが、その他にも幾つか薬の作り方を習い実際に作り置きしてあるものが幾つかある。その中でも森の中で重宝した傷薬。傷の治りをよくし、痛み止めの効果も持つ大変便利な薬だ。いやいや修行期間の前半にしか結局使う機会が無かったからすっかり忘れていた。

気合で宿の食堂まで降りて水をもらうと、粉状になった傷薬を口に流しこむ。飲んで数分で痛みがかなりマシになり、まるで口ボツ

トみたいな固い動きはしなくてもよくなった。走るのはまだきつそうだが、歩く程度なら問題なさそうだ。

しかもこの薬は効果抜群で血が流れるほどの切り傷も三日でふさがるほどの良薬だ。内出血程度なら三日で跡形も無くなっていることだろう。

「回復魔法が使えたらいいんだけどね」

傷を瞬く間に癒していく回復魔法なるものがあるらしいのだが、光属性の中級以上にしかないらしく、今の俺ではとてもじゃないが使えない。なんでも神様に仕えて加護を受ければ、それに属する魔法が割りと簡単に使えるようになるらしいが、正直この世界の神様がアレであつたため信仰する気はさらさら無い。

ないものねだりをしてても虚しいだけで、今は今朝の朝食への期待で胸をふくらませようじゃないか、痛さもましになったしね。そうして待っていると厨房のほうから食事を載せたお盆がひとりでこちらに向かつて来るのが見えてきた。これは……お盆の下に何か居る！？

ゴトツとお盆が俺等の待つ机に置かれる。そしてその下から現れたのは――。

「ハニワ？」

そう若干等身が短くデフォルトされているがまさにあの土で作られたハニワそのものだった。

「違うわよお客さん、それはミセスハニワウェイトよ。家事専門型の自動人形^{ゴレム}だけど見るのは始めてかしら？」

「ああ、俺はこの街には昨日着いたばかりだし遠くから旅をしてき

たもんでね」

魔法で動くロボットみたいなものだろうか。

「じゃあ後でもう一体のそのつがいなミスターハニエスがどこかで見れると思うから楽しみにしといておくれ」

なるほどこいつは一応主婦型でもう一体旦那方のハニワがいるわけだな。たしかによく見るとエプロンを付けているし、なにやら少しだけ胸の膨らみがある。

しかしハニワだ。

「どうしたのキドー？」

「いや、実にファンタジーで俺としては喜ばしいのだが、なぜか釈然としない部分もあるんだよねこれが」

だってハニワって和風じゃん！ デザインした奴出てこい！

考えても仕方ないので……なんか最近思考を投げ出している感がいなめないが、異世界に来たんだ、問題何てぶっちゃけ全部だ。いちいち考えていては切りがないので、まあいいやで済ましておく。

朝食は実に満足のいくものだった。焼きたてのパンとカボチャっぱいスープに玉子焼き。そして見たことがない形状の野菜が色々入っていたサラダも実に美味しく頂けた。パン主体の朝食としては満点ではないだろうか。昨日露天で食べた食べ物も軒並みおいしかったし、どうやら食文化はなかなか進んでいるらしい。メシマズの生活は元日本人としては耐えれないのではないかと心配していたので一安心だ。

さて俺としてはこのブローナスの街を拠点にしていきたいつもりなので午前中は街を散策という名目の観光をフィリーと一緒に行った。昨日は露天に並ぶ商店通りしか歩いていなかったなので色んな発見や情報が次々と見つかって非常に楽しく有意義なものになった。

まずあのハニワシリーズは結構な場所で見つけることができた。どうやら単純労働力として人気なようで建物に入ると大体のところで見つけていた。露天しか回っていなかった俺が見ていなかったのも仕方ないな。あともっとでかいゴーレムも警備隊の詰所らしきところに鎮座していたが、さすがにハニワではなくごつい人型だった。まったく動かないので兵隊さんに聞いたら有事の際は動くらしい。あと警備兵さんが見回りの時に連れて歩いている探索型のハニワが兵隊さんの後を数体がトコトコ歩く様子はなかなかの鼻血ものだったよ。

こっちにきて気付いたが俺はどうやら可愛い物に割りと目がないらしい。もしかして子供好きもそこからきてるのか！？

そして昼飯を済ませて俺はかなり大きな商館の前に来ていた。服装は午前うちに買った長袖のカッターシャツと皮のベスト、そして綿でできたつばい長ズボンに着替えていた。わざわざ着替えたのは目利きのできる商人さんに、あのGパンとパーカーを見せるのはまずいような気がしていたからだ。見た目に痛い腕の痣を見せるわけにもいかないし、商談って格好でもないしね。そう商談なのだ。

午前中に狼の皮だけはそれなりの商人に売りさばいたのだが、問題の猿とか熊の売り物は扱いは難しいが金に成るのも確かだ。そこで俺が考えた答えは、この街で有名な商人に直接売るといったものだった。有名な商人ならばこちらの秘密を他に漏らすような信用を失って損をする真似はしないだろうし、値段も正当な額で引き取ってくれるだろうと踏んだからだ。露天や宿屋のおばちゃんに聞きたった情報では、この街には五商家と呼ばれる、国王認定のとても大きな商家があるらしい。その中でも評判が良くて手腕も確かなのは、傾きそうになった商家を僅かな期間で立て直した若手のホープ、ボライアズ家のジーニー・ボライアズのようなだ。

そんなわけで現在ボライアズ家の前に到着しております。是非とも一度直接噂の彼に会ってみたかったので在宅中に訪ねようと思っていたが、偶然今日は家にいるはずだという事を小耳に挟んでいざ即刻直談判ですよ。

「お待たせしました。ジーニー様がお会いになるそうです」

取次を頼んだ門番君が帰ってきた。こんな名も知らぬ一般市民に会うのかどうかなんて期待は薄いと思っていたが、門番君に持たせた売却リストに興味を持ってくれたようだ。目録は傷薬などの材料になったフィラリア、ヌスス、ミラーゼという薬草を15束づつ。これもかなり希少らしいのでこっちに回した。後は猿の皮と爪セツトが2と熊セツトが1である。さすがに有名な商人であっても、熊やら猿の商品を一気に売るのは危険だと判断して、期間をおいてち

よつとづつ売ることにした。目の前に崖が見えてるのに突っ込むのは単なる無謀ですから。

商館の中はかなり豪華な内装を想像していたのだが、あまり装飾に派手さは無かった。しかし色んな所にセンスを感じる配置や家具の数々にその手腕の高さが伺えた。

「いい仕事してますね」

商人の手腕なんてのは測れないが、物の良し悪しは存分に計れますぞ！ この匠の技が込められた家具を選ぶ商人が出来ない奴であるわけがない！ この色、ツヤ、芸術的な曲線、あぁいいな、あの椅子……いやあの机もなかなか……。

応接室に案内されて良質な家具にお花畑を咲かせてトリップしていると一人の若者が入って来た。

「お待たせしました。私がジーニー・ボライアズで御座います」

俺に丁寧な礼をするジーニー。

「あ…… ああ、ご丁寧にも」

若っ！ いやいや若いって聞いてたけどこれは予想外に若すぎる！ 頭首ではまだないらしいけどその手腕と実績から、すでにそれと変わらない働きを見せてるらしいじゃん？ なのに目の前にいる青年はたぶん俺よりちよい上の二十歳前後ってところだ。若すぎるだろ！ 街の人から褒めちぎられるような男だから若いと言ってももっと上を想像してたわ！ というかその若さで国で有数の頭首クラスってどんだけだよ！ と内心のツツコミを全力で隠しつつ挨拶を交わす俺。

「すみません。お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「——失礼致しました。私の名はキドーと申します。今日はよろしく願いたいします」

フリーによればキドウやマサシは、ちとこちらの言葉では発音しにくいということなので普段はキドーと名乗ることにしている。

「いえいえこちらこそこんな若輩ものですがよろしく願います」

はい、内心バレバレなんですね完全に。なんか怖くなってきたよ。

「それでは早速商品のほどを見せていただきたいのですが」

俺は持ってきた包みを机の上で開いて見せる。

「これはリコステの爪と皮ですでね……こちらのハッグベアーの皮なんて久しぶりに拝見しましたよ。おやこの薬草は……」

ひとり言をブツブツいいながら品物を鑑定していくジーニー。真剣なんだか目の輝きが半端ない……なんだかちよつと俺に似ているような気もしてきた、自分の分野に夢中になるって所で。10分ほど時間を掛けて隅々まで鑑定し終えたのか長く息を吐いて姿勢を正すジーニー。俺の予想に反して薬草の鑑定に一番時間が掛かっていた。なにかまずいところもあつただろうか。

「それではハッグベアーの皮が一万二千ディスクと爪が三千ディスク、リコステの皮が二千ディスクに爪が八百ディスク。あと各薬草がかなり良質でしたので少しおまけして千ディスクで買い取らせて頂きたいと思います」

合わせて二万千六百かふむ、高いな。日本円で216万円が……ばねえ。

「はい問題ありませんのでその価格で結構です」

さすがにこの金額を釣り上げる商売根性は持ち合わせてないよ。

「ありがとうございます。付きましては一つお聞きしたいのですがよろしいでしょうか？」

やべえ！？　もしかして身元とか出所とか聞かれちゃう！？　この人なら聞かないと思ってここにきたのにー！！

「……何でしょうか？」

「この薬草の根を包んでいるものは何でしょうか？」

んん？　根を包む？　ああ草が枯れないように俺のけなしのシヤツの袖を破って根っこを土ごと巻いて水を含ませてたやつね。おかげで俺はノースリーブのお兄さんに進化出来たぜ、大事な服の袖を泣きながら破ったおかげでな。

「ああそれは――」

普通に答えそうになってあることを思いつく。この人程の方が態々俺に聞いてくるということは、もしかしてこの草を日持ちさせる方法を知らないのでは？　俺の婆ちゃんの園芸知識から頭の隅で覚えていた事だし、そこまで専門的な知識ではないはずだけど……。計算だけは早い俺の頭脳がそろばんを弾いていく。

「さすがジーニー様。それに付きましても商談をしたいと思っ
たのですよ」

今思い付いたんだけどね。

「と、いいますと」

「これからその包みに関する話をさせて頂きますが、その詳細を
買取っていただきたいのです」

たぶん情報を買取取るなんて事は概念としても薄いだろうからこ
れはかなり部の悪い賭けだ。確率は低いがうまく行けばリターンは
デカそうだ。

「ほう、話を買うというのはおもしろい事をおっしゃる。しかし聞
いてもない話に値段付けられませんがよろしいのですか？」

そうこの話は聞いてからしかその価値がわからない。なので聞い
た後で金銭をジーニーさんが払わなくても何の問題も無いのが痛い
ところだ。

「はい、私が全てお話した後でジーニー様のご采配で値段を決めて
いただいて結構です」

「……………わかりました。お聞きしましょう」

さて、この若い商人さんの器はどれだけでかいのかな？

そして草の根を土ごと保存することで劣化を防ぐ方法の詳細を俺なりに詳しくジーニーに話し尽くす。ちなみに獵師であった実家の秘伝だということにしておいた。

「素晴らしい」

まあ喰いつくよね。この方法なら取ってから10日は完全な状態で持ち運べるからね。今までそれをしてこなかった環境だったのなら、これからの薬の質の平均がガラッと様変わりするだろうしね。

「実に有意義なお話を聞かせて頂きありがとうございました。つきましてはこの話の値段なんですが……」

敬語で取り繕った感謝ではなく、心からの感謝だと目を見て感じ取れた。まあこれだけ感謝の気持ちが伝わって来ただけでも話した価値は結構あるな。人に感謝されるのはどこの世界でも実に気持ちいい。

「20万デイクスでいかがでしょうか？」

「へ！？」

「ああ、お気に召しませんでしたか！？ それでは25万で！」

「ウェイ！？」

「ええ更に上！？ 仕方ありません28万でお願いします！！」

あまりの金額に言葉も出なくなり首だけカクンカクンと縦に降る俺。

「いやありがとうございます。キドー様とはこれからも長いお付き合いをさせて頂ければ大変ありがたいと思っています」

ここぞとばかりの輝くほどの営業スマイルを携えておれの右手を両手で握って握手を交わすジーニ。

すまん、見誤った。この御方の器のデカさはとんでもない大きさだったようだ。

度肝を抜かれて半分魂がはみ出た状態な俺だったが、あのも話を詰めて俺は商館を後にした。

とりあえず28万デイクスはその金額が金額だけに銀行で受け渡しをすることになった。この世界にはしっかりと銀行制度がある。しかし俺は手続きも何もしていないので利用することはまだ出来な

い。

持ち込んだ皮や薬草の代金だけ受け取り。そしてジーニーに話した薬草の保存方法は他には漏らさないことを契約書を作って約束し。それでもっていつでもジーニー及びボライアズ家の誰かと交渉できるように、この商館への入館証をもらった。ただのペーパーの俺に対して破格の条件なんだろうことは、ジーニーのはしゃぎようからなんとなくわかった。商才に乏しい俺では、あの話でどんな儲け話が生まれるのか分からないが、彼にとってはとんでもない価値があったらしい。

持ち込んだ品と話の価格を合わせて30万デイクス余りの現金を手にした

ぶっしょっ。

第五話 想定外デース（後書き）

価値観の違いとはいつの世も大きな実りと戦乱を呼んで来るものです。

第六話 どこにでもいるやつ

実りがありすぎて、精神的に圧死しかけたボライアズ家からの帰り道、俺はなんとか理性を取り戻し、ホクホク顔で食事処や露天を練り歩いていた。

「フィリー今日は好きなお菓子なんでもおごってやるぞ！」

「ほんとに！？ イヤッホー！」

超甘党のフィリーはなんでもというワードに興奮して商品を決めるため、あっちにフラフラこっちにフラフラしていた。俺もせっかくだから晩飯は豪華なところで食事しようと周りの店を涎を堪えれない状態になって見まわってる。なんという食欲という煩惱に弱いコンビなんだ俺らは……。

この世界の食文化は予想通りかなり進歩した状態のようだ。調味料の多様性こそ地球での日本には大きく劣るものの、味付けや調理道具の質はかなりのものだ。どうやら最も簡単な部類の魔法であるのなら、一般市民の人達も使える人はかなりいるようで、その力を料理にも活用しているみたいだ。

ブタのような動物を『ファイヤーボール』の火力を低くした状態で包んで丸焼きにしている様子は、圧巻の一言だった。

満足いくまで食べた俺らは宿への帰路についた。おみやげのお菓子まで買えたことに興奮してフィリーは俺の周りを飛び回り続けて

いる。普通の人には見えないがもし見える人が男の周りを妖精が跳び回る様子を目のあたりしたらどう思うんだろうか。腰を抜かす？俺に詰め寄る？それとも苦笑い？

明日は色々装備品とか物資調達に買い物に出かけますかな。いまだ魔法が不完全なおれでは有事の際に対応できない場面があるかもしれない。そのための対応策はいくつか考えてあるので、武器屋か防具屋でもいつてそれに必要な物を見繕う事にしよう。これだけ金があれば結構融通効くはずだしね。いやゝお金って大事！

そういえば銀行の口座も作らなきゃだめなんだよな。あんまりジニーさんを待たせるのも悪いし宿の女将さんに聞いてみるかな。順調すぎる未来図に浮かれて、まあなんだ俺は油断していたんだろうね。いいことあったから。

「ぶつからないように気を付けろよフィリー」

フィリーに注意を促した時、後方から俺に向かって注がれる視線に気がついた。危険と隣り合わせの森で過ごしていた俺は、気配というより敵意みたいなものに敏感になっていた。この視線はまさに獲物を狙う肉食獣のそれだ。だけどここは街中で俺が獲物に見えたとするならば――。

「フィリーごめんな、ご機嫌なとこ悪いけどさ俺等付けられてるみたい」

「えっ。あっほんとだねゝ顔の怖いお兄さんが三人ほどついてきてるよゝこの街ってああいうの結構いるよねゝ」

少し上空に上がって目視で確認するフィリー。おう三人もいるのかよ、聞き捨てられない話も聞こえたがまた今度にしてどうするか……。走ってまいちまうのも手だけど付きまとわれて宿の場所がバ

しるのも嫌だし、ほっておくには俺の主義に反するな。

宿には向かわず、むしろそれとは違う方向にしばらく歩き、薄暗い裏路地に入り込む。

「おつと兄ちゃんそこで止まりな」

周り込んだのかつけて来ていた男の一人が正面に立ちふさがる。こんな分かりやすい誘いに乗ってくるとは三流なのか俺を甘く見るのか、ってどっちも当てはまりそうだなこの駄目さが溢れる顔からして。

「……なにか御用でしょうか？」

「あんた今日なかなかいい稼ぎがあつたんじゃねえか？ それを俺たちにも分けてほしくてよ」

むむ？ 稼いだことを知ってるってことはこいつらボライアズ家あたりから付けて来たのか、気が緩みすぎたる俺……………商館のあるあたりでほくほく顔でかい硬貨入れをぶら下げてりゃ、アホでも儲かったってわかるだろうに。しかも今は町人風の一般市民的な

服を着ている。悪党からすれば夜中に歩いている俺は丸々太った旨そうなブタさんに見えただろね。

「稼ぎたかったら、汗水垂らして得たお金の方が、気持ちよくつかえると思うけど」

「はっそんな馬鹿なことより、てめえみたいな間抜けから頂いちまったほうが俺らは酒がうまくなるのさ！」

「ほほう。苦労してお金を稼ぐのが馬鹿ですか。そうですかそうですか」

どうやらこいつらは遠慮のいらぬゴミのようだ。今の発言にはピシリと眉間に来るものがありました。

「お断りします。てめえらみたいなクズに恵んでやる金は一ディクスも持ち合わせておりません。とっとと大人しくママのいるお家に帰ったらどうですか豚野郎」

すっごい見下した目線で挑発してやる。

「このガキほざきやがったな！」

強盗どもは殺気を俺に向けながら、獲物を引きぬく。

「せいぜい悲鳴を上げて後悔するんだな！」

三人同時に俺に斬りかかる。もうほんとキレやすい最近の若者はこれだから困る。まあ俺のほうが確実に若いけど。

まず正面から来ていた一人の振りかかるその手を、正確に狙って

拳を放つ。移動したことで空振りしていた後ろの一人へと振り返りその手につま先で下段蹴りをかまし、驚きで固まっていた最後の男には裏拳でその手を薙ぎ払う。持っていたナイフや剣などの獲物が三つ飛んでいき、それぞれの指は見たこと無いような方向に曲がっていた。

もちろん手加減はしている。もし全力で攻撃したら、もしかしたら指がもげ落ちるなんて事もありうると思うからだ。

「ぎゃあああああああああ」

痛みに絶叫するのはいいけどお前ら、なんで手を抑えるリアクションがまったく同じなんだよ！ 悲痛な場面でシリアス展開のはずなのに、ちよつと笑っちゃったじゃないか。

人が集まるのも困るので全員の顎を揺らして意識を断つ。すぐさま三人抱えていつも通りスタコラサッサですよ。

「こいつらなんだか汚いね」

ある意味では正解なんですけどフィリーって結構口悪いよね。

「さて確かこの辺に……いたいた」

じゃあこいつらを君たちのご主人様のところまで引きずっていいてね。

翌日、巡回に当たっていたワニワゴーレムが縄で括られ、額に「

このひと泥棒です」と書かれた紙が貼られた三人組が運ばれてくる
事件が起こったらしい。
ハニワ君って凄いね！

第六話 どこにでもあるやつ（後書き）

ハニワ回？

第七話 職人たちの晩餐

ものを言う事もできず、大した戦闘力も持たないハニワゴーレムが強盗をしよつ引いてきた一件は、しばらくの間酒場とかの話題にはなつたものの、結局俺のところまで辿り着く事は無かつた。目撃者が話もできないハニワでは無理もないし、あの小悪党ではあの暗い中で俺の顔をしっかりと見えていたとも思えないので、大丈夫だとは思っていたんだけど。

翌日の朝、宿屋の女将さんに早速銀行の口座の開き方を聞いてみた。なんでも身分証明書みたいなものがあれば誰でもすぐに作れるらしい。

「おうう。無いよそんなの」

「ならどこかのギルドに金を払って登録するといいいんじゃないかい？」

ギルドってたしか地球でいう総合協力組合みたいな？ 学校でいうなら委員会だな。ただ地球での団体よりこちらのほうが権限も強く、金をやり取りする額を大きいらしい。どうやらそこへ登録すれば身分証明書的なものをくれるようだ。金には余裕があるし、元から入るつもりでいたからこれは好都合だ。

「じゃあ生産ギルドに入りたいんで本部がどこか教えてもらえます
?」

フリーからの予備知識により大事なところはバッチリ覚えてい
る。

「生産ギルド本部は、西門のところからもうちよい北に行ったとこ
にあるから、ここからは少し近いね。西門まで行ってその兵隊さ
んに聞いた方が早いとおもうよ」

「ありがとう女将さん」

「なに、いいってことよ」

この女将さんまじ男前！ 勿論ほめてますよ？

朝食を堪能した俺は生産ギルドにさっそく赴いた。フリーはお
菓子を食べ過ぎたのか俺の腰に付けたポーチで眠っている。この街
の服には胸ポケットが付いていなかったため急遽買わされたのだが、
ゆくゆくはお気に入りの服には全部胸ポケットを付ける予定だ。

俺の胸ポケットからヒョコツと顔を出すフリーはマジで鼻血も
んだからね！ 俺としても是非これは叶えておきたかった。

さて生産ギルドの本部に着いたわけなんだが、この街の建物はほ
とんどが石造りか木造の家がほとんどだ。そんな中ギルド本部は全
面を黒鉄で覆ったとてつもない建物だった。

「要塞かつ！」

とツツコミながら中へと入場。中も外に負けないほどに鉄だらけ。粗相でもしたら地下に設置されてそう拷問部屋に案内されるんじゃないかなっていうくらいなぜか圧迫感のある様相だった。行き来している人もみんなゴツゴツしい肉体の持ち主が多い。鉄製の壁なので涼しいはずの屋内が少し暑く感じてしまうのは気のせいではないだろう。

「ようこそ生産ギルドブローナス支部へようこそ！ 本日はどんな御用でしょうか？」

ごく一般的な接客なのに建物のせいで今日はやけに眩しくみえるぜ。もしかしてこれが狙いか！？

「えーと、新規の登録をお願いしたいのですが」

「はいありがとうございます。ギルド規約のほうはお知りでしょうか」

「いえ、説明お願いします」

なんでも階級が別れており最初は銅から始まるらしい、そして鉄、鋼、ミスリル、オリハルコンとランクアップしていくようだ。しかし義務として半年に一回査定が行われ実績及び成果を一定以上示さ

ないよランクが下がり、銅の状態で半年を過ごすと即除名になるらしい。

階級によって特典があるらしいがそれはあがってからでいいか。あとは製作依頼とか仕事の斡旋を回してくれることがあるらしいが、基本生産ギルドの面子は自分で仕事を探すのがほとんどでギルドから回される仕事はかなり特殊なものがほとんどらしい。しかし成功の際にはかなりの高評価が得られるらしい。

それにしても魔法鉱石ミスリルと神が人に与えたと言われる鉱石オリハルコンって実在するんだ。いつか手に入れてみたいものだ。というかこの世界は魔法があるし神様が実際にいるわけで、なにやらちよいちよい干渉してるようなのでそれがあってもそこまで不思議なことではないのかな。

「それでは登録料千デイクスとこちらの容器に少量の血を入れてくださいませ」

用意された針で指先を突いて容器に血を垂らす。なんだか血を垂らす所を美人のお姉さんに見られるのは、いけないことをしているようでなんだか恥ずかしい。

「では証明書となるカードを発効致しますが、作成にやや時間が掛かりますので明日改めて受け取りに来て下さい。それではキドー様のご活躍をご期待しております」

銀行の為に証明書が欲しかったのだがどうやら明日まではお預け

のようだ。予定がなくなつたので午後から行こうと思っていた武器屋へと足を延ばすことにする。ラッキーな事に武器屋多い一角は生産ギルドに使い場所にあつたのでついでとしては都合がよかった。

「おじゃましてーす」

店の前に並べられた武具を見て品定めし、良さそうな店を見つけて入店する。

「いらつしゃい。何をお求めですか？」

愛想良く迎えてくれた妙齡の女性。店内は武器や防具が所狭しと大きな目の部屋に並べられている。数も多いが、その種類がかなり多いと思われる。剣や槍の形違いはもちろん、鎌や鎖のついた鉄球なんてのも置いてあつた。防具は、鉄製、皮製があるようで、手袋から胸当て、果ては全身鎧までの充実っぷりだ。

この店で三件目なのだが、どうやら見たところ当たりの予感がする。

「えーと武器とか防具を見にきたんですけど」

「どんな物をお使いに？」

「おれは拳闘を得意にしてるんで拳につけるナックルなんてのがいいですね」

ナックルはこっちでいえばヤンキー御用達のメリケンサックみたいなもんだな。

「ほう珍しい客が来たもんだ」

奥の方で無表情のまま本を読んでいた爺さんが会話に入ってきた。目付きが鋭いが、見た感じこの人がここにある武具を作った鍛冶屋なんだろう。筋肉隆々だし、なにより手の皮の分厚さが尋常じゃない。

「まさかそんな体で魔獣にまで拳闘で挑むつもりじゃあるまいな」

「そのつもりですけど？」

「ハンツそんな細腕じゃ殴った腕のほうが先に壊れるぞい」

カッチーンときた、職人さんには敬意を払うと決めてはいるが、そこまで侮られては黙ってられない。

「昔気質の職人は武具を作る技量はあっても、使い手の实力を見抜く目は持ち合わせていないんですね」

「抜かせ小僧が！ 過信をし過ぎると早死すると言つとるのだ！」

これは説得しないと売ってくれなさそうな空気だな。

「お義父さんお客さんにそんな喧嘩腰にならなくても」

「うるさいわい！ ワシが売った武器を使う奴がみつともなく死んでいくなど許せるものかよ」

いい志ではあるし良い人のようだ。ならばなおさらここで買いたくなる。個々の武具はかなりの良質で、ご予算的にも手が届くこの店で、是非武具なんかを手に入れたい。仕方ない、実演といきますか。

「お姉さんこの紙ちよつと使つていい？」

「あらやだお姉さんだなんて。いいわよ一枚くらい」

四十手前つぱい女性にお姉さんは無理があるかと思つたが効果は抜群だ。

「爺さんその閉じかけた目でよく見てな」

俺は紙を空に投げ出し構えを取る。胸の高さまで落ちてきたそれに貫手を放った。

「どうよ、これで信用はできたかい？」

落ちたその紙には俺の放った指一本の貫手によって穴が開いている。紙に穴を空けるのなんて子供でもできそうなことではあるが、宙に舞う紙は軽すぎるため空圧で飛んでしまいあたつても破ることも難しい。それを俺は速さと鋭さを備えた貫手で、ど真ん中に丸く穴を開けて見せたのだ。力、速さ、そして技量を伴っていないとできない芸当である。強化される前なら厚めの紙でやってみせても、やや裂け目が出来てしまうくらいだったが、こちらでの全力を使えば達人級の技でも、難なく出来てしまう。

その紙をみて爺さん目を限界まで見開いてしばらく凝視していた。

「おんし何者だ？」

「そこは企業秘密です」

「なんのことかわからんが、聞かれたくないのなら聞かんわい。だ

が確かに腕はあるようだ、わびを兼ねてどんな奴でも一個だけ半額にしてやるう」

この爺さんの職人としての意地はどうやら清く正しいらしい。間違ったことを素直に認めて謝罪も忘れない。いい職人の必須条件で
すぜ。

「じゃあさっきから気になってたこのナックルの右手側を一個下さ
い」

「なんでい左手には装備しないのかい？」

「はい、右手は攻撃を左手はなるべく防御に回すため、軽めの鉄甲
をつけようかと」

「なるほど、悪くない選択肢だ。それならあの奥にあるのはどうだ。
四肢を守る為の鉄甲と脚甲のセットだ。速さ重視の戦士を想定して
作った逸品だ」

左手の鉄甲を試しに付けてみる。手の上側だけに鉄をしつらえて
あるそれはかなりの軽さながら、その強度も期待できそうだ。脚甲
も前面はプレート入だが、その他は丈夫な皮で作られた軽装だ。か
なりいい感じだし、俺の希望していた条件ともピッタリと合う。い
い仕事してますね、爺さん。

「じゃあ後はお前にあわせて調節するからちょっと待つてろ」

返事も待たずにナックルと防具を抱えておくに引っ込んでいく爺
さん。

「あ、値段聞いてない奥さんお幾らになりますか？」

「はい、ええつと全部で5千2百ディクスですね」

予想通りなかなかのお値段。しかしこの質でそれならばむしろ安いかもしれない。よし決めた！ 他の武具もここで全部買ってしまうおう。

「えつと他にも欲しい物があるんですけどこんなのでありますかね？」

爺さんが裏で金槌を鳴らす音を響かせる中で俺は奥さんと相談しながらさらに多くの品を買い上げることになった。

結局あの爺さんの店『ビート&ガッツ』で大量の買い物をした俺は大風呂敷で荷物を背負って宿屋に帰還中だ。なんだか最近背負ってばかりな気がするな。そのうち子泣き爺も背負うんじゃないだろうか。いやいや、そんなの想像したら背中中の荷物が重く感じてきた。

人通りの多い中央通りのテクテク歩いていると、またあの視線が向けられた、以前のものよりかなり弱々しいそれだったのだが、どうやらスリだったようで俺の腰に下げた皮袋に伸ばされた手を掴み

とつた。

「いやいや二日連続盗みに合うとか、狙われすぎだろ俺」

呪われてる、もしくはとても間抜けな鴨にでも見えるんだろうか？ 視線も向けずに掴んだ犯人に体を向き直す、だが何だか違和感があるぞ。細さとか高さとか手触りとか。

「なにすんだよ！」

そこにいた盗人は小さな子供だった。

「人の物に手を出すのはいただけないな」

見るからにボロを来て顔もいつ洗ったのか分からないようなほど汚れている。そして何よりガリガリだ。いったいこいつの親は何を考えているんだ。

「うるせえ！ まだ触ってもいないだろ」

「まあね」

暴れて逃げようとする少年を掴んだままやり取りしている中にグーという少年の腹の虫が鳴り響いた。

「なんだ腹が減ってるのか、俺も減ってたしついでだ少年、お前もなんか食つか？」

「え？」

奇っ怪な物を見たような顔で俺を見つめる少年。ふっふっふ変人と呼ばれた俺にはその視線は慣れ親しんだものだぜ。

少年をそこらのベンチに座らせて、露天から肉と野菜を挟み込んだ大きなパンを二つ購入してくる。特製ソースが自慢の一品らしいが、そのソースの香りは俺の食欲をいっそう際立たせていた。待たせている間に逃げるかと思っていた少年はちゃんとベンチに座っていた。どうやら周りの露天から匂う香ばしい香りに食欲が勝てなかったらしい。帰ってきた時お腹を抑えてこつちを睨みつけてきた。なんだろう。待て！ お手！ ちん。ん！ って言いたくなってきたけどこつちで通用するのかな、この話。

「ほれ出来たてホヤホヤだ、急いで食って喉詰まらせるなよ」

パンを受け取った少年は悩んだ様子で、唾を飲み込んだ。まあ見も知らぬ他人から食べ物なんかもらったら疑うのが当たり前だよな。なかなかこいつはしっかりしているようだ。

五秒ほど悩んで意を決したのか少年は一心不乱にパンを貪り出した。見た目そうだな10歳くらいかな。歳のわりにはちょっとデカすぎるかなと思ったがこの調子だとあっさり完食できそうだ。

無言で食べる少年の横に俺も座ってパンを食べだす。うむ、この間に挟まれたソースはケチャップっぱいが、かなり酸味が効いていて肉と抜群の相性を発揮している。露天で買った食い物の中では一番の当たりだなこれ。

俺が食い終わって少年の方を見ていると下を向いたまま固まって

いた。

「なんでだよ……」

「なにがだよ」

「なんでおれに食い物奢ったのか聞いてんだよ！」

少年の顔には涙を流した後が見れ取れた。あーなんだろうチクチクしてきた。

「お前腹が減って腹が減って、仕方なかったから俺の金を盗もうとしてたんだろ？」

「……そうだ」

「でも俺は、さすがに全額取られるのは困るんだわ。だから間をとって晩飯を奢ることにしたわけだ」

少年に全力のドヤ顔を披露する。しかし少年はなんとも言えない表情をしていた。あつれーツツコミ待ちだったんですねー。

「ウザさが凄い」

フィリーさんツツコミどうもー。指の先ほどに小さく切り分けたパンをあげたのだが。それを食べたフィリーの口の脇にはがつつりと赤いソースが付着していた。

「わけわかんねえ……わけわかんねえよ………」

そりゃわからんだろう。だって思い付きだしね。

「ん？ パン全部食べなかったのか？」

てつきり完食したものと思っていたパンはその半分が少年の手の中にまだあった。

「これは帰って妹たちにやる……」

おいおいおいおい、そんな劣悪な環境にまだ子供がいるのかよ。明日になったら殴り込みにいつてやろうか。

「オーケー分かった。だがそれは俺がお前にやったんだ、全部お前が食べ！」

「でもっ！」

「そのかわり——」

俺は腰の革袋から中銀貨を一枚、百ディクスを少年に差し出す。

「これで土産でも買って帰ってやれ」

こういうのは偽善なんて呼ばれるんだろうね。自覚は無くはないが、見逃す選択肢はもつと無い。

何も言えなくなった少年はボロボロと泣きながら残ったパンを頬張り出した。

この時俺は今だ想像が追いついていなかったのだ。生まれた国が豊かすぎて平和ボケしていたのだろう。この世界の果てしない厳しさと理不尽さを、そして悪意持つ者たちの多さを。

第八話 愛と影

あのボロを着た少年と、少しだけ話しをして俺は宿に戻った。彼については思うところが多々あったが、何かあったらこの宿を訪ねて来いと言っているので大丈夫だろう。苦労したのか、幼いくせにしっかりしてたからな。

「キドーってホント変わってるよねー」

「だがそれがいい」

「私も面白いからそれでいいけどね」

自他共に認める変人が妖精にも認定されたよ！ やったね……いややめとこう。

とりあえず今日買い込んだ物を自分の部屋の床に並べる。爺さんに調節してもらった意外のものは俺なりに改造して使うつもりでいるからだ。買ってきたのは皮で出来たポシエットと小さな手投げナイフ30本とそれを収める皮の入れ物10個だ。徒手空拳で戦いしかも魔術が不完全なおれではどこかでリーチのなさが問題に成ることがある。実際ヨルガの森のサーベルタイガーにはフィリーの援護無しで触れる位置まで距離を詰めることが出来なかった。

そこで投げナイフだ。森では石を投げて代用していたが、それが

鉄でしかも刃物であるナイフならば更に殺傷能力は上がるだろう。他にも色々応用が効きそうだし俺の肌にもあつてと思うので戦闘スタイルに取り入れてみる。魔法を使うという手があるのだが、肉弾戦闘の素早さや対応能力に比べると、不慣れな為に、時間がどうしてもかかしてしまう。かかるというてもイメージしてから発動までに二秒で発動できたりすづののだが、俺の現在の身体能力ならナイフを取り出し、投げるまでの時間は一秒、いやその半分すら消費しないだろう。一瞬の時間で命運を分ける命のやりとりをする場では、それだけの差は大きい。なんせ魔法一つ打つ間に俺は四回ナイフを投げられる計算だからな。

ポシェットは腰周りを一周して、腰の位置に小さなカバンを固定するものだ。カバンといっても拳が丸々一つ入るほどの小ささなのだが、それが右側に設えてある。そこには武器屋で買ったナックルを収納しておく予定だ。定位置に設置しておけば手をつまむだけで、装備が完了するという手早さはなかなか魅力的だ。

次にポシェットの皮と同質のもので出来たナイフを、頑丈な糸で五つ一組で斜めにして組み合わせていく。皮加工は社会見学で一回だけ体験した事がある程度だったが、繋ぎ合わせるだけならなんとかなるだろうという、よくわからない自信で行っていた。まっ結局成功したんですけどね。そしてお次にそれをポシェットの腰巻の後ろにあたる部分に、金具を使って固定していく。そして左側のスペースには細い筒が入るように皮を6箇所追加して、そこへ買ってきた小さな試験管のような鉄製の筒を指し込む。試験管の中身はフィリ―直伝の薬を水で溶いたものを入れる予定だ。疲労回復、傷薬に解毒薬を二本ずつだな。そんでもってその腰巻には、更にズボンのベルトとも連結出来るように金具を追加して完成だ。

「できたー！」

作業に集中していた為に時間の経過をかなり無視していたらしい。

喉がカラツカラに成っていたので机に置いておいた水を飲み干す。

「ぷっはー！ 作業の後のこの一杯」

昔からおっさん臭いとよく怒られた恒例行事だが、この時に飲む水はどんな飲み物よりもうまいんだから仕方ない。

「おーおー」

夢中で作業する俺を黙々と見つめていたフェリーが、完成した俺式ホルスター（収納するのは銃ではなくナックルだが）を近くによつて輝く瞳で観察している。期待の眼差しに答えるために、早速自分の腰に装着してみる。しっかり固定されているかチェックしてみるが、どうやら問題は無さそうだ。

「よしよし、一から作ったわけじゃないが、こっちに来て作った作品第一号だな」

ヨルガの森で壁やらベッドは作ったが、俺的プライドにかけてあれは作品と呼べるものでは断じて無い。

ここまで言えはわかるだろうがつまり俺は必要な装備を手を使わずに収める場所を皮のポシェットを改造して作ったわけだな。これに鉄甲と脚甲を装備すれば第一段階としては完成だ。本当はホルスターの前部分にも付きたい物があつたのだがそれは後日にする。

もちろん第一段階なのだから第二段階もあるがその完成は大分先になるだろう。今のところ目処すら立っていないわけだしね。

「それにしても……」

鉄甲と脚甲、ホルスターを装備し武器も全て設置した状態で部屋

に用意された鏡の前で自身の姿を確認する。

「……………良い」

特撮ヒーローというよりは、どっちかというところ忍者が、その姿は大いに俺を悦らせてくれる。

「うれしそうだね〜キドー」

「おう！ フィリーに会えた次ぐらいに今感動しているぞー！」

俺はしばらく色んなポーズをとったりし、ニコニコ顔で動作チェックを繰り返す。今の状態を他人に見られたら、俺はこの街を出ないといけないかもしれないぐらい恥ずかしい様相だったが、今は完成の喜びが上回っているので、分かっていただけやめられない。

だいたい十分ほど鏡の前に立った頃には、既にフィリーが目を擦ってオネムの状態に成っていた。もうそんな時間が、確かに外からの音も全く聞こえなくなってきたな。

この世界に来て最も困った事は手に持てる時計が無いことだ。太陽とか星とかを観察すれば大まかな時間がわかるのだが室内ではまるでそれがわからないのだ。大通りなんかでは大きな時計がある。小さめの時計はあるにはあるが、かなりの高級品らしく安宿でそれを買うのは難しいだろう。

いい感じに疲労したし俺も眠ろうと装備を外そうとしたその時、

宿屋の階段を駆け上がりこちらへと走ってくる音が廊下から聞こえ出した。襲撃！？ とっさにナツクルを装備してドアへ構えを取る俺。

「兄ちゃん！ 助けてくれ！」

ドアを開けて現れたのは昼間に泣きながらパンを食っていたあの少年だった。

騒ぎに飛び出してきた女将さんに事情を説明して謝り、取り乱す少年リッキーをなんとか落ち着かせた。少年の話を聞いて俺は愕然としてしまった。

俺はてつきり家庭内暴力、そんな程度の問題だと思っていた。あなんて甘い、なんて大馬鹿野郎なんだ俺は。

彼はストリートチルドレン。親も家族も家もなく、その日その日を路上で暮らす孤児だったのだ。一人でなんとか生きてきた彼は、最近ストリートチルドレンが集まって暮らす集団に仲間入りしたらしく、妹達と言ったのは彼の年下の女の子のことらしい。彼等にとっては共に生きるのは家族同然の信頼関係があるのかもしれない。

俺に百ディクスを貰った少年はありったけの食料を買い込んで仲間の待つ場所に帰ったらしい。うまい飯を腹いっぱい食べたことは彼等にとっては、これ程嬉しいことはなかったってさ。もちろん仲間たちは大いに喜んで食べ物に飛びついて食べていった。その嬉しさのあまり、一時はお祭り状態になった。

そんな騒ぎを彼等の住むスラム街のボスが通りかかった。大量の

食料を食べる子供たちを見て彼はこう言った。

「ほう今日は大漁だったらしいな。なら三ヶ月たまつてる場所代を払ってもらおうか糞餓鬼ども」

なんでも彼等がボロ家に不法滞在しているのを黙つといてやる替りに、毎月スリなどで稼いだ金の一部を払わされていた。しかし三ヶ月前に一人の女の子が病気を患ってしまったためその金は滞納してしまっていたらしい。

「違うんだ！ これは貰ったものなんだ！ 本当なんだよ！ だからおれが稼いだ金じゃないんだ」

スリで稼いだ金じゃないんなら、そのボスの取り決めには違反してはいないので当然の言い訳だろう。

「ああん？ 誰がためえらみてえな汚いガキにこんだけの食いもん恵んでくれるやつがいるんだよ！？ それに百歩譲ってそうだとしてもその金をオレ様に献上しない理由はないだろうがっ！！ なめてんのかテメエ！！」

ボスに近寄り懇願していたリツキーは殴り飛ばされてしまう。それを見て一人の少女がリツキーに駆け寄る。

「まあいいや。予定より少し早いが攫っちまうか」

ボスが指を鳴らすと周りからゴロツキが十人以上現れた。

「あなた最初から私たちを売るつもりだったのね！」

リッキーを介抱していた少女がボスに言葉で噛み付く。

「相変わらず乞食の癖に頭がよろしいなトウカ。この俺が態々警備兵に金を握らしてまでお前らを庇ってやるわけねーだろーがよおー。やっとお前らを奴隷として売る算段がついたんだ。しつかり今までの恩をたっぷりの金にして俺に返してくれよ？」

トウカと呼ばれた少女にボスが手を伸ばしたがそれを少女は全力ではねのける。

「触らないでこの外道！ あんたに触られるくらいならここで舌を噛んで死んでやります」

「そんなこと言うなよつれねえな」

今度は油断なくトウカの襟首を掴んで片手で持ち上げるボス。

「おんやゝお前今までそのなげえ髪と、顔の傷で気づかなかったが、なかなかいいモン持ってるじゃねえか。湯浴みでもして綺麗に着飾れば美人になるぜ。そうだ今夜は俺の相手をしてくれよ、最近色々溜まって困ってるんだよ」

その時トウカは舌を突き出して噛み切るために口を開ききる。

「おっと死ぬのはいいが、さっき殴ったガキの確かゝリッキー？ だったか、お前が寂しくないようにあいつも一緒に道連れにしてやるが、それでも死ぬか？ それにお相手してくれるなら一人くらいは見逃してやってもいいんだぜ？」

宙吊りになりながら震える少女。

「あんたは地獄すら生温いわ！」

「商談成立だな。野郎ども一人残らずかつ攫え！！！」

そこで気絶したリッキーが、次に目覚めた時は奴らのアジトに連れ込まれる寸前で、自分はどうかやら気絶していた為拘束されずに肩に抱えられていた。そこから必死にもがいて逃げ出し、ここまで一心不乱に走って来たのだ。

「もう兄ちゃんしか、兄ちゃんしかいないんだ。警備隊のやつはグルだし、俺たちみたいな乞食なんて騎士が助けてくれるわけない。むしろ居なくなれば清々するだろうさ。でも……でもアイツらはおれにやつとできた家族なんだ！仲間なんだ！頼むよ……頼むよ兄……ちゃん……俺なんでも……するから……死んだって構わない……だから……たすけてください」

俺は泣き崩れるリッキーを抱きしめる。

「よくここに来た。よく逃げ出してきた。お前は偉い、本当に偉いぞリッキー」

頭を撫でてやると体の強張が解けていった。

「後は任せとけ。愛を守って悪を砕くのがおれの役目だからな」

立ち上がり用意してあった赤いバンダナを頭に巻く。ああ力が溢れてくる、まるで尽きることはない無限の如く。

「フイリー」

「わかってるよ。付いて行けばいいんでしょ」

「いや君はここにいてリッキーを守ってくれ」

「……一人で平気なの？」

「大丈夫さ今夜の俺は誰にも負けない」

力が体の外にまで溢れ出して空気が揺れているような気がした。

「わかったよ。お土産期待して待ってるわ」

本当に今日彼に会えてよかった。本当に今日装備が整っていてよかった。本当に彼がここまで辿り着けてよかった。

不謹慎だがこれは幸運、運命かもれない。心の底から感謝してやるよ神様方。

今日俺は成りたい俺になる。そう正義のヒーローに俺はなる。

第八話外伝 トウカの覚悟と叫び

私はトウカ。１１歳の頃、理由もわからずに親に捨てられてストリートチルドレンになった。絶望と理不尽への憎しみに苛まれて消えてしまいそうになった私ではあったのだけれど生存本能ってやつは思ったよりも強くて、気が付けばご飯を探して街を彷徨うストリートチルドレンの仲間入りを果たしていた。

最初の一年は本当に酷かった。私が女で乞食って知った悪人顔の男が私を狙って拐かそうとするなんて日常茶飯事で、ほんとうにこの寸前までいったことも結構あった。だけど幸か不幸か、結局私はなんとか変態どもの手から逃れる事に成功して生きていた。

ある雨の日、例によって私は男に襲われ命からがら逃げ出して下水の入り口で座り込んでいた。

「なんで……なんで私ばかりこんな目に………」

夜には泣かない日の方が少なかった。そして憔悴しきった私は本当に心が折れてしまいそうになっていた。終わらない飢餓感、安寧のない暗闇、襲い来る欲望に汚れた手。一人の人間の心を砕いてしまうにはどれ一つとっても十分なものだと思うわ。

「寒いよ……誰か助けて……」

自らの命を断つ事を思考に浮かべ出した私が聞いた声は下水の奥から聞こえてきた。

まるで私自身の気持ちを代弁したその声の主を探すため私はヨロヨロと立ち上がって下水の奥へと進んでいった。そこで見たものは闇で覆ってしまった私の心を見事なまでに打ち砕いた。

私と同じストリートチルドレンだというのは人目で分かった。で

もそこにいた彼女は私より遙かに年下、六歳ほどしかない少女だったのだ。なぜかさつきまで弱音を吐いていた自分がン情け無くて下唇を噛み締めていた。

ついさつきまでは私は世界で一番私が不幸で恵まれていないと思っていた。そして恨んでもいた。なぜ誰も助けてくれないの？　な　　んで私はこうなってしまったの、と。だが今出会った少女は同じ環境に六歳の身で過ごしている。

それがどれだけ辛い事か、どれだけの恐怖に怯えて暮らしていたのかを私は想像することが出来なかった。だけど既に骨と皮だけのよう　　に痩せてしまった体がその壮絶さを私に物語っていた。私は普通であつた頃の知識を使つてなんとか生き延びている。だけどこの子は……。

「大丈夫、大丈夫よ」

別に何かを考えたわけじゃなかったけど、自然と体が動いていた。

「私があなたを守つてあげるから」

きつと私と似ていたから、暗闇の底に囚われた私たちには助けという光が必要だった事を知っていたから。

誰も助けてはくれない世界。絶望がどれだけ恐ろしいのかを知っている私だったから。

だから決めたんだ。私が助けようつて。世界中の人が私を助けて

くれなくつても私が誰かを助けようつて。

それが私なりのささやかな世界への復讐だったのか、それとも希望だったのかは自分でもまだ分かってはいない。

私は街にいた子供達を集めることから始めた。一人が弱々しくても一つになれば少しはマシになるはずだ。それに私たちには誰かの助けが必要だったから。

歳の小さな子はすぐに合流したけれど、大きな男の子達は反発する子が多かった。理由はその目を見れば直ぐに分かったしまった。信用できないのだ。騙し騙され、裏切ることでなんとか生きてきた子には「助け合おう」なんて言葉は一番信じれない言葉だったと思う。分かるわよ、私だってそうだったから。

だからこそ無理強いはずに根気良く説得し続けたわ、話を信用してもらおう前にまず私を信じてもらうために。私がどれだけ本気なのか知ってもらうために。

一年もかかっちゃったけど私はなんとか街中のストリートチルドレンを集めることができた。総数で34名の大所帯になったのは驚いたし、何より15歳になった私が最年長っぽいというのがすごく意外だった。

集めたのも私なら引っぱって行かなきゃならないのもどうやら私のようで。心に決めた決意はさらに強みを増していった。彼等彼女等を守る為には私が居なきゃいけない。信頼を預けてもらったんだ、最後まで責任をもたなきゃだね。

だから私は人であつたころの最後の嬉しかった思い出を消すことにしたんだ。

今だに私を狙う男は少なくなつたけども居なくはない。そいつらから狙われなくなるために私はボサボサに伸びた髪を留めていた紐を解き、捨てられる前に父様にかわいいと褒めて貰った顔に傷を付けたのだ。家族になれた子達を守る為ならなんだって喜んで差し出すわよ。

その日から私を狙う男は居なくなつた。

相変わらず苦しくてひもじい日々ではあったけどなんとか一人も欠ける事無く一年を過ごす事ができた。きつとこれは順調だと私は胸を撫で下ろしていた。でもそんな安堵は悪意によって叩き壊された。

突然スラム街のボスが私たち全員を売りさばくために攫ってしまったのだ。

そして今、私はボスの無情な条件を飲み込んで守り続けた貞操を引換にたった一人だけを救える契約を果たそうとしていた。5年ぶりに湯浴みをし、破れていない綺麗な服に袖を通す。本当ならば喜ぶべきことのはずなのに私の心は死んでしまったように動かなくなってしまった。

やっと……やっと小さいけれど幸せを感じれるようになっていたのに、笑顔で誰かに笑えるようになったのに、助けることが出来たと思ったのに。

男たちの集まる部屋へと私は足を踏み入れる。一番嫌いだった肉欲の目線を全身に浴びたがそれでも私の心は揺れもなかった。

「へっへっへ、見る俺の目は確かだったろう？　ほんともうちょい肉を付けて傷を隠せば超が付いてもいい上玉だぜこりゃ！」

私が守ってきたものを全て奪う男が自慢気に語る様を見て私は憎

しみの目で睨んで見せた。死にかけた心が最後に選んだ心の形が憎しみだったのは残念だったけど。でも終わり。ここで終わり。決意で闇を切り裂いたつもりだったのに、私の心はまた絶望に沈んでしまう。次こそ耐えられないだろう。私の心は粉々に砕けてしまう。でもっ——。もう自分の意志で動かせないでいる体に一滴だけ残った心を注いで唇を動かす。

「タ……ス……ケ………テ」

絶望に飲み込まれるその中で、それでも私は手を伸ばして天を仰いだ。

誰も助けってくれないと思っても願わざる負えなかった心の叫びを叶える者が天から舞い降り、最後まで諦めなかった彼女に奇跡を与えた。

第九話 正義の鉄拳

リッキーに聞いていたアジトは直ぐに見つかった。荒廃したスラム街にそびえる旧ナーブ教会。しかもきっちり強面の見張りまで立たせているんだ目立ち過ぎにも程がある。そしてそこまできた俺は最後の装備を装着する。鼻と輪郭を隠すマスクのような鉄の仮面だ。仮面と言っても目は見えているし、口も影になってはいるが少しは見える構造だ。これは露天に売っているのを一目見た瞬間に衝動買いしてしまったものだ。せつかなので改造して顔に装着できるようにしていた。これで完全に見た目は忍者ルックそのものである。別に狙ったわけではない。気に入ってはいるけど。

さて作戦はどうする？

誘導？ 一人じゃ無理。

ちよつとずつ奇襲？ 時間がかかり過ぎる。

人質だけ救出？ 30人超えは敵しすぎ。

ならば？

「悪党に小細工無用！ 正面突破あるのみよ！！」

小細工も嫌いじゃありませんけどねー！

隣の建物の屋上に上り全力疾走。そんなもって建物に見えます大きなガラス窓に向かって全力ジャーーーーーーンプ！

ガラスを見事に突き破り着地に成功！ つとしまった！？ 今の大ジャンプで窓を壊す時はヒーローらしくキックにするべきだったか！？ 次の為の課題にしとくか。

「デメエ！ フザケてんのか！！！」

どうやら敵の集まる広場のド真ん中に降り立ったらしい。これは

ラッキー。おや？ この目の前にいる女性は……顔に傷があつて16歳くらいでうつすら赤くて長い髪……。

「もしかしてトウカさんでしょうか？」

「はっはい！」

なんだ、この麗しの生物は……。

「しばしお待ちを。あなたを蝕む闇を今から掃除しますゆえ」

うむ我ながらキザすぎた。いつの間にこんな齒の浮く台詞を言えるようになったんだ俺？ 初ヒーローで興奮しすぎたか？

謎が残るが取り敢えずはまず悪党退治だ。おれはボスが座りそうな椅子に座る汚い野郎に体を向ける。

「ええつとここのボス、名前はたしかゲ……ゲ………ゲロ？」

「ゲイロスだ糞野郎！」

「一応一回だけ警告してやる。いまから一切合切の犯罪行為をやめる。それでもって明日からは真っ当に働くなら見逃してやってもいいが、どうする？」

「はああ！？ 貴様頭いかれてやがるのか！？ この人数相手にてめえ一人でどこに見逃す要素があるんだよ！」

「まあ了承するなんて思つてはいなかったさ。お前ら性根の底まで糞みたいだからな」

騒ぎを聞きつけて他の野郎も姿を見せ始める。

「ほざいてやがね。じゃあ俺様からも聞いてやるよ。今から泣いて命乞いをするなら両手で勘弁してやるぞ?」

「ん？人数は百人くらいか」

「残念だったな！ もっと少ないと思ったかあ！？ ゲイロス様を作った組織は巨大で無慈悲な極悪集団なのよ！」

「ああ実に残念だ。千人くらい居るかと思つて来たが、がっかりだよ」

喋り終わった瞬間一番近くにいた二人に自分でも見えないほどの速さの突きを放つ。かなりの巨体だったが見事に吹っ飛び体の半分くらいが壁に埋まってその勢いはやっと止まった。

「警告は終わった。生きるか死ぬかは運次第」

腹に全身の力を溜めて解き放つ。

「だがてめえら外道に手加減する気なんて一切ねえから覚悟しやがれえええええ！！！！！！！！！！」

建物が震えるほどの大声で宣戦布告に近い死刑宣言をかましてやる。全力で叫んだのはこっちにきて始めてだった。がこれもすごいわ。遠目に見える窓ガラスにひびがはいってやんの。

殺気を隠すことをやめた俺は全力で攻撃を繰り返すしていく。突進しながら正拳突き、そこから隣へ回し蹴り、着地と共に前蹴りを放ち、再び目標に駆け寄っていく。凶悪な攻撃が次々に悪党どもを

壁へ天井へ地面へとめり込ませていく。

「ハッハ！ 自慢するだけはあつて鍛えてるじゃないか！ なかなかいい殴り心地だ！」

びっくりすることにこいつらはハッグベアー並の耐久力を誇っていた。ほぼ全力で殴つても手や足は簡単にひしゃげたが体を突き抜けずに耐えていた。ただし衝撃を殺せずにほとんどが吹っ飛んで無残な結果に陥っているわけだが。流石に皆殺しにする気は無かったのでナツクルは装備してはいない。それでも生きてるかどうかは怪しいところだろうけど。

開戦して僅か三分でその人数が半分まで減ったクソツタレ共。阿鼻叫喚の地獄絵図になりつつあったがどうやらボスゲロが指揮した部隊が隊列を整えていた。

「なんだあんた名ばかりのボスじゃないんだな」

ちよつと感心。

「うるせえこの化物が！ これで死んでしまえ！」

どうやらボスゲロが集めた野郎どもは魔法の使い手だったようで六人ほどがファイヤーボールを俺に向かって放ってくる。避けるのは簡単だが装備というか奥の手の試運転には丁度いい。俺は腰に挿したナイフに手を添える。

「『ウォーターコート』」

コートシリーズは今まで出た魔法とはまた系統が違ふ付加魔法だ。物体にその魔法の効果を与えるつてのが単純な説明だが、ウォータ

「コートを含みにナイフに付加させると水でコーティングされたナイフが出来上がるわけだ。魔法の面白い現象として、なぜか使用者には生み出した魔法の影響を及ぼさないことだ。水に包まれたナイフなのに俺は水に濡れることなくナイフが掴めるし、火であつた場合も熱くもないし燃え移ったりもしない。服は燃えたり、濡れたりするだろうと思うが、そこまで魔力を流しておけば大丈夫のようだ。

威力が無いなら足せばいい。筋力だけは有り余り、投擲の威力はかなりの物だったのでそれを魔法に応用して相手の魔術のぶつける。無駄に魔力のこもった俺の魔法は威力こそ上がりはしないもののやたらと頑丈なんだそう。つまり同じ威力の魔法に当たった場合

「相手の魔術が先に壊れる」

「ぎゃああああああああ」

しかもボールシリーズの魔法は直線で飛ばすのがオーソドックス。ナイフを魔法に向かって投げればその向こうの術師に当たるのは必然なわけだ。

まあ精度がまだいまいちなんで術師にまで当たったのは3人だけだ。しかしこれはスプラッタ。腕やら肩がすっ飛んでいる。これは付加魔法がすごいのか、ナイフがすごいのか判断に困るところだな。要実験だな。今ので最低でも隙を作り出せる算段だったのか中級魔術を構築しようとしていた奴がいたのでそいつの足には直接ナイフをお見舞いしておいた。結構な深手を負わせたので、痛みで集中力を保つことはできなくなつたろう。

「うわあああ。あああああああああ。ちくしょう畜生。そうだお前その女、なかなか美人だろ？ そいつをやるから手を引か

ねえか。なんならもつと美人の奴隷を何人だつて攫つて来てやるさ。なんならお前の好みの女でも構わないぞ」

ああこいつホントに俺の神経を逆撫でさせるのがうまい。

「今決めた、お前は間違いなく最後に殺す」

俺は逃げようとするものから攻撃を加えて行動不能にしていく。運悪く死んだ奴がいるかもしれないが知ったことではない。ボスゲ口の一言で更に容赦なく攻撃を開始した俺は残り殆どを始末した。

「ハアハアハア、さて……残りはお前だけだな」

流石にこれだけの数を捌くのは疲れるな。息が切れるなんてのはこの世界に来てからはなかなか無かった現象だ。

あえて最後まで残したボスゲ口はガタガタ震えながら腰が抜けているみたいだ。さあどんな恐怖をさらに刻んでやろうか。なんて吟味していると後方から新手が出現する。

「動くな化物。お前この女の知り合いか何かだな？ 最初なんかしゃべってたろお前」

新手と言ったのは訂正、どうやら余りの恐怖に気絶して倒れていた奴が復活したようだ。男はトウ力を羽交い絞めにして捉えていた。

「動いたらどうなるんだ？」

「見りゃわかんだろ！ こいつの命がどうな――」

男が言い終わる前におれは渾身の速度で右の突きを放ち、その指をトウカに突きつけられたナイフに引っ掛ける。それを引きつつ、驚いている男の顎へと手刀を放った。脳を激しく揺さぶられて男は、紐が切れた人形のようにその場に崩れ落ちた。

「すまん。怖い思いさせちまったな」

「いえ、ありがとうございます」

「じゃあもうちょっとで終わるから部屋の隅のほうで待ってて」

「……はい」

いい度胸してるよ実際。人間離れた戦う俺を目の前にして物怖じ一つ見せないなんて。

今にもションベン漏らしそうなボスゲロに見習わしてやりたいぜ。

「さてどうやって死にたい？」

「ひひひひひ来るな来るなああああああああああああ」

ゆっくりとした足取りでボスゲロへと近づいていく。

「頼む許してくれえ。金ならいくらでもやるから、なっ？」

「もう薄々気付いてんだろ？ 俺は悪は許さんが別に殺しがしたいわけじゃない。なのに俺が殺気を抑えきれない理由は――」

ボスの襟首を掴んで片手で持ち上げる。

「お前が俺を怒らしたからだ」

そのままボスを壁に投げつける。それを追って接近して俺が放つのは一本指貫手。それで足と腕の神経がある部分を突き刺し四肢の自由を奪う。

「があああああああああ」

「どれだけの人を不幸にした？」

続いてわかりやすく血が出る頭部を手刀で僅かに切り裂く。飛び出るように流れだす血液。

「ああ、あああああ」

「どれだけの人生を狂わせた？」

さらに手刀で右腕を吹っ飛ばす。

「はひやあああああ、たす……たひゅへへ」

「お前がばら蒔いた絶望、そっくりそのまま返してやるよ」

止めはその目によく見えるようになるべくゆっくりと正拳突きを

放った。最高に嫌な感触を残して種族人間、性別男、スラム街のボスであったボスゲロはこの世から消えた。

金の玉を殴り潰すなんて嫌すぎる経験をしてしまった。なんだか自分のも痛い気が……。

第九話 正義の鉄拳（後書き）

仮面ラ。イダー的に言つとまだショッカーしか出てない感じ。

第十話 オーハレルヤ

百人悪党組み手を開催した後、捕まっていた子供たちと一緒に捕まっていた何名かを解放して、俺たちはアジトを脱出した。帰り道にまだボスゲロの一味がリックを探すためかうろついていたが、速攻でぶん殴って眠らしておいた。

40人弱に膨れ上がった大所帯をどうするもんか困ったのだが、取り敢えずリック達が滞在していた廃屋に留まることにした。

そうだ、話を進める前に説明しなくちゃならないことがあった。

前回傍若無人に全力で暴れまわった俺に対して「この鬼畜！」とか「やりすぎだろ！」とか感じた人が多くいたんじゃないかと思う。

たしかに誘拐が初犯だった場合ぶっコロはやり過ぎだとは俺も思う。個人的には子供を攫ったその時点で万死に値するが。しかしおれはブローナスに入ってからというもの情報収集には余念が無い。主に常識を身につけるために、だったのだが。物価とか国の情勢、噂話しに最近あった出来事に今の流行。取り敢えず思いつく限りの話題を、色んな人から聞き出す事をこの三日間費やしてきた。

そんな中でも悪い噂が問題だ。それを全体で十としたら八がゲイロス一味に関しての黒い噂だった。しかも話される事件はほとんど別件で、その裏や実行犯がゲイロス一味に違いないというものだった。札付きの悪の集団なら、こんな憶測の飛ぶ噂の一つや二つはあるようなもののだが、いくつかといってもかなりの数だがどう考えてもゲイロス一味の仕業としか思えないものが多々あったのだ。

場合によっては目撃情報まで飛び出してきた。

ここまでくれば、それを知るものはなんとなく気付くだろうさ。警備兵がグルなのではないかと。俺の推測ではもっと上にも共犯者がいそうだが。

そしてゲイロス一味の悪行は殺し、誘拐、強盗に強姦。酷いので一家虐殺なんてのもあった。ここまでやって共通の容疑者になっているのにもかかわらず、ゲイロスは世にのさばっていたようだ。ぶっちゃけリックに頼まれるまえからおれの討伐予定ノートには第一筆頭になっていたので、遅かれ早かれ同じような結末になっていたはずだ。

殺した罪悪感？ その質問良く聞くよね。でもさ、俺から言わせれば救いようのない悪人に、欲望で人を食い散らかすような奴に殺意を抱かない。そっちの方がどうかとおもうぜ？ もちろん殺しに嫌悪感はある。でもそれを天秤にかける重さが圧倒的に悪を許さない事の方が重いつてだけなのさ。

今回は……たぶん死んではないと思う。結構おもいきり殴ってしまった時もあったので瀕死なのは確かだが。皆殺しなんて選択肢も無くも無かったりもしちゃったりしちゃったんだが、まあ生きて捕まった方が後々役に立つ時もあるとおもうのさ。余罪が追求されれば間違い無く絞首刑だろうけどね。

さて困った。そろそろ夜が明けるのだろう、東の空が白い光がさしだしてきた。もしかしたら危険がまだ残ってるかも知れない懸念から、朝まで子供たちとご一緒したのだが。……距離が遠い。

まあね！ まあね！ 物騒な格好に、今だにマスクは外さずにい

る完全な不審者スタイルだし、おまけに色んなとこ血まみれだしね！

「お、やっとご出勤か」

逃げ出した時に一緒に捕らえられていた女性や男の人は俺と同じくらいの歳だった。その人達には警備隊の詰所に行ってもらい事情を説明してもらうことにしたのだ。グルの警備兵のところに駆け込んで嫌な結果になりそうだったんでそれぞれ別の詰所に駆け込んでもらった。指示を託して送り出してから大体一時間は経っていた。そして警備兵らしき多数の足音がやつとスラム街に聞こえ出した。おっせー。時間の目安はもちろん俺の腹時計である。

「さて、それでは俺はこれで」

子供たちをなだめていたトウカが去ろうとする俺に急いで駆け寄ってくる。

「あ、あのありがとございました。本当にあなたは命の……いえ心の恩人です」

「いや……勝手にやったことだ気に――」

朝日が上り建物の隙間から光の筋が溢れ出す。その光がトウカを照らし出しその見に纏った白いドレスを煌びやかに輝かせていた。

衝撃。そうこれはまるで、始めて特撮ヒーローものを見た時に匹敵する衝撃だった。

なぜならその幻想的で美しい光景よりも、彼女の目に宿る輝きの方が優っていたからだ。

なぜそうしたのはかは分からない、もしかしたら正気を失っていたのかもしれない。俺はマスクを取り外した。

「俺はキドーと言います。改めてあなたのお名前を聞いてもいいだろうか？」

「えっ？ あっはい！ 私はトウ力といいます」

ヒーローを見た時の衝撃で俺は歓喜の渦に飲まれた。そして今もそれに似た歓喜に包まれている。しかし熱い力が漲るわけでもなく、震えるわけでもなく、俺は涙を流していた。そして力なく膝をトウ力の前で地面へと付け跪いて、手をトウ力に差し伸べた。

「いきなりですまないと思う。でももう俺には止められないんだ。
——どうか俺の愛を君に送らせてもらえないだろうか？」

心の中では感動の反面、嘘だろう！？ と叫んでいるほどに自分でも信じられなかった。恋愛のレの字にも興味が無かったし、可愛い、いや美人だなという感覚こそあれど、異性としての意識なんかしたこともなかったのに。いや確かに惚れましたともさ！ 認めましょうそこは！ でも俺は自分的に理性ある人間で自制心の強い男だと思っていましたよ！ この時までではな！！

「……………え？ え？ へえ！？」

ドン引きなんですねわかります。私もドン引きです。長い長い、本当に長い沈黙。凍りつく空気。混乱と未体験のプレッシャーで死んでしまいそうです。

「……………はい」

トウ力は指し伸ばした手を握り返してくれた。

「……」

「……」

——ってマジかよ！？ 混乱したまま取ってしまった行動の結末が自分でも信じられなくて信じられなくて信じられなくて頭が真っ白になって固まる俺。そんな空白の脳裏に浮かんだのは。

（血濡れの戦士が純白の姫に誓いを立てる……か。絵にしたらい価値が付きそうだ）

なぜか現実逃避の末、魂が抜けて第三者視点でその情景を見ている、という設定の感想だった。

第十話 オーハレルヤ（後書き）

主人公は変人に見えるアホですね。努力家と言う名前の猪突猛進でもあります。

第十話外伝 オデットの眩き

私はプロニアス騎士団が一つ紅玉の騎士団副団長オデット・ポレヴァンヌ。若くして栄えある騎士団の重役に任命されている。普通ならありえないことなのだが、貴族が幅を利かせるこの国においても、それらを優遇する気が欠片もない事でも有名な、我が騎士団。力が無くてなにが出来るとのたまう団長を筆頭にした、前団長から受け継がれた、根っからの実力主義の団であつたおかげで、私のような若輩がこんな地位にいられる。だがそんな独断的思考で騎士団を動かすならば、周りから疎まれて、妨害や嫌がらせの嵐にあり、場合によっては人事すら上からの命令に従わされる事になりかねない。しかし我が騎士団の団長を動かせる者は、この国には国王様以外でも数名ほどこが存在せず、国王様も団長に全幅の信頼を置いているためにその自由奔放な意思は例外として扱 われている。

どうやら戦の才能があつた私は、その団長に師事されたお陰でここまで駆け上がる事ができた。その役職における責任を果たすために、私は警備隊の戦闘指導を連日行っていた。はつきり言つて我が騎士団に比べればこの北西区の警備兵は素人同然で、まるで教え甲斐がない。おかげでやる気がそこまで湧かなかつた指導ではあつたが、それも明日で終了する。そんな事を思いながら警備隊の宿舎で就寝していると、外がざわめく音で目が覚める。

「何事ですか？」

素早く身を整えて、下で装備を着込んでいる警備隊の一員に声をかける。寝起きだから少し機嫌が悪かつたのだろつ、若干ではあるが威圧するような態度な私に隊員は萎縮しながら答えだした。

「突発的な大捕物が始まるらしいので、北西区の警備隊は全員出動

とのことですよ」

全員出勤しなければならぬ大捕物とは初めて聞くな。東西南北に伸びた道で分けられた区画の一つである北西区に配備された警備部隊はおよそ五百名。見回りなどの抜けられない者達を差し引いても全員となれば四百弱ほどの大規模だ……面白。この連日の訓練には飽き飽きしていたところだし、指導の成果を確認するにも丁度良い。私達も見学と洒落こませてもらおうか。

問題の場所は、大捕物が行われる修羅場というよりも、まるで野戦病棟の様だった。警備隊が通報されて急いで人数を集めて踏み込んだ時には、すでに悪党一味はほとんどが瀕死の状態で転がっていたらしい。今は応急処置のために兵とかき集められた治療師が奮闘中であつた。

私達騎士団は、基本的に国防と大規模な魔獣討伐などが主な任務で、街の治安については警備隊に一任していた。おかげで治安や犯罪に関しての情報などはあまり知る所ではなく、側にいた警備隊の隊長格をひっ捕まえて状況報告と事情説明にあたらせる。

「……不可解過ぎる事が多い話だな」

「はい……まさかこの人数を誇るゲイロス一味が一夜のうちに壊滅するとは……」

「そんなレベルではないがな……」

殲滅された云々の話しどころか、このゲイロス一味に関わる資料そのものが不可解な部分だらけだったが、その場では呟くだけに留めておいた。まずはこの惨状を誰が起こしたかを探るのが先だ。

中へと入り、最も被害が多かった中央広場へと踏み入る。元神殿を悪党どもが根城にするとは度し難い話である。だからこそその天罰が下ったのかもしれないが。

「意識を取り戻した者からの話では、信じられない事に百名からの一味を壊滅させたのはたった一人の人物だったそうです」

なんでもその戦力の高さゆえに、この一味へは迂闊に手出しできなかったと、汚らしい言い訳していたが、戦力自体は本当に高いのであろう事は、倒れていた男たちの体つきを見れば分かる。しかし、この人数を相手取る事が出来る、いわば怪物呼ばわりされる類の人物は私がかぎりでもかなりいる。もちろん私自身もその内の一人だという自負はある。

「……………さらに信じられない話なんですが」

「言ってみろ」

「相手は素手だったそうです」

「魔法師なのか？」

「いえ、補助的に使ってはいたそうですがまさに拳で戦っていたようです」

訂正しよう。この人数の武器持つ相手に徒手空拳で魔法もほとん

ど使わずに圧倒することは私には無理だ。おまけに、これは予測ではあるが首謀者は手加減をしている。心臓が停止しており、何とか蘇生が間に合つてギリギリ助かった者もいたが、結局死人は出ていないのがいい証拠だ。皆殺しで良いのであれば魔法を使えば私にも殲滅は可能だが……。

とにかくこんな芸当が出来るものなど、国内には片手で数えるほどしかない。私の師匠である団長の仕業か？　とも一瞬脳裏をよぎった。天然かつ生粋の女好きの団長のお気に入りな酷い目にでもあわしたのなら考えられはない事だ……。實力としても、素手どころか裸であろうと三分もかからず仕留めるだろう。他の規格外の者達も同様に性格や行動原理が飛び出たしまっている。ので、氣まぐれでこの状況を作ったというのは有り得なくは無い話だ。

だが――。

「容疑者は探すな。そしてその容疑者の情報の一切を隊員に口止めしておけ」

「え！？　いいのですか！？」

「こんな規格外をプロニアスの敵にするつもりかお前は？」

「い、いえ……」

心当たりのある者たちは、全てあらゆる方面の頭に超が付く重要人物達だ。悪党をのした事で彼等を法で裁こうものなら、どんな問題が発生するか考えるだけで頭が痛くなる。もしもうちの団長だった場合であれば国が割れかねない。そして警備隊から取って寄越したゲイロス一味に関する資料を見る限り、明らかに国の一部と結託していると思われ、確実にこちらに落ち度があるのは直ぐに明白になるだろう。後ほど私の部下を配置して洗い出しておくが、だから

こそあまり表沙汰にはしたくない。

重い気持ちを口から吐き出して下を見ると、なにやら手投げナイフが地面に突き刺さっている。その刃の先には紙が留められている。

「『悪よ闇を恐れよ 我はシャドーフィスト 悪の天敵なり』」

それを読んで私ははっとした。まったく思いもしていなかった可能性を思い付いてしまったからだ。この惨状を作り出した者が私、いやいまだ世に知られていない者だという可能性だ。

なぜなら私の知る者たちは気まぐれでこのような事態をしでかすことはあっても、確固たる意思に基づいた理由を持って、勧善懲悪を行うものなどいなかったからだ。もちろん断定などできはしない。この紙をその本人が書いた確証もないし、可能性は限りなく低いが規格外の者たちの誰かが心変わりして正義に目覚めたという場合もある。

だが私はなぜか期待、いや僅かな願望を抱いていた。

「シャドーフィスト……フッフッフいつか会ってみたいものだな」

期待を胸にして、その紙を私は胸へとしまい込む。謎の事件として処理させ有耶無耶にしてしまった事件であったが、一つだけゲイロス一味を壊滅させたのはシャドーフィストと名乗る者だという噂だけを街中に流してやったのは、好意の表れでもあり、ある意味挑戦状でもあった。

第一話 幸せ家族計画

なんだろうこれ、足元がおぼつかない。幸せすぎて体が浮いてい
るようだ…………。

というノロケからスタートの、みんなのヒーロー木堂です。

あの後、血まみれの装備を取り敢えず外して、布に包み、警備兵
の目を掻い潜って宿屋に帰還。帰ってきた俺を見て安堵したのかリ
ッキーは俺に抱きついて泣き叫んでいる。よしよしもう心配ないから
な、だから落ち着け。おれの服が鼻水だらけになって、すでに腹に
直接感触が伝わってるんだよ！

泣きじゃくるリッキーをなんとかだめて落ち着かせる。心配の
ため一晩中緊張していた糸が切れたのか立っているにも関わらず、
リッキーの頭がユラユラと宙を彷徨い出した。まだ年端もいかな
い子が全力疾走した上で徹夜していたのだ、眠気の限界に来ても仕
方がないだろう。むしろよくここまで頑張れたと感心してしまった。
すでに半目になって意識朦朧とするリッキーを、俺のベッドに運
んで寝かしつける。

さて俺は急いでこの宿を出る準備に取り掛かる。理由としては色
々あるのだが、なによりも昨日のリッキーが駆け込んできた騒ぎで、

俺の装備の一部を見られてしまっているのが大きい。ヒーローで在り続ける為には正体不明をなるべく守らなくては。

なぜここまで俺の戦闘力を隠し、なるべく目立たないように計らっているのかという疑問をお持ちだろう。これは俺の尊敬するヒーローの一人である蝙蝠男さんから学んだことで「人は目に見えぬものを恐れる」なんだそうだ。要は正体がバレればそっち方面の人に四六時中狙われるだろうし、下手をすれば周りにまで被害が及ぶ。さらに正体を隠しつつ正義を名乗ることで、悪党にプレッシャーを与える事ができる。闇から人を脅かす物がさらなる闇から逆に足を引っ張られるのだ、さぞ怖かるう。正体を隠すことにはとても大きなメリットがある。

「お帰りキドー」

用意をしていると欠伸をしながらフリーが起きてきた。護衛を任したのにがつり熟睡していたようだが、それでもフリーは俺より格段に危機察知能力が高い。たとえ寝ていても危険が迫れば直ぐに感じ取って起きれるのだ。ヨルガの森では大変お世話になった。

「お土産は？」

「喜べ今日は大漁だ」

準備を終えるとまず朝飯を取り、女将さんに宿を出ることを告げる。一週間予定で前払いしていたが、手間賃として残りの分は貰っ

てもらった。そしてまず生産ギルドに行き証明カードを受理する。なんか色々言われたり絡まれそうになったが華麗にスルー。忙しいんだ今度にしてくれ。

それでもってボライアズ家に訪れジーニーさんに予定を聞く。ちょうど午前中は開いていたらしいので銀行での手続きをしてもらう。口座を開くだけならいいのだが、そんな開いたばかりの人が二十八万という大金をいきなり得るといのは、怪しまれて理由を聞かれかねない。そこでしつかりジーニーさんから受け取ったという確認をしてもらった方がいい、とジーニーさんが助言してもらっていたからだ。

こちらがなるべく目立ちたくないという事への配慮だろう。ほんとのひと出来る人だわ。まあ、あの時、もしあの話が世間に広まりだしても俺の名は出さずにジーニーさんが考え付いた事にしといてって言ったしね。

「それでは28万ディクス確かに納めさして頂きました」

どうやらギルドカードは銀行カードの替りになるようで、カードさえあれば金銭のやり取りができるらしい。もちろん盗難防止のため登録者本人にしか使えないそうだ。

「また何かありましたら是非我がボライアズ商家をご利用ください」

「あつそれじゃあ早速いいですか？　今回は販売じゃなく単純に相談なんですけど？」

「はいもちろん。キドー様には大変有意義な商談をさせて頂きましたので」

「それじゃあ――」

結局頼みごとになつてしまつた取引を終えた俺は、次に商店に向かい手で引く荷車を購入。武具の購入で更に増えた俺の荷物を街中ではさすがに背負うわけにはいかない。荷車を買つた雑貨屋で力仕事兼雑用係のゴーレム、ミスターハニエスをお勧めされて、かなり心を揺らしたが今は金が入り様なのでぐつと我慢した。宿へと帰宅した頃には昼前といったとこだ。

「おい、起きろリッキ―起きろゝ家に帰りますよゝ」

「む」

寝起き悪いのかこいつ？

フー

必殺桃色吐息！ 耳に優しく息を吹きかけることで相手は死ぬ！
いやびつくりするだけだね。

「ひよわあああああああああああああああああああああ
ああああああ」

書いて字の如く飛び起きる。50センチは浮いたか？ どうやら

耳は弱点のようだった。今度から起きなかつたら攻撃してやる。耳への衝撃と見慣れない場所で起きたためか、部屋の隅に張り付いてキョロキョロをあたりを見回している。……………涙目で戸惑う姿はなんかこう…………くるものがあるな。

「ほれ家族の元に帰るんだろ？」

手を伸ばしてリッキーを起き上がらせる。

荷車の余ったスペースへできるだけ多くの食料を買い込む。昼飯に食うように出来合いの物を色々買ってみた。

「いやーお待たせお待たせ」

荷物を引いて俺はリッキー達の一応の家である廃屋へとたどり着いた。

「リッキー！」

「みんな………トウカ？」

いち早くこちらに気付いたトウカがリッキーに駆け寄っていくが、なんだかリッキーが戸惑っている。

「私よりリッキー！ トウカよ」

お美しい。

「トウ力ってそんなに美人だったんだ」

おつと惚れるなよ？　それはおれんだ。

感動の熱い抱擁を交わす子供たち。でも三十四人の抱擁は多いよ！　なんだか胸上げの光景を思い出す。

「リツキーがキドー様を呼んできてくれたのね！？　こんなにも強い人がリツキーの知り合いにいたなんて」

「ええ！？　兄ちゃんがゲドロスぶっ倒したの！？」

やっべ。なにも事情を説明してなかったなそういえば。

買ってきたお昼ごはんを食べながら積もる話に華を咲かせる。リツキーは俺がどれだけ優しくかったかを語り、トウ力は俺がどれだけ強かったかを語った。俺はというと拍手喝采、英雄伝のように口々に褒められて、そのあまりの気恥ずかしさを空の雲を数えて耐え忍んでいた。

「あの雲はイカに見えるな」

褒められる事は今まで無くも無かったが、ここまで感情むき出し

で喜ばれるというのは、なんだかむず痒い。

「それでキドー様はこんなにも荷物を持ってどうしてここへ？」

やっと話題が途切れた。それにしても様付けとかその呼び方は背中が痒いよトウ力ちゃん。地球でも君とか、さん付けだって恥ずかしかったのに。

「様付けは恥ずかしいんでやめてくれるとありがたい、気軽にキドーでいいよ。ここに来たのはまだ心配だったのとリツキーを送るため、それと——」

「キドー殿——キドー殿はこちらに居らっしゃいますかー!？」

「俺もここに住もうと思ってね」

さあここからはじめようじゃないか、俺の幸せ家族計画を！

第一話 幸せ家族計画（後書き）

英文を日本語に直訳すると、とんでもない物になることってよくあるよね。

第二話 家と鍋と箱と笑顔

廃屋に俺を呼ぶ声を響かせていたのは、ジーニーさんの執事である、セバスチャンさんだ。セバスチャンは俺命名だぞ？ 本名知らないしね。さすがに執事でセバスチャンとか無いよ。ありきたりすぎるわ！ でもこれの呼び名ってどこからきたんだろうね。

「キドー殿、こちらがご注文の権利書になりますぞ」

執事の爺ちゃんが持った封筒を受け取る。

「なんか予定よりも大分安くないですか？」

「そこは我が主の説得の賜物です」

説得という名の値切りなんですね。でも予定額から3割も引いてくるとか、不動産屋は泣いてるんじゃないだろうか。

「ご心配せずともふっかけられた分を見破って、正々堂々買い上げたものですから」

流石の手腕だ。これから俺の心の中では『流石のジーニー』と呼ぶことにしよう。値段を確認してカードから金銭をやり取りする。

「それと主から「いつかお茶で一緒にしましょう」と受けたわってございます」

「ありがとう。近々顔を出すって言うという」

なんだか気に入られたな。今のところ信用できそうだからいいけど。丁寧にお辞儀をしたセバスチャンは馬車に乗って帰っていった。

「あのー何をお買いになったんですか？」

まだ敬語はやめれないらしい。ていうかストリートチルドレンのわりにはえらく教養あるよねトウ力って。

「この場所、君たちの家の正式な権利書さ」

「え……」

「俺もここに住もうと思ってね」

俺が買ったのはリッキーや、トウ力達が住んでいた廃屋とその土地である。廃屋はなんとか屋根が見て取れるが壁が崩れ、一部はすでに斜めに傾いている。建物の価値としてまったくの無かったので、金額的には土地の値段だ。これはかなり広く六十×四十メートルの敷地だ。立地としては一番端の方と言ってもスラム街にあるので価値が低くなると思ったが10万デイクスはすると予想していたん

だけど。

「六万八千デイクスかあやつすいなあ」

このちよつとした公園レベルの広さがこの値段か……いやこれが常識的なかもしれない。日本は特別土地の値段が高かったから余計に感じる。

手に入れた廃屋と敷地を見つめながら今後の予定を組み上げていく。取り敢えずあの廃屋がどこまで使えるかの点検と調査が必要だな。庭だったらしき広場も今では頭の高さまで伸びた雑草で埋め尽くされているので刈り取らなきゃ。

「あの」

いきなり不法占拠していた土地を買い上げて一緒に住む宣言をした俺に呆気に取られて沈黙したままの子供を代表してトウ力が質問してきた。

「これを聞いてしまうのはきつと失礼な事なんでしょうけど、あえて聞きます……なぜここまでしてくれるんですか？」

まあ戸惑って当たり前か。俺だってちよつとびっくりしているんだけどね、自分の行動力に。

「……俺は君が大切にしているものも大切にしたいと思ったんだ。理由はそれで十分だ」

嘘偽りない本心なんですけど俺もあえて言おう！ クッサーー！
—————！！！！ 自分で言っただけで一瞬
毛穴が三倍は広がった。なんとか自然な仕草で話すための集中力だ

けで、百メートル全力疾走したくらいの体力が消耗されたよ！
でも顔を赤くして俯くトウカの姿を見れたから良しとしよう。う
む、大変良し！

「リッキー、リッキーおいでおいでー」

「おれはイヌか！」

あっているんだ犬。いやだって飯を食う仕草とか、表情とか見てた
らねえ。初めて見た時から思っていました。

「わかってる範囲でいいから家の中を案内してくれ」

「お、おう」

午後からの時間を全部使って有意義な廃屋の調査は完了した。時
間がかかり過ぎて辺りが真っ暗になってしまった。街中なら幾らか
の灯りがあつたものの、このスラム街はほとんど無い。

「『ライトボール』」

ボールシリーズで唯一攻撃できない光魔法。そして最も簡単な魔
法でもある。明るさを持った光の玉を頭の上に浮かべてみんなのと
こに戻る。

帰ってきたらみんなの視線は俺の荷台に釘付けになっていた。あ

あお腹がすいたのね。子供たちの興味の大半は食べ物に向いているだろうしな。環境的な意味でも本能的な意味でも。

「よしじゃあお兄さん頑張って晩ご飯作っちゃうぞー」

買っておいた大きな鍋を荷台から取り出す。中には野菜と肉が入っている。俺はそこまで料理はうまくはない、そこそこといった所だ。だから大漁簡単で、おいしくて、パンに合う料理といえばシチューでしょ。

「『ストーンウォール』」

ウォールシリーズはその名の如く壁を創りだす防御魔法だ。出力をかなり弱めて膝下ほどの石の壁を創りだす。俺はそれを三枚出して簡易のかまどを作り上げる。俺の無駄に注がれたストーンウォールなら一時間は余裕でもつだろう。そして薪を組み上げて出力最低にしてファイヤーボールで点火する。包丁で野菜と肉を切って鍋で若干炒め、そしてウォータボールをそつと鍋にいれる。

「キドーって魔法も使えるんだね」

ランランと輝く目で料理風景を眺めるリッキー。てか全員近いよ！ 危ないからちょっと下がってね。

ここで少し魔法について解説しよう。魔法は出力の調整ができる。ただし個々の種類で上限が決まっており、出来るのは弱める事だけ

だ。それを利用してマジックキングをしてみせたのだ。さらに魔法で作った石や水などはその込められた魔力の密度に比例してしばらく経つと粒子状になって宙に消えてしまう。しかしだ、火の魔法で付いた木の火は消えないし、少しだけ加工を加えれば水も消えなくなる。ウォーターボールの水は純粹に水だが、例えばそれに砂糖を加えれば砂糖水になる。なぜか出した時の状態から変化を全てに加えると世界に定着して消えなくなるらしい。出力の調整はイメージの問題で、魔力を注ぎ過ぎな俺だがその力の強弱には関係性は無いらしい。

なぜそうなるのかって？ 知らん！ そういうのはもつと偉い人に聞いて下さい！ 魔法初心者なめんなよ！ あれだあれ、その時不思議な事が起こった！ だよ、それでいいだろ。

鍋に入れた水が煮立ち火が通った後、塩コショウと宿の女将から教えてもらった調味料を加えて完成だ。更に主食に買ってきてあるフランスパンのような長いパンをを輪切りにして火で炙る。フランスパンといってもその太さは首より太い一切れでもなかなかの大きさになる。

全員にシテューの入った皿を配り、大きなバスケットに焼いたパンを入れて配置完了！

「それではみなさんいただきますーす」

返答は無し。

「それは何の掛け声なんですか？」

おっとついテンションが上がって日本の挨拶を使ってしまった。

「これは俺の生まれた国の挨拶で、食事をする前に食べ物を生み出した自然への感謝をあらわす為にするっていわれてる。最初にいただきます、最後にごちそうさまで一組の挨拶だ」

たしかそんな感じだったはず。当たり前のようにやってきたから詳細な話は忘れた。

「それはいいですね。普通は信仰する神に祈りを捧げるんですけど、私達はどの神の信仰していませんからね。じゃあみんないただきますってキドーさんに感謝して食べましょうか」

いやいや自然に感謝だからね！？

「「「いただきます」」」

はい感謝されましたー。たくさんあるからおかわりもありますよー。

「ねえキドー。もしかしてお土産ってこの子たちのことなの？」

「いまさら気付いたのかフィリー」

「ほんと変だよネキドーって。お土産までありえない」

「それこそ今更だぜ」

最高に決めたドヤ顔を向けられたフィリーは、クスクスと笑って俺のポケットに入って眠っていった。

次の日、朝から全員の体を水洗いするところから始まった。敷地内にあった井戸が幸運にもまだ使えたので紐に水桶を付けて利用してもらった。リッキーや、やんちゃ坊主のトマス、無口ながら面倒見の良い少女のユーリに、ひよろ長優男のロイなどの年長組に面倒を任せて、俺とトウカは空にした荷車を引いて街にくり出した。べつべつにデートだなんて思ってなんかないんだからね。確かに胸は高なっただけ。

買い物描写は省略して、昼に差し掛かる前に自宅へと荷車に山のような荷物を引いて帰還する俺。背負ったり引いたり、背負ったり引いたり、俺は馬か！　なんて思ってみたりなんかして。

「はいそれでは身長順に並んでください」

トウカの指示で順番に並んでいく子供たち。サプライズを兼ねて、トウカ以外には何をするのかは伝えていない。ニヤニヤするのを我慢出来ないでいる俺とトウカは、荷車に積んできた箱をそれぞれ一人に一個づつ目の前に置いていく。箱は膝くらいに高さがある正方形のなかなかに大きな箱だ。

「それでは合図で箱を一斉に開けましょう」

トウカが指揮して全員が箱に手をかける。

「いつせーのーで！」

懐かしい掛け声だ！？ なぜに地球と同じ掛け声が……いや違うな、これはナーブに貰った特典で脳内で自動変換してるな。

「うおおおお」

「わあああああ」

「あわわわわわ」

「ふおー！ー！！」

歓声の中に奇声が聞こえた気がするがあえてつつこまない。喜ぶ人へのツツコミなど無粋の極み。

箱に入っているのは全員分の服と靴だ。上の服とズボン、そして下着のセットが五。靴は一足づつ見繕ってある。大きさはトウカに選んでもらったがあとで俺が調節してやろうと思ってる。

あまりに興奮しすぎた男の子がその場で着替えようとしたのを、トマスがゲンコツで止めていたほどにみんな喜んでくれているよう

だ。無理もないだろうとは思うよ。全員服はボロボロで一着しか持ってなかったし、足なんて裸足だった。みんなを引っ張って来たというトウ力だって服選びをしている時の全身から溢れ出る輝きは凄まじかった。

「うんうんやっぱり子供はこうでなくっちゃ」

「どうしたんですか？ キドーさん」

「ここに一緒に住むといった理由の一つに、俺は無類の子供好きなんだ。それでもって勝手なことかもしれないけど俺は子供は笑っているべきだと思ってる。だから笑ってない子供をみると無性に笑わせたくなるんだよね」

やっぱり子供は笑顔が一番だ！ 異論は断じて認めない！

「はい」

でも俺の一番はトウ力の笑顔だけだな！ 一万デイクス払ったかいがあるぜ、その笑顔には。よろこぶ子供たちを尻目に人生最大の勇気を振り絞ってトウ力の手を握る。

「……フフ」

それに優しく笑ってみせたトウ力は手を繋いだまま、はしゃぐ子供たちを俺と一緒にしばらく一緒に眺めていてくれた。

「……」

正直動悸がヤバ過ぎて心臓止まりそうでした。

第三話 リフォームリフォーム

三十五人家族になって二日目も無事終了。なんだか人数を言葉にしてみるとんでもないが、それを養っていくと言いだしたんだからなおさらびつくりだ。

そして朝飯を頂いた庭では元気を取り戻した子供が、フィリーと遊んでいた。初日の夜にフィリーにこいつらとは家族になったことを説明してからは、二日目の夜まで沈黙したままだったのだが、今日の朝になって。

「キドーの家族ならいいよね。許可します」

と言って急に子供たち全員がフィリーを認識できるようにして、朝食を食べる俺らの前で自己紹介を始めたのだ。神様関連のことはごまかしてくれたが、妖精が人に憑いてるなんてのはとんでもないことらしいので、その挨拶を見た俺は朝飯を吹き出しかけた。

しかし世間からある意味はずれた子供たちは「ヘー」とか「すごい」なんて感想で終わってしまった。そして子供の持つ適応能力を発揮して、朝飯が終わったそばから一緒に遊び出したのだ。

ブローナスに来てからは慌ただしくて俺と遊ぶ機会が少なくなっていたフィリーは、子供たちと同じくらい楽しそうにしていたので、俺としてもこれでいいかな。いやかなり良かったね。

食後の休憩を終えて俺は気合を入れて立ち上がった。せっかく買

ったマイホームだ、このまま廃屋ではちょっとまずいかなり嫌だ。今でも多少の雨なら防げそうだが、嵐なんかが来でもしたら崩れてしまいそうな勢いだ。

昨日は広い空間で全員でブランケットだけ被って雑魚寝した。起きた時におれを枕替わりにした奴が6人もいて大変だった。あれはあれで楽しいが、いつまでもこのままというわけにはいけない。

それにこんなボロ屋に住むというのも職人のプライド的な意味でもいただけない。

幸いな事に家は主な部分の柱や土台は、石造りになっていて朽ちた木の壁を取り替えれば充分住めそうなのだ。傾いた部分は流石に専門知識が要りそうだが応急処置だけなら俺でもできそうだ。

自分の家を自分で作るってのは男にとってはなんとも心躍る響きではないだろうか？ 少なくとも俺はこの計画を立てた時から興奮で胸が高鳴りっぱなしだ。早速木材屋から資材を調達してマイホームを改造せねば！

木材と大工道具一式を荷車に買い込んで、二体のミスターハニエスに二台を引いてもらい、俺はトウカと手を繋いでのんびり歩いている。釈明しておくが、決して我慢できなくなつてハニワを買ってしまったわけではない。これから家を作るという労働作業などの力仕事を予定しているのだが。今の栄養失調気味に衰弱している子供たちに、手伝ってもらうのはとてもじゃないが無理がある。かといってやっぱり人手は欲しいわけで、かといってあんまり関わる人を無闇に増やすのも、問題がありそうな気もするのでなるべくなら避けたい。わざわざこれだけの人数のストリートチルドレンを養おう

としている俺は、この世間では変人どころか狂人扱いだろうと予想されるからだ。十七歳の成年が、三四人もの人を養うとか言い出したら地球でだって頭おかしいんじゃないかと俺でも思う。やりたいと思っても出来ないのが普通なのだが、今の俺は普通とは程遠い存在になっているので、そこんとはまあいいだろう。

そこで単純労働力であり、絶対に情報が漏れない運搬担当のミスターハニエスと、家事担当のミセスハニエイトを二組購入した。買ってびっくりしたが、なんと同型でもそれぞれデザインに若干の違いがある。店員さん曰く開発者の趣味らしい。作品に対しての愛を感じるぜ。

土というか頑丈な陶器っぽい材質で出来たこいつが、なんで動くのか分らない。分かっているのはこいつの燃料は魔力ってことだ。大体一般の成人が持つ魔力一日分で、半日ほど動くそうだ。魔法は下手だが、魔力の量だけは無駄に多い俺には、四体同時に一日中動かすくらいの魔力を与えても何の問題もない。いつかこいつらの構造とかを学んで、自分なりのゴーレムを作ってみたいものだな。

「リッキー！ トマス！ ロイ！ 手伝ってくれ」

子供たちの中の男年長組だけは手伝ってもらう。彼等はすでにかなり血色が良くなっている。もちろん俺の作った飯で回復してはいるが、二日で六食、いや今日の朝飯を合わせて七食程度で、直ぐに長年の不摂生な体が回復するわけではない。実はスープやらシチューなどの水物には、栄養剤でもある疲労回復剤を混ぜてあるのだ。枯れたスポンジのようになってしまっていた子供たちも一週間服用を

続ければ健康児までは、全員いけないかもしれないが、力を取り戻すくらいはできるはずだ。

ちなみにこの三人は二日目の朝には既に走り回るほど元気になっていた。いやー若いね！

「はい」

「おうよ！」

「ちょっとまって」

手伝うといっても近くに置いた道具屋釘を取ってもらっただけなんだが、将来を考えて作業を見てもらうのは、彼等の為になるんじゃないかと思つての判断だ。いずれは元気になった人から順次、手伝いを増やすつもりだ。

さてまずはみんなの寢床からだな。その次は風呂、そう風呂だ！この世界には湯浴み場は合ってもどうやら風呂という文化そのものがないらしい。うかつに地球での文化や知識の持ち込みは目立つという危険が伴うと思うが、自分の家で使う分にとりあえずはいいだろ。危険なことになるとは思えないし、もしもバレたらジーニーさんに薬草の時みたいに売り込んでみよう。

施工開始から一週間経過。なんとか寢床の床と壁、そして天井の修復を完了した。なんとも早く終わったが、そもそも建築構造の知識は少しあったので、ちょっとアレンジして直ぐに出来た。ただそ

れでも一ヶ月は掛ると俺も思ってたんだが、なんとミスターハニエスの説明書きに、釘打ちやノコギリでの切断作業可能という文字を発見した。場所さえ指定すればハニエス二体が次々にやっていくってくれるので、作業効率が段違いにアップした。しかも見た目からは想像できないくらいに器用さがあって、俺より釘打ちがうまかった。お礼に一体にはハチマキを巻いてハッピを着せてあげて、もう一体には付け髭をプレゼントした。

そして建築をする上でこの世界には、すごく便利なものがあつたのだ。それは隙間などを埋める粘土なのだが、これがアスファルト程ではないが、固まるとかなりの硬さをほこり、しかも通気性、保温性、耐久性にも優れている品で、木の板と板の間に挟んで乾かせば、直ぐに壁が完成出来たのだ。最近の開発されたもので、値段もさほど高くなく、今の建築物にはほとんど全てに使われているようだ。

更に強度を上げるための俺的工夫も施した。生産ギルドを通して幅一センチほどの長い鉄の棒を発注して、その粘土を埋め込む場所に部屋の四角い形に対して斜めに固定して配置した。現代建築によくある補強の構造ではあるが、この時代としては抜群の頑丈さを手に入れただろう。全面石か、鉄のほうが頑丈ではあるだろうが、金がかかりすぎるので知恵を絞ったわけなんだが。

さらに一ヶ月経過。ここまでやればかなり手馴れてきたので作業スピードはかなりアップ。子供たちも殆どの子が手伝えるまでに元気になっていたので尚更だ。

出来上がったのは一階の部屋が三つと一階の床、二階への階段と

二階の床と屋根だった。いや、我ながらよくやってるんじゃないかと思うよ。最近余裕が出てきて装飾を付けたりしてるしね。

しかし問題だったのは風呂だ。床と壁は粘土を見つけた時点で決めた方法があるのでそれを試した。磨き石といって丸い石をただ磨いただけの石だが、それを更にガラスでコーティングして、なるべく平たく壁一面に粘土を使って組み合わせた。石のコーティングは武具を買った店の爺さんに全部頼んだ。

「ガラス加工は皿とか防具に使ったことはあるが、なんで唯の石にそこまでするんだ？」

という全力の疑問をぶつけられたが。

「趣味です」

とだけ返しておいた。

しかし資材ではこれが一番高かった。なんせ風呂場は家族の人数から考えてものすごく広い仕様になっていたため、石の総数は一万個に届いていたからだ。一個あたり加工料で3デイクス、さらに粘土が全部で一万デイクスかったので合わせて四万デイクスもかった。普通の部屋の三倍はかった計算だ。たっけー、しかし後悔はしていない。

問題は湯船にあった。俺的こだわりで檜ではないがどうしても木造にしたかったのだ。しかし唯でさえ難しい木造の湯船を巨大に作つたため、何度やっても水漏れが出てしまったのだ。補強をしたら見栄えが悪くなるので何度も何度も作りなおした。正直これに、一ヶ月のうちの半分はかけていた。

これ以上俺には無理！　ってとこまでやってみたが、チヨロチヨロと流れる程度だが少しだけ水漏れがあった。しかし現段階の俺の技量ではそこが限界と判断してハチマキが似合うミスターハニエス

一号に頼ることにした。

「これが後にいう『溢れるのなら足せばいいじゃない作戦』である」

風呂の外側にタンクを設置、そこから溢れる量と同じだけの水を湯船に足していく作戦である。八二エス一号君の役目は水を送るために延々と歯車を回し続ける重大な役割だ。なんとも八二エス頼みの力技だが、これ意外おもいつきませんでしたよ。がんばれ八二エス！ 超がんばれ！

そんなこんなで風呂場は完成へとなんとか漕ぎ着けた。装飾などの一切ない簡素なもので、もちろん後でそのあたりは足して行く気満々なのだが、どうしても今は手も金も足りないので今回はパス。

風呂に初めて入った時のことだ。完成を喜ぶ俺と子供たちはその日に早速入浴することになったが、初めて俺は家族の一員になってワガママを申しました。

「一番風呂に入りたいです」

俺が俺が状態の子供たちに先んじて一人湯船に入るのは多大な罪悪感があったのだが、風呂はおれの待望でもあったのでそこは譲れなかった。

子供たちの視線に後ろ髪を引かれながら脱衣所へと向かい、湯気に覆われた風呂場へと足を踏み入れた。まだ不完全ながらもそこはこの西洋っぽい異世界で唯一、純和風な空間だった。銭湯を意識し

たような、加工した石と固めた粘土でできた床。完全木製の大きな湯船に、木製の手桶と小さな椅子。

それでは背を流し、髪や顔を洗い、心を沈めていざ入浴！

「はあ~~~~~~~~」

あまりの気持ちよさに腰が抜けてしまいそうになった。てかちよつと抜けてたと思う。心地よい湯の温もり、木の香りが俺の全身を溶かしていった。風呂を心の洗濯と例えたなんて聞いたことがあるが、ここまでそれを実感できたことは無かった。

涙が出た。こんなに風呂というのは気持ちいいものだったのか、癒されるものだったのか。まさに極楽だ。

オーバーだ！　なんて思うのは無理もない。しかしここは、この場所は単純に風呂として作ったわけではなく、それとは別の俺にとつて大きな意味を持ち合わせていた。風呂場の内装は純和風、つまりここだけが生まれ故郷の日本を思い起こせる場所。そんな意味を込めて作りこんだ。広さとしては家の風呂より大衆浴場のほうがしっくりくるが充分だ。

向こうの俺は死んだ。今ではこのアトレアの世界の住人であることは確かだ。でも日本人、木堂正志であつたことを俺は忘れたくはない。むしろ誇りにして胸に秘めている。それを噛み締める場所でもあつたのだ。だからこそ最初だけはここに一人で入りたかつたのだ。日本の香りを感じたかつた俺だったが、他に思い付いた味噌や醤油、緑茶に畳といったものは流石に再現不可能だった。だからせめてこれだけでもなんとか似せて作りたかつたが予想以上の大成功だった。

じゃあ一番風呂じゃなくても良かったんじゃないかって？　ハハハ、そこは単なる欲です。

ご満悦になりながら虚空を見つめ、その気持ち良さにだらしなくヨダレを垂らしそうになっていると、脱衣所が騒がしくなってきた。

「いつけね、もうそんなに時間たってたのか」

不満ブーブーだった子供たちを納得させるために、どれぐらいで風呂から出ると言って入浴に向かったのだが、どうやらその時間を過ぎてしまったようだ。

「おらーいけーいけー！！！！！！」

「突撃突撃——！！！！！！」

素っ裸の子供たちが風呂場へとなだれ込んでくる。

「おおお！　なんだこれ！？　なんだこれ！？」

「すっげー！！！！！！！！！！」

目の輝かせようが半端ない。目から光線でも出るんじゃないだろうかという勢いだな。今まで楽しいなんて事を経験したことのないこの子達に、いろんな事を教えていくと、その分子供らしい元気さを取り戻していき、今では暴走してしまいがちになってきた。小学生ほどの年齢ならあたり前と言えばあたり前のことなんだけど。

「オラ！　走るなよ！　滑ってすっ転ぶぞ！」

俺は取り敢えず湯船から出て子供たちを統制する。脱衣所から服を来た優男のロイがひよっこり顔を出していた。

「スイマセン……僕じゃもう抑えるの限界で……」

「いいよいいよ、時間を守れなかったのは俺なわけだしね」

「じゃあお願いしますね」

ロイは脱衣所から退場していく。なぜ一緒に入らないかと申しますと、ここにいる子供たちはもちろん全員では無い。十五×十五メートルと無駄にだだっ広く作った風呂場だが、流石に35名全員が同時に入ることはできない。せいぜい入れて多くて十人ちよつとあったところだ。なので厳正なクジを引き組み分けを行い年長者を誰か付けて入るといふ形になった。

我が大家族の男女構成は男二十四、女十一人の割合になっている。今回は男八人づつと女性組に別れてみた。まだ湯が入っていない状態の時に、年長者組には風呂の説明はしておいたが、なにぶん入るのも見るのも初めてのことなので、俺の受け持つ第一組が入り終わっても脱衣所で待機しておくつもりだ。

女性組の時まで脱衣所にいるのかって？ 居れるか恥ずかしい！ 流石に廊下で待つよ！ えっ？ 覗き穴は勿論作ったんだろぅなだって？ 覗き？ トウカの入浴シーンを…………… ヒッヒーロ―がそんな事出来るかぁ！ べっ別に一瞬迷ったわけじゃなからな！

騒がしく元気にはしゃげるようになった子供たちに苦労はさせられてはいるが、何とも幸せを感じる毎日が続いていた。でも何もかもが順調に進むわけがないのが世の常。

俺の足元には決定的で致命的な大きな問題が差し迫って来ていたのだった……………。

そろそろ金が無い。

第三話 リフォームリフォーム（後書き）

風呂は日本の心です、なんて言葉を噛み締める時がたまにあります。

第四話　こんにちわ御仕事

大体家を改築し出して一ヶ月経った頃から、問題には気が付いてたんだ。どれぐらいで俺の貯蓄が底をつくのかどうかは。底と言ってももちろん無一文に成るわけではない。食い物とかを買ったりする生活費はもちろん残しているのだが、このままではこれ以上家の改築資材が買えなさそうにないのだ。

現在は三十万デイクスあった俺の残高は五万デイクスを切るところまで減少してしまった。日本円にして五百万円もあるのならまだまだ余裕があるじゃないかと御思いだろうが、この場所では、もしもなにかあっても俺たちは全員市民権を持っていないので、支援も助けも国からは期待できない。そう考えればこれだけあってもむしろ不安なぐらいだ。

とても有意義に使うことが出来たので微塵も後悔はしていないのだが、いかんせんおれは三十五人家族の家長で、唯一の稼ぎ頭だ。子供たちには今までやっていたスリや盗難の類は一切やめてもらっている。働きに出れそうな人もいるにはいるが、そうなると子供たちの面倒を見る人がいなくなる。俺でさえ外出は最小限に抑えて、子守を手伝うほどだからとてもじゃないが無理だ。幼稚園のような物があれば大変助かるのだが、どうやらそのあたりは近所同士の協力でなんとかしているようで、このスラム街では期待はもてそうにない。あつたとしても、たぶんこっちは頼られる側になってしまうだろう。

なにより今外に働きに出ること自体も不安が残る。どうせならその労働環境も俺が作り出してみるのもいいと思っではいるし、案もあるっちゃいくつかある。だがそれにもやっぱり大量の金がいる。

まだまだ色んな問題を抱える家族だが、やっぱり何をするにもまず金だ。

だが商売の知識なんて大して持ち合わせて居ない俺が頭をひねっ

た所で「近所で出来て、早くて大きな金に成る」なんて都合の良い金稼ぎの方法なんて思いつくわけがない。

「というわけなんだがいい仕事ない？」

「何がというわけなのか全然わからん」

まったく考えつかないから誰かに相談してみた。相談相手は最近特に仲良くなった、武器屋の主人であるガナド爺さん。買い物に出た時は毎回寄ってだべってます。

「いやだから、街で出来て早くて稼げる仕事はないかって聞いてるんだけど」

これに『簡単な』って付けば完全にダメ人間です。

「あのなあそんな都合の良い仕事がそうそう転がっとなるはずないじやろ」

「ですよ〜」

「街の外でって条件ならそれなりにはあるんじゃないかな。希少な素材の確保、名前付きの魔獣の討伐、盗賊団なんかの賞金首の捕獲や、危険地の調査とかな」

それは最初のほうに考え付いたけど、街を離れる必要性がある上に日にちがかかりそうなので却下。主に子供たちの心配の為に。

「今言ったのは全部冒険者ギルド発注の依頼だし冒険者ギルドに顔出してみたらどうだ？」

冒険してお金を稼ぐ？ いやいや完全にそれじゃ道楽だな。冒険者ギルドはいわば危険性のある依頼を請負い、金銭を得る荒くれを紹介し、まとめ上げる組織だ。傷を負うだけでは済まずに、命がけの物も多々依頼の中にはあるが、危険が増せば増すほどの報酬金額は馬鹿高い。頑張れば一週間で一万デイクスを稼ぐのも夢じゃないので今の俺にはうってつけなんだけど……。

あとギルドは調べたところによると俺が登録している生産ギルド、調理ギルド、医療ギルド、錬金術ギルドに魔法ギルド、そんなもって冒険者ギルドの六つだ。なんでも噂では調査ギルドという謎のギルドが存在するなんて噂もあったが実態を掴めることはできていない。ありそうなギルドだけだね、日本でも情報屋は実在したらしいし。

なんでもギルドを複数重複して登録することは可能なんだとか。おすすめはできないなんて言われたが可能なこと自体がちよつと意外。あまりやる人はいないらしく、いてもどこか自分の実用的部分がかぶるように二つだけ登録するのが普通なんだとか。

なぜ登録したらお得なことがあるギルドになぜ重複登録したからないかというと、生産ギルドの査定のようなものはどのギルドにも存在し、それをクリアしていくのは大変な労力のようなのだ。下の方のランクの査定なら簡単そうだが、ギルドを有用に使うためには最低でも五段階中三まではあげる必要があり、そこからはあがるのも維持するのも格段に難しいようだ。しかも途中でランクダウンどころか、除名なんて不名誉を被るとあつという間に悪い噂は広がってしまう。そうなりや他の街にでも移動しなけりや商売上がった

なのだ。

「ほんとに生産ギルドの仕事して稼ぎたいけど、まだ仕事場すらないしね。仕方ないちょっと覗いてきますか」

そうだとウチ連れていこう！ 最近煮詰まり気味だし久しぶりにデートもいいかもしれないな。グフフ。

「それならもう一ついい稼ぎになるものがありますよ」

午後からの予定を決めた俺の背後から爺さんの娘さんであるマリナおばさんが話しに入ってくる。

「いいのかマリナ」

「フフッ。キドーさんは信頼するには十分な程に、お人良しみたいですから」

何の話だろうか。

「私は武器屋の店員ですけど、調査ギルドの構成員でもあるんですよ」

な、謎のギルドキターーーーーー！！ 確かに武器屋の一店員さんにしては、妖艶なオーラ漂わしてましたけども。

「そこで私に情報売ってみませんか？ キドーさんはちょっと変わった視点をお持ちのようですからいい取引ができると思いますの」

「……」

いや商才すらない俺に情報の価値とかわからんから。情報収集に余念はないが、あれは基本俺の為と目的のものにしてるだけで、他の使い道使えるとは思わないしな。

「なんでもキドー様は人から情報を聞き出すがお得意とか……」

ヒイ！ 俺の情報収集活動が筒抜けだー！！ 壁に耳あり障子に目あり、いやそこは同じ穴のムジナか？ どっちにしても専門家にはかないません。

「なにかお金になりそうな、今求めてる情報ってありますか？」

ダメもとで聞くだけ聞くか。もしかしたら日々の活動の中で小耳に挟むぐらいしてるかもしれないし。

「そうですね……。今ですとジーニー・ボライアズ様のこれからの動向。汚職役人情報、正体不明の窃盗団。あとは一月前に起こった旧ナーブ神殿で起こった惨状に関しての情報でしょうか」

おっと二つも引っかかりましたよ。ジーニーさんとはあれから数回お茶に招かれている。なんだか友人のように接してくれているジーニーさんとの会話は、すごく為になり楽しいものだったし、一緒に連れてったトウカやリッキーがガツガチに固まっていたのは、とても面白かった。世間話をしたりしてるので、もしかしたらその会話を売れるかも知れない。マッ個人的にこれはパスだな。恩人を売るとかマジ勘弁だ。あと一つは……。

「ゲイロス一味が全員逮捕されたのって、街で有名話じゃないですか」

あれだけ悪評を振りまいていた一味があつさり全員御用となったあの事件は、街中がその噂でしばらく持ちきりだったはず。

「はい、そうなのですが……。ここまで話題になったこの一年以内に、屈指の事件なのに、詳細な情報があまり出て来ないのよ。なぜ今まで放置していた一味が突然逮捕されたのか？ 現行犯逮捕との知らせはありますが罪状不明。近辺に住んでいた人の話では捕まった日の夜中に、すごい物音が神殿内から鳴り続けたという話もあります。しかし警備兵や騎士団が踏み込む前の話だとのことですし……。単純なはずの事件なのにとっても謎が多いんですよ。つまりこれは隠したい事があるんじゃないか、という推測が成り立っているんですね」

なーるほど。たしかあの連中に絡んでいた役人はいたはずだし、現場の惨状はともじやないが説明しても信じられない。それにおそらくあの連中を締め上げれば、ゴロゴロ余罪が浮かんだはずだ。そうなったら今まで放置していた警備隊や国に批判が向かう。だから臭いものには蓋をしたか……。政治的判断するのはどこの国でも変わらないな。

「それについてなら一個だけ知ってる事がありますよ」

「えっ！？ どつどれについて!？」

なぜにびっくりした。

「ゲイロス一味が逮捕された罪状ですよ。あれは確か誘拐罪です」

「……証拠は出せる?」

「実際に行方不明なっていて、その日次の日に見つかった人が複数いると思います。あとは直接そっちに聞けば分かるかと」

「……………」

やばかったか？

「すごいわ、期待していたのは事実だけどいきなりこんな大物を出してくるなんて…………」

よかった感心してくれてただけだったようだ。セーフ。

「報酬は裏付けが済んでからになるから、受け渡しはこの店の奥で行いましょう」

「いくらぐらいになりそうですか？」

なんだが業突く張りな話だけど、今は切実に一デイクスでも多く金が欲しい。

「そうね…………低くても一万、高ければ四万にも届くんじゃないかしら？」

「高っ！？ 噂話を確定させてだけなのになんでそんなに高額に！？」

「ふふ情報っていうのは使う人によってはすごいお金に変わるのよ」

あっそつえばジーニーさんここで俺も変えたな大金に。あれは

俺にとって完全に運要素が百パーセントだったけど。

「それとキドー君、情報ギルドに登録する気ないかしら？」

「はい？」

本当にこの世界は俺をどれだけ驚かせれば気が済むんだよ。知り合いが実は謎のギルド構成員でしただけでもかなりの衝撃だったのに、更にその場でスカウトしてくるとかとんでもないよ。……受けたけど。

なんでも情報ギルドは査定制度がないらしく、別に仕事に励む必要がないらしい。気が向いた時に売り込みにきてくれるだけでいいそう。そんな制度でダイジョブか？ とマリナおばさんに聞いたところ。

「いいのよ、この道は信頼こそ最も必要なものだからね」

だそう。よくわからん。

さて現在、一応の稼ぎは出したと思うが、これからのことも見据えて冒険者ギルドへの訪問は実行に移した。もちろんトウカと手を繋いでである。又フグフフムフフ、何度握ってもトウカの手は俺を満たしてくれるな。

一月もあつたんだからなにか進展したと思った？ 残念私にそんな度胸はない！ 今だに手を握るだけで精一杯であります！ これより先は、即昏倒の可能性のある危険ゾーンです！ もっと偵察を

して現状把握する必要があります！！！！
単にすごいヘタレとも言っけど。

「あれが冒険者ギルドですよ」

道案内を任せていたトウカが指をさす先に、大きな建物が見えてきた。黒鉄で一面を覆った生産ギルドと対称的に冒険者ギルドは支柱を除けばほぼ木製だ。カーペットや壁紙すら貼っていない木目調。なんというか荒くれ集う場所として、見てくれはらしいっちゃらしいね。それにしても――

「でかいなあ」

そうでかいのだ。今までこの街でみた建築物の中では城に継いで二番目にでかい。地球でいうなら学校の敷地を二つ繋いで全部が建物だと言ったら分かりやすいと思う。

「なんでも色んな店や酒場、あと登録者専門でお貸しする安い宿屋も経営しているらしいですよ」

「なるほど冒険者たちからすれば、ここにいれば全部揃えていくことが出来る施設なわけだ」

すごく至れり尽くせりな場所だな、それでもちよつとデカすぎると思うけど。ドアさえないあけっぴろげな正面の入り口から中へと入場、目の前には受付っぽいカウンター、右側は武器屋などの店が並び左は酒屋のようだ。昼間だけかなりの賑わいが見て取れる。席の数が数えられないくらいとんでもない多さから想像しても、夜になったらどれだけの人が集まるかわかったものじゃない。

まあこの街すごく人が多いしデカイもんね。あまりに広くて、

自分では把握することすらできていないのだが、一度総人口がどれくらいかガナド爺さんに聞いてみたが。

「五百万はいるんじゃないか？」

だつてさ。めっちゃめっちゃ多いしそれが全部入りきる街つてどんだけだよ。しかもその街を外壁で覆ってるんだぜ？ それだけでもこの国の力が高いことがよく分かる話だ。

さて今日は今後の参考にするために見学しにきただけだし、どんな依頼があるのかだけみようかな。その後はトウカと店でもブラブラしますか。

「キドーさん。冒険者ギルドにお入りになるんですか？」

「いや、今のところはその予定はないな」

「せっかくあれだけお強いのに……」

「ハハハ、アレはあんまり人前では見せたくないからね」

「フフ、そうでしたね」

恋人の関係のはずだけど、お互い緊張してか今だに敬語っぽい会話になってしまう。

トオウカ談笑しながら依頼の貼られた掲示板へと向かう。するとなにやら受付カウンター前で言い合いになっているグループが目についた。

「チームで仕事したんだから報酬は均等に山分けだろ！？」

「ハッてめえ等みたいなガキのひよつこなんて二人で一人分で充分だろうが！ わざわざ俺が駆け出しんみ付き合ってやったんだそれで十分だろう」

新人とロートルが、どうやら成功報酬の分け前について揉めているようだった。新人側は俺より年下に見える男と女のコンビ、ロートルは剣士っぽいのが二人、槍を背負ったのが一人の構成だ。ロートルといっても全く強そうではないが。

「そんなバカな話があるか！ 薬草の採取にだってミミルの知識に頼ってばっかだったくせにどこが付き合ってただよ！ むしろそっちが付いてきてたって言ったほうが正しいじゃないか！」

おうおう猛々しいね少年。嫌いじゃないよそうちの。

「テツメエ！ ほざきやがったな、表に出ろ！ ぶちのめしてやる」

おいおいどう見ても少年は弓使い、それに盾持ちの剣士が決闘を仕掛けるとか有利すぎんだろ。ボコりたいだけだなあのオッサン。

「受けてやるよオッサン！」

「駄目だよおジョイ……。怪我しちゃう……」

熱くなりすぎて自分の状況がよくわかっていないご様子です。若いね。少年の裾を引っ張って制止しようとしている女の子の方が冷静みたいだな。

「あれは、ジョイとミミル？」

「え？ あの喧嘩しそうな二人って知り合い？」

「はい私達北西区とは別のスラムの子でちょっとした知り合いだったんですけど冒険者に……」

ほおストリートチルドレンから冒険者になるとは、見上げたやつだな。

「キドーさん……助けてはあげられないでしょうか？」

トウカの上目遣いからの頼み事だ！？ こうかはばつぐんだ！
どっからみても理不尽な決闘だしな、助けるのもやぶさかではない。というかトウカの頼み事を断る気なんて全くないけどね！

第四話 こんにちはわ御仕事（後書き）

リアル求職中の私です

第五話 ジョイ&ミミル

「はいはい、そこまでそこまで」

今にも胸倉掴んで殴りあいそうな険悪な一団の中へと笑顔で乱入する俺。

「なんだテメエは！？ 関係ないやつはすっこんでろ！」

「いやゝそれがあつちの関係者なんだなゝこれが」

「「え」「

俺の言葉に少年少女の方が驚く。それに対して目でトウカのいる方へと視線を送ってもらう。

「あの傷はもしかして……トウカ？」

よかったよ気づいて貰えて。

「という事で見苦しい真似はやめて大人しく報酬支払っていただけませんか？ こんなこと評判が下がるだけですよ？」

ギルドで悪評上げたってなんの得にもならないでしょうに。しかも受付前とか正気の沙汰とは思えないな。

「へっ知ったこっちゃねえよ。そっちに一人分払って残りが俺らの配当が正当な報酬だよ」

やべえお話の通じない系統のお方でしたか。でも周りの反応が薄いな……受付のお姉ちゃんも苦い顔してるけど注意しないし……。もしかしてこいつらこいつことの常習犯か？

「ねえ、この依頼は誰の名前で受けたんだ？」

ジョイと呼ばれる少年に向き直って聞いてみる。

「えっ？ おっおれだけど……」

「じゃあ依頼の配当権は確かジョイ君が握ってるはずだよね？」

「だからなんだよ」

「では別に君たちの報酬が全くなくても誰にも文句言えないよね？」

男三人の眉間にシワが寄る。

「そんなことが通ると思ってんのか？ それともなにか？ この金を力づくで奪い取るってつもりでいるのか兄ちゃん」

手に持った金袋をこちらに見せ付けて薄ら笑いを浮かべるアホ。

「ホントにあんたら頭悪いんだな。今君らは強盗と同じ扱いなんだよ？ 力づくでその金をこっちが取り返しても法律的になんの問題も無いんだ」

受付のお姉ちゃんがあつと驚いている。気づけよギルド員。

「大人しく報酬を受け取ってお家に帰るか、何の報酬も受け取らず

に痛い目に合うか選べよゴロツキ」

「このガキィ……」

文句を言いながらも報酬を支払うロートル三人組。これだけ人のいる場所で強盗を証明されたて暴れようものなら即警備隊を呼ばれて牢屋行きは確実だ。流石にそこまでするアホではなかったようだ。ていうかそこまで救いようの無いアホだったら冒険者はやってられないだろう。

「覚えとけよ」

お決まりの台詞を吐いてゴロツキ共はその場から退場していった。いやいや覚えとけて悪いの完全にそっちだからね？

「ありがとうございました」

「……」

ミミルちゃんが頭を下げて俺に感謝を述べてくる。どうやらジョイ君は収まりが付かずに納得できていないご様子。

「よかった、なんとか丸く収まって」

トウカが走り寄って来て胸をなで下ろしていた。

「余計な事すんなよな、ったく」

気が強いな〜ジョイ君は。

「ジョイ君のバカーーーーー!!!」

その一言を聞いてミミルちゃんが手に持ったメイスを全力でジョイの頭に打ち付ける。

「何すんだよミミル!」

「あのまま決闘して三人がかりで来られたら私達ふたりじゃ絶対かてなかったよう」

怖いのを我慢していたのか涙目でジョイにいかに危なかったかを訴えるミミル。この子はなかなか頭が良さそうだな。

「そんなの気合でなんとかなる!」

それに比べてジョイ君は残念だな。

「なつりませーーーーん!!!!」

再び全力で振るわれたメイスがジョイの顔面にヒットしてその体をふっ飛ばしたのだった。

「あり……が……どう……ございまして……た」

食事処に移動した後、顔面が腫れ上がった瀕死の状態のジョイ君がおれに息も絶え絶えに感謝してきた。いかに自分たちに危機が迫っていたのかを、その身を持ってミミルに説明された結果なんとかご理解できたようだ。

その後、色んな話を交えながら俺のおごりで昼飯を取ることにした。家の昼飯は最近メキメキと料理の頭角を現してきたユーリに作ってもらった事が多くなってきた。すでに味付けだけなら俺よりもうまくなっている。単純な作業はミセスハニーウェイトが手伝ってくれるのでとても楽チンだ。

なんでもトウカが仲間を集めようと思ったきっかけは彼等だったらしく、ジョイとミミルも五人ほどの小さな子供の面倒を自分の稼ぎで面倒を見ているらしい。普段はジョイが獵師として、ミミルは光の神殿の巫女として働いており、時折自分たちにできそうな依頼を見つけては冒険者ギルドの依頼を受けているそうだ。

「君たちホント偉いね」

「いやキドーの兄ちゃんのほうがすげえだろ」

年齢を聞いたら一応一五歳のはずと返ってきた。俺と二つ下ですでに独立して子供を養ってるとかやっぱすごいよ。

「そっぴいさつきみたいなのはよくある事なのか？」

「報酬を奪うほどの事はないですが、組んだチーム内でトラブルはよくあります」

「あいつら俺らがストリートチルドレン上がりだって知ってるから、いつも舐めてかかってきやがるんだ！ むかつくぜ！」

「ならどうしてチームを態々組むんだ？」

面倒事が起きる上に分け前が降る行為をなぜ毎回する必要があるのか疑問でしかたなかった。

「私達、神官と弓師のペアだからどうしても前衛で頑張ってくれる人が必要で……」

ああなるほどね。弓師も回復術主体の魔法使いである神官も接近されると困るもんね。接近戦に長けた人もいるらしいが、それは上位陣に限った話らしいし。

「とするとその弱みに漬け込んでくるやつが多いってほうが正解かもしれないな」

「……そうかも……しれません」

「元からそのつもりで近づいて来てるのかよあいつら……」

ここは他のギルドに比べてあらくれ物が多いからね。隙なんかみせたら骨までしゃぶられそうだな。

ん？ 待てよ？ …………… 良い事を思い付いたぞ！

「俺から一つ提案があるんだけど聞いてみる？」

トウカの話と今まで喋った感じからこの二人はかなり信頼できそうだな。なら、ギブアンドテイクでみんなデハッピーな関係だって築

けるような気がしたんだ。

「俺らと兄ちゃんがチームを組むっ？」

「そう、ただし俺は冒険者ギルドには登録しないから毎回助っ人として参加する」

「強いんですか？ キドーさんって？」

「それはもうびつくりするぐらい強いわよ」

少し俺の思惑を感じ取ってくれたのかトウカが二人の説得に回ってくれている。

「その条件を飲んでくれるなら、俺からもそっちにしてあげられる事がある」

「……もし飲んだら？」

「俺んちで住める権利をやるっ」

聞いた話じゃ現在二人は借家住まいで、いつも子供五人にはお留守番をさせているらしい。俺と心配の種が似ているだけにこの条件はなかなかの妙案じゃないかと思うんだけど。

とりあえず家を見てもらうために二人を自宅へと案内する。

「うそ……だろ……」

「信じられない……」

何に對してそんなに驚いているのだ君たちは。ボロさ加減か？ おつかしいなあ、なんとか一階の部分の大半を改築してボロい壁は全部とっばらい。支柱は綺麗にして屋根は完成している。いまだ柱しかない二階はともかく一階は見れるようにまでにはなっただけ。庭だって身の丈ほどに伸びてた雑草だって子供たちが頑張って整地してくれたので広さの分かる綺麗な庭になっているし。

「これを一月ちよつとでしかも一人やったのか？」

「ああ、そこなんだ驚く所」

確かに早いとは思うけど今だにどこの部屋にも壁紙なんて貼っていない角材丸出し状態だし、唯一寝ている広い居間にはカーペットを引いてはいるがそれでも色んな事を省略しての強行だからこんなもんじゃないだろうか？

「ほんとにいいのか？ 俺たちがこんなとこに住んでも？」

「そつちが良ければいくらでも」

正直俺はこの二人がかなり気に入っている。トウカと同じように苦難の日々を過ごしながらもそれに負けない目の輝きを持った彼等と一緒に過ごしてみたい、家族になってみたいとおもったのだ。

「あつてもミミルちゃんは神殿勤めだから光の神殿まではここからは遠いか」

この広すぎる街中にあるといっても光の神殿までは定期的に大通りを回っている馬車を利用しても一時間くらいかかる。往復毎日二時間は俺も嫌だなあ。

「いえゝ巫女と言いましてもお私は下っ端もいいとこなので。直接神殿ではお勤めしているわけではないんですよ」

なんだか緩いなゝこの子は。

「ですからあ住まいが代わったと申請すればあ近場の奉仕先を斡旋してくれるとおもいます」

「問題はないのか。じゃあどうするよ？ 今すぐなんて話じゃないから返答を急がなくてもいいんだけど」

「一つだけいいですか？」

どうしたなぜ急にかしこまったんだジョイ君

「いくらでもどうぞ」

「キドー兄ちゃんの実力を見せて欲しい……です」

おつとそれは重要だよね。

「じゃあ軽く組手でもしてみるか」

組み手は家の庭でやることになった。広さとしてもそれなりだし、人目という問題もスラムなのでそこまで気にする必要はない。魔法さえ使わなければ問題ないだろう。

俺は右手に手甲をつけて構えを取る。ジョイ君は近接戦では刃渡りがナイフに比べれば少し長い、ダガーで戦うようだ。今は訓練用に使っているのだろう、ダガーに見立てた鉄の棒を持って構えている。

「でりゃあああああ！」

姿勢を低くしたまま、俺へと突進してくる。下から放たれた攻撃を、上体を逸らしてギリギリかわす事が出来た。侮っているつもりはなかったのだが、ジョイ君の速さは俺が想定していた速度の倍以上の物だった。体勢を崩したと見て、振り上げた武器を、俺へと向けて突き出すジョイ。だが、それは少し早計だぜ。体勢は確かに崩れているように見えるが、それは上半身だけの話で、足はしっかり重心を捉えている。

歩法という技が格闘技や武術には存在する。物によってはスポーツにも取り入れたりすることもあるらしいが、武術などのそれに比べれば技と呼ぶにはまだまだ未熟だ。歩法は簡単に言えば、足運びである。だがその足運びによって生まれる利点、欠点を突き詰める

ことで、あらゆる状況に対応し、ある時は防御の為、ある時は攻撃の為の始まりを起こす基礎にして、絶対の奥技なのだ。

その歩法にて体を横方向に移動させ、その反動を使って、ジョイの突き出した腕を俺の手で逸らし、その姿勢を崩す。逆に姿勢を整わせ、真横という有利な位置を確保した俺は、ジョイの首へと素早く手刀を打ち込み、寸前の所で停止させる。

「一本、俺の勝ちだな」

「……なに、今の」

「何って、空手っていう武術の回し受けてっていう技だけど」

「聞いたことない武術だけど、すごいや」

そりゃ聞いたこと無いでしょうね。異世界の武術なわけだから。

「最初の攻撃でよろけたのも、誘いだったの？」

「いや、あれはジョイ君の速さに面食らって、マジでよろけた。あそこで上半身じゃなく、足を狙ってたら当たってたかもしれないな」

「……もう一回やってもいい？」

「ああ、喜んで」

その後も存分に組手をしたジョイは元の口調に戻り、晴れやかな表情で家族の一員に加わることを了承してくれた。

第五話 ジョイ&ミミル（後書き）

前から思ってたけどなんで洗剤のジョイは関西弁なんだろうね。ちよちよいのちよいやでー♪

第五話 外伝 トウカの驚愕

ご飯が三食毎回食べられて、綺麗な服を着て、温かい毛布に包まって眠れる。今までは考えられないような生活を私達は送れるようになった。いまだに信じられないこの光景を作り出してくれたのは、その存在感が凄すぎて信じられないキドーという男の人です。

そもそも私とキドーさんの初めての出会いだつて人に言っても信じては貰えないようなものでしたし。

あの時、私は何もかもが終わってしまうんだなつて思っていました。分厚くて私じゃとても壊せない大きな壁に囲まれて、これからの人生を過ごすんだなつて。でも空から現れたキドーさんはあつという間にその壁をなんと拳で叩き割ってしまったんです。驚きましたよ、驚きますよ普通。ゲイロス一味は警備隊でも迂闊に手を出せないほどの実力を持っていると聞いていたのに、それをたった一人で圧倒してしまつたんですから。私はその戦う姿を見て、火と武の神バーダグノミス様の使いなのではないのかと思いましたもの。

そして私達全員を見事救出して下さいました。心配だから一緒にいてくださると言ってくれるこの御方は、本当に優しい方なんだと心から思いました。

そんな中で周りが騒がしくなり、夜が明けたすと、ずっと座っていたキドーさんは静かに立ち上がりました。私はもしかしたらここでお別れになるんじゃないか、もう会えないんじゃないかって思い、

勇気を振り絞ってお礼を言いに駆け寄りました。

「あ、あのありがとうございました。本当にあなたは命の……いえ心の恩人です」

「いや……勝手にやったことだ気に――」

そんな私の言葉を聞いたキドーさんは目を見開いてしばらく固まっ
てしまわれました。なにか気に障るような事をしてしまったんでは
無いかと思い、私もそのまま見つめたままで立ち止まっています。
すると顔を隠していたマスクを外して私に問いかけてきた。な
ぜだろう、光に照らされて明るみに出た顔は、始めて目にした時
からイメージしていたそのものの、お顔だった。

「俺はキドーと言います。改めてあなたのお名前を聞いてもいいだ
ろうか？」

「えっ？ あっはい！ 私はトウ力といいます」

正体不明、ここまで名前も明かさなかった人が、突然私に名前を
教えてくれて、なぜか私の名前を尋ねてらっしゃいました。本当
に私はこの時焦ってしまって、ちゃんと喋れていたんでしょうか。

するとキドーさんは私の目の前まで近づき、その膝を付いて私に
手を指し伸ばしてこられました。これはもしかして物語なんかで聞
いたことがあるような……。いやそんなはずはない、私なんか――
――。

「いきなりですまないと思う。でももう俺には止められないんだ。
――どうか俺の愛を、君に送らせてもらえないだろうか？」

そう心の中で否定したのに、あっという間にそれを覆されてしまった。

「……………え？ え？ へえ！？」

そのあまりの唐突さ、予想外の出来事に思考も体も完全に停止してしまいましたよ。もしかしたら鼓動さえも止まっていたかもしれない。無理もないじゃないですか、だって私はストリートチルドレンで、こんな貧相な体をしていて、顔にだって大きな傷を負っている女なんですよ？ そんな私にこんな凄い方が、あ、あ、愛のここ、告白をするなんて……………。思い出すだけでも顔が赤くなってしまいます。

でもその真剣なキドーさんの雰囲気はその言葉が心の底からの真実なんだと物語っていました。

私は嬉しくって嬉しくって、心に花咲いたように嬉しかった。でもちよつと「ずるい」とも思いました。だってきつと私のほうが先だったから。空から現れて救いの手を差し伸べてくれた彼と、初めて目を合した時から私の心は彼に向かっていたから…………。

「……………はい」

喜んで心からその愛を頂きます。その代り、私の全てをあなたに送りたいと願います。

初めての驚きの出会いからも、キドーさんは私の心に大きな大き

な驚きを送り続けました。

まず、次の日にはあそこから逃げ出したリッキーを連れて来てくれて、しかも私達が住んでいた場所を購入してしまったなんて言うて――。

「俺もここに住もうと思ってね」

なんて言い出すんですもの。あまりの驚きにきつと頭が麻痺していたんでしょう、今考えるととっても失礼ですけどその訳を聞いてしまいました。

そしたら――。

「……俺は君が大切にしているものも大切にしたいと思ったんだ。理由はそれで十分だ」

私の為とおっしゃいましたよこの方！　あまりにストレートでわかり易い理由に私はしばらく耳まで真っ赤にして俯いて固まってしまいました。

その後も驚きの連続でした。全員分のご飯を魔法を駆使して作ってくれたり、全員分の衣服を買ってくれたり、なんと家は自分で作り上げるなんてもおっしゃいましたし。この人の凄さがどこまでいくのか測ることを、諦めそうになりましたよ。

でも衣服に喜ぶ子供たちを二人で見守っていた時、静かに私の手を握って来られました。ちょっとビックリして見たキドーさんは、

見るからに緊張して、額に汗まで浮かべていました。

ここまでの凄さを見せたキドーさんの初心^{うぶ}さというか、純情さを見て私はなんだか「かわいいな」なんて思ってしまった。

「……フフ」

でもそれが、私に向けられてるって思うと嬉しくって、自然と顔が綻んでしまいました。

それから驚きを絶やすことなくキドーさんの日々は続きました。あまりにも驚かしてくるものだから。

「キドーさんってまるで体中がビックリ箱みたいですね！」

って言うてみたらなんだか少し悩んでいたようでした。……これだけ色んな事をしてきたのに自覚が無かったようですね。鋭いのか、鈍いのか、ほんと面白い人です。

そんなある日、冒険者ギルドに案内を頼まれて、キドーさんと二人で行くことになりました。二人つきりでどこかに出かける時は手を、繋いで歩くのが最近の決まりみたいになっていたので、勿論この日も手を繋いでゆっくりと歩いていました。家から冒険者ギルドまでは徒歩で一時間以上かかるので、もちろん市内の大通りを回る大型馬車を利用しましたけどね。

そして人気の少ない通りを歩いている時、ふとある事を思い付いたんです。いつもいつも、驚かされてばかりのキドーさんを、いつ

か驚かせてみたいと思っていた私は、今までしたことのない恋人っぽい話題を振ってみたんです。

「キドーさんって私のどこが良かったんですか？」

初心なキドーさんなら、こういう質問は苦手なんじゃないかな？って思ってみたんですけど。苦手だけど嫌いじゃないはずですし。

「どこがって……全部だけど？」

素面で返された！？ たまにこういう事をさらっと言う人だから、私も気が抜けませんよ。

「でも、私って孤児でしたし、あの時初めてお会いしたばかりでしたし、それに……私の顔には大きな傷がありますし………」

この時、ちょっと焦ってしまっていたんでしょう。いままで疑問に思っても、心にしまっていたことが漏れ出してしまいました。

「孤児である事は好きになれない理由にはならないし、なにより………一目惚れ………だったしね」

私も一目惚れでしたけどね。恥ずかしくて言いませんけど。

「それにその傷の経緯はユーリから聞いたよ？」

いつもは一言二言しか喋らないユーリですが、二人つきりになると凄くしゃべりだす上に、すつごく口が軽くなるんです。キドーさんにも慣れてくれたのか、お喋りするのはいいんですが、彼女とは仲間を集めたした時からのなかなか長い付き合いですから、どんな

事を喋ってしまったているのか気になる所です。

「それはトウカの……そのなんだ……美しさに何の陰りも見せないし。むしろトウカだっていう魅力が際立つよ」

驚かさないまでも動揺してもらうつくらいのつもりで質問したのに、逆に私が驚かされてしまいました。

私が子供たちを守ると決めた時。私の持てる全てを投げうってでも、守って見せると決意しました。それは自分の幸せだったり、将来だったり、女としての自分だったり、そしてこの顔の傷もその為の一つでした。

手を差し伸べてくれるだけではなく、今まで捨ててきたモノをキドーさんは、簡単に拾い集めてきてくれるんです。ああなんて、なんて愛おしい人だろうか。

その嬉しさの余り、私は唐突にキドーさんの腕を抱きしめるように腕を組んでみたのです。

「ト、トウカさん！？ どどどど、どうしましたか！？」

どうやら急な事に驚いてくれているようです。質問作戦は失敗だったようですが、結果としては作戦成功のようです。驚きのあまりに口調まで変わってしまったていますからね。今度からこういふうな物理的アタックを心がけてみましょうか。

「フフフ、なんとなくこうやっていたい気分なんです」

ガチガチに固まった体を、何とか動かしているキドーさんは、とてもおかしかったですね。頑張った甲斐があったというものです。そして私はその腕の力強さと暖かさからとてもとても幸せな気分を堪能させて頂きました。

でもなんだかチラチラと視線をこちらに、というよりどこか一点を気にして見ているような？

「あっ」

しまった！ この形で腕に抱きついたら、胸を押し付けるような形に！！ かなり時間が経ってから気付いた私はあまりの恥ずかしさに全身真っ赤になってしまったのですが、自分から仕掛けてしまったので、離すに離せず二人共無言のまままで歩くことになってしまいました。

長い沈黙であたふたした二人だったんですが、偶然にも視線が一瞬重なつて見つめ合う形になってしまいました。頭が真っ白になっていた私は、視線を逸らす事も出来ずに――。っという最高に甘い雰囲気であつた私達二人の真横を、かなりの勢いで馬車が通り過ぎていき、その空気を壊されてしまいました。

おいしい！

何が惜しかったのかは、ご想像にお任せしますが、その後改めて腕に抱きつくことは出来ずにまた手を繋いで歩くことになりました。

よくあそこまで男性に対して恐怖を抱いていた私がここまで変わったなと自分ながらに思いますね。これもキドーさんのせいに間違いないかもしれませんけど。

そんな幸せ気分で冒険者ギルドに行くと、そこで私の知る友人に再会することになったんです。

ジョイとミミル。子供たちを守ろうと決心したところに、男性に襲われそうになっていた所を助けて貰ったことがあったんです。その時に話してくれた彼等の話から思い付いて、みんなを集めることになった始まりの人達であり、私の友達。

ジョイとミミルは私の滞在していた北西区とは逆の場所にある、南東区にあるスラムを拠点にしていたストリートチルドレンだったそうです。でも偶然にも光の神殿の神官に、ミミルの才能を認められ、そこで勉強しながら働くことになった。その賃金で年下の子供たちとジョイを養っていけるように、なったらしい。もちろんジョイも負けじと、働き口を安い賃金なりにも見つけ出して、必死に働いているそうだ。そのうちお金が貯まったら冒険者になりたい、なんて夢も持っている立派な男の子だ。

その二人を冒険者ギルドで見た時は夢が叶ったんだと思えて嬉しくて、でも同時に少しだけの罪悪感も感じていた。

彼等が私達同様苦労してきた、ストリートチルドレンなのはわかっていて。願うことならキドーさんの救いの手が、ジョイとミミルにも差し伸べられたらどれだけ良い事だろうかと思った事は何度もあった。彼等もまた、私の仲間であったから。

でもそれは出来ない。私達にこれだけの事をしてくれているキド

「さんに、我俣に等しいお願いをするなんて事はとてもじゃないけどできっこなかった。

だからせめてもと思ってジョイ達が揉めている所だけでも思ったのに……。

なぜかジョイとミミルと一緒に住む事にトントン拍子に話が決まってしまうていた。

もしかして心を読まれてしまったんじゃないだろうか、と疑ってしまったけど、理由を聞くと確かにお互いにとっていいお話になり、キドーさんにもメリットがあるみたいだった。

その時なんだか笑顔で確信してしまったの。きっと私がキドーさんに驚かされない日々は、こんなに嬉しい気持ち達が途切れる日は、こないんだらうなって。

第五話 外伝 トウカの驚愕（後書き）

だいたい最初からここまで勢いに任せて二日で書いた。自分でもドン引きするほどの集中力でしたよ。

第六話 明日のために

そんなこんなで、今後の方針はだいぶ固めることが出来た。まず家の完成を目指す事を基本としていき、ジョイとミミルの仕事をたまに手伝い、貯蓄金額が五万デイクスを切ったら家の建造を一旦停止して、金を本格的に稼ぐ。それと平行して情報ギルドの仕事をしていく事を、これからの活動プロセスにしていこうと決めた。

家は不完全なところもいいところなので、早く完成させたいので当然最優先。ジョイ達を手伝うのは当たり前だし、五万デイクスを切ったらキツイのは前に述べた通りだ。そして情報収集活動については積極的にしていくつもりだ。

元から悪党を見つけるためには必要な行為ではあったし、ここには情報ギルドというものがあり、その話によつてはかなりの金額を得る事が出来る。しかも信頼度を上げていけば、逆に向こうからの情報提供にも期待が持てるようだ。それならば、俺の探す凶悪党の情報だつて得る機会があるかもしれない。その証拠にゲイロス一味の情報報酬を受取りに行った時、マリナおばさんに詳細を少しだけ聞いてみると、どうやら犯罪に対する情報の金額は、他の情報に比べればやや高かった。情報ギルドがその系統に対して力を入れてるのがよく分かる。結局俺の売った情報の金額だつて三万五千デイクスにもなったのでかなりのものだろう。

あまりに高い気もしたのでマリナさんに聞いてみたが。

「一つの情報を確定することで、色んな情報が手に入ることもあるのよ。キドー君が売ってくれた情報も、そんな類の情報だったわけ。おかげで面白いことが色々わかって助かったわ」

俺一人の活動なんてたかが知れているのだ、専門家にお任せする方がこちらの都合としてもいい。収集した情報を組み合わせ、何か

を導き出すっていうのは得意だと思うが、集めれる数には限界があるし、街の事情も、つてもない俺では運に頼るところが大きい。これはまさに渡りに船というやつだろう。いや、実際その規模と実力からすれば渡りに軍艦かな？ 本当にラッキーな出会いだっただな。

情報収集に関してはちよつとした自信がある。なんせ地球で俺の生きた世は情報という名が付いた時代だった。情報の有用性はその身に感じるほどに理解している。機械の勉強に邁進していた俺の学習速度も、図書館、専門誌、インターネットの情報媒介が安易に利用で来たことで、その速さは飛躍的に伸びていたことは確定的に明らかだった。

こちらでいう生まれた時からもつ魔力の感覚の代わりに、俺は情報の感覚を持ち合わせていると言えるだろう。使いこなせてはいないけど。

そういえば忘れられているかもしれないが、ヨルガの森で獲得していた熊の皮などは全て販売した。全部をジーニーさんのところに売るのは流石に目立つので、他の五商家にそれぞれ分けて販売した。五商家はボライアズ家の他には建築のナルバ家、食品のノーイリス家、武具のグライス家、貿易のロナイホーン家というのがある。それぞれ得意分野で活躍しつつ、手広く商売をしているそうだ。ちなみにボライアズ家は資材販売を得意としていて、なんでも石切場と鉄鉱石採掘所が、ほぼ同時期に取り尽くしによる閉鎖が相次いでしまい、家が傾いたとジーニーさんが苦笑しながら説明してくれた。そこでジーニーさんが、新しく色んな販売ルートを開発して、なんとか持ち直したそうだ。

まあボライアズ家に持ち込んだ時のように、頭首クラスどころか、一族の一員が対応することは一度もなかった。失礼に見えるかもしれないが、お得意様ならともかく、有象無象の相手を一々相手に出来るほど暇ではないから五商家なのだ。

どっちかというと、度々俺と会ってくれるジーニーさんのほうが異端であるのだよ。ジーニーさんもかなりの変わり者なんだろうね。アレだアレ、「類は友を呼ぶ」ってやつなんだろう。

そして今回は本当に金欠が大変だったので遂にアレを売ろうと決断したのだ。

「キドーさんは体が全部ビツクリ箱で出来て居るのかもしれないね」

俺の持ち込んだサーベルタイガー、正式名称ワイルドカッターの毛皮を鑑定し終え、俺と午後のお茶を楽しんでいたジーニーさんが偉く失礼な事を言い出した。でも、こないだトウカにもおんなじような事言われたな。……おかしいな俺的にはまだまだ自重しているつもりなのだが。

「そういえばサーベルの部分はどうされました？」

「あれは加工してから販売しようと思ってるんですよ」

一応この魔物達の素材は知り合いの人が集めてきたという設定な

のですが、ホントは自分で使う気満々です。

「なるほど、あれは鉄すら切り裂くと言われる素材ですからね」

ジョーンさんとは大体週一ペースでお茶に招かれてこうやって談笑している。今回はついでに商談も行った次第だ。

「それでお願ひがあるんですけど。この商品の販売を依頼した方は前も言つた通りあまりこちらでは有名に成りたくない事情がありまして。なのでまだワイルドカタターの懸賞金は受け取つて居ないのですよ」

「なるほど、それを私が受け取つてこれば良いのですね？」

「報酬の方は折半で構いませんので」

「いやいや、この魔獣を倒したことの労力は相当なものはず。代わりに受け取るだけの行為に、そこまでの報酬を頂くわけには行きませんよ。割合はそちらが九、こちらが一で結構ですよ」

商人って業突く張りなイメージなんだけど、ホントこの人いい人だわー。なんでここまで気に入られているのは大いに謎だが。

「どうです最近は？」

「いやー新しい事業はやつと軌道に乗つてほつとしていますが、不景気な話もあつて困つていますね」

「何かあつたんですか？」

「実は家が管理している鉄鉱所の近くで、魔獣が出没して作業効率が激減してしまして、ほとんど動いてないも同然なんですよ」

「冒険者ギルドに依頼は？」

「それがこの魔獣はかなり多い上に凄く逃げ足が早くて。何匹かは討伐したもののその度に学習しているらしく、今では冒険者が近寄ると全く出てこなくなってしまうました。しかし労働者だけになると狙って出てくるという厄介なヤツらでして難航していますね」

ふむ、あのベアーハッグも連携してたし、多少頭の良いリーダー格が統率している群れがいるんだったらそれくらいはするのかな、魔獣って。

そうだ。色んな試みをするのには、これは都合がいいんじゃないだろうか？

「どうでしょう、このワイルドカッターを倒したチームに依頼してみるといいのは？ チームの一員には獵師を生業にする者がいたはずなので、逃げた先を追跡して巣を直接叩くなんてことも出来ると思うんですけど？」

チームを組んで一週間経過していたが、その間に二度ほど既に依頼をこなしてジョイの獵にも一度同行させてもらっていた。猪突猛进タイプのジョイに、隠密性の重要な獵師が出来るのかと不安であったが、思いの外獵師としての才能はかなりのものだった。知識はまだそこそこでしかないが、とてつもなく感覚が鋭いので、気配察知や探索行動などがとても上手かった。それに身の軽さにかけてはかなりの者で、弓師としてはすでに一人前と言える程だった。それがどこまで通用する高さにあるのかを、一度限界まで測っておきたかったのだ。

なんせ今俺は、ジョイの戦闘技術の指導を頼まれている、師匠的位置にいた。空手以外はとてもしゃないが、教えることができないと一度は断ったのだが、その熱心さに負けてジョイが強くなるための方策を検討中だった。

他にも実践のために俺が試行錯誤して作っている戦法や、魔法の使い方が大量にあるので、いくつか試すのも悪くないだろう。

「なるほど……獵師ですか……。問題の魔獣は犬型で、今まで逃げていく先は森の中だった為に、その機動力に振り回されていたようです。しかし痕跡から後を追える、森の専門家である獵師ならば、もしかするかもしれませんが。戦闘能力においてもワイルドカタ―を倒せるほどの力があれば、申し分無いですし」

ふむふむと言いながら、思考の海に入っただけでいるジーニーさん。冒険者の仕事なんて完全に範囲外のことなのに、よく頭がそんなに回るな。

「いいですねそれ。是非お願いしたいです」

「わかりました。それでは俺が直接お願いしておくしますのでそこらは冒険者ギルドにジョイというこの街所属のソード級の冒険者宛に指名して依頼を出しておいてください」

ソード級とは冒険者ギルドのランクで、下からダガー、ソード、クレイモア、ハルバード、セイントソードの五段階になっている。

「了解です」

ジョイについてのツッコミは無し。ほんと空気も読んでくれるわこの人。

さあ人を助けながら、少年少女二人の可能性を確かめて、俺の戦いの手札も試しつつ、しっかりと働こうじゃないか。

第七話 いっぱいイッパイ

早速ジーニーさんからの依頼を、ジョイとミミルに説明し、準備を始める。山や森に入る予定だと分かると、その準備の良さは俺なんかよりも、二人のほうが実に手馴れたものだった。

準備も整い、次の日には鉄鉱所の近くにある、ウインストーンという村へと出発した。今回の依頼は初めて、数日間かかるであろう依頼だったので、フィリーにはお留守番してもらうことにした。子供たちだけとわかれば、スラム街にあるあの家が、ゴロツキに襲われないとも限らない。前の状態ならあまり心配はいらないが、改修が進んだ今ではそれなりに良い見栄えになってきたので、危険性は大きいにある。

食料なんかの買い出しはマリナさんをお願いしておいた。これから情報ギルドには大いに協力していく所存を伝えると、快く引き受けてくれた。どう考えても武具屋での働きより、情報ギルドへの献身度の方が上回っている気がするが、大丈夫なんだろうか……。

留守番についてフィリーは猛然と不満をブー垂れていた。

「そんな面白そうな事に私を置いていくの!？」

俺とトウカによる懸命の説得によって、なんとか納得してもらったが、代わりに一個3デイクスもする特別性の飴を一袋も買う約束をするはめになってしまった。そして俺は見た……その約束を交わした一瞬に、フィリーの見せた、してやったり顔を。実に悪そうな顔だった。まさか一時間に及ぶ抗議は、飴を買わすための策略だったのか？ まさに計画通りに運ばれた事に気づいたが、既に時遅しである。

ウインストーンはブローナスから北にある山岳地帯の手前にあり、歩いて三日といった距離だ。当然そんなに時間をかけたくない俺は、

馬を一頭レンタルしてミミルとジョイを乗せて走らせる。もちろん俺は自分で走りましたとも。そして更に早く、かつ効率的にするため俺と馬には『ウインドコート』の魔法を、常時かけながら進んでいた。

魔法はその単語の組み合わせで効果が決まり、ボールシリーズのようにほぼ属性通りの結果が生み出されるものもあるのだが、ものによってはその効果が違ってきたりするものがある。たとえばコートシリーズの効果はちよつと他とは変わっている。火と水はそのまんま包むのだが、ウインドはその対象に風で包んで軽くし、ストーンコートは石で包むことはないが、その対象を若干硬くし、重くする効果を發揮する。ライトコートについてはミミルに聞くとなんでもほんのり光る膜ができて闇への耐性がつくとかなんとか。闇の属性は気配を薄くできるらしい。

つまりウインドコートをかけることによって俺と馬さんは、より軽快に、より疲れずに走ることが可能なのだ。

道のりを順調に進み、無事ウインストンにたどり着く。なんだかジョイとミミルが道中口数が凄く少なかったが、馬は苦手だったんだろうか？

「……………キドーって凄く強い人じゃなくて、化物って呼ばれるよ
うな人だったんですね」

「え？　なんで？」

ずっと走り続けてはいたが、ウィンドコートをかけた状態の一端の冒険者なら不自然ではなかったはずだが。休憩も挟みながら走ったし、これぐらい走れるやつはいるはずなのだが。

「これだけ長い時間、ウィンドコートを維持できる魔力量を持った人なんて居るもんなんですねぇ……………」

「あ」

しまった。魔法に関しては大した才能もないので忘れがちだが、魔力量に関しては尋常でない量が保有している事は把握していた。なにせ今までどれだけ使い込んでも、今だに底を感じたことすらないからな。魔力はその消費量にしたがって、倦怠感とか精神的鬱屈感が現れ出すらしいけど、道中魔法を使い続けてきた今も、そんなのは毛ほども感じない。

「ごめん、これも黙っというてね」

すでに二人には、俺が強さなるべく隠したい旨は伝えてあるの
で、これも口止めしておこう。

「こんな話しても誰も信じてくれませんよう」

そこまで荒唐無稽なキャラなのか俺は？ 凄いというのは流石に
実感できているのだが、どこまで上なのかは今だにさっぱりだ。
さてとりあえず村人達や鉱夫の人に話でも聞いて回りますか。

朝早くに出発し、ウィンストンにはお昼前に到着しており、そこから始めた聞き込み捜査も無事に終了。少し遅いお昼ご飯を、ジョイとミミルと食べながら情報をまとめる作業に入った。俺はまだ、あまり常識的とはいえない。この世界の知識量はまだまだ乏しいので、一人で情報から何かを導き出しても、間違いとか勘違いが起る可能性が高いので、秘密にしたい事柄以外は、常に誰かに聞いてもらうようにしていた。情報の価値もあがるし、俺の足りてない常識も埋まっていった。一石二鳥なのだ。

「まず分かった事は、対象はグレイウルフという狼種の魔獣で、坑道へと近づく、もしくはその方向に近い山道を歩いている時に襲われることがほとんどらしい」

坑道付近の地図を広げて過去に襲われた場所に印を書いていく。

「かなり分かりやすいね」

「一目瞭然ですう」

その襲われた場所の印を見れば大体どのあたりがグレイウルフ達の生息圏なのかは誰にでもわかるくらいわかり易かった。

「ジーニさんは単なる大量発生だと思っていたらしく、俺らの前に出した依頼は五匹倒したら千五百デイクス。追加でも倒せば二百デイクスずつ報酬を出す、なんていう形をとることで、その数を減らすとしたらしい」

「結局それで何匹減ったの？」

「一回目こそ七匹討伐出来たらしいけど、それ以降のチームは三日かけて三匹が関の山だったらしい」

傾斜のきつい山にある森で、四足獣と追いかけてこしても捕まえられるはずもない。

「最初の被害から学習したんですかねえ、すつごく賢いワンちゃんなんでしょうか？」

狼ですよミミルさん。

「冒険者もその用心深さを警戒して、森の奥にまでは足を踏み入れてはいないそうだ」

グレイウルフはかなりの群れを成す種族で、過去最大記録では百二十五匹とぶち当たってしまった冒険者がいるそうだ。しかもこいつらは歳を重ねていくと、魔法に近い力を駆使する物が現れるらしく、数と魔法なんていう厄介な合わせ技を持っている。

「冒険者の鉄則に『群れとは正面から当たってはいけない。当たるなら用意周到な準備をしてからにせよ』なんてものがあるくらいだしな」

何やら思うところがあるのかジョイが椅子を後ろに傾けながら空を見出した。

「でも、わたしたちの任務って壊滅なんですよね？」

ああなんだかミミルと会話すると力が抜けるな。

「こんな状況じゃかなり難しいのは分かってる。だからこそその高額を支払いだ」

グレイウルフは単体ではそこまでの脅威ではない。普通のやつが数匹相手でもやりようによつてはジョイ一人でなんとかなるだろう。魔法を使う強化型でもジョイとミミルならなんとか勝てるそうだ。15歳の駆け出しでもなんとかなる程度の魔獣なのだが、今回の依頼報酬はなんと三万デイクス。通常のグレイウルフ討伐に比べればおよそ十倍近い。

なんでも既に鉄鉱所は二十日ほど稼動しておらず、そのための損害はすでに二十万デイクスを超えているという。今はなんとか在庫を売りさばいて販売契約は保たれているが、もしも足りなくなり、その信用を失うような事があれば以前のお家没落騒動の二の舞になりかねない。つまりボライアズ家にとっては早急に片を付けたい案件なのだ。もう一週間この状況が続けば、同じような条件で高ランクの冒険者に依頼するつもりだったらしい。

「明日の明朝から森に入り、この襲われた辺りを搜索して、群れまたは巢を見つけ出す。最終的に全滅させられなくてもボスを仕留める事ができれば、ここから追い出すことは可能はずだ。もし見つからなくても、暗くなる前には撤退して、この村まで帰ってくる。この人数で夜中にグレイウルフとやり合うなんてのは御免被りたいからね」

俺一人ならまだいいが、二人を庇いながらとなると絶対の保障が出来ない限りは、無理はしたくない。

「なかなかしんどそうだな」

「えええゝわたし体力には全然自信ないですよゝ？」

「それに問題に対してもちゃんと用意はしてあるから大丈夫だよ。
なので探索は明日からだな」

「了解」

ああ素直。本当に助かるよこの子達は。

「兄ちゃん一ついい？」

「なんだジョイ？ 今晚の飯でも気になるか？」

「ちげえよ。明日の探索っておれのスキル使いなんだよな」

「ああ、ジョイの探知力があつたからこそ受けた仕事だからな」

「おれが使い……ヌフフフ……からこそとか……ムツムフフ」

なんだかジョイが気持ち悪い笑みをこぼし出した。

「ジョイくとわたしはゝ今まで利用されてもおゝ頼られることなんてえゝなかったからねゝ」

ああなるほど。しかし俺から言わせれば頼らないでどうすると物申したい。ジョイの探知力はもちろんのこと、ミミルの神官として学んでいる薬学の知識はなかなかの物だ。小さい頃に魔法の才能を見初められて神殿に仕えて以来、今まで勉強してきたから当然と言っていたけど、それでも凄いのは凄い。おまけに光属性の治癒術も使え、ファイヤーボールやストーンウォールなんてもの習得してい

る。ジョイの身体能力もほとんどが平均以下ではなく、その身軽さにおいては体操選手並のものだった。今まで散々この二人を利用してきたのは、大したこと無い奴らばかりだったんだろぅが、利用するよりチームとして引き入れた方がよっぽどお得だったと思うんだが。

世の中見る目の無い奴が多いもんなんだな。

「頼り頼られてこそチームだぜ！」

親指を立ててドヤ顔で決めてみたが、それを見た二人は盛大に吹き出し、しばらく笑いが止まらなかった。

あれれ？　かつこ良く決めたつもりだったんだけどな。

次の日は予定通りまだ明るくなり始めた頃に出発。ちなみに俺は武具の類はカバンに詰めて運んで、村を出てから装着した。もちろん怪しいマスク付きで。正体を隠すならやはり徹底的にね。

「ほんと変わってるね〜キドー兄ちゃんって」

褒めんなよ恥ずかしい。

一番最近にウルフが目撃された場所へと向かい、そこからジョイ

に任せて痕跡を追っていく。なるべく気づかれないように忍んでの移動だったが、速度はそれなりの速さを保って歩を進める。一時間もしないくらいで、ミミルが山の高配に根を上げていたが、あらかじめ疲労回復薬を混ぜた水筒を渡してあり。休憩の度にそれを飲ませることでなんとか耐えて貰った。

というか冒険者稼業してて、その持久力のなさはどうなのよ？

「結構な数がいんのかもしれない」

痕跡を追っているなかで狼の気配を遠目を感じる事が度々あったようだ。

「もしやばそうな数に出くわしたら、俺が時間稼ぎはするから一目散に逃げろよ」

「もちろんそうするよ」

あれ？そこは仲間を置いて逃げられるかって台詞を期待していたんですけど。

「俺の数倍は強い人の心配なんかするわけないだろ」

探索を開始して六時間が経過した。

「なあジョイ……………俺さすつごく嫌な事が思いつきそうなんだけ

どぞ」

「気が合つね兄ちゃん……おれも実は、さっきからそんな気持ちが浮かんできてた」

苦虫を噛み潰したような顔になる。正直頭痛がしてきそうだった。それはなぜかというと、これだけ探索したのにグレイウルフの気配を感じれても、その姿を見ることは一回もなく、それでも巢と思わしき場所まで辿り着いてはいたのだ。なぜか三箇所も。野生に生きる魔獣が巣を転々としている？ いやいや、ここに来る前に冒険者ギルドにあつた魔獣図鑑にはそんなこと書いていませんでしたよ。近づくと思え、有り得ない行動をしているのに縄張りに入る鉦夫だけを襲う？ ……盛大な違和感しか感じないですよ。

「そついや昨日会つた人で、討伐に付き添つた村人に聞いた事を今思い出したんだけど、なんでも「狼の群れにかち合つた時、狼たちは一斉に違う方向に逃げた」らしいぜ」

「……決まつて欲しくないけど決まりだな」

普通逃げるなら同じ方向に全員で逃げる。だが違う方向に逃げて見せればどれを追えばいいか迷つてしまい。結局追いつけなくなつてしまう。

つまり狼は危険を犯してまで逃げきる事を優先したわけだ。……ねえよ。有り得ないだろ、獣が本能を置き去りにした行動を取るか。

本能を抑えこむ事が出来る力は世界でたった一つ『理性』だ。そしてそれを持ち合わせているのは――。

「人間相手は想定外にもほどがあるぜ……確か魔獣使役は『ギフト』

保持者が可能に出来たっけか……。これは三万デイクスでも安かったかもしれないな……………」

神様からの加護であり、贈り物。極めることが出来れば、神の起こす奇跡に匹敵する大いなる力『ギフト』。そんなありがたい力をこんな事に使う奴を相手にしなきゃいけないとはね。

燃えてきた。

第八話 狼の遠吠え

新事実を発見してまった俺らは長い休憩をとりつつ昼飯を食べていた。これまで魔獣の仕業と思っていた被害が人によるものだとかかったならこれは事件だ。昼食をとりつつも元から集めていた情報を踏まえて改めて状況を整理していく。

「まずは……目的だな」

強盗の線はない。襲われた被害者にも近場の村にもそういった痕跡は見当たらなかったようだし。

「むむむ、とすると……」

ジョイと一緒に印を付けた地図と睨めっこをする俺。

「ワンちゃんの餌が欲しかったとか？」

「いや、わざわざ人間を襲うとか面倒くさいでしょうに」

カニバリズムな狼を人間が操ってるとかギャグすぎるだろ。

「誰かを狙ってたなんてのは？」

「ありえそうだけな話だけどな。でもそれなら今逃走なんて手段を取ってるのがちょっと不自然だな。最初に亡くなった人が狙いの人だったら今頃とんずらしてるだろうし」

「やっぱり採掘の妨害なんじゃないの？」

「それが妥当なとこなんだけどねえ……」

人も物資も被害を受けているのは鉱山関係だけだ。妨害としてやっているのなら一応は辻褄は合うといえは合うのだが。

「ここまでする？ 普通？」

数ある鉱山の一角を妨害するために人を殺して、冒険者まで相手取ってなんてのはハイリスクすぎると思うんだよね。いくなればご飯を食べるのを妨害するために手に取った茶碗を一々叩き割るような難しく面倒くさい方法を使っている。妨害が目的ならもっと穏便かつ気付かれないようにやり方などいくらでもあるように思える。その中でもこれはほぼ最高な程に目立つ部類に入るだろう。

「じゃあさ、例えばさ、どこかに近づいて欲しくなかったとかってどう？」

なるほどなるほど、襲っていたのは人払いのためか……。それなら最初だけとはいえ冒険者にまで手を出した経緯にも説明がつかないじゃあどこに近づいて欲しくないか考えればもしかすると。

「えっと、一回目の討伐以来をこなした場所って聞いているか？」

「あつそれならわたし知ってますよ」

話を聞いていたミミルが地図に指をさす。そこは鉄鉱所に続く道に続く最も人が襲われた場所でもあった。

「オーケーオーケーなんとなく分かるような気がする」

推理なんてのはあまりやったことはないが、元からあるものを組み立てて答えを導き出すのは職人柄得意だぜ。

「よく見れば被害を被った場所はその辺りが中心地になっている。たぶんその先に目標の場所があるな」

「兄ちゃんの予想が当たりかもしれない。こんな山越えさえ出来ない道なのに最近馬が走った後がある」

「やつぱりこれはデカそうな山にあたったのかもしれないな」

相手が相手だけに危険だと判断はしたものの、個人的にギフト保持者とは今後の為に是非一戦交えておきたかったので任務は続行した。もちろんジョイとミミルには村に帰っておいてといったのだが。

「キドー兄ちゃんだけじゃ奥に行ったら帰って来れないだろうから付いて行つてやるよ！」「」

「えーっと敵さんが強いならー治療術が必要だと思つのでえー」

と言つて俺の指示を全く聞かなかった。いい子だよホント君達はい！ 帰ったら存分にハグしてあげよう！ たとえ嫌がつてもない！

正直かなりの我俣で依頼を続行して、危険度は最初の想定を大きく超えているので心配なのだが……。まあこの一ヶ月、俺も鍛錬を怠らずに強くなる術も磨いてきた。相手が獣を操る力を持った人だと分かつていればいくらかの予想を立ててる事ができるのでなんとかあるとは思うんだけどね。

そして俺の予想が当たっているようなので、あとはこの馬の蹄の後を追えば目標まで辿り着ける。

「じゃああとは作戦通りにな。重要なのは落ち着く事だ。どんなに危機的状态になったとしてもな」

俺たちは人の知恵にて蠢く狼たちの群れの場所へと足を踏み入れていった。

「兄ちゃん……」

「ああ……これは凄いな……」

狼達の気配を察知したジョイが俺に小声で合図を送る。しかしそ

の数が膨大なため俺にもなんとなくわかってしまっていた。二人は耳に手をあて、俺は吸えるだけの限界まで息を吸い込んだ。

「出てこいよ魔獣使い！！！！！！ 近くにいるのはわかってるぞ！！！！」

なぜ分かるか？ それはこいつらが人を襲ってまで秘密にしたかった遺跡の入り口が既に見える場所まで俺たちが来ていたからだ。いくら冒険者を避けていてもそれを発見されて生きて返す訳には行かないはずだからだ。その為には全力を持って事に当たる、そんな予想を俺は立てていた。

数秒の沈黙の後、周囲を取り囲むように狼達が姿を見せ、その中に一人の男が大きな狼に跨って現れた。狼たちの数はパツと見ただけでも四十を超えていそうだった。

「なぜ貴様私の存在に気付いたのだ？」

手足と顔を包帯で巻いたような不気味な男が俺に質問してきた。

「あんたはなかなか几帳面なようだけど、狼までそんな動きを見せれば獣としておかしいって気付くさそりゃ」

んゝふゝん、完璧にこなしてみたのが逆効果だったわけだよワトソン君。ジョイが居なきや絶対気付かなかったけどね。

「なるほど、獵師を欺くことまで考えて使役をしてはいなかったかな。今後のいい参考になったよ」

男が手を挙げる。

「では、死ね」

男が手を振り下げると、少し離れた位置でこちらを囲んでいた狼たちが一斉にこちらに跳びかかって来た。

「想定通りなんだよマヌケ！」

「ストーンウォール」

俺とミミルが三人で固まっていた場所の後方百八十度に石の壁を作り上げる。元からこういうふうに襲ってくるとは予想済みだったのだ。なぜなら複数であることを有効活用するならこれが最善の手であるからだ。人間なんて必ず死角なんて呼ばれる隙つてのがあるもんで、それをつくなら全ての方向から襲いかかるのが手っ取り早く確実なのだ。

これで攻撃は前方だけに集中すればいい。まあそれでも10匹近くが絶賛俺に向かってきてるわけですけどね。なので今回の俺のビツクリドッキリの必殺技の出番なわけですよ！

「『ウインドーボール』アクトテンー！！」

俺の詠唱と共にファイヤーボールが十個、空中に出現する。ちなみにアクトテンはまったく必要ではなかったけどカッコイイかと思つて気分で付け足した。

「はあ！？」

「ええ！？」

味方のミミルとジョイが驚きの声を後ろで上げている。ストーン

ウォールを作ったあとは俺がなんとかするとしか言っていなかった
のでビックリしたようだ。

魔法を複数同時に出すことはイメージ次第で直ぐに可能だということ
はわかっていた。しかし目標に飛ばすために一々指定していかなければ
ならなかったたので脳内の操作だけではとてもじゃないけど無理だ
ったのでお蔵入りしていた。しかしそこは発想の転換。「飛ばせない
なら飛ばさなければいいじゃない」とね。

狼たちは浮かび上がった風の玉にも動じずに俺へと牙を突き立てる
為に迫って来た。よく訓練されたワンちゃんだぜ、感心するよ。
ただし今回はそれが駄目なんだけだな。

側に近寄った狼達へと浮かび上がった風の玉が次々に飛び出して
いき、狼達を吹き飛ばしていった。

俺は全部の球に一つの指定を下していた、それは『俺の5メートル
以内に入った物へと飛んで行く』である。発動した時から入っている
ジョイとミミルは対象とはならないが、襲ってきた狼達は見事に
それに引っかかってくれたのだ。もちろん一匹に付き一個ずつ飛ぶ
ようにも設定してある。

「——！！？ 貴様あ！ なんだそれは！？」

狼達が同時に十匹もやられて動揺したのか魔獣使いが俺に質問を
飛ばしてきた。

「何って魔法ですけど？」

ウインドボールの数以上に迫っている狼を拳で打ち据えながら質
問に答える。

「そんなウインドボールなぞ見たことも聞いたこともないわ！」

「じゃあ俺の特有の使い方って事になるのかあゝへえゝ」

いい事聞いたな、オートメーションって名付けるか。後ろから襲えない狼が迂回してきて徐々に前に回ってきているが、俺が拳で、遠目にいるのをジョイがどんどん矢で迎撃していく。いいよいよジョイ、君は土壇場でこそ本領を発揮するタイプなのかもしれないね。

「まずい！？ 集まれお前たち！」

既にかかなりの数の狼が動けなくなったのを見て男の側にいた大きなヤツらを自分の周りに呼び寄せ始める魔獣使い。

「放てえ！！！」

グレイウルフの上位種が使う『切り裂く風』を5匹ほどがまとめてこちらに放ってくる。見事に統率された狼がその射線上を空けて風の刃が俺に向かってきた。

「『ストーンウォール』アクトスリー！！！」

それを三枚重ねにした石の壁で止めてみせた。強靱さだけなら一級品の俺の壁でも一枚半ほどまで切り裂いていた。これは脅威的なな。

「なんだとお！？」

どうやら今のが奥の手かな。

「投降する気はないか？ ギフト保持者なんだ死刑にならずに済む

かもしれないぞ?」

ギフトの保有率はなんと全員が持っているらしいのだが、発現させることが出来るのは千人で二、三人。さらに使いこなすのがそこから100人に一人。極める事が出来るのが一世代に一人いるかどうかだそうだ。そんな希少なギフト使いならばここまでのことをやったとしても死刑を免れる仮想性がある。といっても人生の大半を無償労働にあてられるだろうけど。

「……ふん。もう勝った気が小僧が」

おや? 既に勝負は見えてると思うんだけど……。

「来い! ゴリアス!」

その呼び声に答えるように地面を揺らす轟音がこちらへと向かってくる。

「でけえ……」

「うそぉ……」

「なんだよアレ……」

現れたそれは、一見は二足四腕の変わった成りをしているが牙の生えたゴリラだった。問題はその巨体がハメートルを超えるほどあったことだ。

ヤバい。これは俺一人でも勝てるかどうか疑わしいのに、今はジョイとミミルがいる。

「ハハハハハハ！ 貴様が奥の手を持つように私にも当然切り札は用意してあるのよ！ さあここからがほん——」

おそらく俺の苦々しい表情にいい気分になった魔獣使いの語りが最後まで言い終わる前に——。

「ぐぎゃあああああああ」

ゴリラが森の彼方に吹っ飛ばされた。

「「「「は？」「」「」」

その場にいた全員が呆気に取られてしまった。

「見つけた。ついに見つけたぞルド・バリアック！——！！」

静まり返った場に響いたその声の主は純白に輝く大狼に跨った若い少女だった。

第八話 狼の遠吠え（後書き）

張り詰めタアー弓ノオ←

第九話 会話の価値

魔獣使いが乗っている灰色の狼と、対峙するように逆側の丘の上に現れた大きな狼。しかしその威圧感、高潔さ、存在の大きさは魔獣使いの駆る狼に比べれば、段違いのものだった。あまりの気高さ、自然と畏怖を抱いてしまいそうになるほどだ。あれも魔獣というのだろうか？ なにか……こう……違うもののような……。てかそんな狼の背中に乗ってるあのちびっ子は誰ですか？

「貴様が妾に与えた三年前に与えた屈辱、ここできっちり利息を付けて返してくれるわ！」

なんだか幼女のくせに口が荒いな。おまけに何だか物騒な雰囲気……俺の子供好きさはあれを許容できるんだろうか？

「そ、その狼っ！？ 三年前だっつ——！！ お前まさかリーンバーグの関係者か！？」

「わかっておるなら話が早い、その素っ首貰い受けるとうしよつか！」

あれ？ なんか蚊帳の外へといきなり放り投げられた感が……。

「ヒイツ！ お前らのような化物に付きあつてられるか！ 行けお前たち！ 時間を稼ぐのだ！」

なんだか幼女の素性が分かった途端に、魔獣使いのルドと呼ばれた男は逃走を始めようとした。

「逃すものか！ ボーゼ！ こいつら全部沈めてしまえ！」

そんな声が上がると、草木の生えていた筈の地面が泥のように溶けて、その場にいた全員の足を絡めだした。ちよつと俺らも対象になつてますけどー！ー！！ ストーンウォールを地面に横たわらせるように出現させ、その上へと三人で避難する。

その謎の現象の中心の地面から、体中に泥を塗りたくり、水苔がそこかしこに張り付いていて、口から何本もの牙を生やしたイノシシが現れた。

「よくやったぞボーゼ！ ナンフよ雑魚を頼むぞ、妾とコウジンはあの痴れ者にとどめをさしてくれろ！」

「クワツ！」

泥を逃れて少女へと迫つてきていた狼の群れに、躍り出たのは立派な黄色のトサカをした、もとい黄金色したモヒカンをしたアヒルだった。すると自分の目の前に幅広い水の壁を作り出して、それをそのまま狼達へと押し出した。突然起こった濁流に狼達は為す術もなく、飲み込まれていく。凄……すつごく凄……いんだけどツツコムよ。

「モヒカンでけえよ！」

ファンシーなアヒルが、でかいモヒカンつけてるとかマジでロツクだぜ。

「うわああああああああ」

なんてアヒルさんの雄姿を見ている間に、魔獣使いの周りに居た一回り大きな狼達も、全て幼女の白い狼に全てやられていた。開戦

一分と経たない内に全滅とか、圧倒的にも程がある。そして幼女は腰にぶら下げた短剣を引き抜き、男へと差し向ける。

「言い残すことはあるか下郎」

「クソツクソツ！ たかが獣を何匹か売ろうとしただけじゃないかよ！ 三年も前の話でここまで追って来やがって！」

大気が震え、いや森全体が震えたように思えた。なんて殺気だよ、俺がゲイロス一味で放ったものが可愛く思えてくるよ。

「たかが獣？ 妾の家族と言うべき友人達を誘拐しようとしておいで、た・か・がだと？ いいだろう、今直ぐ死ねえええ！！！」

男の頭上へと短刀が全力で振るわれる。

「何のつもりだ貴様」

なんとかギリギリのところで、俺はその腕を男が殺される前に掴んで止めて見せた。

「いやいやいやいや、後から乱入して来てその言い草はないでしょ。この男には聞かなきゃいけないことがあるんで、まだ死んでもらうては困る」

「……妾は三年前からこやつを追って来たのだ。妾から言わせればお主達の方が後だ」

こわっ！ この幼女怖いよ！ なんてメンチ切ってくるんだこの子！ 不良と喧嘩は何回かしたことあるでど、見ただけで逃げ出し

たくなるメンチなんて初めて見たよ！　っていうか力強いな、かなり本気じゃないと押さえてられないのはなぜだ？

見た目のころ10歳くらいで、髪はどうやら銀髪、三つ編みに結ってからさらに肩より上へ括り上げている。眼の色が黄色というより金色？　銀に金とか派手だなあ。幼いながらに美しいと言える容姿なんだろうけど、今は迫力満点な恐ろしさしか感じません。

「でもさ、こいつの後ろには黒幕がいると思うから話して貰わないと困るんだよね」。さっきの話聞いている限りじゃそっちの誘拐だっけか？　それにも黒幕がいるかもしれないけど、そっちの犯人は捕まってるのか？」

「——！！」

おつと今気が付いたのが丸分かりの顔をしているぞ。三年間の間に一回も思いつかなかったのか……。

馬車を用意したり、冒険者を敵に回しながらも、警戒を怠らなかつたりと、それなりに計画的犯行の匂いがしている。ならば仲間もしくは、後ろで糸を引いてるやつがいてもおかしくはない。

「こいつ殺しちゃったならそこに辿り着くのは無理だと思うけど？」

説得なんてやったこと無かったけど上手くいきそうかも。

「ウムムムム……しかしここまで来て諦めよというのか……」

「こいつを締め上げるか、その他の奴を見逃すのかを選ぶのは君次第だ」

「その黒幕とやらへは、貴様なら辿り着くことは出来るのか？」

「確實とは言わないけど、絶対に見逃してやるつもりはない」

裏で糸を操っている悪党ほど質の悪い輩は居ない。ならばその糸を見つけたのなら全力でその先を手繰らなければいけない。そういう奴は生きてる限り害悪をまき散らせ続けるからな。

「……………わかった。しかし！」

どうやら懐はなかなか広いのか、少し考えて俺の提案に承諾してくれた。了承の意を示した少女は短刀を手から離して魔獣使いへと拳を振り抜く。哀れにもゴムボールが跳ねるように、男は森を跳ね回って飛んでいった。

「これぐらいでは妾の怒り欠片も収まらんが、今はお前……名前はなんと申すのだ男？」

「俺？」

「以外に誰がおるか」

すつごく偉そうな喋り方するなあこの子は。いいところ出のお嬢様だつたりするんだろっか？ まさか貴族とか上級階級のお方だつたりするのかな、その割にはいささか野性味溢れすぎてると思うが。今の格好であまり名乗りを上げたくはないが、下ろしかけた拳がまた上がってしまったてはとてもまずい。なぜならこの少女に従う獣達相手では全く勝てる気がしないからだ。中級魔法並の力を振るつた先の二匹もそうだけど、今目の前にいる純白の狼にいたっては、いい勝負するイメージすら沸かないと来たもんだ。上には上がいるのは重々承知だつたんだが、こいつは上は上でも空の上って感じがす

る。

「俺はキドーだ。ゆえあつて正義のヒーローをやっている」

「ヒーローとやらはよくわからんがキドーよ、この件は貸しにしておくぞ」

え？ いやいや、そっちにもメリットあつたよね？　なんで俺への貸しになるんだよ！

「尋問なぞはやったこともないし、この国にはまだ来たばかりで土地勘もない。あそこで転がっていい男の後始末はまかせろぞ」

文句を言いたかったのだが、それを発する間もなく少女は狼に跨った。

「妾はビルマイア・リーンである！　また会おう！」

唐突に現れ颯爽と風のように去っていった少女。

「なんなんだアレは……まあでも、苦戦しそうになった所を助けて貰ったという、見方もあるか」

その後スタボロになった魔獣使いと、泥沼からストーンウォールに飛び乗って脱出していた、ジョイとミミルを回収して下山していた。

村まで降りた俺はまず依頼を達成したことを鉦夫の人達に教え、ジョイとミミルにはジーニーさんに連絡してもらったため先に街まで帰らせた。

俺はというとその日の夜になって再び森へと半死半生ではあったが、ミミルの治療術と俺の傷薬の効果でなんとか喋るくらいには回復していた魔獣使いこと、ルド・バリアックと一緒に森に入っていた。

もちろん尋問するためだ。

真つ暗闇の森に、ランプを灯し、魔獣使いの顔がなんとか見えるほどの明かりを確保する。捕まって、縄で雁字搦めだがんじがらというのに、男は落ち着いたようすだった。

「さて、聞きたい事は三つ。誰から頼まれたのか？ お前のような裏の仕事を請け負う奴は他にいるのか？ そしてなぜあの場所だったのか、だ」

「喋るとでも思ってるのかお前？ へっ！ どれだけ頼まれようと脅されようが、何も教えてやるつもりはないね！」

縛られた状態でよくも強気に出れるもんだ。それなりに修羅場をくぐって来たのだろう。

「なにか勘違いしているようだけど、今から頑張るのは俺じゃなくてあんただよ？」

「……どういう意味だ？」

「今から……そうだね。夜明けまでにあんたが俺に信用されるかど

うかであんたの運命が変わってくる」

「……」

「信用できたら警備隊に、もしも信用出来ないと思ったら……あの狼少女に引き渡す」

狼少女という言葉に少しだけ反応を見せる。

「選ぶのはあんただ。俺はここから何もしないし何もしやべらない」

ていうより俺も尋問なんてできませんよ！ 話術で相手を突き崩すなんて繊細な作業は無理だし、拷問なんてもつての外。なら素直に警備隊に付き出してしまえばいいのだが、こいつの上がもしかしたらもしかしてしまうのかもしれないので、なるべく自分で情報を手に入れておきたい。

たった一つ、俺の持ってきたランプだけが灯り、静寂な夜の森に俺と魔獣使いは押し黙ったまま鎮座していた。沈黙つてのは人間にとつては度が過ぎると体に毒だ。それが暗闇で、おまけにこのままにも喋らないままでは、確実な死が待つ狼少女というプレッシャーに晒されれば、何か一つくらいは喋るんじゃないかな？ という計算だ。

「……」

「……」

長い長い沈黙の時間が続く。しまった！ この作戦すつごい欠点がある！ それは俺もこの沈黙が辛いつてとこだ！ 野郎と二人で静かな暗闇の中で待ち続けるとかどんな拷問だよ！ 仕方ないトウ

力の笑顔でも思いだして何とか耐え忍ぶか…… ヌフツ。

星の位置から詠んで、尋問開始から大体六時間が過ぎようとしていた。その間男は一言も喋らないままだった。俺はというと妄想でしばらくは頑張っていたが、沈黙との戦いから次第に眠気との戦いへとシフトしていった。ねじ切れるほどに太ももを何度も何度も抓って頑張っていた。その甲斐あつてもうすぐ朝を迎えようとしている。ふと魔獣使いの方を見ると冷や汗だろうか、顔中に汗が吹き出していた。死というプレッシャーを、ここまで耐えられるのは感心する物があったが、逆になぜここまでの精神力を持ち合わせておいて、悪党なのかという疑問も抱き出した。

「もう直ぐ夜が明けるな……」

最後通知のつもりで俺は呟く。どうやらその意図を感じ取ったらしく、大きくと肩を震わせる魔獣使い。

「どこまで喋れば信用してくれるのだ？」

ここに来て初めて男が喋りだす。そういえば裏稼業だったら喋っただけで、殺されるような情報もあるかもしれないのかあ。

「さっき聞いた三つを出来る限りで詳細に説明してくれ」

命に関わるような話は無くてもいいよと、暗にお情けをかけてみる。俺だって人死はなるべくならして欲しくはない。

「……………まず誰から頼まれたかどうかは俺には分からない。こういったやばい仕事を幹旋する組織があるらしく、どこから嗅ぎつけるのか、俺らみたいな奴に間接的に話を回してくる。だから依頼主本人に会ったことは一度だってない」

うつわあ 厄介な話がいきなり出てきたぞお。

「俺のような裏の仕事をしている奴はごまんというはずだ。何度か数名でチームを組んで仕事をしたこともある」

組織力の高い犯罪組織か……。

「なぜあの場所かという質問は、あんたわかってるんじゃないのか？」

「あれれ、バレてた？」

「あの場所を嗅ぎつけた時点で予想はつく」

「じゃあやつぱり新しく発見した遺跡があるんだな？」

この世界の遺跡には滅びた文明の遺物や歴史を示す物、時には魔法を帯びた強力な道具なども発見される宝の山だ。しかし危険な物や厄災を封印されたような場所も、多々発見されているので、そういった遺跡はその場所にある国に管理される。許可された一部の者だけが探索を許されるものなのだ。

つまりこいつが隠していたのは盗掘。多大なリスクを伴う行為だ

が、それに見合う金額が手に入れられる事は確実だ。

「他にも仲間がいるんだな？」

「仲間っていうより、あっちの方から派遣されてきた野郎で詳細は知らねえよ。俺の担当は人払いだったもんでね」

業務分担当まできっちり管理してるとかマジでしつかりしてる組織だな。

「そいつらはまた来る予定はあったのか？」

「本当ならあさってくるはずだが……俺からの定期連絡が途絶えた時点で、もう来ないだろうよ」

わあ、ほんとしつかりすぎてウザいわあ。

「俺のポケットに大きめのコインが入ってる。それを出してくれ」

男の腰のポケットをまさぐるとか嫌すぎるが、ここは我慢して言われたとおりにコインを取り出す。この世界の硬貨は基本丸い形なんだが、取り出した硬貨は六つ角形になっていて色は銀色だった。絵柄は……たぶん何かに髑髏だろうけどなんの動物なのかはわからない。

「それはその組織からお墨付きを貰った奴に渡しているコインだそうだ。その絵は牛の頭蓋骨だって話だがなんでそれなのかは知らないな。仲介として派遣されてくる奴も、そのコインか同じ文様の刺青なんかがどこかに入ってる。全容なんて全くもって掴める物じゃなかったが、今まで十以上の国で仕事してきたんだ、余程の組織な

「んだらうよ。」

聞けば聞くほど、その規模と体勢の整い方に驚きを隠せない。はつきり言ってまだまだ文明の進歩としては、元の世界に比べれば四段階程は遅い、年数で言えば五百年といったところか。そんな中で組織として機能しているのは国とギルドという母体意外には基本無かった。商会という物もあるのだが、基本的にはワンマン企業といった一番上の実力次第といったものだった。それを考えるとこの組織はどれほどに根が深く、強大な力を持っているのか想像すら出来ないでいる。

「これ以上は俺の知ってる事はないが……いや、もう一つあったな」

「なんでもいいぞ、とにかくその組織の情報はなんでも欲しい」

「名前だ。組織の名前は『ルドラの右手』と言っていた」

俺はその名を胸に刻みこむ。確実に近い将来この名を背負う者たちとの、熾烈な戦いが起こるという確信を持っていたからだ。もちろん俺の正義感から言って、放っておけない奴等なのは確かなのだが。予想すら立てれないほどの大規模な犯罪組織が、世界でも三本の指に入ると言われるブローナスで活動していない訳が無い。俺の故郷である地球で言うなれば、ここは日本の東京、アメリカのニューヨークやロサンゼルスに匹敵すると言っているだろうか場所なのだ。

「よくここまで喋るきになっ たな」

「俺だって死にたくは無い。それに好きで裏稼業をしてきた訳じゃないんでな」

どうなるのか俺へと窺う視線を送る魔獣使い。まあ脅しはしましたけど、最初から警備隊にする予定でしたしね。じゃないとあんな怖い狼と少女の間に入ってなんていきませんから！ 思い出しただけで股間が縮み上がるほど怖かったんだぞマジで！

それから俺は無事に魔獣使いを冒険者ギルドに引渡し、報酬を受け取る。その事情を説明した結果、ジーニーさんからは、更に一万デイクスの追加報酬を頂けた。そこからマリナおばさんの所へ直行し、この事件の顛末と謎の犯罪組織、そして犯人がギフト能力者である話を情報ギルドに売っぱらった。謎の犯罪組織については知っていたらしいので、大した額にはならなかったが、合計で一万八千デイクスになった。どうやら新しい遺跡とギフト能力者の情報がかなり高額になったようだ。

もちろん冒険者ギルドの報酬はジョイとミミルで均等に分けようとしたが、家の改築代ですと俺が多めに貰うことになってしまった。そんなこんなで金策を初めて一週間の出来事で俺は七万二千デイクスを手に入れたのだった。

これでしばらくは、落ち着いて大工仕事ができるな。

第九話 会話の価値（後書き）

文明的にそんな組織力を持った犯罪組織が居るか？　なんて思うかも知れませんが、日本でいうと実際に居た忍者なんかは一つの国なんかよりも組織力があつたと思われるので有り得なくは無いかなど。

第一話 それでいいのか

この世界アトレアの一週間は六日、一か月は三十日、一年は十二ヶ月で三百六十日に統一されている。一週間の一日一日は神様にちなんで火の日、水の日、風の日、土の日、闇の日、光の日のローテーション。一ヶ月もその順番で二回りする形になっている。なので日にちの数え方は火の表月、第三水の日なんて呼んだりする。

現在あの魔獣使い事件から、十日が経過した光の表月、第二土の日になった。地球暦で言えば大体6月くらいになるだろう。暑くなりだしてきた、そんな季節だ。プロニアス国は四季の移り変わりが顕著な地域にあり、夏はそれなりに暑く、冬は積もらない程度に雪が降る程度に冷え込むとても住みやすい気候をもっている。緑豊かで川も多く、その恩恵が人々の発展や活気は世界を見渡してもかなり高い水準を持っているようだ。

あれから金を貯めることで改築作業に没頭したお陰で、ついに昨日の時点で一階の作りかけだった二部屋も完成、これで一階の部屋の部分は出来上がり、二階の一番外側の壁も施工は終了している。後は外の壁へと、赤石を混ぜて少し赤みのかかった土を塗り込めば、一見は家に見えるだろう。

そう、約二月の奮闘の末、ついに掘っ立て小屋から、家に進化するところまで漕ぎ着けたのだ。まだまだ完成には（仮）が付いてしまいう有様だが、それでもここまで日本の労働基準法が鼻で笑えるくらいに時間を使った苦労が報われる感動は、感無量な思いを俺にもたらしていた。ぶっちゃけ全身が震えてしまうほどに。

朝早く起き、俺の手製洗面台の前に立って、顔を洗い歯磨きをする俺の顔が綻びまくっていたのだいい証拠だ。一人でニヤ付いた顔と格闘していると後ろから声がかかる。

「キドー兄ちゃんお客さんが来てるぜ？ いつも通り応接室に通し

といたけど」

「サンキューリック」

はて？ 今日来客の予定なんてあっただろうか？ というより今
していた変な顔をリックに見られていたのだろうか……。家に来
る客なんて、ガナド爺さんかマリナおばさん。あとはジーニーさん
とこの執事さんがたまに来るくらいなんだが、こんな朝早くに来る
なんてなにかあったんだろうか？ まあ待たせるのもなんだし行け
ば誰かわかるだろう。

応接室は俺たちがいつも雑魚寝している居間以外で、唯一内装を
完成させてある部屋だ。しかも家具の類も完備してある。さすがに
お客さんを招くにあたって、木張りの部屋に通すわけにも行かない
のでここだけは優先的に作っておいた。

「おまたせしました」

かるゝい挨拶をかけながらドアを開け放つ。

「久しぶりじゃのキドーよ」

「ブーーーーー！！！！！！！！ なっ！ なんでここに狼少女が！？」

「狼少女とは無礼な……いや的を得ているのか？ 妾の名はビルマ

「イア・リーンと名乗っただろうに」

「いやいや、俺この家の場所教えてないよね？」

「それどころかこの家の住所を知ってる人なんて、家族を除けば片手ほどしかないはず。」

「また会おうと言ったはずじゃが？ 妾の一振りを受け止めて見せるほどの猛者なのじゃ、よほど有名な男と踏んでこの街を探したのじゃがのう。驚くことにキドーなんて名前を知る奴など全く居ないではないか。じゃから仕方なく我が相棒のコウジンに、お主の匂いを追ってもらった結果、ここへと辿り着いたわけじゃ」

「え！？ ちょっと待つてあの狼さんを街の中に入れたのか！？」

「とてつもない存在とわかるあの狼が街を闊歩しようものなら、街中大騒ぎになって城から騎士団が飛び出してきてもおかしくない。」

「入れたというか、そこにおるぞ？」

「うわぁっ！」

横を見ると大きな狼ががつつり寛いでいた。まてまてこれだけの質量とどでかい気配に、今まで気づかなかつとかおかしい。いや待てよ？ 気付けない存在ってなんか他にもいたような？

すると面白い匂いを嗅ぎつけたのか、フリーが風でドアをそつと押し開いて入ってきた。

「あーーーーー！ コウジンじゃーん！ 久しぶりー元気してんたー？」

「これはこれは懐かしき匂いがすると思えばフィリー様では御座い
ませんか」

えーっ 知り合いつすかフィリーさん。しかも狼の方が敬語使っ
てるとかマジバないっす。

「知り合いだったのフィリー？」

恐る恐るフィリーと狼さんの会話に入り込む。

「そっだよーコウジンも風に属する神獣でねー昔一緒の場所に住ん
でた事もあるんだよー」

「もう300年は前になりますな」

「様とか呼ばれてるってことは、もしかしてフィリーの方が目上？」

「ええーっとーホントはそんなのいないんだけど、一応私はナーブさ
ま直属の妖精だから、精霊とか神獣とかの子達はほとんど敬ってく
れるかなー」

そっぴや神様から直接派遣されてきたもんね。なるほど神獣のコ
ウジンもフィリーのように認知されないようにできる術があるんだ
な。それなら街中を歩いても騒がれないで済むだろう。

ていうかフィリーって何歳なんだろう？ 見た目は子供そのも
のなんだけど……。いや聞いたら最後だ、ここは堪えよう。

「ほほう、ぬしも精霊付きであつたか。ふむ、妾の真贋はやはり正
しかったようだな」

なぜに今のやり取り見ててあんたが胸を張るんだよ。あれ？

「フィリーあの人に見える許可をもう出したのか？」

「ううん。あの人は許可して無くても見える人だよ。だって龍人だから龍眼持ちだろうしね」

「龍眼？　というか、この世界には亜人っていたのか！？」

「龍眼っていうのは、龍人族は全員生まれた時から持つてて、魔力を通すと魔力の流れが見えたりするんだよ。あと私達精霊なんかも全部見えちゃうね」

亜人。人の形をしいおり文化と言語を持ち合わせているが、その生態系は人間とはまた違う知能生命体。

「その通り！　妾はリーンバーグ国が王、リーン家第十三王位継承者、ビルマイア・リーンじゃ敬って遣わせ」

「……」

「どうした？　驚きすぎて声もでんのか？」

「いや、俺リーンバーグって国知らないし龍人だって初めて見たから凄さがわかんなくて……」

「はあ？　おんしはもしかしてアホウであつたのか？」

失礼な！　単にアトレア世界の初心者なだけだ！　……たぶん。

それからしばらくビルマイア嬢による、いかにリンバークという国が凄いかの解説講座が続いた。歴史からなにかを講釈されたがあまりにも長かったので割愛すると。龍人族は最強の力を誇り、寿命も人間の十倍もある種族。かつて行われた戦争によって亜人差別が横行し、そんな亜人達を保護するために今の王であるゴルディ・アス・リーンが国を建国した。場所はナハト高原という険しい山脈地帯にあり、精霊種や聖獣種の多くがそこに住み着いているらしい。建国から四百年間の間、戦争に負けたことがない常勝国家ではあるが、侵略戦争を一度もしたことがない平和主義国家でもあるらしい。

「つまりはリンバークはとっても凄いんですね、わかります」

「おお！ アホウかと思うたが飲み込みは早いようじゃな！」

なんだか不名誉な思い込みが先行しているが、釈明するのもメンドクサイのでほっておく。

「で、その偉い偉いお姫様がどうしてここへ？」

まあわかりきってるけど一応聞いておく。

「無論、あの男の黒幕とやらを聞きに参った」

「わかりませんでした。グハッ！！」

予想していた答えに即答してみたら、思いつきり右ストレートを叩きこまれた。

「貴様あれだけ大見得切っておいて、何をしらつと答えておるのじや！」

確かに俺から持ちかけた交換条件だったしね。怒るのはわからんでもないけど手が早過ぎるだろ。

「待て！！ 時に落ち着け幼女よ！ 話をちゃんと最後まで聞いてから判断してくれ」

「誰が幼女じゃ！ 貴様よりは断然年上じゃ！！」

「年上？ どう見たって十歳くらいにしか見えないけど」

「我等は人間よりも寿命が十倍近く長い。成長もそれにそって遅いのじゃ。人間からすれば十歳に見えるじやろが、妾は今年で七十八歳なる」

「マジか……」

それから落ち着いたビルマイアに事の顛末を教えていった。

「なるほど…… 依頼主は分からなかったが、それを誘発する組織が存在するわけか…… 不埒な」

一見冷静だが、拳に力が入っているところから見ると怒り心頭のような。誘拐云々にも怒っているのは当然だが、そんな組織がある

こと自体にも怒りを覚えているみたいだ。そこで俺は一つの提案のような賭けに出る。

「実は俺のヒーローっていう肩書きは、そういう悪辣な奴らを叩き潰す事を目的にしている」

「ほほう、感心な事をしているな」

「そこで、俺に協力してみる気はないか？」

「何をさせる気じゃ？」

「もちろんこの犯罪組織そのものを跡形もなくぶっ潰す手伝いさ」

「……面白いの……実に面白いぞお主」

なにやら考えながら、俯いたり俺を見たりと、視線を動かしながらニタニタしだすビルマイア。この提案は実は思い付いてはいたものの、実行に移す気はさっきまでなかった。戦力としては申し分ないのだが、なにぶんこれには絶対的な信頼性が問われる。正体を隠したり、目的の共有を一致させたりするには、信頼無くしては成り立たない事柄が多いのである。しかしある種の正義から始まった国の姫様で、それを誇りに思っていて、精霊に好かれる気性を持っているこのビルマイアならば、と会話の中で思い立ったのだ。

「キドーはね、神様に飽きさせない男って太鼓判を押された人なんだよ」

なんだその安いキャッチコピーは、初耳ですよフィリーさん。

「ほほう、精霊に好かれるだけではなく神に愛でられるとは、奇特な男よの。どうせあの男を捉えたとして国に帰るつもりもなかったし、そんな輩が居ると聞いて捨て置くのは我が王家の名がすたるというものじゃの……よし！ その話受けよう」

「おお」

王家というから、もっと堅く考え込むかと思ったけど、あっさり了承された。

「これからは同志となるのだ、お主にはマイアという愛称を呼ぶことを許可してやろう！ そして差し当っては貴殿に妾の衣、食、住の進呈を命ずる！」

「はい、ありがとうございます……は？」

「自慢ではないが、妾は金も残り僅かで稼ぎ方も全くわからん！ それらの進呈が無くば、悪党どもを捕らえれなどしないだろう！」

こっこの娘——！！ なっなんて駄目な事を威風堂々と、さもあたり前のように語っているんだ！？ これが真性の箱入り娘というやつなのか！？ ジョイ君は残念なんて思ったがこの子はなんというかダメだ！ これでは戦いという長所を抜けば完全に二ト宣言ではないか！ 根本的なところがほんとダメッ！

「これの教育もしなきゃいけないん……だろうな……」

心労が格段に上がるであろう事を渋々飲み込んで俺はマイアの居候を許可するのだった。

第二話 非常識人

仲間が増える事は良い事だ。一人でやれる事にはどうしても限界が有り、困難を乗りの超えようとするならば人数が多ければ多いほどその選択肢の数は増えていくだろう。信頼の置ける仲間が増えるのは本当に嬉しい限りなのだ。弓師としても獵師としてもその才能を発揮するジョイ。治癒としても薬師としても、そして性格の面でも癒しを与えるミミル。そしてマイヤ率いる愉快な仲間たちに至っては確実に俺よりも数段上の戦力を持ち合わせている。しかし――そうしかしなのだ。なぜ？ なぜ俺の周りには――

常識人がいないんだ――！！！！

ジョイはアホ。マイヤはダメ人。ミミルはそれなりなのだが知識欲とか探究心なんかが睡眠欲に圧迫されすぎて職場で使う以外の事には超無関心だ。フィリーもなかなかの知識量なのだが、やはり妖精のためかかなりの偏りがあるし、年代が食い違っている物も多い。トウカが一番マシではあるのだが、それでもつい先日まではストーリートチルドレンをやっていたわけだからやはり乏しい部分は数多い。

そして俺に至ってはアトラス歴二ヶ月ちょいの赤子同然の欠落っぷりである。

紛いなりにもこの一団を率いてるのは俺なのだ。今のところ被害は出てもなんとかなっているもの、とんでもない厄害や損を叩き出す恐れなんてのはどこにでも転がっているもんだ。

そこで頭を悩みに悩ませた結果。

「そうだ！ 図書館に行こう！」

『無いなら学べ、不可能なら作り出す』をモットーに掲げていた俺らしくやはり正確な情報を学んで、そこから常識を作り上げる事にした。元より図書館には色々な専門書が盛り沢山あると聞いているので訪れるつもりはあったのでこれもある意味一石二鳥だろう。

ちなみに家の改築はもうそのほとんどの作業をリッキーとロイに任せることになった。作業を手伝わしていた年長男組だったが、リッキーとロイはかなり手先が器用だったので釘打ちや鋸での切断作業などを学ばせながら進めていた。流石子供だけあって飲み込みが早く、しかも一から何かを作り出すこの作業が楽しくてたまらない様子。そんな輝く眼差しを見ていた俺がポロツと――

「お前らは職人に向いてるかもな。俺の弟子にでもなってみるか？」

なんて事を冗談半分ぐらいの気軽さで言ってみたら。

「なる!!!」

と即答しながら詰め寄られた。どうやら二人共そうなりたかったらしいが、俺に遠慮して言い出せなかったようだ。家族なんだから遠慮なんてしないでいいのにな。もうちょつと俺にも配慮が必要だなと反省させられた一事でもあった。

もう一人の年長さん、トマスは職人にはかなり向いていなかった。不器用というほどではないが細かい作業が精神的に苦手なようで、作業の手伝いはほとんど運搬係に従事していた。しかも健康状態を取り戻してからというもの、体を動かすことが楽しくて仕方ないらしく、最初は二人がかりで持ち上げていた角材も今ではなんと三本も右肩に乗せて運べるようになっていた。効率が上がって空いた時間は筋トレに費やす始末で、まさに脳筋まっしぐらである。最近はずいぶん懐いているようなので、将来は冒険者なんかになるんじゃないだろうか？

なので二階部分の改築工事は指示だけを朝に出して、リッキーとロイに作業の方は全て任せる事にしたのだ。すでに壁の作り方は熱心に俺の講釈を聞いた結果ほぼ完璧に覚えているためそこまでの問題は無いと思うし、問題が起こったところはそのままにしておいて後で俺と一緒にやるようにしてもらった。

師匠として最初に教えた事は『失敗や無知が駄目なんじゃない。反省と探究心を無くさないことが重要なんだ』というどこかで聞いた名言をくつつけたような発言だが、重要なのは間違いない。

さらに今の家にはマイアが滞在してくれているので防犯面では心配がなくなったので俺が自由に外へと出かけられる時間が格段に増えたていた。

そういえば改築が一段落したので報告しておくことがあった。実は一階部分を作り直していた時の事だ。おそらく物置として使用されていたのであろう石の壁で作られた部屋が一番奥側にあったのだが、そこを整理していた時に見つけた物、いや場所があった。

確か七万デイクスくらいで購入した土地と廃屋だったのだが、おそらく不動産屋はその部屋を知らなかったんだろうな。初めて隠し工房を見つけた時はそりよ笑いがとまりませんでしたよ。三十×二十メートルくらいの馬鹿でかい部屋に簡易溶鉱炉や制作道具一式。密閉されていたためかほとんどそのまま使えるものがかなりあった。空気口も開閉式の仕掛けが施されていて個人としては一流工房並の施設が隠れていたのだ。正直俺の計算でも値段に換算すれば三十万デイクスでも安いといえる施設だろう。不動産の人にはご愁傷さまと言っておきたいが、これは最高にラッキーだ。

だが同時にこの屋敷であつたであろう家の元持ち主にも興味が湧いても来た。なんでも六十年前ほどにこの一帯で疫病が流行り、かなりの人が亡くなったとか。それに伴い、主要施設が次々と移転していき。この辺りはあつというまにゴーストタウンと化したようだ。ここの元主人もその時に亡くなったらしいのだが、相続者もいなくなつたらしいし、このただっ広い屋敷に一人住まいで謎の隠し工房持ち……。一度経歴を調べてみるのも面白い事がわかるかもしれないな。

そのおかげで俺の職人としての活動の目処は一応は立ってはいる。まだ準備金なんかを用意する必要があるので活動はまだもう少し先の話になるのだろうけどね。

さてやって参りましたプロニアス王立図書館。その書籍の保有量は世界でも三本の指に入るほどだと言われている、建国から続く由緒正しき図書館だ。その納書数は100万を超えている充実っぷりで国民ならレンタルも可能だ。さらには希少な重要書物専用の部屋があり、こちらは持ち出し不可だがその場で読むことなら可能だ。一定のランクになったギルド員でも持ち帰りは可能なのだが今回はこの場で読むだけにする。持ち帰っても読む場所も開く場所もまだないからね。書室は作る予定だが完成はまだまだ先になりそうだ。今回はトウカヤリッキーとかは連れてこなかった。子供たちはまだ文字を読む練習をしている最中なので図書館に来る意味が無いし、読書に熱中した俺は本当に周りのありとあらゆるものを無視してしまつ。自分の名前を呼ばれたって反応すらしないらしい。友達と図書館に行ったはずなのに帰りは一人になっていることなんてざらだった。なので勝手に付いて来たフィリーを除けば今日は一人のお出かけた。

生産ギルドで最低ランクの俺が借りれるのか疑問に思った人もいるだろうから補足しておくが、実は少し前から最低ランクの銅を脱出して鉄へとランクアップを果たしているのだ。家の建築の過程で

開発した『風呂』を生産ギルドの査定に回したのだ。簡易式の木造風呂を最初に見た時は大した反応を見せずに怪訝顔をしていたので

「一度入ってみてください。それからご説明します」

と言って入浴してもらった。予想通りちよつと気持ちよくなつて出てきたギルド査定員にあらためて風呂には、美容、健康、さらにハーブを混ぜているので温泉まではいかないが殺菌と精神疲労の解消などの効能があると力説すると、初老に入っていたギルド員は目を輝かせながら「本当か!？」なんて疑っていたので。

「ご自身でお作りになってみて、一ヶ月も毎日入浴すればその効果を体感できますよ」

正直口でしか説明の仕様がなかったので生産ギルド本部に行つて図面を書いた解説書を作成して爺さんたちに配つておいた。そしてその査定は無事認定の判をホクホク顔の爺さんに押してもらふことが出来た。

それがついこないだの話で俺が爺さんに渡した解説書を木造専門の職人さんと改良し、さらに分り易くして、さらに簡易式、家式、大型式の三種類を今生産ギルドからの提供として販売している。事情によりあまり有名にはなりたくないという旨を生産ギルドが理解してくれた上での処置だ。なんでも人嫌いの職人は結構多いらしいので、代行販売はごくあたり前の話のようだった。大変ありがたい。驚いた事に技術書と呼ばれるこの解説書はかなりの高額の商品らしい。適正価格の分からなかった俺は共同開発した木工職人さんに相談してみたところ。

「安くして三万、高くするんなら七万デイクスでも売れると思うぞこいつは」

情報の保存が本に限られたこの世界ではそんなもんなんだろうか。

図書館に入った俺はその風景に圧倒されたのだ。正面の吹き抜けから覗くその光景は立体的に入り組んだ本の迷宮だった。この世界に紙は存在するのだがまだまだその制度は地球の現代技術に及ばないため一枚一枚の紙が厚いのだ。現代では十分の一ミリなんて厚みの紙はザラにあったが、この世界での基準は高くて二分の一ミリとあったところだ。つまり同じ内容の本であってもその本の厚さは五倍になってしまう計算だ。それが大体二千万冊あるということは日本の基準で言えば四百万冊の所有スペースが必要となるのだ。

「図書館で迷いそうだな……てかどうやって目的の本を探したりするんだろうか？」

既にフィリーはその内装を気に入ったのか嬉しそうに館内を飛び回っている。正直探しているだけで一日が終了してしまいかねない広さと量なのだ。多いことは嬉しいのだが……これは流石に腰が引けるな。

本の探し方なるガイドブックを片手に図書館を歩き回る日々が十日を過ぎようとしていた。といっても間に改築の手伝いや冒険者ギルドの依頼の同行、さらにトウカとのデートを挟んでいたので実質は五日程度になるのだが。え？ デートの報告はいらなかったって？ ハッハッハ自慢したかったから態々言っただけにきまつてるじゃないですか。

「今日もご苦労様です」

なんて係員さんに挨拶されるほどに一日中読書に没頭していた。地球時代にも本を読んで技術を学ぶ機会は多かったので速く読んで時間短縮するための速読技術は習得済みだったので、俺が本を読んでいる時の机には何十冊もの本が積み上げられていた。地球での学生生活でもたまにこの状態になっていた事があったが、それを見た友人には「図書館でこんなに静かに目立つ奴がいるとは」なんて呆れられた事があった。

「……応用出来る所も多々あるが……やっぱ知らない技術もかなり多いな。ふむふむなるほどこれはあれに応用が効くんじゃ……。これは……わからんな」

常識を備えるために来たのに何技術書読んでんだよ！ ってツツコミが聞こえますが、もちろん平行して一般的な物語とか家庭的な本も読んでいますよ？ 割合九対一くらいだけどね！ おおおお、俺の知識欲が溢れ出すーーーー！ って感じな暴走邪気眼みたいな感じですから止めようなんてないですよ。

その日は魔法の基礎を解説した書をいくつかと、魔法を発動するのが楽になったり、その威力を強化したりする魔法具の解説書を読み漁っていた。魔法具はそれそのものに魔法を宿すなんてものもあるらしく、あのハニワゴーレムもその類の物のようだ。

さてさてかなり知りたい情報も得られてし、常識の初級者くらいにはなれた……と思う。今後も週一くらいで通うつもりだが、連日通うのは今日までにしておこうと思いつつ読んでいた本を元の棚に戻していく。

ここで手に入れた知識をこれから作り出す制作物へどのように活用していくかという期待に胸に膨らませて思考を張り巡らせていた。その顔の緩みっぷりはフィリーさんに。

「キドーの顔が溶けてる!？」

なんて驚きを与えた程だったようだ。

緩みきった体たらくで最後の本を返したそばには、持ち出し禁止の本が保管されている特別室があった。警備兵が常に数名見張りについている厳重っぷりだ。夕方に差し掛かる時間になったのでそこから退出していく人が何人が目に付いた。

「うわっ!？　　すげえ魔女がいる!」

魔法を使う女性ならそりゃ魔女だろ？　なんて思うだろうが、頭にはとんがり帽を被り手には曲がりくねった木の杖を持ち、体を紫

色のローブに包まれた女性を見たら口にでちゃっても無理もないでしょう、魔女って。もうこれ以上無いってくらいに魔女だもんね。惜しいことに黒猫を連れているか、カラスなんか肩に止まっていれば満点を差上げたんだが……。

なんてくだらない事この上ない思考で遊んでいる目線の先にふと気になる物があつた。

「あれは？ なにかの有名な本なのかな？」

なぜかそれは棚に入ってはおらず、変わりに厚いガラスに覆われた真ん中に一つだけ飾られていた。

「なにかの原本とか歴史書だったりするのかな？ でもなんでこんな所に？」

本だけ飾って置いとくなんて聞いた事ないな。多分予想した物の複製品ではあるだろうが態々展示するほどの物なのだろうか？

「えーっとタイトルは……アルデールの書か」

超有名な人の日記かなにかだろうか？ 俺の読んだ本には書いてはいなかったな。そんな感想でなんとなく眺めていた俺の体を不意に誰かが肩を鷲掴みにして体の向きを力尽くで変えてしまった。

「あんた今なんて言った？」

そこにいたのは、さつき保管室から出てきた魔女のお姉さんだつた。なんだろう、言葉に表せないような表情をしていらつしやる。あえて言うならギリギリなバランスで組み上がった積み木を見ている気分にさせられる表情だ。

「えっと……アルデールの書って言いましたけど………ど？」

そんなのも知らないのバツカじゃない。なんて罵倒されるんだろうか？ それとも魔法使いの人には恐れ多い書で気安く読むではいけなかったり？

「そうなんだ……………フフ……………ウフフフフフフ」

表情筋をピクピク動かしつつ、徐々に怪しい笑顔へとシフトしていくお姉さん。ああ、超怖いんですけどこの人。正直逃げ出したいが、しかし俺の肩を掴んだ手の力は最初以上に強くなつてすでに肉まで掴んでいる始末だ。逃げると何だか呪いなんてかけられるかもしれないし…………。

なんて思っているとやっと人らしい顔になった魔女さんが俺と目を合わせる。

「あなたアレが、神の言葉が読めるのね！？」

俺はこの日アトレア世界に来て最大の失敗をしてしまい、そして思い知ったのだ。

この世界の神様はさじ加減がすごく下手糞だということを。

第二話 非常識人（後書き）

常識があると自負しているけど非常識行動まっしぐらの作者。

第三話 志の先

心の底から逃げたかったのだが、言葉の限りを尽くした嵐のような説得と懐柔、あとかなりの割合の物理的ななかに押されて、図書館近くにあった大きな建物の一室に軟禁される羽目となった。軟禁などと言ったが物騒なものではなく、俺の精神的問題なのであるのだが……。

どうやら外から見るとなかなか大きく思えた建物だったが、中は小分けに分けられた部屋がいくつもありそれぞれに住人がいるアパートみたいな施設のようなのだ。いや日本語的な意味で言えば長屋と言ったほうが正しい風貌といえるかもしれない。

さてそんな一室にて俺はあの魔女のお姉さんに紅茶をご馳走してもらっていた。

「さあ、フッフ、私達の運命の出会いに乾杯でもしましょうか」

ここに来るまでの説得にも度々挟んでくる意味ありげな微笑は、明らかに身の危険を感じるものだった。

「なぜ？ とお聞きしてもよろしいんでしょうか？」

「そうね……確かにあなたは事の重大性に何も分かっていなさそうね。じゃあまず自己紹介から始めましょうか。私はブローニアス第七魔法研究所所属のメリーバンナよ、よろしくね坊やフッフ」

「俺はキドーって言います。最近この街に来て職人稼業を始めました。所属は生産ギルドになります」

「へえー最近来たって事はまだ知り合いは少ないのかな？」

「そうっすね。面倒事が嫌いなんで無闇矢鱈とは増やさないようにしています」

面倒事って部分をあえて強調して喋ってみる。只今絶賛あなたという面倒事に巻き込まれ中なんだと、自覚してはくれないだろうか。

「フッフ、それは好都合ね。ちなみに生産ギルドのランクは聞いてもいいかしら？」

はい怪しい笑みで華麗にスルー。上機嫌になっているのはなぜ？

「最近鉄になっただけです」

どうだ、なんだか知らんが過度の期待を寄せているようだが、ランクの低さにガッカリしただろう。

「ますますいいわ」

なぜだ！

「じゃあ、あなたの疑問、私からの本題を話すわね。それは……えーっとあの図書館に飾ってあった本。題名はなんだったかしら？」

「あのアルデルの書とかいうのに関係しているんですか？ 言っときますけど俺はあれの内容すら知らない、学のない男ですよ？」

「……………」

メリーバンナさんの視線が俺を見据えたまま長い長い沈黙が流れ

る。あの書の内容かなにかに俺の知識があると踏んで協力でも申し出ようとしたんだろう。期待が外れて悪かつ――

「ムフ……ウフフフフフ………アハハハハハハハハハハ！！！」

なにこれ怖い。ここまで人は笑えるのかってくらい極限までの笑い声を上げてみせるメリーバンナさん。

「凄い、凄いわ！ これもギフトの力と呼ぶのかしら、まさに神の遣わした奇跡と運命！ アハハハハハ」

ウンウンと自分でなにやら納得してドンドンテンションを上げていく彼女。この置いてきぼり感はたまらない。

「ちょ、ちょっと！ なにがなんだか分かりませんが説明していただけませんか！？」

「ほんと無自覚であることが恐ろしいなんて誰かが言ってたけど、ホントだったのね。いいわ説明してあげる、あの本とたぶんだけどあなたの力について」

長い長い彼女のアルデールの書に付いての歴史だつたりの話を俺流にまとめると。

・あの本は遥か昔に書かれた最古の魔導書の一つである。

・書かれている文字は今だに解読しきれっていない文字『神の言葉』という物で、魔法の名前もこれで出来ているらしい。

・そしてあの本のタイトルはまだ解読されていない文字の内の一つだったらしい。

まずいぞ。非常にまずい。メリーバンナさん曰くあのアルデールの書の頭のアルの字を確定させたのが十日ほど前らしく、あのタイトルを正式に読めるもの人間はこの世いないということ。そもそもって俺はそれを見事に読んでしまっており、嘘だと誤魔化そうにもどうやら文字が正しく読めていればそれを聞いた者にも正しいという確信が得られるらしく、もう無理くさい。

このままでは国の研究機関とやらに拉致監禁されてしまいかねない自体に陥る危険を感じて、なんとかここを乗り切るために思考をフル回転させる。そして一つ気付いたのは、もしかしてこれはナーブ神にもらった特典『この世界の言葉を理解できる』のせいではなからうかということだ。初めてフリーと喋った時に判明して特典なのだが、喋れる分かれるところか読み書きもバッチリ出来て、実に良い特典だと思っていたのだが、もしかしてこの世界中の言葉が範囲に入ってるんじゃないだろうか？ 神の言葉とやらも含めて……。いやあの雑というか大雑把というか駄目な神様ではあり得るというか、ほぼ確定的だ。だって現に読めてしまっているし。今の気分は誕生日プレゼントに時計を買ってやると言われてたら、当日に口レ

ッ。スの最高級腕時計を買ってもらった気分だよ。言葉にならんわ！ 大盛り一杯のつもりだけど、器の上に天高く積んでそれを「コレも大盛りだよ？」といいそうなナーブが簡単に想像出来たわ！オーケーオーケー取り敢えず落ち着いた。後でナーブはぶん殴るとしてすでに言い訳は立ちそうにない状況。かといってどうしていいのかも分からないので取り敢えず……聞くか。

「で、俺に何をさせたいんですか？」

研究所に来てと言われたら即逃げる。実力行使で。

「話は簡単よ。私に協力して欲しいの」

「国ではなく？」

「それでは困るわ。私だけに協力してもらいたいのよ」

おっと予想より大分小規模な話に。

「どういう事が説明してもらってから考えます」

「そうね。あなた世間知らずな人っぽいから教えておくけど魔法研究所の職員の九割以上は貴族もしくは王家の遠戚の人、もしくは商家みたいに家名を持つ人がほとんどで私のような平民はごくごく僅かよ。おかげであの排他主義の塊みたいなアホどもが幅を効かせているおかげで私の研究は遅れるし、完成してももみ消される始末。しかもあいつらは権力を維持するために魔法を使っているのよ？ 一般市民の人達が教会に所属でもない限り、魔法の勉強ができないのはおかしいと思わない？ 神様がお作りになった力を欲のために使うなんて絶対に間違ってる！」

ふむなんとなく分かるが俺がなぜ要るのだ？

「もつといい使い方をすれば、もつと多くの人が幸せになれるはずだし、もつと国だって豊かになるのよ！ 私は魔法という力に感謝しているわ。お師匠様は言った「感謝は返すものではない、応えるものだ」と。だから魔法を欲にまみれさせた手から引き離して、光の方角へと進ませたいのよ！ 私は！ だからっ！ 力を貸して欲しいの！」

悪くない、悪くない信念だね。夢見がちな思想に聞こえなくもないが、この人は前に進む意志がある。言葉だけの思想と未来を作る思想の差は、先に進む意志があるかどうかだ。現在を嘆くんじゃなくて、それでも進む。それが天と地よりも大きな差を生み出すのだ。「言葉を叫んでもだめ、正論を吐いたって聞いてなんてもらえない。物事を大きく変えるためには力が必要なのよ、意志を伝えて納得させられるだけの力が。それにはあなたの力が必要なのよ」

「で、何をしてほしいんだ？」

「私と新しい魔法を開発して欲しいの」

俺は職人として技術者として科学者として最も尊敬する者は、新しい道を往く、作り出すことを覚悟した者だ。

「おもしろい。うん、おもしろいよそれ」

突然訪れた突拍子も無い展開に全身を強ばらせていた俺はここで初めてメリーバンナさんに本心からの笑顔を見せた。

その後、同盟における条件をいくつか確認しあった。

まず俺の詳細を調べない事。そして魔法を創りだしたとしても、それはメリーバンナさん単独での開発だったと発表すること。これは身内が訳が多いからとして納得してもらった。一人はなんてったってお姫様だし、嘘では決してない。

なにやらメリーバンナさんは平民でありながら上昇志向を持ち合わせていて、貴族連中からは疎ましいどころか敵視されているらしいので、相談や話し合いは俺の家で行うことにした。魔法開発はかなりの偉業とされているらしく、だからこそ発言力と地位を手に入れるには効果的と言える。しかし個人でしかも一介の平民がそれを成そうとしているなんて知られようものなら、どんな嫌がらせが待っているか知れたものではないそうだ。研究に畏れ多いも何もあったものではないと思うのだが……。

あとは俺に対して魔法の講義をしてもらうことにもなった。俺が魔法を初級ながらかなり使いこなしていることにはかなり驚いていたが、俺的には中級魔法もやはり習得をしておきたい。開発や設計なんかは得意分野ではあるのだが、魔法という知識に関しては基礎さえおろそかだし、原理すら曖昧なままに使用している。開発発展なんてのはその基礎を押さえない事には話が進まないのだ。包丁で野菜が切れるからといって料理が全て作れるようになるわけではないのだ。

そしてここに魔法という繋がりを持った、俺と新しい魔法の未来を模索する、『新開発同盟』が結成されたのだった。

第三話 志の先（後書き）

人によつての解釈の違いから生まれる齟齬つてのは、時に恐ろしい結果を生み出す。

第四話 作戦会議

なんだかんだあってから、改めて週末に俺の家に集合して今後の計画の話し合いとあいなつた。暇なのか？　なんて疑問が浮かぶだろうけど、改築工事はリッキー達に任せているし、図書館での調べ物も一段落して、お金の余裕もまだまだある。そんなもって魔法開発も、俺の中では元から予定の内の一つに入っていたから、それなりに乗り気であつた。オリジナル魔法の創作なんて面白そうだし、自分だけの必殺技はヒーローにとっても必須スキルであろう事は間違いない。

「それでは第一回、魔法革新計画を開始しまーす」

「うおー！　パフパフパフ」

ノリが良いんだな姫さま。これが俗にいう御転婆姫か。

「この子達は誰なの？」

会議を行おうとしている書室予定の部屋には、メリーバナさんと俺以外に、ジョイとミミル、ビルマイア、そんなもってトウカが机を囲む椅子に座っている。シェリーも入って来て浮遊しているが、どうやらメリーバナさんには見えていないようなので、傍観するだけのようだ。紹介するにあたって、流石にビルマイアの経歴を知られるのはまずいので、マイアと呼称させてもらった。

「俺んちの家族代表と居候だ」

「……重要で難しい話をする予定だったはずだけど？」

「だから信頼を置ける人を集めたんじゃないか。それに新しい事を考えるには、いろんな人の意見や視点が必要不可欠なんだぜ？」

「なんだか楽しそうねあなた、思ってたより軽い人なのかもしれないわね」

「軽いとは心外だが、常に楽しむことは大事だとは思ってるな」

「まあいいわ、どうせあなたの力に頼らざるえない状況に変わりはないのだから」

まあ見た目子供ばかりが集まったら、研究所勤めのメリーバナさんには不満が残るのかな。俺は高校までしか行っていないから、これぐらいの年齢層の話し合いしかしたことないからな。

「……キドーよ」

「なんだよマイア」

「こやつちと妾共を舐めておりはせんか？」

「そうだと思うよ？ 実際全員子供だしね」

地球で言えば高校生以下の子供達と、自分の未来について話し合わなければならぬのだ。多少の不満は仕方ないんじゃないだろうか。

「あまり舐められるのは妾の沽券にかかわるので言わせてもらうが、妾は龍人族で、お主よりも遥かに長く生きておる」

「……見た目で判断し侮ってしまったことを心からお詫びします」

「どうしたんだよ急に」

「龍人族は魔法師としても優秀だし、研究所への協力者として名を連ねる人も多いの。なのに私は見た目でその実力を決め付けてしまっていたわ。それでは私の嫌いな貴族と一緒にだって思っ

ちよつと思考が走り気味になる傾向があるけど、反省が出来るのならこの人の未来は明るいな。

「まあマイアは本当にアホだけど——グハツ——」

つい口を滑らしてしまい、空いていた椅子をマイアに顔面へと投げつけられて昏倒してしまう俺だった。

「己の過ちをすぐに省みていける心を持つことは、大変いいことじゃ」

「じゃあ、改めて始めまーす」

昏倒した俺が目を覚ますのを待ってから会議再開。殺気を放ちまくってるマイアを、ミミルが頭を撫でながらなだめている。なんだかミミルの趣向にマイアの容姿はピッタリ嵌ったらしく、初めて会

つて以来やたらとスキンシップを試みるミミル。なかなかの刺々しい雰囲気を持ったマイアであるはずなのだが、流石は天然、まるで動じていない。

「といっても俺は開発とか設計なんかは得意分野ではあるが、魔法の知識に付いては大したことないし。他のメンバーもあつてそれなりつてところだ。なので今回はメリーバンナさんの意見に対して、俺らが発案してりしていく方向でいこうと思う」

「呼び名はメリーでいいわよ。みんなそう呼ぶしね。まあ方法として一番簡単なのは、今だに解読できていないワードをキドーに読んでもらうのが早いんだけど」

魔法の構成は例えば、ファイヤーボールなら『ファイヤー』と『ボール』という単語を組み合わせる事で効果を發揮している。新しい魔法を作るための方法は二つ。新しい組み合わせを生み出すか、新しい単語を見つけるかである。

「こないだ俺がすっかり詠んじまったあの本とかはどうなの？」

「確かにアレの中身もかなりの未解読のワードがあるらしいけど、そういう未解読な部分が含まれた古代文書は基本的に国が管理していて、読めるのも研究所で言えば所長とか王族、最高位にいる貴族なんかしか許されていないわ。図書館においてあるのも、表紙だけを写した模造品だしね。勿論持ちだそうものなら、極刑間違いないよ」

なんでも、危険過ぎるワードが出てきた場合は、その場で封印して歴史から抹消するため、極秘扱いなのだそうだ。そんなものもあるかよ……。箱を開けたら爆弾でしたなんてのは勘弁願いたいが。

「なら組み合わせか？」

「そうね、それなら可能性が無くは無いけど。実はすでに開発されていて、一族ごとに秘密裏に使われている魔法がかなり多いわ。無闇に表沙汰にしてみましたら、場合によっては王族なんかを敵に回しかねない危険性も伴ってしまう」

「秘密であるからこそって魔法は多いだろうな」

どんな物であれ知られてしまえば対策を講じられて価値が激減することなんてよくある話だ。でも敵にまわすって部分は完全に八つ当たりだと思っただけ。

「だからこそ、膨大な知識を得た上で、まだ存在しない可能性の高いものを見つけたすのよ」

「それが未開発だって確証はどうやって得るんだ？ 国内だったら調べられなくもないかもしれないけど、他国だったりしたら難しいだろう」

「そんなのおかんたんですよ」

ここに来てミミル参戦。

「神様に直接お聞きすればいいんですよ」

ミミルに出会った当初に教えて貰ってビックリしたのだが、なんでも神殿には神託の間というのがあって、神様からのお告げを聞くことができる場所が大きな神殿にはあるらしい。それを実行するも

のの徳によつては姿まで現すこともあるようだ。なんとうい暇人神かつ便利な神様だ。勿論聞ける内容に決まりがあつてルールにそぐわない場合は返答は無いらしい。

「あいつらも役に立つんだな」

「なにかいいましたあゝ？」

「いや独り言だから気にしないで」

俺としては厄病神に近い扱いになつていたので、世の中に良い影響を与えているあの神様達の姿が少し想像しにくい。みんなは後光輝く壮大なお姿を想像しているだろうが、俺は悪そうな笑みを浮かべて俺を見下ろしている姿しか思い浮かばない。光と闇の神様は会つたことがないのでまだ分からないけどね。

「自然魔法なら四神様に聞いて、付加魔法なら地のドウツガ様、治癒魔法は光のアグリア様、精神魔法と幻想魔法は闇のダグウィー様、あとは……他にも色々あるけどそれぞれの条件にあつた神様に聞きに行けば問題はないはずよ」

うむ、専門用語なのだとは思うが全く分からんな。自然魔法ぐらいなら分かるけど。要は火、水、風、土のどれかが発生するのが自然魔法に分類される、はず。

「でもさ、組み合わせの方を協力するのはいいけどまだまだ実践するには時間掛るぜ？俺が勉強しないと駄目なせいだけど、でもメリーは結構急ぎで結果を出したがつてるように思っただけかいの？」

俺の質問に固まっているメリーさん。

「……………なんで分かったの？」

「いや、だって流石に俺があの場合であんな事口走っちゃったとしても、身元の確認もせずに女性が自分の部屋に男を連れ込むなんてよっぽどでしょ」

「あっ」

「ほほう、そちは見た目によらず、なかなか大胆な女なのじゃな」

「女に連れ込まれるとかキドーの兄ちゃんモテモテだな」

「？」

「……………」

今更気付いた顔をしているメリーさん。そんなに切羽詰まったのか、しっかりしてるように見えてちよっとドジっ子？ 後、最後のトウカさんの無言によるプレッシャーが真横から直撃して辛いです。

メリーさんは実際の所かなり焦っていたようだ。なんでも彼女の所属する第七研究所の分室、その新たな室長選抜が年末に行われ

るのだが、彼女の分室の室長には貴族出身の若造が選ばれる見込みらしい。貴族が構成メンバーの大半を埋めている研究所では珍しくもない話ではあるのだが、なにやらそいつは根回しと、実績の横取りでのし上がって来た者のようで、実力に関してはからっきしのようだ。将来貴族職に付くための箔付けの為に、研究所に所属しているようで、熱心さの全てを出世と嫌がらせにしか向けていないような、研究者の風上にも置けない、無能を絵に描いて行動力だけ付け加えたような、とんでもなく傍迷惑な男だ。しかも超が付くほどの貴族主義らしく、そいつが室長になろうものならメリーさんどころか、分室の機能停止と同意義だという。そいつが貴族の中で、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵とある爵位の中でも上から二番目の侯爵の三男というから世も末である。

「困難とか苦労なんていくらでもしてみせるけど、あんなのに無駄にされるのは許してやれるものではないわ」

分からないでもないな。今まで積み上げた物が崩れるなんて事は日常茶飯事だし、それが起こることで得られるものもあるのでそれはいいのだが、それを崩しやがるのが救いような無いアホでは殺気すら抱くこと請け合いだろう。しかも当然の如くの見下し目線とで考えただけでも拳を作ってしまうそうになる。

「この国の貴族はアホでも勤まるのじゃのお」

「私の分室は若い子で構成されていて、他の子は目を付けられるのが嫌らしく既に諦め気味なのよ。ならいつそ——」

「自分が室長になってやろうと」

「ええそうよ。悪目立ちはなるべく避けるべき環境なのだろうけど、

アレに上に立たれるくらいなら矢が降り注ぐ戦場に自分から挑むほうがよっぽどましよ」

「なるほど納得。でも年が変わるまではもう二月もないぞ？ 新魔法開発なんてぶち上げるぐらいなんだからかなりそいつが選ばれるのを覆すのは難しいんだろう？」

「かなり評価される論文を提出した上に、元研究所の幹部である侯爵からの推薦状も届いているわ。どちらも金で買ったのは見え見えだけど、大きな実績として扱われているわ」

「この短期間で新しい組み合わせを見つける事ができる見込みは？」

「そうね……年末までにこの街からたった一つの小石を探すくらいの確率かしら？」

半径数十キロのこの街から探すとか難易度高いのに、期限付きとか難易度高すぎるにも程があるだろう。

「じゃあメリーさんの目指すのは」

「当然あなたがいるんだから新ワード発見になるわね。そのために誰にも知れていない古代書を、手に入れる必要があるわ」

「でもそれってそもそも、古代書を見ること事態が難しいんじゃない？」

「……方法は一つだけ考えてあるわ、かなり頼りたくはないのだけれど」

第四話 作戦会議（後書き）

偏見や選民意識ほど無駄なものは、なかなかない。

第五話 酔いしれ時

苦い顔をして先行していくメリーさんに連れられて、俺達一行は冒険者ギルドへとやってきた。面子は俺、ジョイミミル、マイヤとシェリーで来ている。目的地としては冒険者ギルドというより、併設されている酒場にあるようだ。美人らしい気品を持ったメリーさんを先頭に、酒も嗜んでいない子供達が喧騒入り乱れる酒場の中心を横切っていく。

ときたま耳に俺達の事を噂する声が聞こえるが、ここは無視無視。火の神様の特典の身体能力強化は五感も判定に入っているらしく、少し集中するだけで驚異的な能力を発揮してくれる。風の言語理解の特典と一緒にこつちも解釈が広そうなので、改めて検証の必要があるかもしれない。

同じように耳のいいマイアにも噂というより侮るような声が届いたのか、憤怒の表情で声が聞こえた方向に飛び出そうとするのをなんとかなだめて進んでいく。すると酒場の一番奥底に、酒の瓶とコップが隙間なく敷き詰められているのに誰も座っていない奇っ怪なテーブルの前で、やっとメリーさんは足を止めた。

「ゾナ」

「……」

「ゾナ叔父様」

誰もいない筈の机に向かってメリーさんが一人語りかけ――
いや、だれかいる？

「……すいません店員さん。この飲んだくれは何日くらいここにい

ますか？」

「あついらっしやいメリーバンナさん。ゾナさんは今回はまだ三日月でここですよ」

「ありがとう。ウォーターボール」

店員さんになにやら聞き出したメリーさんはいきなり魔法を使用した。

「ぐわあはっ!!」

机の向こう、酒に埋もれたその向こうに居るであろう人物に水の塊が直撃したようだ。

「起きてくださいゾナ」

「なんだあゝ朝か？」

「『ウォーターボール』」

寝ぼけながら起き上がった男に、再び魔法を発射するメリーさんは無表情なんだけど、ちよつと怖かった。

「ガバアッ!? ……なんだぁメリーか、こんなところくるとは珍しいな」

「なるべく来たくはありませんでしたけどね」

もしかしてもしかするんだろうけど、この酔っぱらいの極致のオ

ッサンが逆転の為の唯一の方法だったりするのか？

場所を変えて酔っ払いのオッサンの解説をしてもらう。場所を変えたといっても、密談をするためにある、ギルド内施設内の個室に移っただけだが。

「紹介するわ、これは私の義理の叔父にあたるゾナよ」

「これ扱いは酷いんじゃない？ いメリーちゃん」

「私はもう二十四だ！ ちゃんをつけるんじゃない！ それに年中酔っ払ってる中年なんて、これ扱いで充分だわ」

「もううゝいけずなんだからあゝ」

いちいち体をクネクネさせながらメリーさんに不真面目な抗議をするオッサン。しかも合間合間に片手に持った酒瓶から水分を補給しつつという、変な器用さを発揮している。

「まあいいや、なんだか知らんが初めましてゾナだ。冒険者ギルドじゃ『酔狂のゾナ』なんても呼ばれちゃったりしてるな」

「酔狂のゾナ！？」

「知っているのかジョイ！？」

「見て実感できたけど変人で酒飲みで有名な冒険者なんだけど、それだけじゃ称号持ちなんて務まらない。確かランクはハルバードの上位に位置していたはず。高ランクの依頼ほど腕っ節だけじゃ攻略できなくなっていくのに、ほとんどの仕事を一人でこなすっていう変わり者な凄腕で、しかもそれを楽しんでいる風な所から酔狂って称号が与えられたっていう、色んな意味でも有名な人だよ」

うむ、説明ご苦労。

「いやゝそんなに褒められるとオジサン照れちゃうな」

今の説明の凄腕ってとこ以外は褒めてなかったと思うのだが……。

「じゃあ私の作戦を説明するわ。実は公にまだなっていないけど、この街の近くにあるウィンストン村付近の山に、新しい遺跡が発見されたらしいわ」

ああ、こないだの魔獣使いの時のやつか。まだ公になってなかったんだ。

「その探索が一週間後から一般に解放されるわ。でも国の管理下にある遺跡の調査には、それなりの実力と信頼が伴っていないと許可が降りないのよ」

ジーニーさんの話ではなかなかの重要な物が出てくる可能性と危険性があるとか言ってたもんね。

「そこでこのゾナのハルバードっていうランクを使って遺跡を探索、そして私達自身の手で新しい古代書を手に入れるというわけよ」

「あれ？ 確か古代書も国の管理下に収まるんじゃないかなかったっけ？」

「図書館にあったような古文書のような希少価値の高いものならそうなんだけど、石版とかなら個人で所有が認められる物も結構あるのよ。それに希少なものだったとしても、遺跡の中で中身を見てしまえば問題無いわ」

「オジサンにも分かるように説明してくんない？」

俺達の顔とメリーさんの顔を眺めながら黙っていたゾナさんが話からかなりの置いてきぼりを食らっている。メリーさんの普段のゾナさんに対する扱いが酷いのだろうという想像が容易に付く。凄腕の冒険者って威厳が一ミリも感じないんだが大丈夫なんだろうか？

「遺跡探索のお願いよ。報酬はコレ」

そう言つと手提げ袋から一つの瓶を取り出す。

「ふお？ うおおおお！？ こっこいつは！？」

「黄金林檎から作った果実酒である『エデン』 お酒好きの人には幻の名酒なんて呼ばれてたりするんでしょ？」

「受けた！ こいつの為ならドラゴンだってシバキ倒してやるぜ！
！」

いやいやドラゴン討伐とか無理無理、マイアが呆れすぎて苦々しい顔になっちゃってるじゃん。他の人はさらに置いてきぼりだし。

「ということで明日の朝には出発しようと思うんだけど行けるかしら?。」

遺跡探索で得た物のほとんどはかなり金銭になる上、に国の管理下に置かなければならない物でも、その希少性に伴って報奨が得られるようだ。ただ古代遺跡の奥底は例外無く危険な場所なんだそう。悪魔なんてのが封印されて、その影響で遺跡中魔物だらけか、重要な施設を守るためのゴーレムだらけ罠だらけかの、どちらからしい。

今回は白狼のコウジンと、モヒカンアヒルのナンフがお留守番となっている。流石にコウジンを、おいそれと知らない人の前に出すのはまずいと思うし、イノシシのボーゼは基本土の中にいながらマリアに付いて来られるらしいし、まだ見たことはないがもう一匹、というか一体精霊が付いてるらしいので、お姫様の安全面でも心配はないらしい。最強と言われている龍人族の王族であるマイア自身も、かなり実力者なので護衛事態いらないかもしれないが。

ミミルは御仕事の都合上来れなかったので、チームメンバーは俺、ジョイ、マイア、メリーさんとゾナだ。正直まだメリーさんとゾナには実力を隠しておきたい。そこで……いや待てよ、今こそ――。

「こんなこともあるのかと!。」

「何誰もいないとこに向かって喋ってんだよ兄ちゃん」

ジョイに冷たい視線を送られたが、人生で言ってみたい台詞第二

位を言えて大変満足である。改めて、こんなこともあるのかと、あの忍者ルックな装備とは別の装備一式を買っておいたのだ。各自鉄製の手甲に脚甲、肩当てと胸当てを装備して下には魔物の皮なんかで作った服を着込んでいる。武器はナックルでは無く、四十センチ程の幅の太い片刃の曲刀を使用する予定だ。もちろんナイフやナックルを収納している自作ホルスターも装着している。更に生産ギルドの爺ちゃんに紹介された、面白商品の中から見付け出した『鍛錬の指輪』を装備していた。

『鍛錬の指輪』は身体能力と魔力循環に常に負荷をかけることで、通常よりも大きな鍛錬の成果を発揮することが出来る品物だ。スポーツで言えばパワーアングルみたいに、体に重りを付けるようなものだ。自分の魔力を使って自分を重くするとか、とんだ自虐仕様だなと思ったのだが、日々鍛錬を積む俺としては魅力的だったので即購入。すると俺の身体能力は、半分ほどに制限される程の負荷が掛ることが分かった。これを付けた状態なら、冒険者の中では、ちよつと能力が高いくらいに見えるはず。ちゃんと事前に冒険者ギルドの運営している訓練場に、何回も見学に行つて確かめ、この世界の強さの基準はなんとなく分かつてきているはずなのでこれで大丈夫なはずだ。

「なあメリーよお遺跡探索するのはいいが、御守りまで含まれてるなんて聞いてねえぞお？」

遺跡の入口にまで来てやつと酔いが覚めたのかオッサン、現状把握が遅すぎるだろ。

「文句言つならあのお酒を叩き割るわよ」

「へい！ なんの文句も御座いませんメリー様！」

「よろしい」

なんとという酒主上主義者。命よりも危険よりも酒を優先させるとは『酔狂』の名は伊達ではないな。ちよつと不安になってきた。

「ウオツホン、俺は冒険者ギルドから来たゾナだ。この遺跡の探索をさせてもらうことになったのだが、通してもらってよろしいかな？」

遺跡の前で見張りをしている騎士団の部隊にゾナが許可をもらいに行った。そっぴや初めて真剣に喋ったなこのオツサン。

「通達は受けている。大変やる気のある冒険者がいて、おおいに感謝していると部隊長より事付を受けている。なんせ探索開始初日から二組ものチームが調査に乗り出してくれるとはな」

「なに！？ 俺達以外にもチームで参加してる奴等がいるのか！？」

「ああ、大盾のライナスと大剣のカイナス兄弟が、学者っぽいのを連れてさっき入っていったぞ？」

「ああん！？ あの脳筋コンビが遺跡探索とか正気か！？ あいつらは魔物専門みたいな冒険者のくせになんだってこんな所に……」

なにやらゾナ、もといオツサンが兵士達の話聞いて驚きの声を上げている。

「急ぐぞ小僧ども。俺らの前に先客がいるらしいが、どうやらかなりのアホが入っていつちまったようだ。死んでるだけなら自己責任だが、遺跡を荒らされるだけなんて落ちも見えちまう」

「はい！？　話はなんとなく聞いてたけど学者も一緒だったんだろ？　それなのになんで貴重な遺跡を荒らすなんて事になるん？」

「多分だが、学者の方が脳筋コンビを雇って探索に乗り出したと思う。あいつらは遺跡探索なんて細かい仕事を、態々自分からするようないかならないかな。だが、大金が絡むと考えたら、依頼を受ける可能性はある。でもって学者の方は魔獣専門の冒険者を、遺跡探索に雇うような見当違いなド素人だ。そんな奴が初日から潜りこむなんて無茶をしゃがるのは欲と名声にかられたアホの証拠だ」

このオッサン酔っぱらいのくせにやたらと頭が回るな。さすが一流と呼ばれるような冒険者ってことか。

「そういう輩は大抵他人にとっちゃ悪い結果を振り撒くもんだ」

「……そういう学者に心当たりなんていくらでも出てくるわね。遺跡がプロニアスから近かったから……急ぎましよう。ただし少しだけね、安全はやはり最優先で確認していきます」

冒険者としてもクレイモアの下級の位置するメリーさんは、その表情を引き締めて先頭を切って遺跡へと踏み行っていた。

第六話 バ力騒ぎ

所々に苔の生えた古めかしい石で作られている遺跡に踏み入り、長い通路を通り抜けるとそこは――。

「一面銀世界だった」

「なに寝ぼけてるのさ、騎士の詰所だから」

完全に言ってみただけだが、最初の部屋は大きな広間となっていて警備と管理、及び調査として派遣された騎士たちの詰所になっていた。この遺跡が俺の見つけた一月以上前から非公開放つたのは、発見の経緯が胡散臭かったからというものもあるだろうが、どうやら入り口に近いところは、騎士達自身で調査を行っていたようだ。そして俺達の踏み込む場所は騎士が危険だと判断した場所からが始まりとなるわけだ。

「……」

「ビビってきたかジョイ」

「ビビってなんか……いや、ちょっとだけ不安はある」

「大丈夫俺もだ」

「心配するでないわ小童ども、コウジンとの闘争以上の脅威はそうはありはせんわ」

マイアがその小さな体に似合わない、柄の長いハンマーを肩に抱

えながら鼻を鳴らしていた。ジョイとミミルの戦闘訓練は最初の頃は俺が見ていたのだが、マイアが居候しだしてからはマイアと精霊達もその役目を担うようになっていた。もちろん俺もいまだ未熟な部分を多々持ち合わせた者という認識があったので、手合わせを何度かおこなったのだが。

「コウジン並の奴が出てきたら即死確定だろうが」

強すぎたのだよコウジンは。明らかに手加減されているはずなのにジョイはおるか、俺でさえ実力の差が明白だった。

「狼を象る精霊の中では世界屈指であるからな。妾の一族とてあれに勝てるのはそうはおらんわ」

いるのかよ、それが驚きなんですけどこの超人一族は。マイアとも組手を何度かやったのだが、その身体能力は俺が全開で動く速さの一段だけ遅いくらいで、パワーに関してはなんと五分ほどだった。魔法は火に関しては上位まで使えると言っているし、戦闘経験は俺とは段違いな程に多いようだ。組手ではいい勝負をしていたが、もし真剣勝負になれば俺よりも強いと思う。そもそも龍人族のリーン王族は武家としての一面があるので、物心付けば男も女も訓練をしていくのが普通だったそうだ。種として最強とか言われている上に、努力家な一族とかハンパねえ。

コウジンにも「強いっすね」なんていったら「我なぞフリーー殿に比ぶればまだまだだよ」なんて返されたし。フリーーさんだけじゃないんですか。

「まあ初めて遺跡に潜るんだったら不安なのは当たり前だが、俺以外で一チームだと思って身だけ守ってりゃいいぜ。あとはおじちゃん片付けっからよ」

「なんだかよくわからんが凄い自信ですね」

「このオッサン……いえ飲んだくれは見た目駄目人間だけど、冒険者としての腕前は一流よ。目の前に酒さえぶら下げてれば、百の魔獣にだって笑いながら突っ込んで帰ってくるわ」

「褒めるなよ〜かわいいな〜メリーは」

オッサン、またもほとんど褒められてないぞ。取り敢えずゾナは凄腕で、それをメリーさんはまるで虫のような扱いをしていて、ゾナはメリーさんを溺愛しているのは分かった。まあもしもの時は手袋の下に付けた『鍛錬の指輪』を外すし、マイアも精霊を呼び出すだろうから、よっぽどの事が起きなきゃ大丈夫なはずだが。

「さてここから先が本番つてやつだ。騎士共の話じゃここは魔法生物の巣窟らしい。大まかにいえばゴーレムだったり、液体生物のスライム系統だったりだが、どちらにしろ防御力とタフさが売りだ。物理攻撃も効きにくいし、魔法への耐性もあらかじめ備えられてるのが普通だ。そのかわり大体のやつが遅いし、形が同じ奴はほとんど同じ行動しか取らねえから対処はしやすいな。倒すのはちとしんどいが、弱点さえ見つけければ簡単だな」

「どこかに動かすための核があるんですね？」

「そういうこった。そこを壊さないで倒すとなると、いちいちバラバラにするぐらいぶっ壊さなきゃいけないからな。再生能力だったり融合能力だったりを持ちあわせてたりする奴もいる」

「殺るなら様子見か、全力攻撃というわけじゃな」

「ご名答、だが俺の指示なく全力攻撃はするなよ？　なにがあるかわからんのに、スタミナを無駄に消耗してたら帰ってこれん。普通の探索だったら日にちを分けるんだが、今回は急ぎのようだからな、若干の無理を押して目標物を見つけ出す。分かったか？」

「了解」

なるほど、このオッサン一流と呼ばれるだけはあるそうだな。目付きも鋭くなってきた。

「んーうまいっ！　やっぱり仕事前には一杯飲まないとな！」

一瞬目を離れた隙に小さめの酒瓶一本空けてやがった。やっぱりだめだこの飲んだくれ。

危険区域に入ってからしばらくは戦闘に入ることはなかった。どうやら俺らの前に入ったチームが根こそぎ始末してくれていたらしい。

「あの脳筋コンビは温存という言葉をしらんのか……」

通路に飛散するスライムであったであろう粘着質な液体。全身を覆う鎧が自立して動くゴーレムのバラバラになった腕や足が通路中に散らばっていた。どう見ても弱点狙いなんて繊細な戦い方はして

はいなさそうだ。

「障害物を取り除いてくれるのはいいんだけど……意外ね、小部屋なんかの探索はやっていないようだよ」

入り組む通路にはいくつもの小部屋があり、その中には宝ではないにしろ古代の遺物がある部屋があった。しかし先行のチームがその中を物色した形跡は今のところ見受けられない。

「もしかしたら……」

「どうしたんだ？ なにか気付いたのかジョイ」

「遺跡って一番奥に一番重要な物があるんだよね？ もしかしたらそれが狙いなんじゃないかな？」

なるほど、この潔い程の調べていない小部屋に脅威の進軍速度を考えるよそうなのかもしれないな。

「……訂正する。前に入った奴等はアホじゃない、頭のイカれた狂人が脳味噌の腐った痴れ者だな」

「なんでだ？ 最高のお宝を目指すのはそんなに悪い選択ではないと思うけど」

「遺跡ってのは悪魔っていう魔獣を生み出すと言われている化物を封印している物が、重要な元研究施設か保管庫だ。構造や巢食つて敵は千差万別だが、全部に共通する事が一つだけある。一番最奥には確実にとんでもない仕掛けと化物が居るってことだ」

「それを倒す自信があるんじゃないか？ 魔獣専門みたいな戦闘タイプの冒険者なんだろ？ 先行チームを率いている冒険者ってのは？」

「……………遺跡を完全に探索しきる平均期間は三年だ。その内三割が最下層攻略にあてられると言われている。俺だって挑戦するなら、ハルバードクラスの冒険者十人以上でチームを組んでからにするぜ」

オーケー先行チームがいかにかアホなのかよく分かった。ていうか雇っているであろう学者はその知識知らないでここに来てるのか？

「まあいいわ。アホなチームが騒いで罔にでもなってくれている間に、私達は私達の目標を達成して行きましょう。ここはどうやら研究所だったみたいだし、魔法書は難しいけど石版とかならそれなりに出てくるはずよ」

さて探索を始めて丸二日が過ぎた。階層別にいうなら三階層分の小部屋を調べきつて一旦上に戻り、騎士達の詰所を間借りして就寝を取ろうとしているところだ。遺跡では魔法生物でも魔獣でも一度倒してもしばらくすると、どこからとも無く湧き出すが、魔法生物はまだ遅い方らしく見張り番を立てておけば遺跡内でも寝泊まりが可能だった。今は騎士たちもいるのでなおさらだ。

それでもつて今は見張りをゾナと俺が担当していた。

「そついや魔獣とかが湧くダンジョンでの寝泊まりはどうなるです

？」

「一日で帰って来れる範囲を探索しては帰るのが普通だが、寝泊まりまで想定するんだったら二十人規模で行けばなんとかなるかな」

「階層ってどれくらいあるですか。この遺跡は山に丸々埋まってるみたいな形で深そうですけど」

「遺跡それぞれだが、今んとこ最高は二百十二階層だったはずだぜ？」

「一階層一階層ごとがゆうに百×百はありそうなほどに横にただっ広いのが二百階層とか古代人すげえ。」

「それにしてもおめえやあの龍人の嬢ちゃんは、中々良い腕をしているじゃねえか。あのジョイっていう小僧も悪くないし、いいセンスしてやがる。子守りの心配なんて杞憂に終わってくれて助かったぜ」

「腕も何も、そこまで披露する場面なんてありませんでしたけど」

この二日間、魔法生物たちとは幾度と無く戦い、五十体ほどは討ち果たしたはずだ。しかしそのほとんどはこのオッサンが一人で瞬殺してしまっていた。オッサンの装備は脚甲に右肩だけに肩当をしていて他は黒と濃い茶色で染められ、胸元が開けた布の服を着込んでいるだけだ。オッサン曰く特殊な布で頑丈らしいけど。ちょっとだけ様相が和風というか、着物風だったんで後で買った場所を聞いておこうかな。

そして問題と言うか武器が特殊だった。『双転斧』という魔法具の中でもさらに希少な分類の魔装らしい。普段は二本の手斧として

ゾナの腰元に収まっているのだが、戦闘になると柄の部分が伸びたり、刃がでかくなったり、二つが一つになったりとその形を次々に変えてしまう、なんとも不思議な武器だ。それを自在に操るゾナは魔法すら使わずに、石のゴレームやらスライムを殲滅していたのだ。おまけにそれで温存していると抜かすから恐ろしい。

「いやいや背中を気にせず戦えるだけでも楽々だったし、メリーの心配をしなくていいのはたすかってるぜ」

ゾナの印象は俺的にはかなり良い印象が強くなってきた。

「カー！ 仕事の合間の酒もうまい！」

この酒癖を抜けばの話だが。

「そつえばメリーさんとは親戚なんですね」

「俺の姉貴の娘にだからな。といつても十三も歳の離れた姉貴は姉弟というより育ての親に近かったから意味合いはちと違うかもしれないがな」

「それは……頭が上がらなさそうですね」

「うむ、全くあがらん。娘のメリーにさえ全くだ。ナツハツハ！あと敬語はやめていいぞ？俺は偉そうにされるのが嫌いだが、偉そうにするのはもっと嫌いなんだなナツハツハ！グハア！」

遺跡に響くほどの声で上機嫌に笑い出したゾナに水の塊が飛んできた。

「やかましいぞ飲んだくれ！」

メリーさんはウォーターボールをゾナに飛ばす癖でもあるんだろうか？ しかも今回は吹っ飛んでいくほど威力高めだし、容赦ないなあ……。

三日目の探索も午前中から順調に進んでいき、四階層最後の部屋を探索している時だ。ゾナが本棚らしき物の後ろに、隠し金庫のような物を発見した。ここまで見つけたお宝らしき物はそこまでの価値ある物が無かったので、いやがおうにも期待が高まるものだった。そこまで価値がないと言ってはいるが、初探索というだけあってものすごい量にはなっていた。だいたい荷台いっぱいに積み上げるくらいには騎士団の詰所に運び込んでいる。ほとんどが器や小さなインテリアだったりするが、遺跡から出たというだけで十分金にはなるそうだ。

「これは魔法で施錠されているタイプね。……時間は掛かりそうだけれどなんとかなりそう」

少し嬉しそうな顔をしながらメリーさんは杖を持って金庫の前で構えをとった。するとその足元に文字や図形が描かれた陣が浮かび上がる。初めて見るがこれが世に聞く魔方阵というやつなのだろう。

「ジョイとキドーは外を見張っといてくれ。なにかあったらすぐ呼んでくれ」

「オツケー。いくぜジョイ」

「妾も行こう、どうせこういった繊細な作業に協力できるとは思えんしな」

マイアは遺跡に興味があったのか、その発掘物や遺跡の構造なんかをみて終始ウンウンと頷いてばかりいた。楽しそうではあったのだが、やや戦闘狂のきらいのあるマイアには只探索するだけなのは少々飽きてきているようにも思える。

すでにメリーさんが鍵の解除に取り組んで十分程が経過した。どうやら難しくはないけど、時間がかかってしまうタイプの鍵のようだ。俺達が現在駐留している部屋の外からは、次の階層に続く階段が見えていた。今開けている金庫に目標の物がなければ、次はあの階段を降りていくことになるだろう。

そんな風に思っただけで階段をぼんやり眺めていたら、そこらなにかが駆け出してくるのが見えてきた。敵か！？　なんて思ったがそれはよく見れば人の集団のようだった。

「あれって先行したチームかな」

なんだか見るからにボロボロで、傷を負っている者も多数いるようだ、人数のころ二十弱は数えられる。

「あんなに大人数で来てたのか。最初に潜った割には本格的な人数なんだな」

頭が悪いなんて予想をしていたが、戦力だけはそれなりに揃えて挑戦していたようだ。まあもし準備すらまともに出来ていないようなチームだったら、今頃骸になって転がっているわけなんだが。

「ああん!？」

「む」

その集団は全速力で俺らの前を駆け抜けて行ったのだが、一瞬だけ一番大きな男と目があつた。身の丈よりもでかい大剣を背負っていたのでおそらくあれが脳筋コンビの片割れ、大剣のカイナスなのだろう。驚きを表したような顔のあとになんだか嬉しそうな顔をしたように見えたけど……知り合いだったっけか？ うーむ、身に覚えは………ないな。

「なんじゃ、まるで一目散で逃げてくようじやの」

おそらく騎士の駐屯所では見なかったので遺跡内で寝泊まりしていたはずだ。なのに今見た集団は手に最低限の物しか持つておらず、それどころか何人かは人が人を肩に背負って走っていた。まさに敗走という言葉がピッタリ当てはまるその様子に気付いた時、下へと続く階段から何かが這い上がってくるのが見え出した。

第六話 バカ騒ぎ（後書き）

RPGは難しくていいんだよ。

第七話 千変万化

メリーさんが解錠を試みている部屋の前に、今俺らは陣取っているわけだが、その部屋は通路の曲がり角に位置する。正面の通路の先には途中開けた場所もあってそこには幾つかの部屋が隣接する広間のようなものもある。その先を廊下を真っ直ぐしばらく行くと、階段が突き当たりに見えてくる。その階段から小さな点というか、蠢く何かがこちらに向かって這いずるように進んで来るのが視認できた。

「あれが何に見えるよ二人共」

まだかなり距離があるそれは、はっきりと分かるものでは無かったので隣にいた二人に聞いてみる。ジョイとマイアは俺よりも視力がかなり高いのでどっちは見えていると思う。

「見たことないものじゃが、石のような材質なのは見て取れるの」

「……あれは手？ ピョンピョン跳ねるみたいにこっちに來てるね。すっごい数で」

まだ遭遇していないタイプのゴーレムか。とりあえず既に発見されてるだろうし迎撃するかな。

「ジョイはオッサン呼んできて。マイア俺はあの広場でアレを迎撃してみる」

小型の敵がこんな狭い場所に殺到してしまつては、いざというとき逃げることもすらできなくなってしまうしね。それなら少しでも前

に出ておかないと。

「うむ、では先陣はいたどころか！」

ここまで思ったほどの激しい戦闘がなく、やや欲求不満だったマイアは嬉しそうにハンマーを掲げて飛び出していった。早いよマイアさん！ 今の俺じゃ全く追いつけないんですよー！

「^{バースト}広大であれ！『ファイヤーブレス』」

来ましたよ！ 初の中級魔法のお披露目！ 中級魔法は初級魔法より難しいワードを使い、さらにその前の単語に強化や効果を指定する命令文を唱えることで、その効果を増大させたり、範囲を広げたりする。マイアの放った魔法は単純に、術の発生場所から炎を前方に放射線状に発生させるだけの呪文だが、単語の前に付けたバーストという術の広さというか、大きさを増大させる文を付けることで、広域な範囲に炎を撒き散らす魔法に様変わりする。俺が中級魔法を使えていない部分の問題点は、この命令文の所で、ある種の魔法に別の魔法を付け加える作業に近く、その魔法と魔法の魔力のバランスを取ることが全くできないのだ。片方が重すぎたりデカすぎたりは潰れちゃったり、壊れちゃったりするのは当然と言えば当然だろう。その分初級魔法は構造が単純なので、使い放題なんだけどもね。開けた場所に入り始めていた、手の形をしたゴーレム達は残らず火の海に沈んでいった。なんとか追いつき、俺も敵を視認できたが、どうやら手首までの手の平の形をしたゴーレムの群れだったようだ。指の力で虫みたいに飛び跳ねながら移動するようだが、その様はなんだかキモイ。

「火の海過ぎて何も見えないよ！ 『ウインドボール』アクトファイブー！！」

とりあえず近場の火をかき消して視界を確保する。

「いやいやスマンちと力が入りすぎたようじゃ」

「俺まで蒸し焼きになっちゃうのは勘弁してくれよ」

既に汗がダラダラ流れる程暑いけど。

「しかしまだまだ湧き出してきておるようじゃの」

「うへえ、ここまでゾロゾロ出てきてたら気持ち悪いな」

マイアの炎で燃えて、というか溶けた群体の向こうの階段からは今だに手だけのゴーレムが登り続けてきている。心境としてはアリの巣を眺めている気分だけど、こいつらは俺らに明確な敵意を持っているのでそんな悠長な気分ではられない。

「あの手のひらの丸っこい部分が核でいいのかな？」

「まあそうじゃろうな。指の所は継ぎ接ぎなだけの石の欠片にしかみえんし、核の大きさとしてはちと足りはせん」

「じゃあ俺は援護役ということで、敵をなるべく散らして、孤立したやつから仕留める」

「今のキドーの状態じゃ致し方ないかの。妾も全力で暴れたかったのでは非もないが」

「それじゃ、『ウィンドボール』アクトファイブ！」

質量の軽い手形は俺の魔法が当たると散り散りに吹っ飛んでいく。

「そりゃああああ『ストーンコート』!!!!」

マイヤは自分の武器に、強度と重量をやや上げるストーンコートを掛けて、一番敵が固まっている場所へと全力で鉄槌を振り下ろしていく。その威力は凄まじく、地面に辿り着くまで当たった敵は粉微塵となり、勢いを減算させずに地面にぶつかったその勢いは衝撃波を生み出し、周りにいた手形までふっ飛ばしていった。

「全力の一撃だな」

マジ本気。

「オリヤ!! フン!! トリヤアアア!!」

手加減無用の攻撃を繰り広げる度に、塊となっている手形達が紙吹雪のように空中に舞っている。

「嬉しそうだな」

なんという生き生きとした表情。家では寝てるか食ってるかしかして、いつもゴロゴロしている駄目姫とは思えん輝きようだ。俺はふっ飛ばされても、なんとか動こうとしている奴等を順に止めを刺していく。そんな連携を繰り返し、危なげなく戦闘をしている所にゾナが走りこんできた。

「大丈夫か!？」

「見ての通り問題なくマイアが暴れてるよ」

「……いや……こいつはマズいな」

「？」

「どこがだ？ 数こそ多いが、戦闘力だけならスライムの方がよっぽど高いと思うのだが。」

「アレ見ろ」

ゾナが指さしたのは広場の隅に転がっている、粉々になった敵の残骸だった。完全に原型を失っているただの石塊になっていたのに、それは僅かながら動き出していた。

「こいつの名前はツウーレム、通称『繋がる者』なんて呼ばれてる群体方のゴーレムで群体全部で一つのゴーレムなんだ」

「つまり……どういうことだってばよ？」

「こいつは再生しきる前に一つ残らず倒さないと死なないんだよ」

全部って……まだ階段の向こうからは続々と登ってきて、増え続けておられるんですが。

「なんでこんな面倒くさい奴に手を出した！」

「いや、手を出したっていうか、先行してたチームが逃げてきて、押し付けられたってのが多分正解かなあ」

「あのボケども、ボス級を連れたままここまで逃げてきやがったのか！？ 学者中心のチームが来てたらどうするつもりだったんだあのアホどもは！」

どうやらこいつは、腕に覚えのある冒険者でも逃げ出す事を考える厄介な敵ってことになるのか？

「気をつける、こいつらは集まれば集まるほど強さも鬱陶しさも倍増してくるぞ！」

ゾナの助言通り、ツウーレムの脅威は時間が過ぎるほどに増してきていた。最初は広場の入口辺りで戦っていた状況も、今では出口手前での攻防になるまで押されてしまっている。十分以上戦い続けているので、さすがに階段から這いでくる奴等はいなくなっているようだ。

「粘土……いやどつちかというと積み木かな……」

初めの頃の形は俺らの手と同じ程の大きさだったのだが、徐々に一つ一つが纏まり出して大きくなっていき現在は俺の身長と変わらない大きさの手形が、十数体襲ってきてくる状態だ。

「そりゃー！ー！」

「フンッ！」

「ソイヤツ！『ストーンボール』アクトスリー！！」

知能はそれほど高くないのか、至って単純な思考をしていたので、なんとか迎撃は出来ているのだが。

「ええい！ 切りがないわ！！ 広^{バースト}大であれ『ファイヤープレス』！！」

近接戦では埒があかないとみたのか、マイアが一番固まっているツウーレム達へと炎を浴びせる。しかしツウーレム達はさらに一塊になることで、全てが炎で焼かれないように防御していた。

そうこいつらの厄介な所は、一度受けた攻撃を危険と感じれば二度目の時には、防御対策を講じてくるところだった。大きくなりだしたのも俺がウインドボールでふっ飛ばして砕く事を脅威と感じての対策だと思われるしね。マイアの炎で表面だけが溶けたツウーレムの塊は更に二体同士が重なって2メートル近い手形になっていた。

「オッサンなんか策とか無いの？」

「言つとくがこいつはかなりレアなゴーレムで、俺も見たのは初めてだし、実際戦った事のある奴に会ったことも無い」

「つまり情報不足ということですね」

「一度に全部壊してやりやあいいの分かってるんだけどなあ……」

「一度に全部つて……こいつらざっと千体以上はいると思うんだが……」

次々に迫る小さな手形と巨大な手をしのぎながら、打開策を考えるのだが。この大量の飽和攻撃の前には逃げた方がいいのではないかというのが本音で出てくる。いわば持久力特化ともいうのだろうか、とにかく体力勝負に無理やり持ち込むのが、こいつの持ち味のようなのだ。

「もうそろそろメリーの解錠が済むだろう頃合いだから、それが終わったらとつとずらからう。こいつらボス級は、移動できる範囲が決まってるはずだから、上に逃げりや追ってはこれねえ」

なるほど、俺らと同じような状況になって八方塞がりになったからあの脳筋コンビのチームはここまで逃げてきたのか。そんな事を思っていると、なんだか後ろから何か声が聴こえる様な気が。

「なんじゃと!?!」

龍人族ゆえか、五感の鋭いマイアだけがその声に反応していた。だが普段から動じるとこなど見たことも無いマイアの慌てようからして、悪い予感しかないわけで。

「うああああああああ」

「きゃああああああああ」

魔法を使ってなんとかツウーレム達を押し戻し、後ろの悲鳴の正体を確かめる。

「嘘だろ!?!」

なんと石版を持ったメリーさんとジョイが、まだ見たこともない天井に届きそうな、巨大なゴーレムに追われてきていた。

「メリー！？ どうなってるんだ！？」

「ごめんなさい！ 隠し金庫が開いたらあいつが発動するようになつてたらしくって」

前門の群体、後門の巨体ですか。逃げる算段がおじゃんですよ。

「ここでアイアンゴーレムか……」

今まで相手をしてきたゴーレムは、土か石で出来た奴等だった。しかし後ろから迫るゴーレムは、全身を鎧で武装した巨人のようだった。その様相と威圧感だけで、他のゴーレムとは一線を画す強さだと伝わってくる。

「俺が後ろをやる！ お前等でこいつらをなんとかできるか！？」

「愚問じゃぞゾナよ。妾は最初からこやつを倒す事しか考えておらんわ！」

何か策でも思い付いたのか自信満々で返答するマイア。

「上等だ！」

いい笑顔を残してゾナは後ろのゴーレムに飛び出していった。浅めの階層なら余裕を持って帰れると思っていたけど、やはり何事にも予想外のことが起こるもんだ。試練は逃げずに乗り越えてこそ力になる。そしてそれは俺達に必要な物だ。

さあここからが正念場だ。

第七話 千変万化（後書き）

ハニワ君の群れなら可愛かったのに……
いや、人によつてはそれはそれで悪夢かな？

第八話 必殺の一撃

偶然と偶然が重なりあって出来ているのが、現在という日常だつていうのは、なんとなく理解しているつもりだ。ならば今眼前と背後を埋める偶然とやらは、よほど俺達に対して悪意を持っているようだ。

「^{バースト}廣大であれ『ファイヤーウォール』！」

群体で迫り来るツウーレムに肉薄して戦い続けていたマイアが、魔法で相手全体を足止めして、俺達が固まっていた場所まで戻ってくる。

「あいつらをまとめて倒しせる手があるのかマイア」

あれだけの強気をゾナに吐いたのだ、一つくらいは思い付いたのではなからうか。

「あるにはある。しかしその手はひどく直線的な攻撃での。……お主らであやつをあの廊下に押し戻すことは出来るかえ？」

廊下って階段に続く一本道のことが。

「メリーさんはバーストって使えるの？」

「ええ、それ以外の中級も風と水ならかなりの数を使えるわよ」

じゃあイケるかな。こと戦闘に関しては一級品の实力を持つマイアが、自信満々に使おうとしている手なら、廊下に押し込めさえす

れば確実にやってくれるだろう。

「では、俺が左右の奴を、メリーさんが中央の奴等を押し込む方針で行きます。マイアは牽制とジョイはマイアの援護を。合図で合わせて一斉に押しこむからな」

「承知したぞ！」

「了解」

「わかったわ、なんとかしてみる」

マイアは作戦を聞いて元気に飛び出し、ジョイは矢を携え、メリーさんは魔法の構成に取り掛かっていく。

俺はと言うと、初めて実践で利用する術に、若干に緊張を覚えていた。使用できるのは確認済みなのだが、いかんせん威力や運用に関してはまだ試験段階といったところで、やや不安だったのだよ。日本で機械を作ったり、実験を行ったりしていた時は、準備と検証などいやというほど出来ていたのだが、この世界においての戦いというのは、想定外の範囲外が常に生まれていき、あらかじめ用意していた物では足りなくなるのがあたり前。ぶつつけ本番など技師であり科学者の端くれであった俺からすれば、愚かしいとさえ思っていた事であったのだが、ここでは命を盾にして、その愚行を強いられる。

「今だ!!」

メリーさんの魔法構築が完成に近くなったのを見て取り、叫びを上げる。

「『ストーンウォール』アクトシックス！　そんでもって『ウインドボール』アクトシックス！」

俺はサイドに広がる奴等を漏らさず囲えるように壁を作り出す。しかしいつもは地面から出現させて地面に固定するように出す壁を、固定しないままにその場に留める。そんでもって風の塊でその壁ごと無理やり押し込んでいく。

マイアに突っかかっている中央の奴等はかなりでかいのが多かったが、サイドに散るのは大抵小さいのだった。この力技でも充分なはず。

だが、ウインドボールを六個同時に操作するのは俺の脳の容量からして限界ギリギリ。まだ単純な動きなんてなんとかなっているが、今の心境は腕を六本同時に動かさなければならぬようなものだった。

「どおりやああああああ！！！」

魔法使ってこんな掛け声をしたりする奴はそうそういないだろうが、まさに俺の今の作業は力技意外の何者でも無かった。なので必然的にこれですよ。

「^{バースト}広大であれ『ウォーターボール』！」

中央寄りになったツウレム達に、メリーさんは直径二メートルほどの水の塊を作り出して飛ばしていく。押すというより押し流すなんていった感じだったが、ここに来て初めての水系の魔法に対応できず、敢え無くその体を廊下にまで引き戻すことになってしまったツウレム。

「勝機！！！」

押し込んだ事でツウレム達とやや間隔の空いたマイアが、その手にもつハンマーを掲げて疾走する。

「乾坤一擲！！ 今こそ我は解封する成り！！！」 衝波穿！」

廊下流れ込んだ中でも、一番抵抗していた最も大きくなったツウレムに、渾身の雄叫びとハンマーの一撃を浴びせるマイア。マジでワイルドだよねあなた。

「砕け散れええええええい！！！！！」

その全力全開の一撃が当たった場所から唸りを上げ、衝撃の嵐が巻き起こり直線上にいたツウレム達を巻き込んで全てを粉碎していく。その風圧は俺らが膝を曲げて姿勢を低くして耐え無ければならないほどに、恐ろしい威力だった。衣服が翻り、砕けた小石が顔に当たり、鳴り響いた轟音は遺跡中に響いただろう。メリーさんなんて悲鳴を上げながら伏せてしまっている。

「なんだよそれ……」

正直なところ目の前で起こった光景を信じられないでいた。魔法を使った様子も無かったし、いくら馬鹿力とはいえ、遺跡の廊下の幅が倍に広がるほどの損害を与える直線攻撃を使ってみせたのはどう考えても理解不能だ。直撃を食らったツウレムなんてもはや小石のような大きさが精一杯なほどの残骸と化している。

「どうじゃ我が奥義の威力の程は？」

勝負が決した事を確信しのかマイアはこちらに振り返って俺に向

かつてドヤ顔をかましてきた。

「すげえはマジで。腰が抜けると思ったわ」

いくら頑丈になった俺もあれをくらえばかすっただけで即死だろう。

「驚いたというよりは不可解だと顔に出ておるぞ。フッフ、お主を驚かそうと黙っておいた甲斐があったの」

なんでトウ力といい、マイアといい皆さんは俺を驚かそうとするの！？ 今まで気付いて無かっただけで、実は俺っていじられ体質！？

「妾の力の説明は帰ってじっくりしてやるわい」

是非お願いしたい。

「かぁー！ かなりの実力者なんて思ってたけど、なんだよ今は」

俺らの後ろからオッサンが声を掛けてきた。まだ巨体のゴーレムと戦っていると思っていた俺は、驚いて後ろを振り向く。そこには飄々と立っているゾナ、そして遙か後方では関節部分に十数の斧を差し込まれ、おそらく最後のトドメに頭からかち割られたゴーレムがいた。

「あの斧は数まで増やせるのか……」

「便利だろこれ？」

そう言って手斧サイズにした双転斧を見せ付けてきた。というか明らかにあっちも強敵だったろうに、たった一人でもう倒してきたのかよオッサン。この人も充分化物だね。

軽症でしかなかったが、傷の手当てと疲労回復のために少しの休憩をした後に、俺らは一目散で騎士たちに駐屯している階層まで戻っていった。

あのツウレムとの戦闘で、マイアが見事なまでに遺跡を破壊してしまったことは問題ではなかったのではなからうか？ 下へと続く階段まで塞いでしまったし。そんな不安を戻ろうとしている時にゾナにぶつけてみると。

「ああ、それなら心配しなくていいぞ。遺跡ってのはな、なんとそれそのものが一つのゴーレムみたいになっててな。ほっとけば勝手に直っちゃうもんなんだ」

「なんという不思議空間」

魔法って不思議なんて思ってたが、これは完全に永久機関になっているのではなからうか。ぜひ構造を知りたいものだが、さすがに手が届きそうにない物件だ。

「ということは途中で拾ったそれなりぐらいのお宝なんかも元に戻

ったりするのか？」

「ご名答。だからこそ遺跡つてのは絶大な価値がつく。っていつてもゴーレムや魔物なんかも復活したりするから、厄介なものでもあるんだがな」

それなりといっても、現在では作ることがかなり難しい純度の高い硬質なガラス瓶や、奇怪な形をした花瓶。なんの絵か不明な絵画や、様々な形をした置物等等、どれも技術的視点から見ればかなり価値のあるものだった。それが時間が経てば復活してくるのか。

そんな風に思いを巡らせながら一階層目戻ってこれた。

「さっそく私たちのテントで見て頂戴ねキドー」

メリーさんは布で包まれた石版を大事に抱えながら俺へと期待の眼差しをおくってきた。

石版に刻まれたワードの数は実に百弱にも及んだ。そのうちでメリーさんが知らなかった単語は十個ほど。あとは街に戻ったら神様に聞きにいくしかない。いままで最初の出会いのせいか敬遠していたが、この機会に一度会ってみてもいいかもしれない。

一応目的の物は発見したし、お宝の確保もかなりの数に及んだので任務はこれで完了ということになった。石版は一旦騎士団お預かりとなり、俺たちは予め乗ってきていた馬車へと荷物を積み込んでブローナスへと帰っていった。

第九話 新しい何か

神と謁見するためには各神殿の『啓司の間』と呼ばれる場所に行き祈りを捧げなければならない。だが実際に神と問答が出来るその場所は当然のように人気があり、俺達が利用できたのはブローナスに帰ってきてから一週間経った後だった。

その間にマイアからツウーレムを屠ったあの技の説明をしてもらう。

「率直に言えば、あれは妾のギフトの力じゃ。その名を『蓄積のギフト』といってな。一つのエネルギーを溜め込むことが出来る。あの時は妾が敵を殴った反動を溜め続けて放ったわけじゃな」

つまり、あの時ツウーレム達を散々殴り倒した打撃を、一発に込めて打ち込んだわけだ。岩を砕く一撃を百発以上溜めれば、そりゃあの威力にもなるか……。

「ギフトってどうやってみつけるんだ？」

人の誰しもが神からギフトを与えられている。しかしその使い方を見つめるだけでも難しい。

「人それぞれなのだがな。宿った力は全て違う物だとも言うしの。最初に見つけなければならぬのは発動の条件じゃの。ギフトは一定の条件を満たさんとその効果が発揮せん。妾の場合はエネルギーを指定することだったのだが、こいつは毎日素振りしておったら偶然見つけたものじゃったからの」

「素振りの力だけに集中したからか……」

「1」名答」

「だが、答えは己の心の中に用意されているとも聞く。自己投影こそが最も大切だと、神殿の神官は言っておるがの」

自己投影か……。しかし俺のギフトは他の人とは違いルーレットで決められた後付の力だしな。なんとなくではあるけど、その力があるのは感じるんだけどね……。

ギフトは段階的な壁が有り、その壁を越えることで力を増していく。一段階目が発動条件を見つけること。二段階目がギフト名の確信。三段階目がギフトの可能性を理解する事。マイアの場合は二段階目の壁を超えたところらしい。三段階目の壁を越えると、その力の成長は際限なく伸びていくらしい。しかしそこまで辿り着けるものは、世界中でも一代で一人いるかどうかだそうだ。そしてそこまですり着いた者は、歴史に名を刻む者が多いという。

一週間が経ち、俺らは改めて風の神殿に訪れる。結構な額のお布施をした後、俺とメリーさん、そしてフィリーが啓司の間に足を踏み入れていた。

神殿は神への感謝を表すところ、というのはこの世界での常識らしい。それ故か今俺達が訪れているナーブ神を奉る神殿の装飾なんかはその好みに合わせて作られているらしい。少し派手といいますが、軽いというか爽快な感じの建物になっていた。神官達も薄い緑色をしたローブを付けているものの、それ以外の服装は統一すらさ

れておらず、まさしく自由奔放な風を感じる場所だった。

「神よ神よ、風と歌を司るナーブ神よ。我が願いに答え給え」

膝を付き、指をからませて両手を合わせた姿勢で祈りを送る。一応俺も例に習って真似てはいる。

すると円状に作られた部屋の天井の方が輝きだして、目の前の祭壇に光の粒子が集まりだす。それを確認したメリーは神のメモを取り出す。あの石版から読み取って、まだ使われていないかもしれないワードの一覧を写しておいた物だった。

「ナーブ神さま。こちらの神聖文字の中に、現代において使われていない物が御座いますでしょうか？」

しばらくの沈黙が啓司の間に張り詰めた。メリーさんにとって起死回生となるかもしれない未開発のワード発見が、できるかどうか。これが懸かっている。そう簡単な事ではないようだが、最もそれが発見されるパターンは新しい遺跡からの物がほとんどらしい。確率としてはゼロともいえる行いではあったのだが、あの遺跡のお陰で数パーセントほどの希望は持てたはずだ。もしもこれで駄目ならまた遺跡行きだな……。

「……」

続く沈黙。今回遺跡に潜って得た宝を売っぱらった報酬で買った懐中時計では、今だ五分と経っていないが、その一秒一秒が緊張した雰囲気によってとても長く感じてしまう。

この時代の腕時計のような小型の物はまだ出来たての最新技術らしく、俺の買った懐中時計でさえ五万ディスクもする高額っぷりである。だが今回の遺跡探索で一人頭八万ディスク、総計四〇万ディ

クスにもなったので余裕で買ってしまった。家の建築代も最近では減少傾向にあったのでこれはいい機会とばかりに買ってしまったのだ。

「あ」

メリーさんは俺の少し右斜め前に座っていたのであるが、なにやら驚いたような声を上げていた。

「ありがとうございます。ナーブ神さま。これよりも日々の精進にて世に光を」

たしか今のはこの儀式の締めと言われる台詞だったはず。この部屋に入る時に神官に習ったことだし。ということは答えが出たのかな。

「見てキドー！ やったわ！ 私の、魔法の可能性は守られた！」

振り返ったメリーさんが抱えていたメモの単語の内、二つの文字が光り輝いていた。おそらくそれが未使用の魔法なのだろう。

そのままの勢いで抱きつかれたのには大いに大慌てだった。メリーさんの胸部に付いた柔らかいモノが――！ あたる跳ねる、揺れる大迫力で押し迫る。まだ膝を付いた俺に経って抱きついたらそれは胸に直撃するんですけどー！

「ワワワワワ！？」

しばらく抱きついてから、真っ赤になって離れていくメリーさん。数秒ではあったがとんでもなく恥ずかしい状態だった事に気付いたようだ。俺もおかげで耳まで真っ赤だが。

「『スピン』と『トルネード』か」

恥ずかしいのを誤魔化すように光り輝く文字を読む。
回転に竜巻ときたか……。フフフなるほどなるほど。それはメリーさんの許可があれば使ってもいいものになるんだな。そいつは、そいつは大変結構だ。

さて本題も最高の形で片付いたし俺のオマケを始めるとしますか。俺も私事で聞くことがあると、メリーさんには先に退室してもらった。基本的にこの啓司においては、当事者以外にその情報を漏らすことはならないと、過去に神からの言及を承ってるそうだ。そのためかこの啓司の間の壁は恐ろしく分厚くできている。扉も三重構造で十センチはあろう分厚さだった。

魔法による防諜のために入り口には神官二人が立ち並び、常に防御結界を貼り続けているという鉄壁構造だ。

「いるんだろ、ナーブ」

祈りの形も取らずに神様を呼びつける。神官さんあたりが見たら卒倒してしまうだろう態度である。

「ハッハッハ、啓司の間で神を呼び捨てにするなど前代未聞であるな」

さきほど光が集まっていた祭壇にナーブ神が座った状態で現れる。

「弄ばれてる相手に敬意を払うほどアホじゃない」

「たしかに色々と楽しませてもらっているよ青年。で、本当に愚痴を言いたいがために私を呼んだのかね？」

「確かに色々と言いたいことは山ほどあるが、どうせいつも俺の事は見ているのだろ？　それで楽しんでいるあんたらに愚痴を言っても馬耳東風だしな。今日は質問を一つだけしたいんだ」

神々が俺に与えた突拍子も無い数々の物に四苦八苦している事込でこいつらは楽しんでいるに違いない。なら愚痴を言ったとしても喜ばせる事になるとしか思えないので、ここはあえて言わない。

「なんでも聞いてくれ、と言ってやりたいところなんだけどね。

我々にも神としてルールという物があって、そこまで答えられる範囲は広くはないぞ？」

「重々承知してるよ」

世界に及ぼす影響は最小限にというルールが神には課せられているらしい。

「俺の質問は――」

さてここからが本番だ。メリーさんの計画で言えばほぼ達成され
たに等しい状態になったのではあるが、今までの部分は戦闘力や俺
の能力に頼る事が多かったので、それほど難しいとは思ってはいな
かった。

発見できるかどうかというのは難しいとは思っていたが、これは
運良く早い段階で達成できた。運の要素なんて頑張りようがないの
で神のみぞ知るだったが、メリーさんはなかなか神様に好かれてい
るようだ。

問題はここからなのだ。

通常新しい魔法が発見された場合にはその所有権は発見者の物に
なる。今回の石版のように個人で所有が認められている原本を所有
しているのなら、その力を独占して使うことができるだろう。だが
俺はこれについて懸念するところがあつたので、マリナおばさんを
通して情報ギルドに調査を依頼していた。

『過去、一般市民が原本を独占できたかどうかを』

答えは不安の通りにノーだった。

魔法というのは膨大な力だ。それを隠匿し独占できるというのは、
そのものに対して多大な恩恵を与える事になる。戦闘に使えば相手
は初めて見る魔法に対応が遅れ、富に置いてもその使用許可を売り
さばけば莫大な財となる。

おそらくメリーさんは独占せずに国に贈呈する気でのだろう
が、俺としては独占して欲しいのだ。

もちろん贈呈したとしても新魔法発見および開発の功績があれば、
メリーさんの目的である室長に成ることは達成できるだろう。だが
俺としてもっと偉くなっていたきたいのだ。

別にお偉いさんになってそれにあやかりたいとかそんなんじゃない。
い。

メリーさんははつきり言っただけ優秀だ。その上その志は高く、清い論理感も持ち合わせている。権力とは偉大で広大な力になるものだ。ただそれを得るものが正しい者とは限らないのが急所でもある。

魔法研究所の発展はこの国、ひいては世界の発展に大きな影響を与えている事だろう。しかしその内情を聞いて見れば、今だ非効率な選民意識をもった者が横行し、魔法を権威を振りかざすための道具としか見ていないものがある始末。

もちろん至極真つ当に機能し活動している部署もあるらしいのだが、それは少数派に入るようだ。

そしてもしメリーさんが独占しようとしたとしても、貴族などの権力者からの横槍が入り、手放さざるを得ない状況に追い込まれるだろうことは歴史が証明していた。故に俺が守らねばならない。

メリーさんの本番は終わったが、ここからは俺の本番なのだ。

俺はある物をもってジーニーさんの所に訪れていた。メリーさんの独占を実現させるために思い付いた唯一の方法を実行するためにはどうしてもジーニーさんの力がひつようだったからだ。

だが、人の良いジーニーさんに迷惑をかけるお願いははつきりいってしたくはない。俺は彼を良き友人だと思っているし、ジーニーさんも友人だと思ってくれていると思う。

だから今回は取引をする。

「失礼します」

ノックをしてジーニーさんの待つ応接室へと入室する。今回は訪問ではなく商談と伝えて来ているので、いつも紅茶を飲みながら談笑するような朗らかさは無く、やや緊張した空気がその部屋には漂っていた。

「よく来てくれました。キドーさんとうちやうて再び商談を交える事を楽しみにしていましたよ」

「ありがとうございます。その期待に答えられるかどうかはわかりませんが、良い結果をもたらしたいと思います」

ジーニーさんい最初に売ったあの薬草の保存方法以来、そこまで大きな商談をしたことはなかった。あの魔獣使い事件はジーニーさんからの依頼だったので商談ではないし。

「ではまず商談に入る前に私からの要求をお伝えしたいと思います」

「……商品を見せる前に要求から入るとは。いきなり驚かせてくれますね」

「それというのも今回私が頂きたいのは金銭ではなく、ある人物へ紹介なんですよ」

「僕にだれかとの繋ぎ役を頼みたいと？ 確かにその役目は数多くやってきましたし、キドーさんなら別に商品が無くて大抵の方なら――」

「紹介いただきたいのはバルナス公爵なのですよ」

「！？ それは……確かに通常ならば無理だとお断りする話ですね」

このプロニアス国に三人しかいない公爵。貴族のトップたるその三人の内の一人に、一介の職人風情を紹介するなど、百害あって一利なしまほどにハイリスクにもほどがあることだろう。

「よほど、いえとんでもないと言えるものでないと商談は成立しませんよ?」

俺的には五分五分かやや不利といった商談だが、通常では会うことすら出来ないお偉いさんにパイプを繋ぐためにはそれぐらいの勝算で充分といえる。

この商談のために作った商品。バックル、風呂、家に次ぐ俺の制作物第四弾を机の上に静かに取り出した。

「こいつの販売権をジーニーさんと交わすことが俺から提示する今回の取引です」

「……触ってみてもいいですか?」

「結構ですよ」

四角い形に整えられ、少し茶色味がかかったそれを手に取り確かめるジーニーさん。大きさとしては手のひらサイズなので調べるといっても直ぐにそれは終了した。

「良い香りがしますね、肌触りは変わったものですが……申し訳ないがこれがなんなのかわからないので教えてもらえませんか?」

「知らなくても無理はありません。それは俺の発明品でまだそれを合わせても十五個しか、この世にありませんから」

あの隠し工房で作った初めてのアイテムであるが、実際のところは家で使用するために作ったもので十五個中、五個は現在我が家の風呂で絶賛稼働中だ。

「それは石鹼という物です」

第九話 新しい何か（後書き）

権力も利権も別にそれ自体が悪いわけではない
結局それに溺れてしまう奴が多いのが問題だ

第十話 勝負手

石鹼の効能と使用用途を説明し、それからその価値をジーニーさんに訴えかける。

「それが全て本当だとすると……………すみません、私の頭ではその利益の桁が想像できないですね」

「これをまず月に三千個ほどジーニーさんに下ろします。まだコストが高く貴族相手の高級品しか取り扱っていませんが、いずれは一般層にも販売できるような安価な物も作ろうと思っています」

石鹼制作専用の機器を取り揃えなければ、大量生産が出来ないので取り敢えず高級油から作った者を貴族たちにはらまく予定だ。まず貴族を味方にしておけば大人気商品だからといって、無用な妨害が入ることもないだろうとい目算だ。

「間違いなく即完売してしまうと思いますよ。最近流行りだした風呂というものと組み合わせた美容効果に貴族の方々は飛びついてくるでしょう」

後日、ジーニーさんが商談の為にバルナス公爵に御目通りの機会があるということで、メリーさんを連れて一緒にすることになった。

バルナス侯爵は俺の情報網と情報ギルドで貴族を調べた結果、その中でも群を抜いたほどに正義感と愛国心を持ち合わせたお方、という話だった。貴族の賄賂なんかの内部告発をしたこと数知れず、されども逆恨みの為に襲いかかる不埒者を返り討ちにした数も数知れないとのこと。

なんでも元騎士団長の一人でありながら、その名誉の数々を讃えられて貴族入りし、さらに貴族としても活躍の一途をたどり、今に至る文武両道の完璧超人でもある。

もしメリーさんの後ろ盾になってもらうならば、コレ以上の人選はないだろう。

「それでは今回の商談はこれで成立ですね」

「ああよろしく頼むぞジーニー」

「それと今回の商談とは別件なのですが、人を紹介させてもらってもよろしいでしょうか？」

「……………商人というやつは、パイプ繋ぎに躍起になるなどよく聞く話だが、ジーニー殿から紹介を受けるのはそういえば初めての事だな」

「信頼というより面白みという意味では、ご満足いただけるお話になると思います」

「ジーニー殿がそこまで評する者なら一見の価値がありそうだな。よろしい会ってみようではないか」

「それではどうぞ入って下さい」

ジーニーサーーーん！！ ハードル上げ過ぎじゃないでしょうか？ あまりに緊張しすぎて指先震えちゃってるよ。

ここは空手の息吹で呼吸を整えて。フーフーフー……よし行くぞ！！

「失礼致します」

ちよつとボーつとしてる間にすでにメリーさんがドアを開けていた。この状況になってしまった顛末を聞いた時からちよつと混乱気味だったが、なんとか説得して連れてきたんだけど。完全に今、目が泳いでしまっているが大丈夫か？

「失礼致します」

メリーさんの後ろに付き従う形で俺も入室。

すでに礼の姿勢でフリーズしているメリーさんに変わって挨拶を送る。

「この度は突然の訪問に答えて頂き、ありがとうございました」

「うむ、ジーニー殿が興味惹かれる相手であるのであれば、こちらから会いたいとも思う人物だと期待しておこう。ただ顔見せのためだけではあるまい、何か私に話があるのであるう？ 聞かせてみせよ」

予想通りな大人物だ。同じ部屋に入っただけで、圧倒される雰囲気飲まれそうになる。これが本物というやつか。

礼の形を解き、顔を上げて、線をバルナス公爵に合わせる。

服装は貴族達が好むような、煌びやかな装飾を一切つけていない服装だった。肩当てから伸びるマントは足の長さまで伸びる物で、

中の服装はタキシードに近い高潔さを感じるものだった。しかしその体格の大きさとむき出しの腕、そしてゴツイブーツが元騎士団を感じさせる武力を感じさせる。顔にある大きな傷跡と輪郭に生えそろうた無駄に似合っている髭も、威圧感を増す要因になっているだろう。

会話の為に目を合わせた時に、なにか驚きの色がバイアス公の目に見て取れた気がしたが、気のせいだろうか？

「流石お噂に違わぬ御方で大変嬉しく思います。それでは率直に要件を述べさせて貰いますと、こちらにいるメリーの後見人になって頂きたいのです」

なるべく敬語、なるべく丁寧に心がけて喋っていく。

「ほう、この俺が利権嫌いの公爵と知っての話なんだろうな」

眼光が鋭い！ その威圧さは、すでに殺気の域ですよ。

「もちろん、利益を得るためにこのお話を持ち込んだわけではありません。実はまだ発表してはいますが、メリーは新しい魔法を発見した御仁なのです」

「!？」

「……いいだろう最後まで話してみよ」

なんでここに取り付いたのか説明しなかったジーニーさんは驚きの顔になり、バイアス公は少し興味が湧いたように口の端を上げていた。

「魔法研究所に勤める者なのですが、家名が無いことから分かるようにメリーは一般市民です。なので魔法を発見したとしても、その独占は難しいものとなりますでしょう。そこでバイアス公爵様に後見人になってもらうことでその権利の庇護をお願いしたいのです」

「なぜ俺なのだ？」

「聞いた話によれば、あなた様は自分の臣下達を實力のみを見て選出しており、重臣の中には一般市民もいると聞き及んでおります。それにこれは無礼に値するかも知れませんが、私としては貴族で最も信頼を置ける人物だという事も大きな理由であります」

「……なるほどな。で、その女を庇護した結果、俺に得はあるのか？」

「そうなるよね。いくら正義感の強いバイアス公爵でも今までの貴族の、階級意識の常識を覆すリスクを易々とは受けられないよね。」

「もちろんです。メリーはそこまでこの魔法の独占に対しては固執しておりません。ただ、この先を見据えるならば手元に置いておいた方が何かと役に立つであるという事で、この度のおねがいなのですが。もし、公爵様が庇護して頂けるのでしたら、公爵様の信頼に足る人物へと、優先的に新魔法を回すことも可能となりますでしょう。お望みとあればバイアス公爵の許可した者のみに、その使用权を認めてもらっても構いません」

「ほほう、家名でもなく国でもなく派閥による固有魔法か。新しい発想だな」

「それとバイアス公爵様はなんでも人材を集めておいでとか。将来

性があり、清き志をもつ若者をご所望と聞き及んでおります。その条件にも十二分に当てはまると思われますが？」

「貴様それをどこで聞きつけてきた」

腹に来るような低音で重い響きの声が部屋を揺らす。コエー。

「事前にバイアス公爵を知るために、学習した際にした予測で御座います。尊敬されるに値する人物で、人望も厚いと同時になにやら敵も多いようですから。一般市民起用もその一環かと推測します」

「ふんっ言うではないか小僧」

バイアス公爵なにかを考え込む姿勢を取ってしまい、重苦しい沈黙が続いていく。

「女、そなたの望みを言ってみよ」

「えっええ！？ わ、私ですか！？」

「この部屋に女はそちだけだぞ」

ここまで完全に置いてきぼりにされていたメリーさんに、突然話が振られる。おそらくこれは試したい、というか見定めたいのだから。メリーという人物の器を。

「私は……………私は魔法の可能性を広めたい。少しでも多くの幸せを生み出したい。ただそれだけが望みです」

「……よし、よく分かった。しかし流石に新魔法の利権絡みの騒動から完全にその女を守るには後見人ではちと弱い。おんな……メリーとか言ったか、そなた家族は？」

「あ、はい。両親は既に死別していて、家族は叔父が一人おります」

「そうか、家族は居るのだな。それは少々時間がかかるやもしれんな。その叔父という奴の名は？」

「えっと、冒険者ギルド所属のゾナって言います」

「まさか『酔狂』のゾナの事か？」

「はい、お恥ずかしながらその飲んだくれの事で間違いないです」

今まで殆どを険しい顔で話し込んでいたバイアス公爵が一転、それはもう楽しそうに笑い出した。

「ガーッハッハッハッハ。そうかそうか、メリーはあのゾナの姪になるのか！ ガッハッハッハ！！ これは愉快愉快なんと面白き天の巡りあわせぞ」

なんとという豪快な笑い声だ。ていうかうるせえ！！

「ゾナ殿とはお知り合いなのですか？」

「なに、俺の騎士団時代に育て上げた不肖の弟子の一人よ。ならば話は早くなる、奴の説得など無視でも良いな。メリーよ」

「はいい！」

「そち、俺の養女にならんか？」

マジかよ。

「ふえ？ え？ えっえええええ！？」

予想外ですよ、その選択肢は。

さすがにあんな結論になることは予想してなかった。確かに公爵家の娘なんて箔が付いたら、手を出すわけにはいかないだろう。下手をすれば国ごと敵に回しかねないからな。

「か、考えさせて下さい」

流石にメリーさんは即決出来なかったので返事は後日ということになって解散する――はずだった。

「あつとキドーは残って行け」

なぜに俺がご指名なんですかー！ 出来るだけ頑張ったけど、やっぱり口調がおかしかったですか！？ 不敬罪ですか！？ 首チヨンパですか！？

あれ？ 俺バイアス公爵に名乗ったっけ？

第十話 勝負手（後書き）

ごつい武将キャラ大好き

第十一話 見通す目

メリーさんとジーニーさんが退室し、俺だけが取り残された応接室は先ほどのように重苦しかったり、威圧的だったりとはまた違う、居心地の悪い空気が漂っていた。それは不可解さという疑問漂う空気だ。そういつてもその雰囲気は毒だと思っっているのは俺だけのよ、うで、バイアス公爵は葉巻を取り出して火を付け、椅子にもたれかかってリラックス状態だ。

「硬くならんでもいいぞ。そんなとこに突っ立ってないでこちらに座れ」

呼び残された理由がまったくわからないままに戸惑っていると、さっきまでジーニーさんが座っていた椅子、バイアス公爵の正面に位置する場所に案内される。

「あ、じゃあ失礼します」

「……」

ただ座っただけのはずなのに、なぜかバイアス公爵は俺を見て笑みを浮かべている。

「公爵の正面にそうも萎縮なく座れる一般人なぞそうはいないぞ？ おもしろい奴だな」

やってしまった！ 選民意識や階級層なんて物の欠片も理解も感じ取れてもいない俺では、貴族に対してどうすればいいかの分別がまるでつかない。今の場面も本人に許可されたとしても、畏れ多い

と遠慮する場面だったか。

「気にしなくてもよいぞ。だが他の貴族の時にそれをするのは、まずい事になりうるかもしれんからな、覚えておけよ」

セーフ。危なく無礼斬りにあうところだった。

何がおかしいのか笑顔のままで、小さく笑い声を上げているバイアス公爵。そして葉巻を命一杯吸い込んで吐き出すと、その表情は真剣なものに変わっていた。

「さて、おぬしには聞きたい事がある。資料を持て」

バイアス公爵が命ずると、扉から執事らしき人が紙の束を持って現れ、それらを机の上に置いてバイアス公爵の後ろに待機した。

「ではまずおぬしがブローナスに来たのは約三月ほど前で相違ないな」

「え、あ、はい」

なんだその質問は？

「下手に取り繕うなよ？ 正直に答えたほうが身のためだ」

会話の内容、たぶん今の状態が素なのだろうバイアス公爵の鋭い目線に、冷たい汗が背中を伝っていった。

「どいった経緯かは知らんが、その後北西地区のスラム街に土地を購入して、多数の子供たちと共同生活をしている。生産ギルドに登録しており、一月でそのランクを一段階上げて、今は鉄の位か」

悪い予感しかしない、なぜここまで俺のことに詳しいのか、いやそれよりもなぜ態々一般市民でなるべく目立たないよう努めてきた俺の事を調べ上げたのか。

「発想と柔軟な思想を持ち、しかしそれによる出世や名誉、金銭に関しては消極的。ほう今ぬしの家にはブルマイア・リーンが住んでいるのか。なんとも理解しがたい、ちぐはぐで不釣合いな話だな」

見知らぬ人に自分の個人情報がここまで知られていることが、こんなにも恐怖を感じるものだったなんて……。背中だけに流れていた冷や汗は、すでに全身を覆っていた。

「とまあ、貴殿のことにに関してはかなりの範囲で調べがついている。そして、なぜここまで調べたのかというところ……これだ」

そう言っただけで差し出された一枚の紙。その紙には大いに見覚えがあった。それは俺がヒーロー活動と称して悪党を倒した際に、その存在を証明するために残っていた置手紙。あのゲイロス一味の一件以外にも、あれほどの大規模ではないが、盗賊団、窃盗団、賞金首などを数回にわたり縛り上げて警備隊に突き出している。何度かは大衆の面前にさらすような形で目立つようにその名と所業を明かしたので、今ではこの街に知らない人はいないほど有名になっていた。

「その反応を見るだけで十分だ。クックック、悪党一味と警備兵共を手玉に取っている噂の人物がこんな小僧とはな」

紙を見たときの一瞬の動揺を見抜かれたのか、すでにバイアス公爵の中ではヒーローこと『シャドーフィスト』が俺であるという確信を持ってしまったようだ。

「そう強張るでない。別に警備隊に突き出すつもりも、世間に向けて公表するつもりもない。これは我が名と神に誓って約束しよう」

犯人探しといったわけではないのか……。だとしたら意図がさっぱりわからない。

「どうだ？ おぬしがシャドーフィストと認めるか？」

誤魔化す？ 嘘で切り抜ける？ いや、無理だな。こんな駆け引きを仕掛けられた状況なんてほとんど経験したことのない俺では、騎士団と貴族の両方を駆け抜けてきた百戦錬磨の兵に、下手ないいわけなど一切通用しまい。それどころか、それによってこんな大人物に不興を買ってしまうほうがおそろしい。ならば――。

「俺がシャドーフィストで間違いありません」

「そうそう、そうでなくては見込んだ甲斐がないというもの。そうだ一応証拠をだせるか？」

「一連のシャドーフィストの犯行はそのほとんどを徒手空拳、素手にて行われている……というのは証拠になりませんか？」

「素手以外の攻撃方法は？」

「投げナイフと初級魔法」

「よろしい、そこまで知っておるのは俺を含めても数人といったところ。それ以外では本人しかいないからな。では改めて自己紹介させてもらおうか。俺の名はバイアス・デーガー。公爵であり、騎士

団特別顧問も兼任し、そして情報ギルドの最高責任者でもある」

「えっ!?!」

前の二つは聞き及んだ話だが、情報ギルドの部分は初耳だ。そもそも情報ギルドの組織構成すら謎な部分だらけで、上層部にいたっては顔も名前のお目にかかったことはない。そんな秘密主義のギルドのトップがいきなり名乗りを上げるなんて……。そうになると、三大公爵で、二人しかない騎士団特別顧問で、一ギルドのトップでもあるってことになるが……。とんでもねえ。

「俺の秘密すらバラしたのには、これからおぬしとは腹を割って話したいと思っておるからだ。そもそも俺はおぬしのこの行為については好意を持っている。よくぞやったといつか褒めてやりたいと願っておったほどだ」

豪快ながら嬉しそうに賞賛の言葉を送ってくれるバイアス公爵。その言葉を聴くと冷え切っていた腹のそこから熱が再び取り戻されていく。別に誰かに褒められなくて始めた物ではなかったけれど、誰かに認められるなんて思ってもいなかったから、不本意ながら嬉しくなってしまった。

そしてバイアス公爵の賞賛も、よほどの物だというのもよほどのものだというのも理解できる。徹底した情報規制で隠してきた情報ギルドの身分を俺に明かしたということは、少なくとも信用を俺に向けているということだ。それが俺に対する評価としても受け取ることができた。

「ありがとうございます」

「うむうむ、やはり予想通り実直な心の持ち主のようだなによりだ。

さきほどのメリーの件で見せた饒舌ぶりは想像と食い違つて、やや面を食らうたわ」

そう、俺は本来そこまで喋らない。別に喋ろうと思えば喋るのだが、それは必要だから喋るだけであつて内面では、あーだこーだ考察してたりするが、何もなければやや無口な部類に入る性格なのだ。

「俺にとつて必要なことでしたから」

「『男児は困難に向かつてこそ華』か、いいぞいいぞ、なおさら期待が高まるじゃないか！」

最初に自分の情報を提示されたときは恐怖に固まつたが、今はその内面を見透かされることが、なんだか嬉しくてたまらない。己の道を進むことに何の迷いも無く生きてきたが、変人と罵られることになんの感情もわかなかつたわけじゃなかった。鈍感になつてはきているが、やはり理解できない者扱いされるのは、どうしようもない孤独を感じるものなのだ。

溜まりに溜まつた孤独感が、内面を言い当てられることに光が指して晴れやかになっていくようだ。俺は今、少しだけ震えている。

「では、成果を出した者には褒美をやらねばな」

「そんなっ！？ 俺の勝手にしたことですから、黙っていてくださるだけで十分ですよ」

「そうあわてるな。褒美と理由をつけてはいるが、これは俺からの提案でもある。どうだ、その悪党共を捕まえる為の協力者が欲しくないか？」

「……どういうことでしょう？」

「なに、俺が最近設立した情報収集部隊というのがあってな。その力を一部貸してやろうというのだ」

「今までのように自然に情報が集まるのを待つんじゃなくて、目的の情報を自ら集める部隊ですか」

「理解が早くて助かる。こういう仕事は元から警備部隊や騎士の一部が担っているのだが、専門的にこれを生業にするものはいなかったのだ。そこでまだ実験的ではあるが、俺がその専門家を育てようと画策したわけよ」

「そんな希少な部隊を俺に貸してもいいんですか？」

「おぬしはあまり自分の価値を知らんと見える。情報網の広さこそ我らに劣りはしているものの、情報を繋ぎ合わせていくその手腕は大したものだぞ。おぬしが捕まえた賞金首や窃盗団などは、どの情報網にも引つかかっておらんかったのに、見事に捕まえてきたのがいい証拠であろう。そこをその部隊のやつらには見習ってもらいたいのよ」

「バイアス公爵様には遠く及ばないと思いますが」

俺の正体にたどり着いたわけだし。

「おんし、俺の役職をもう一つ増やす気かあ？ さすがにこの身が二つにならねば手が回らんぞ。それにいつまでも老獪が上に立ち続けるよりは、若い奴等が伸びたほうがおもしろいではないか」

そうだった。公爵、騎士団顧問、ギルド長の三つだけでも一人の身には余る代物なはずだ。なんせ国の最高機関の三つの頂上位置にいるわけなのだから。

「それに、俺はこの国が好きでね。そんな国に悪党が蔓延ってるなんて自体は見過ぎすわけにはいかんのよ。だが、知ってのとおり偉くなりすぎて、俺自身が動くことは叶わんのだ」

「つまり、俺に公爵の代理をしると……」

「別にどの悪党を倒せなんて命令を下す気は一切ない。まあこちらが見つけた犯罪情報は教えていくので偏りが出るかもしれないが、おぬしはおぬしの好きなようにやってくれて構わない。おぬしが動く時に部隊を使ってくればそれで十分だ」

提示された条件は破格も破格、俺にとって都合の良すぎる物だ。もしかしたら、情報収集部隊はまだ経験が浅いために実戦経験を積み重ねさせるといふ目的もあるのかもしれない。それを差し置いてもいい話なのは間違いない。

意欲的に活動してきてはいたが、あの魔獣使い事件で発見した裏組織の実態なんかはまるで掴めていない。俺とマイアだけではその方面に関しては限界を感じだしていたのは事実だし。

「……………分かりました。どれだけ出来るかわかりませんが、その話お受けします」

「フッフ、その思い切りの良さはいい事だ。なら部隊との打ち合わせは、部隊の隊長であるフェルダナ男爵という男とするとよい。あと、キドーが表に出なくてはならない場面に陥ったときはこやつに頼るといいだろう。一般市民から騎士になって、俺が部隊設立のた

めに貴族に引き抜いた男でな。今頭も切れるし、腕も立つ。やや謙虚すぎの節はあるが信頼できる男だぞ」

「了解しました」

「そうだ、条件が一つだけあった」

ここまで話しが進んで、後だし条件！？

「月に一度は俺と会食でもして活動報告をしてくれ。いや、俺の家に招いては悪目立ちしてしまうか……。そうだ、おぬしジーニーの所には何度も足を運んでいたな。それではあやつの家で行いことにしよう。ついでにあやつもこの話に一枚噛ませてやつてもおもしろいな。クッククック」

「活動報告なんてフェルダナ男爵から逐一伝わるのでは？」

「たしかに二度手間だろうが、そこは俺のわがままだ。若者の成長を見届けるのが俺の趣味の一つゆえのな」

若者を抜擢、起用してきた経緯はそんなところにあったのか……。趣味……。まあ、実のあるいい趣味なんだけど。なんか急に大工の親方って単語が頭に浮かび上がったきたな。

かくして、メリーさんの後見人を探しに行ったのに、俺の後見人

が見つかってしまうという結果になってしまった。とにかくこれで本来の目的、ヒーローとしての活動を本格的に始めれそうだ。そしてあの裏組織『ルドラの右手』にも、鉄拳をお見舞いしてやれる光明が見えたかもしれない。

第十一話 見通す目（後書き）

遂に書き溜めに追いついた。

しばらく次の章の書き溜めに入ります。

第一話 始動

雪の舞い散る冬を越え、新たな予感を思わせる春がやってきた。俺がこの世界に生まれ変わった時と同じ季節が。

この一年は長かったと思う。命の遣り取りを幾度と無く繰り返し、今まで出来なかったことが出来るようになり、魔法という力を目のあたりにする。俺にとっての非現実的な日常を、現実だと受け止める。いや何も感じずに当たり前だと思い、ここが俺の世界なんだと実感できるまで、およそ一年を要してしまった。あまりの出来事に、浮き足立ったり、目を逸らしたりしていたわけではないんだけど、やっぱりどこか心の中で起こる誤差を拭いきれずに、まるで現実味のある夢であるかのような感覚だったのだ。

それでもやってこれたのは、曲がることの無かった俺の信念と、隣にいてくれた仲間達のお陰だと断言出来るだろうね。

あの遺跡探索から今日までのことを軽く振り返ろう。あの年の年末、室長の査定が始まる直前に、メリーさんは用意していた新魔法の発表と、その魔法を使った新系統の術を研究所に提出した。国単位では十年に一度出るかどうかの偉業に研究所どころか、国が揺れ動くまでの大事になったが、その功績を称えたという名目で、直ぐ様バイアス公爵の養女へと迎えられる事になり、メリーさんが厄介ごとに巻き込まれる事はほとんど無かった。

あの後でしばらくして分かった話だけど、俺らと同じ日に遺跡に入っていた冒険者チームを雇っていたのは、メリーさんが毛嫌いし

ていたあの侯爵のボンボンだったらいい。あの探索で深手を負ったようで、あれから十日ほど入院するはめになったとメリーさんが笑って説明してくれた。その場にいたゾナが――

「どうせ、親のお陰で上げた成果を自分の力と過信して、俺に不可能はないなんて思ったってとこだろうよ」

と苦言を吐いていた。ゾナのオッサンは基本は酔っぱらいのオッサンではあるが、冒険者の仕事関連だけは真面目な面を見せる。

メリーさんは功績を認められ、希望通りに室長の座をロクデナシの男から、見事奪い取った。室長という権威と、公爵の娘という権威を手に入れた影響で、嫌がらせ等の妨害などは激減し、いままで足を引っ張られて発揮出来なかった実力を存分に振るっているようだ。

それのお祝いと称して、盛大なホームパーティーが開かれた。バイアス公爵主催なのに、なぜかジーニーさんの自宅で。まるでメリーさんと接点がないジーニーさんが、なぜに巻き込まれる事になったかは分からないが、メリーさんとゾナのおっさん、バイアス公爵にフェルダナ男爵とその他十人の情報収集部隊の面々。そして俺の家の住人全てがお招きに預かった。なかなか大人数で色物なパーティーとなった。

机に並べられた豪華な料理の数々に、うちの子供達ははしゃぎまわり、それを制する為に右往左往するトウカとジョイ。メリーさんとマイアは魔法談義に花を咲かせ、なぜか俺はバイアスがいかにか昔から強引かという愚痴を、ジーニーさんから延々と聞かされるハメになった。バイアス公爵とゾナのおっさんは旧知の仲なので、仲良く飲んでいたのだが、気付けばその周りの机には置く所が無いほど、空のコップが並べられていて、凄まじい飲み比べが始まっていた。最終的な容量としては樽一つくらいは飲んだんじゃないかと思うほどの、飲みっぷりであった。

大きな出来事といえば、俺の石鹼作りは、年を超えたあたりから本格化していき、今では一般層への販売も行なっている。大きな専用の鍋や、流しこむ型などを大量に作り、作り手を募って工場のよな施設で生産している。もはや俺がその工程で関わっているのは、水酸化ナトリウムを精製して渡しているくらいになっていた。なぜそれだけが残ってるかというと、あれは結構な猛毒なので、その取扱には注意が必要だったのだ。

工場の働き手は、スラムで職にあぶれている人達を優先的に雇った。もちろん犯罪的な事を平然とするような輩は、雇ってはいないやむを得ない事情で、その身をスラムに寄せている人達が主な人選だ。管理の方はジーニーさんから、商売と生産を両立できる人物を回してもらった。まだ年は若かったが、話題になりつつあった、石鹼の大量生産に興味があったらしく、二つ返事で了承してくれた。作業分担による効率化を計った工場の構造にも注目して、かなり熱心に働いてくれているので大助かりしている。

石鹼は既に街でちよつとした流行となっていて、作れば作った分だけ売れていった。おかげでかなり儲かり、最近財布の心配をすることが無くなってしまった。工場の責任者である商人さんに、儲けの二割ほどを手渡したら。

「げ、げ、限度って物がありますよっ！」

と、なぜか怒られてしまった。今まで下働きを続けてきた彼には、途方も無さすぎる金額だったらしい。一気に稼ぐことばかりして

いた俺は、どうやら少し金銭感覚が少々狂っていた模様だ。それからは資金管理をトウ力にお任せすることにした。

そんなこんなで、ほぼ一年が経とうとしていた今感動の瞬間を迎えていた。ついに、ついに我が屋が完成に至ったのだ。隠し部屋含め二十三部屋、掛かった資金六十万デイクス超、使った角材数知れず、失敗した事も数知れず、数多の努力の成果が遂に実を結んだのだ。内装も全て綺麗に整え、家具も搬入済み、庭も綺麗に設えてある。家の敷地を囲うように石の塀を作り上げ、門も金銭的余裕が生まれてか作ったので、知り合いになった生産ギルドの仲間に石造りで作ってもらったのを設置した。家自体は深い赤みの掛かった色で統一されていて、黒目のニスで染めた木の柱が見え隠れしている。派手には作らなかったものの、その規模はまさに豪邸といえるだろう。

完成する様子を見ていく過程すら、俺の心は踊りっぱなしだったのに、完成した時、どんな心境になるのか想像出来なかったんだが……… 凄い……… 頭が……… 真っ白だ………。

「うわあああああぁん」

「うっうっグスッ」

俺の隣では家の建築を毎日のように手伝い、更に制作までやってきたリッキーとロイが号泣してる。気持ちは分かる。もしもコレが俺の初作品だったとしたら、あまりに立派すぎて泣いていただろう。

自分で作っておいてなんだけど、過去にこれほど立派に作り上げられた作品はないだろう。知識も経験も曖昧なままで、よくぞここまで物を作ったと自分を褒めてやりたい。だが、俺の全身は喜びで溢れかえっていて、思考も体も上手く動かない。まさに言葉も無かったのだ。

家が完成することで、俺は遂にこの街での生活の基盤であり、活動拠点を得ることが出来た。資金の方も、それなりの余裕と、安定した受給もできそうだ。俺は一年という時を掛けて、この場所に居を構えるに至った。一年でここまでこれたのは、奇跡といえるほどの速さだったろう。この世界に来ることが決まった時点で、ヒーローとして活動していくと計画を立て、活動拠点や資金調達などはその時点で予定に入っていた。だがそれが得られるまでは数年を最低でも要すると思っていたのだが、様々な人の手助けがあり、多大な幸運に恵まれて、予想よりも遥かに早くここまで来れた。本当にこれには感謝の気持ちで一杯になる。

そして、年が明ける頃から本格化していったヒーロー活動。バイアス公爵から預けられた、情報収集部隊に犯罪に関する情報を集めてもらうことで、その活動範囲は飛躍的に広がっていた。今までのように噂話や情報ギルドからの情報を合わせて推測していただけとは違い、非公式ながら国に所属している部隊だったので、警備部隊や騎士団に保管されているような情報も手に入れられるようになったのは、大きな変化だった。更にその部隊の力が活動の役に立っているからいえるのは、実際に俺が実力行使に及んだ時に、その痕跡を消していき隠蔽してくれることだ。普段から正体を隠す努力をし

ているが、いざ自分自身が力を振るうとなると、流石にその当たりを気にしていられる余裕は無かった。俺の至らない所をサポートしてくれるその力は、ヒーローとしての活躍に絶大な効果をもたらしてくれた。

その甲斐あって、本格化してから半年の間で解決した難解な犯罪は六件になっていた。少なく思えるかもしれないが、基本的に俺達が標的としている悪党は、警備隊の手に負えないような凶悪な奴等や、法の網をすり抜けるように裏で暗躍する者たちだ。もちろん情報網に引っかった犯罪なんかは、警備隊に情報を渡してそちらに解決してもらっている。あまり警備隊の仕事を掻っ攫っては、目の敵にされかねないし、民衆からの信頼も減りかねないからね。

俺というヒーローはあくまで最終手段。どうしようもないような悪を滅ぼす、最後の拳なのだ。

そんな重大な犯罪者を一月一件ペースで解決してこれたのは、脅威の解決速度だといえるだろう。そうは言っても、元から問題視されていながらも、なんともなくなって放置されていた案件もいくつかあったので、これからは少しそのペースは落ちて行くとおもうが。

ある時、ヒーロー活動のご褒美をバイアス公爵がくれると言ってきたので、マイアを除いた俺達家族全員の国民登録をお願いした。一年間でさらにストリートチルドレンを拾って増えた、総勢四十五名。出所不明でスラム住まいという訳ありそうな人を国民登録して、正式な国民と認めてもらうのはかなり難しくて、俺の力でそれを叶えるのはどうにもならなかった。

「そんな事ならお安い御用だ」

と散々俺が難航した出来事を、あっさりと解決してくれた。きさくというか豪胆な雰囲気のせいか、あまり政治に関わっているイメージを持たせない公爵なのだが、それでも彼はこの国の中枢人物の内の一人。順位で言えば、王様の次の次ぐらいに偉い人なのだ。その権力もあつてか、俺達の国民登録はお願いした一週間後には完了してしまった。

これで俺も出所不明の不審人物という埃を払うことができ、堂々と活動ができるというものだ。もちろん目立たないように心がけるのは変わらないが。

そんな事があつて、俺の家にはついにポストを配置できるようになった。今まではその素性を調べられたくが無い為に、俺宛の荷物なんかは全て生産ギルドに預かってもらっていたのだ。

そのポストに届いた、灰色で出来た封筒を手に、俺は書斎で中に入った手紙を読んでいた。この灰色の封筒に赤い蠟で封をした手紙は、情報収集部隊の隊長である、フェルダナ男爵からの最近集められた情報や、気になる噂話などである。三日に一回は届けられるのだが、時には悪党の確定情報だったりする。だけどそんな事は滅多になく、貰った情報で気になる事があれば、こちらからフェルダナ男爵へと出向いて話をする、といったのが普段のスタイルだ。そして今回の手紙に書かれた情報は見逃せないものだった。

『非法法の薬をこの街へ持ち込む物がある、もしくは既に持ち込ま

れた可能性あり』

非合法の薬。幻覚作用や、五感への干渉、気分高揚、そして高い中毒性。世にいう麻薬だ。地球での蔓延と撲滅の歴史は知っているが、この世界でも似たような物のようだ。ある国では、法律で規制しなかった為に、新しく強力な麻薬が流行った時、その国力が僅か十年で半分以上にまで下がってしまったことがあるらしい。

現在のプロニアスの王は、諸国にその名を響かせる善王で、麻薬は全面禁止と厳しく取り締まっている。だが、規制が厳しいほど裏での需要が高まるのも、当然の結果と言えそうなかもしれない。そして、悪い物だという認識がある国民にそれを蔓延させるには、普通に売るだけでは喰いつくことは、滅多にない。売人はそれが麻薬と言わずに安く売り、中毒症状に無理やり陥れてから通常の取引を開始する。それと知って利用するなら自滅といえるが、そんな使い方を放置する事など言語道断だ。

首から下を覆い尽くすマントを肩から掛ける。すでに日が落ち始めていたので、トウカに今日の晩御飯は帰ってから食べると告げ、俺は情報収集部隊の本部へと向かった。すでに俺の行動原理を理解しているフェルダナ男爵なら、この手紙を読んですぐに訪ねてくることなどお見通しだろう。

さあ今日も今日とて、悪党共に鉄拳をお見舞いしようか。

第一話 始動（後書き）

椅子に座りすぎて腰をやらかしてしまう。パネエ

第二話 活動

プロニアス国の裏側を照らし出し、俺の活動の支えとなっている情報収集部隊、通称『フクロウ』の面々は、バイアス公爵自らその人員を集めて作り上げた部隊だ。その出は様々で、騎士、冒険者、傭兵、商人の護衛。さらには他国の兵士に、元盗賊なんてのもいた。信用が命の部隊であるのに、そこまでバラバラでちぐはぐな面子で大丈夫かと不安に思ったが、フェルダナ男爵曰く。

「あの人が大丈夫と言って、そうでなかった試しはありませんから。まともであつた事も少ないですしね」

怪しさ満点の部隊ではあるが、その一人一人はバイアス公爵の慧眼^{がん}に適つた者達だというだけで、全幅の信頼を置ける保証となるようだ。実際問題彼らの働きは相当のものだった。まだ活動を本格化させてから一年ほどしか経っていないらしいが、彼らの情報で判明した汚職事件は二十三件、賞金首の滞在先四件、解決した事件も確定しているだけでも八件に及ぶ。わずか十一人しかない部隊の業績としては、驚異的な数字だろう。

たしかに今まで情報戦という戦いを専門的に扱った人も部署もない中ならば、彼らの集める情報の価値は今までのものとは隔絶した差を生み出すだろう。それこそ子供と大人の差よりも開いたものかもしれない。情報を商品としていた情報ギルドでさえ、受身でしかなかったので、その差は大きい。しかも今ではこの部隊のバックに情報ギルドが付いているようなものだ。なんせ上司が一緒なわけだし。

隊員の仕事は主に潜入や潜伏、おとり捜査などのある種超法規的活動を行う事だ。もちろん強引な手は最終手段としてしか使用しないが、効果的であるのも事実。その活動を大まかに知った時は、無

茶をするとも思った。なんせ、非公式とはいえ国の認定を受けている部隊が、ほぼ犯罪まがいなことまでしているのだから。しかしその疑問にはバイアス公爵が答えてくれた。

「法とは平和と国を守るためにあるものだ。それを害する悪党を守るためにあるわけじゃあない」

……………なるほど、と思ってしまう。人によれば屁理屈に聞こえなくも無いし、筋が通つてるとも受け取れる。だけど俺が思ったのは、バイアス公爵と俺はすごく似ているんじゃないかということだった。俺のヒーロー活動も言ってしまうえば犯罪行為といえる。だが、それを理解した上で、やらなければならぬと確信しているからこそ活動だ。話を聞いて、なんだかちょっと嬉しくなってしまった。

フクロウの本部は密集した住宅地の中にある。外からの見た目は普通の木造の一軒家なのだが、地下に大きな空洞があり、そこが活動拠点となっている。その地下室からは地下道に出ることが出来、隠密行動にもってこいの物件なのだ。今日もそこへと訪ねて行く。住宅地なら人が多少入り込んだところで目立つものではない。あまりに人が多すぎるが故に。

「お邪魔しマース」

「来ましたか、キドーさん」

家に入り、居間に出るとそこにある机でフェルダナ男爵が紅茶を飲んでいた。

「そりゃあ、あんな手紙読んだらね」

「では地下に行きましょうか。他にも何人か待機しておりますし」

フェルダナ男爵は俺よりも年上、たぶん二十代後半のはずだが、なぜか誰にでも敬語で話す。精悍な顔立ちな上にいつも身綺麗にしてい、髪も短いながら艶のある茶色の髪をしている。それに、一般市民から騎士になって、そこから男爵になったという経緯のわりには、その物腰がとても上品だ。聞いてみたところ、貴族に仲間入りするときに公爵家で受けた教育の賜物なのだそうだ。それを話すフェルダナ男爵の視線は遠くを見つめ、なんだか哀愁を漂わせていたので、詳しい話はあえて聞かなかった。どうせあの豪快なバイアス公爵のことだ、教育という名の矯正だったのでだろう事は、すぐに予想できてしまったからな。顔に苦勞が染み出てるもんね、フェルダナ男爵は。

フクロウ本部の会議室の椅子へと腰をかける。本部の部屋はざつと三部屋。会議室、資料室、倉庫の三つだ。完全な石造りで作られた無機質な部屋ではあるが、秘密組織の部屋としてはお似合いといったところだろう。会議室と倉庫はまあ普通なのだが、資料室はとんでもなく広い。二十×二十メートルの部屋を二階分ぶち抜いた構造で、背よりも高い本棚がずらっとならんでいる。その部屋を見る

と、さすが情報戦を戦い続ける部隊の部屋だな」と納得してしまう。

「それでは今回の件に関する話をさせていただきましょう」

机の一番前の席にフェルダナ男爵が座り話し始める。俺以外には他に三人ほど席についている。ほとんどの人がなにかの事案に関わり続けているので、この本部に十一人全員が集まることは早々ないのだ。何度かこんな形でこの会議室を利用してきたが、だいたいはこの人数ほどだ。いつもいるのは隊長のフェルダナ男爵と事務と資料担当のアーゼちゃんぐらいだろう。

アーゼちゃんは登録上はこの家主なわけだからいても当たり前なんだけど。彼女は分厚い眼鏡を掛け、おっとりとした文系丸出しの女性なのだが、文字への記憶力と資料を整理してまとめる能力がとてつもなく高い。文官として働いていたらしいが、彼女の上司がその能力を活かすことなく埋もれていたところを、公爵が拾ってきたらしい。

「犯罪名は違法取引、物は禁止薬物です。残念ながら情報を察知した時には既に街に持ち込まれた後で抑えることは出来ませんでした」

「持ち込まれたから判明したの？ ていうか禁止薬物なら検問の時のワンちゃんに引つかかるんじゃないの？」

この世界にも麻薬取締り犬は存在する。ただの粉でしかない物を人間だけで見つけ出すのはやはり難しく、犬の鼻に頼るのはこちらでも効果的なのだ。

「……推測になりますが、今回持ち込まれたのは新薬の一種ではないかと考えています。まだ実物すらこの国に無いものでは、匂いを追うことはできませんから。心当たりも何件ありますし」

匂いを覚えてなきゃ、そりゃ探しようもないね。

「ならよくこの取引が判明したね」

「実は黒い噂の絶えない商店に、あらかじめ張っていたいくつかの網に取引の話が引っかかったんですよ。そして今朝になって、やっと取引の物が判明したわけでした」

「なーるほど」

幾多の情報から絞り込んだ、ほぼ何かやましい事をしていると思われる容疑者を張り込んだりすると、色々と錆が出てきたのは今回に限ったことじゃなかったしね。

「もしも取引される薬が私の知る新薬であるのなら、鞆一つ分売りさばかれるだけで……千人単位の人生が狂う事になります。しかし今回の件は物的証拠がないので、取引現場を押さえるしか方法が無くて……」

「いいですよ気にしないで。こんな犯罪なら問答無用でやるさ」

フェルダナ男爵は自分達で処理できない事件を俺に対応してもらう事に、やや罪悪感を感じてしまう人だ。最初の契約で、部隊の都合でこちらに仕事を押し付けないとしたのを気にしているのか、一般人に危険なことをさせることを憂うのか、どちらにしても性根の優しい人だ。

警備隊に取引の情報を流すという手もあるのだが、警備隊の方針的にいうと疑い程度の通報では、本格的に捕まえる為に動かず。確認の為に少数が動くといった形になってしまう。もしも中途半端な

動きを見せて、取引自体が無くなって物を押さえられなくなってしまえば、主犯全員を捕まえられなくなってしまっただろう。

「で、取引の日取りは？」

「……明日の夜です」

なんというギリギリの発見。取引されて物が分散でもしたら取り押さえるのに苦労するし、売人のほうは逃がしてしまうことになるからな。やはり取引現場を押さえで一網打尽にするのが手っ取り早い。

次の日、取引現場に使われると思われる倉庫にやってきた。この倉庫は商人たちの扱う品物の中でも店に置けない余剰分をまとめて預かっておく貸し倉庫だ。もっと人のいない所で取引するかと思っていたが、意外と普通の場所だった。匂いで判定されない新薬ならば、そこまで警戒する必要がないのかもしれない。

俺とマイア、そしてフェルダナ男爵は外で待機中だ。フェルダナ男爵は、騎士団時代は優秀な偵察兵として重宝されていたらしい。それは彼が持つギフトに起因している。彼のギフトは『憑依のギフト』。動物に乗り移る事で、その動物を操作する事が出来る。恩恵か、反動なのか、なぜか憑依された動物は彼が離れた後、人の言葉をそれなりに理解できる知恵を身につけ、さらにフェルダナ男爵にすごく懐いてしまうらしい。

一度彼の自宅に招かれた事があるのだが、敷地こそ広いものの家

自体はそこまで大きく無いものだった。しかし庭の広さはかなり広い。庭の敷地だけで、俺の自宅以上の広さがあつただろう。そしてそこにいままで懷いて付いてきてしまった動物全てが混在していた。犬、猫、鳥、馬。狼とウサギが並んで昼寝をしている風景はかなりシュールだったが、仲良くしろというフェルダナ男爵の言を守っているようだ。

「ほんとうなら、鳥とか犬を常に連れているんですけど、やはりどうしても必要に駆られて憑依しなきゃならない場面がありまして。気付けばこんな数になっちゃいましたよ」

懷いたからといって、全部飼っていること自体大概なのだが、動物のための庭確保の為にわざわざ街から近い村に居を構えたあたり、まさに根っからのお人好しだ。

そのギフトを使えば動物を利用して、安全に策敵や侵入を行うことができる。今は男爵が憑依した鳥が倉庫の天井部分に潜み、俺が『ジョイント』という感覚共有魔法を使い、フェルダナ男爵の目と耳の五感を共有している。

「どうやら来たようですね」

倉庫へ情報収集部隊がマークしていた悪徳商人が入ってきた。その数分後に麻薬の売人もやってくる。双方とも、数人の護衛を引き連れている。

「どっちも悪そうな顔してるな」

何か話をしばらくした後、代表と思われる二人が鞆の中身を見せ合っていた。片方は禁止薬品、片方は金貨が詰まったものだった。

「確認しました。やはり私が懸念していた新薬のようです」

「よし、出番だな！　いくぞマイア！」

「おうとも！」

倉庫へ侵入するため移動するマイアと俺。マイアのヒーロー活動が開始された時に、俺と同じように見た目で判別できないような衣装を作った。鉄装備は嫌だということで、ハッグベアー一頭分の皮を使って作った皮の全身鎧だ。さすがにスーッぽくすると幼児体型には似合わないと思ったので、短いスカートのような部分を取り付けてある。ヘルメットのような丸い形の兜にゴーグルをつける事で顔の方は隠してある。

「どうでしょう？　最高純度の『アポフィス』でございます」

「おお、これが噂の新薬か！　これだけの量があれば……」

「いかにも。この新薬は、今だこの国で犬共に嗅ぎ付かれることもしばらくありません。そしてその効力もまた絶大でございます」

「ヌツフツフ、楽しみで仕方ないの」

フェルダナ男爵から介されて聞くに堪えない会話が繰り広げられている。よし、早くぶん殴ろう。

「この世の闇に蠢く悪を」

「誰だ！」

「この拳にて叩いて砕く」

天窓を破り、俺とマイアは現場の中心に降り立つ。

「シャドーフィスト」

「シャドーハンマー」

「「参上」」

……決まった。八割趣味の口上なのだが、一応名前を覚えさせるための物でもある。マイアも気に入っているしこれでいいだろう。いつかこの口上を聞いただけで、俺らの存在に怯えて降参してくれる事を期待しているのだが、今のところまだ無い。

「貴様が噂の通り魔か！ ええい、やってしまえ！！」

いうに事欠いて通り魔とか酷い言われようだな。悪党から見ればそうかもしれないけど。

「ハンマーは売人で、俺は商人側ね」

「いいじゃろう。今日は齒応えなさそうじゃからどっちでものお」

強敵では無さそうなので、マイアのテンションはやや低めだ。外

で見張っていた護衛も参加して、俺の相手は八人程になった。それなりの手練のようだが、この一年間で進化した俺の敵ではない。

「いざ、成敗！」

空手の息吹を吐き、切りかかってきた剣を左手の手甲で逸らし、懷に正拳を叩き込む。槍を足元に突き込まれば脚甲で受け、そのまま体を回転させて後ろ回し蹴りを顔面へと命中させる。魔法をストーンウォールで防いで近寄り、弓を掴んでは投げ返す。数々の実戦を経て、俺の戦闘における隙はほとんどなくなっていき、対応力も格段に進歩していた。あと、手加減するのも上手くなっていた。

俺の攻撃を受けた男達は、気を失っているものの、外傷などほぼ見当たらない状態だ。元々空手は不殺で相手を行動不能することに長けてはいたが、あまりの力の大きさにこちらに来てからはそれを実現させるのは最近まで困難だった。やりすぎてすぐさま僧侶を呼び出すなんてのを、何回繰り返したことが……。

「き、きさまらあー！　こんな事をしてタダで済むと思っているのかー！」

護衛を全て倒されて、尻餅をついていた悪徳商人が俺に言葉を投げかけてきた。本当にこういう小物はどうしてこう的外れな言動をしてしまうのか。

「おもしろい冗談だな。おまえらが今まさに悪行を繰り返して、タダで済まなかった場面なわけだが？」

こんなアホに長々と付き合うつもりはない。さっさと手刀で意識を経て、商人を床に転がす。マイアの方もどうやら終わったようだ。

「キドーよ、ロープは持ってきておるのか」

このあと警備隊にこっそり通報して、その間に逃げられないように大体の場合、ロープで雁字搦めにした放置しておく。もちろんもしもの事がないように、逮捕されるまでは近くで見張っているけど。さて、全員まとめて縛り上げて、我が家に帰りますかね。

第二話 活動（後書き）

ついに100ptを超えた！

第三話 娯楽満開

完成に至り、見た目も、機能も一級品の家となった自宅は、その使われる用途においてはそう変わるものではなかった。料理に洗濯などの家事はもちろん利便性を高める物を取り付けて、その効率を飛躍的に上げることができた。俺の工房も機材を搬入して、既に絶賛稼動中だ。だがこの家の九割の利用方法はあいかわらず、子供達の遊び場なのである。

「キドー兄ちゃん、あそんでーあそんでー」

「私と向こうでおままごとしよー」

「ぼくらと庭でタマケリしてー」

昼間の時間帯に居間にいようものなら、十人以上の子供が俺を取り囲む。午前中は、トウカとユーリ、たまにマイアとメリーさんとミミルが文字と算数を教えているのでのんびりできるのだが、午後には全員遊びの時間に突入する。フィリーやアヒルのナンフなんかがいとも遊び相手兼保護者としていつもいるのだが、偶にしかない遊び相手である俺やジョイなどがいると、全力で群がってくる。

「兄ちゃんも体一つしかないから二つ同時には出来そうもないな。よしまず俺が蹴りして、その間はマイアにおままごとに参加してもらおう。それでもって三十分したら交代しよう」

「やったー！」

「マイアお姉ちゃんがママゴトしてくれるの？　じゃあ、こないだ

買ってもらったフリフリが付いた服着てもらおうと」

マイアは大体は朝から鍛錬の為に冒険者ギルドの訓練場に出かけ、午後からは昼寝しているのが日課となっている。俺以外がこの昼寝を邪魔しないのをいいことに、いつも眠りこけてぐうたらししている。ちようど話もあったし、起こすと思いますか。

眠りから強制的に覚まされ、不機嫌になりながらも子供達と遊んでいるマイア。美人な容姿で幼児体型のマイアが面白いのか、うちの女子達はかわいい服をマイアに着せたがる。しかし男勝りというか、豪胆なマイアの趣味ではないらしく好んで着ようとはしない。しかし、おままごとや買物で服やに寄った時などに頼むと渋々ながらも試着してくれるらしい。

俺も球蹴りを庭で男の子達と楽しみ、あつという間に交代の半時間過ぎていく。

「キドーよ、おぬしこのためだけに起こしたのか？」

「もちろん他にも用件はあるよ。頼まれてたアレ用意できたぞ」

「まことかつ！ やるではないか！ 褒めてつかわすぞ！」

「その代わりに当日は頼むぜ？」

「任せておけい」

マイアは上機嫌な笑顔を見せながら庭へと駆け出していった。俺がマイアに頼まれたのは、あるサーカス団の公演チケットだ。なんでも昔リンバークで見た時にファンになったらしく、どうしても見たかったそうだ。そしてそのサーカス団はこの国、いや世界最大の祭りであるブローニアス建国記念祭に合わせて街へとやってくる。一週間もの間祭りを続け、毎日目まぐるしいほどの催し物が開催される。武術大会、世界オークション、舞踏選手権、即興で様々な物を創り出す芸術祭。どの催し物一つとっても、それだけで祭りが成立しそうな豪華さだ。

現に開催まで十日に迫った今、街の慌しさは今まで見たこともない程になっているし、流れの商人たちは外壁の外にテントを張って準備し、門の付近には一つの街かと思うような人の集まりになっている。町全体が参加し、外からも多くの人が訪れ、各国のお偉いさんも祭りを楽しみにして来訪する程だ。

もちろん、我が家族を引き連れて存分に祭りを堪能する所存なのだが、チケットの期日である祭りの最終日には中央広場で国王自らが国民の前で演説する恒例行事があるようだ。それに参加せよとバィアス公爵から頼まれていたので、最終日だけは一緒にいてやれないのだ。その代理をマイアに頼むために、子供達を含めた四十名分のチケットを確保したのだ。人気のチケットではあったが、王様の演説も人気だったようで、その時間に少し被っている公演はなんとか入手することができた。

「よし、次は俺がおままごとに参加するぞー！」

「駄目！そこはドアだから、入るときはちゃんとノックして入って！後、キドー兄ちゃんはお父さん役だから自分のことはパパって言うてね！」

「う、あ、はい。すみません」

最近のおままごとは設定細かいんだな！。

晩飯を食べ、子供達をお風呂に入れ、全員を寝かしつけてから、俺の仕事が開始される。

俺は家の一番奥にある倉庫へとやって来た。昔はここに馬でも飼っていたのか水を貯めるの場所や、干草入れなどがしつらえてあった。今は干草をたつぷり敷いた上で、コウジンが寝そべっている。石でできた壁の隅のところにある窪みに指を入れ、奥にあるスイッチを押す。すると水入れが動き出し、下へと繋がる階段が現れる。この水入れは部屋に元から設置されたように作られていて移動させることができない。その構造に違和感を感じて調べたところ、この隠し階段を発見したのだ。

階段を下り、今では自慢に思う工房へと舞い降りる。

「今日で仕上げだな」

俺は部屋に飾られた一つの鎧の前で脚を止める。ヒーロー活動をする際に着ている忍者みたいな見た目の装備は、急遽作ったいわば試作品に過ぎない。そして今俺の目の前にある全身鎧こそが、俺の求める完成作品なのだ。

その鎧に付けるつもりのワイルドカッターの刃は最初に思っていた以上に硬い物質だったらしく、鉄ならば易々と切り裂くほどに強固で、摂氏二千度を超える熱量でも溶けない脅威の金属だった。ま

まったく加工できないままの日々が続き、ある時その刃を手を持ったまま悩んでいると、突然目の前に文字の羅列が現れた。驚くことにその文字は日本語で、手に持つ刃の構造や特性を解説した物だった。これが大地と酒の神ドウツガから貰った『解析』という特典だった。こいつのお陰で、制作の質と速度は格段に向上していった。

その特典によってワイルドカッターの刃は魔法金属の一種と判明した。魔法金属は特殊な方法でないと加工は難しいと記憶にあり、ガナド爺さんに聞くことにした。なんでも、魔法金属は溶かすための熱量が高温すぎて扱いにくい、火のイメージを持って魔力を大量に流すとその形を変えることができるらしい。だが、加工しきるまでに膨大な魔力が必要になるので、魔法金属を加工できる鍛冶屋はブローニアスでさえ片手ほどもないようだ。

あまり有名な人に接触したくはなかったので、魔力を通してなんとか加工できないものかと挑戦してみた。魔力の多さだけは化物級だと、龍人族のマイアに認定されているので力技でなんとかかなると思ったのだ。……………まあ、その結果なんとかなくなってしまったんだね。

加工は、一メートルあった刃を半分にして、二本の刃を作ったっただけだ。更にコツコツと必要な技術を学び、質の良い鉱石を集め、ゼロから全てを作り上げたこの鎧。そして先月、ついに念願の魔法鉱石ミスリルを、少量ながらジーニーさん経由で手に入れることで完成の目処がたった。それらを加工して鎧に装着し、あとは加工して二振りになったワイルドカッターの刃を取り付けば完成だ。

「これを……………左右に付けて……………できた」

相変わらず作品を完成させた時の感動は何事にも変えがたい感動を呼び起こしてくれる。人目もなく防音もばっちりなので、俺は部屋中に響き渡る大声で笑いまくった。向こうの世界で目指していたけど、ついに辿り着く事の無かったものの一つが、今日の前に存在

している。無かったものを作り上げ、成し得なかったことを叶えてみせる。この感動で笑わなきゃ嘘だろう？

そして十日後、アトレア最大のお祭りが始まった。開始を宣言する王様の声と打ち上げ花火と共に、街中に歓声が響き渡り、まるで街そのものが揺れているような盛り上がりで熱気だ。

「うおおおおお！」

「きゃあああああ！」

もちろんうちの子供達も大興奮していた。今までこの街に住んでいながらも、参加することが叶わなかった祭りへの思いは、憧れに近い物があるだろう。かくいう俺もこれほどの大規模なお祭りの経験などなく、心拍数は上がり気味だ。

「よし！ 全員誰かと手を繋いでるな？ 集団からはなれるなよ！ 何か買ったかったら俺とトウカ、ジョイとトマスに言えばよ。もし逸れたらその場で止まってるんだぞ。ちゃんと迎えに行くからな。わかったかー！？」

「はい」

「それではしゅっぱーっ！」

綺麗に二列に並んだ子供の先頭に立つと、なんだか小学校の引率をしている気分になるな。

大通りに出ると、見慣れたものになったその風景はいつもとは全く違うものになっていた。とにかく人、人、人。あっちもこっちも人だらけ。いくら人口の多いブローニアとはいえ、大通りの歩道が埋め尽くされるほどの人は普段からいるわけではない。歩道の端には商店通りにしかいつもは立ち並ばない露天が所狭しと商いをし、広場があれば大道芸人や詩人がその技を披露している。この様な風景は東西南北に伸びる大通り全てに適應される。一本たしか十キロ近くあるから全長四十キロの祭り道か………すごすぎる………。しかも冒険者訓練所での武術大会とかの大きな催し物は、大通り以外で行われているというから、俺の想像の範疇を軽く超えた大規模な祭りだ。

そういえば武術大会にはゾナのおっさんが出場するらしい。あのめんどくさがりが出るとは全く思っていなかったのだが、どうやらバルナス公爵から発破をかけられた上に、希少な酒に釣り上げられて出場するようだ。そして木彫り芸術祭には、リッキーとロイが手伝いとしてだけ出場予定になっている。

あいつらは、我が家が完成した後、俺から免許皆伝を申しつけ外へと働きに出た。場所は風呂の設計の時に共同開発した木工製作の職人さんの所だ。あちらも風呂の製作に追われて人手不足だったらしいし、俺としてもあの職人さんとはいい関係で信賴していたので二人を預ける形になった。それで今回その親方さんと弟子達が芸術祭に参加することになっているのだ。

ミミルは神殿関係、メリーさんは研究所関係の催し物で大忙しらしく、合流して祭りを回れるのは一日だけになりそうだ。

「キドーさん！ ジエシーとモリガが居ないです！」

「早っ！ まだ大通りに出て数分しか経ってないよ！」

何度かこうして子供達全員でお出かけしたことはあるのだが、一度として逸れて迷子に成らなかった子がいなかった試しが無い。おまけに今は人通りが多くて、視界も悪い。人並みに飲まれて、少しでも離れてしまえば小さな子供達では自力で合流することは難しいだろう。だが何度も迷子になっても困るし、かといってお出かけを制限してしまうのも可哀想だったので、俺は自作したネックレスをお出かけの際には全員に付けてもらうことにしていた。このネックレスは俺の魔力が込められている魔法道具で、周囲三百メートルほどならどこにいいのか大体分かる代物だ。商店で売っていた物を参考にして作ったのだが、なかなかうまく作れたと思う。

「それじゃあこの先の広場で待ってて。俺が二人とも連れてくるよ」

「お願いします」

そのネックレスの気配を頼りに、俺は二人を探す。

「お！ いたいた」

見つけた二人は、道に立つ騎士のそばに居た。

「あ、すいませーん」

「あ、いたー」

「キドーにいちやああん！」

どうやら迷子と察したらしく、保護しようとしてくれていたようだ。

「これだけの人の多さだ。迷子になるのも無理は無いが、流石に毎年多くて手が足りん。なんとか気を付けておいてくれ」

「了解です。ありがとうございました」

毎年のことらしいけど、祭りの間の警備には騎士団が参加している。普段はこの街に滞在していない部隊も集まり、五つの騎士団の半数もの人員がこの街一つに投入される。その数三千五百名。少ないと感じるかもしれないが、彼らは兵の中でもエリート中のエリートだけが所属を許される。あの底知れない強さを持ったゾナでさえ、騎士団時代は部隊長止まりだったというのだから、その強さが伺える話だ。現にこの三千五百という数は、小国なら一週間とかからずに攻略が可能となる数字なんだそうだ。この祭りに参加するため、各国から国賓が多数入国し、さらに人の出入りが多く警備の難しいこの時期に対する最大限の防犯を心がけた結果だろう。同盟国においては国王自ら来ている所まであるのだ。その国賓に何かあつては、下手をすれば一直線で戦争行きなのだ、どれだけ細心の注意を払っても足りないことだろう。

街はまるで、その全てが遊園地になったようで、そこら中に人を
楽しませる為の物が散りばめられていた。マリーさん曰く、

「一週間周り続けても、全てを楽しむのはとてもじゃないけど不可
能よ」

と言わしめるだけはある。大通りに入ってわずか五百メートル進
むのに約四時間もかかってしまった。露天の飯は上手いし、大道芸
人の芸も今まで見たことないような一見の価値あるものばかりだっ
た。特にシャボン玉で出来たゴーレムが揃って踊る芸はうちの子供
達に大うけしていた。他にも広場に聳え立った立体型の迷路や、空
中に浮かぶ温水プールにも夢中になって飛びついていた。もちろん
俺も存分にたのしませてもらった。こんな遊びは、地球ではまず体
験できない未知のものばかりで、あまりの楽しさに子供のように
しゃいでしまった。建国祭恐るべし。

夕方に差し掛かるころになって、やっと今日の目標であるミミル
の手伝う露天へと辿り着いた。神殿で働く人たちが作ったお手製の
お守りを売っている。だが単なるお守りではない。神殿に所属する
人物は、基本的に魔法を得てとしている者だ。しかも神からの加護
を直接受けた。そんな者達が魔力を持って編んだり、彫ったりした
お守りは物理的に効果が出る。心労回復だったり、免疫力向上だっ
たりと効果は様々だが、人気は絶大なようで。露天の前には人だか
りが出来ていた。

「おいミミル」

「ああゝみなさん来てくれたんですね」

大忙しのように見えるが、相変わらず緩い空気のままのミミル。

「ちゃんと働いてるのかよミミル」

「ジョイ君こそお、ちゃんとお守りできてたのおゝ？」

ジョイとミミルが仲良く談笑し始めた。邪魔するのも悪いし、その間にお守りでも物色しますか。

「神官さん。疲労回復のお守りとかありますか？」

「すみませんお客さん。私達のお守りは本人がつけてからしか効果が分からないんですよ。だからどれが疲労回復になるのかは買ってからのお楽しみとなります」

……………福袋かよ。一個百デイクスとお高いが、効果は別として、魔法道具をこの値段で買えると考えれば安いかな？ 相場じゃどんな安い魔法具でも五百はするもんな。

「じゃあこれ一つ下さい」

「ありがとうございます」

物は試した。一つ買って試してみる。

「効果の程は裏面の紙に浮かび上がります。他の方が使うと効果が変わったりしますので、その時は紙を取り替えてください」

「わかりました。どれどれ」

さっそく手に持ち、自分の魔力を流してみる。

「効果のほどは？」

『眉毛増毛』

「……」

一瞬呆気にとられた後、咄嗟に手で眉毛を隠す。海苔を貼り付けたような眉毛になってないだろうな！？ いや、トウ力こっち見ないでー！

「そんな一気に効果はでませんよ」

どんな効果が出たのか俺の様子から予想できたのか、ちょっと笑いながら店員さんが教えてくれた。

「よし、このお守りはトウ力に上げよう」

『眉毛増毛』とか活用の仕方がわからないよ。

第三話 娯楽満開（後書き）

眉毛ボーン

第四話 猛る

食って遊んで迷子を探し、喜び驚き慌てふためく。目まぐるしい六日間が経過し、今はサーカスの公演が開催される巨大なテントの前に来ている。

「それじゃあマイア、後は頼むぞ」

「ふっふ、安心して仕事に励むがいい」

仕事と言われると微妙だが、子供たちに預けたペンダントに込めた俺の魔力を追えるのは、俺以外に龍眼をもつマイアしかない。そういう意味では最も安心して任せられる。

「これを一応渡しておく」

「なんだこれは？」

マイアに水晶がはめこまれた指輪を渡す。

「こいつには『ジョイント』の魔法を発動状態で待機させてある。マイアが許可を下した時点から、聴覚の共有が始まる仕組みだ」

感覚共有魔法の『ジョイント』は相手の許可があって、始めて発動する魔法だ。それを利用して魔法を唱えた後で効果が発揮するように仕込んだのだ。道具や魔方阵などの儀式を併用する方が、魔法の効果や効率も格段にあがる。指輪の水晶に、少し工夫を凝らすだけでも大きな違いがある。

「便利な物を次々と考えつくものじゃな、お主は」

さ、この国の頂上の顔を拝みにいきますか。

なるべく近くで祭典を見たかったので、開始一時間前に中央広場に来たのだが、人気の王様は伊達ではないようだ。すでに千人を超えると思われる人達が最前列に立ち並び、続々と格方面から人が集まりだしている。まだ国賓達は姿を現していないが、騎士と思われる人達がすでに配置についていた。エリートと言われるだけあつて、一人一人が強者特有の雰囲気を放っていた。

城の南側に位置するこの中央広場は、式典やこういった祭典などに使われる街一番の広い広場だ。ちょっと広すぎるだろ、と最初見た時は思ったのだが、祭典の始まる時間になるとその広場は人で埋め尽くされていた。後ろの方は遠くて見えないが、この様子だとギリギリまで人が入っていることだろう。見学者は全員立ち見なので、後ろから押されて前の方は立つのも難しくなってきた。

その押しくら饅頭をしている隣には、いつの間にかフェルダナ男爵が来ていた。なんでも公爵から解説役を仰せつかったらしい。確かに雰囲気で王様ぐらいは分かるだろうけど、それ以外となると全く分からないからな。

「始まりますよ」

男爵に促されて舞台に目を向けると、左右に各国の国賓が並んで座り、中央には男性が二名と女性二名が座り、その椅子の後ろには

屈強な騎士たちがそれぞれ付き従っていた。バイアス公爵はその場にはいなかった。あの人は武術大会の責任者らしく、こちらに顔を出すことはできないそうだ。フェルダナ男爵に重要人物達の解説をしてもらっていると、国民の歓声と共に黄金の王冠を頂く初老の男性が真ん中へと姿を現した。あれが『善王』と評されるプロニアスの国王様か……。

歓声の鳴り止まない中、王が軽く手を上げると、広場は静寂に包まれた。

「今日は良き日である。プロニアスがこの世に出来て六百二十一年の時が経ったのだ。かつて私が若く、諸国を巡り世界を知ろうと旅をしていた頃。あのリーンバークの王であり、生きる伝説でもあり、我が盟友でもあるゴルディアス・リーンと論を交わす機会を得た。そこで彼は言った『人がもし滅ぶとするならば、それは欲に沈んだ時だろう。しかしそれを御する事ができたのであれば、人の可能性は無限に広がるだろう』と。私はその考えに大いに同意した。そして王となり、この国を導く根底として務め続けて来た」

地球時代に校長先生の話や、偉い人の演説なんかを何回か見てきたが、この演説は違いすぎる。迫力といいますが、まるでこの場の全てが支配されているような錯覚に陥る。これが本当のカリスマと言う奴か。

「現在のプロニアスこそが、歴史上最も繁栄していることは、明らかなる事実である！ 今、私の目の前に広がるその光景こそが、私の想いと信念が正しかったと証明している。我が国民達よ！ 良き日々を作り上げよ、良き人生を歩むのだ！ それが私の何よりの喜びとなり、この国の発展を支え続けるだろう！ この世界に光あれ」

王の演説が終わった瞬間、怒涛の歓声が鳴り響いた。空気どころ

か、本当に地面が揺れていた。魔法によって街全体に響いた演説は、見事なまでに国民の心を掴んだようだ。周りを見渡すと、何人かの人は涙を流している。

俺の記憶が正しければ絶対王政の国で、国民にまでその思慮を割く王様はかなりの希少さのはずだ。その上国の発展も見事にやってのけるなら、国民にとってはこの王であるというだけで最高の幸運であるだろう。現代社会で生きた俺だけど、あの時代にここまで支持された名君主がいたという覚えはない。

「それでは続いて授賞式を開催する！」

どうやらこのまま国で活躍した人への勲章の進呈式が行われるようだ。次の行事に移るため人が行き交っていく。王様などのお偉いさん方も全て自分の席へと座っていた。

すると俺の場所から僅かに舞台の下部分が青白く光るのが見えた。

「魔方阵の発動光！？」

気付いた瞬間、中央舞台は青白い炎の柱に包まれた。衝撃で前方の人は倒れこみ、近くに居た国賓達は傍に待機していた騎士に庇われている。広場は阿鼻叫喚の渦となった。そして中央に居たこの国の重鎮達は炎の柱に巻き込まれてしまった。この規模は間違いなく上級魔法。これをまともに受けては無事ではすまない。

「なんてこと——っ！？」

驚愕と恐怖が入り混じるその場に、強い気配を感じた。右へ視線を移すとそこにいた紫色の髪をした青年が、眼を限界まで見開きながら、微笑を浮かべていた。それを見て俺は全身を震わせる戦慄が全身に駆け巡った。

「うらああ！……！」

轟々と燃え盛っていた炎が掻き消えて、王様が座っていた椅子の前に一人の男が仁王立ちで立っていた。あの上級魔法を相殺してしまうなんて、なんて非常識な……。俺やマイアもあれを食らっては、どんな防御をしたって致命傷は免れないだろう。

「あの糞ジジが！　このこと予期してやがったな！？　降ろしたてのマントが台無しじねえか！」

確実に死の危険に晒されていたはずなのに、なんて的外れな発言。

「……た、たすかったぞグレイル団長」

わずかに衣服が焦げているものの、無事な様子で王様が前方の男に感謝している。

「はっ！　気にスンナよ。あんたなまだまだ生きて貰わなきゃ、俺が困るからな！　この貸しはバイナスの爺に払ってもらっしな！」

「……………団長って言うてるから、騎士のはずなんだけど。なんで王様にあんなに偉そうなんだあの男。」

「チッ」

広場の全員が安堵するこの状況に不釣合いな、不満を漏らす舌打ちが右から聞こえた。先程異常な表情を見せていた男だとすぐさま推測して視線を送る。しかし男はすでに身を翻して移動を始めていた。

「フェルダナ男爵」

「な、なんだいキドー君？」

男爵は今の騒動に驚きすぎて、腰が抜けたように脱力していた。そういえば王様を敬愛してるとかなんとか言ってたな。

「実行犯だと思われる男がいたので、これから追跡します。騎士団に紫色の髪をした、黒服の男だったと報告しておいて下さい」

言葉を言い残して、人ごみを掻き分けて男を追いかけた。だが男はどんな方法を使っているのか、隙間さえないような人ごみを何の苦もなく進んでいた。おかげでその差は広がるばかり。広場を抜けるまで、まだ二百メートル以上あるが、今日の人の多さで街に出られては追跡が困難になってしまう。

「マイア！ 聞こえるか」

すぐに手元にあつた指輪へと聴覚共有の許可を出す。互いの耳が一緒ということは、自分の喋っている声も聞こえるということだ。

「なにがあつた！？ こちらまで騒ぎが広がっておるぞ！？」

「王様が暗殺されかけた。大事には至らなかったが、今犯人らしき男を追跡中だ。今すぐこっちにこれるか？」

「既に向かつておるわ！」

さすがだぜ俺の相方。サーカスの会場はここから近いから、直ぐ

に到着できるだろう。

「犯人は紫色の髪の男だ！　今は広場から南南東の方向に向かってる。見つけ次第確保してほしいが、なるべくなら俺の合流まで待て」

「なぜじゃ！？　ぶん殴って騎士共につきだせば、それで終わりではないか」

「あいつは上級魔法を使って見せた。それに……あんな異質な表情をするやつがまともとは思えない」

人を焼く炎を眺めて喜ぶあの顔は、人でない何かの様だった。

案の定、広場を出るころには俺の視界から犯人は見えかけていた。しかし、咄嗟に高い場所に上り、広場全体を見渡していたマイアが奴を補足して、後を付けていた。

裏路地に入り込んでいったのを見届けると、赤いバンダナを頭に巻き、持ち歩いていたマスクを取り付ける。武器はナツクルと、ナイフが三本だけポケットに仕込んであるだけだ。こんな街中でいつもの俺式ホルスターは付けてはいられなかったので、仕方ないのだが。

「こないだの倉庫通りに進むみたいじゃぞ」

「了解。もうすぐ合流でき——」

そこで共有感覚が切れた。この魔法が途切れる条件は、込めた魔力の枯渇、対象の消失、そしてどちらかの使用者が急激な変化に見舞われた場合だ。

「やばいつ！ 始まっちまった！」

追跡がばれて交戦状態に入ったと予測して、全速力で現場に駆けつける。

連絡が途絶えて、一分だけしか経っていないはずなのに、戦いの場になった倉庫の裏側は悲惨なことになっていた。

「マイア！」

「キドー！ 避ける！」

マイアに駆け寄ろうと走り出したその瞬間、死を予感した。紫髪の男はまだ遠いし、魔法を放たれているわけでもない。しかし、今まさに俺の頭部が危機にが迫っている事を予感していた。全力で状態を逸らして、姿勢を低くした。何もないはずの空中で、俺の前髪が何本か宙に舞っていた。

「な、なんだ！？」

その何かが起こった場所を振り返る。眼を凝らせば、僅かにその場所には線が走っていた。

「うわお！ お嬢さんに続いて、兄ちゃんも初見で避けちゃうの？ 今日とは全くどうなってるんだろっね」

空中に浮かんだ線は、スルスルと男の手に収まっていく。

「系……いや鋼鉄線か！」

「ええー見破るの早いよーこれ特注品なんだぜー？」

鉄製の線などありふれたものだが、あそこまで細く、しかも柔軟性と強度を併せ持った物など、この世界にきてから見たこともない。しかし地球ではロボット制作で見慣れた話だったので、言い当てることが出来たようだ。

「あんたら何者？ ってそれは僕が言われる方だったかな？」

軽い口調だが、そこまで大きくない体格の目の前の男からは、どす黒いまでの殺気がこちらへと向けられ続けている。その表情を笑顔に固めたままで。

「マイア、最初から全力で行く。こいつはやばい」

「わかっておるわ！ ボーゼ！」

マイアの掛け声で、男の足元が泥で覆われていく。

「わわっなんだこれ！？」

たまらず空へと逃れる。その選択を見越して、マイアも空へ飛び出していた。

「^{シャープ}鋭さを増す『ファイアーランス』!!」

男の頭上へと躍り出たマイアの手には、巨大な炎の槍が握られていた。

「こんのお!」

全力で炎の槍を投げ放つマイア。当たれば岩さえ溶かす槍を、空中で難なく横に避ける男。先程つかった糸を壁の突起物へと巻きつけて、引き寄せることで移動したようだ。もちろんこれも予測していたさ! 壁に張り付く男へ壁を走って迫り、踵落としをその頭へ落とす。今度は避けれずに手で地上へと落下していった。いつもなら不殺を心がけているが、今は完全に手加減も何もない。目の前の男は、一人一人で相手をすれば確実に命を奪われる。殺しにいつてやっと成果を上げれるほどに強敵だと、そんな警報が頭に鳴り響いていた。

「ハハッ 凄い凄い!」

地面に叩きつけられる所を、足のバネだけで耐え抜き、攻撃を受けたのにも関わらず、男は満面の笑みを浮かべていた。

「僕の『フレイムピラー』を破ったあの男とやりたかったけど、君達でも楽しめそうだなあ」

「『ストーンボール』アクトスリー!」

石の塊を牽制に使い、男の横側へと回りこむ。魔法は最小限の動きで躲されたが、俺の拳をこの距離で避けられないだろう。

「くら——」

思い切り拳を振り抜こうとした瞬間、先程の命の危機を再び感じる。今度は首筋に。咄嗟に首を引つ込め、体を落として回避する。男は魔法を避けながら、鋼鉄線を輪っかにして、俺の首を狙っていた。体勢を崩した所に真上からダガーを振り下ろされる。中腰のような状態で受けては更に不利な状況に陥ると判断して、後ろの手を付き、無理やり左足でダガーを持った手を払う。ギリギリ過ぎて、頬を少しダガーの刃がかすっていった。体を捻った回転力を生かして、右足を更に伸ばして男へと攻撃する。

「うわっと！」

そこまでの威力は無かったが、なかなかの奇襲だったはずの蹴りも、上体を逸らすだけで避けられる。そのよけた状態の体に、炎の玉が襲いかかっていった。

「どうじゃー！」

やっと攻撃が当たったのだが、所詮初級魔法の『ファイヤーボール』。とてもじゃないが、こいつに深手を追わせるところか、傷すら付けたとは思えない。少し吹き飛ばされた男は空中で体勢を整えて、四肢を使って地面に着地する。

「フフフ、ハハハハハハ！ 楽しい！ 楽しい！ 楽しい！ こんなに楽しいのは久しぶりだよ！」

「マイア援護してくれ」

奇襲強襲、その両方を防がれた。場慣れ、経験、実力どれをとってもこいつの方が上のようだ。だから真つ向勝負を仕掛ける。俺の絶対的武器である空手を使って。弱者が強者に勝つために生み出された武術。勝てない状況をひっくり返すことを目的として磨き続けられた技ならば……。

「いざ……」

右手を上、左手を下に添える天地上下の構え。その姿勢を保つたまま、ジリジリと男との距離を詰めていく。

「知らない構えだねー。何それ？」

「空手って名だ。覚えときな」

狙うは相手の攻撃に生まれる隙。攻撃を逸らしてから放つ正拳突き。

「へーじゃあ味あわせて貰おうか」

数メートルを一足で詰め、伸ばした手でダガーの突きを俺の心臓へと突き出していた。それを左手の手刀で逸らしながら、体を反転させて防いで見せる。勢いで体勢を崩した男へ俺の最速最強の右正拳を叩きこむ！だが、無理やり体を捻らせながら手で弾く男。だけど空手は一撃で終わるような武術じゃない！完全に無防備になった体へと、指を軽く曲げた猫でという手刀を振り下ろす。今度は手で防いだものの、受身を取れないままに地面に叩きつけられる。

「ぐっ！」

間髪入れずに顔へと前蹴りを繰り出すが、それは避けられてしまう。その隙に距離を取ろうとする男を、追い打ちをかけて右で貫手を顔面に放つ。この技なら手で受けようものなら、それゴト決つてみせる。だが当たる寸前までいった所で手を引き戻す。戻したての中指が僅かに切り裂けていた。

「おしかった——」

想定通りだよ！

「『ウォーターสปิน』！！」

俺の周囲に水の薄い膜で作られた渦が発生する。水の流に逆らう鋼鉄線が浮かび上がる。これで俺に近づく鋼鉄線を判別できる。どいう原理であんな物で、斬撃を繰り出しているのか知らないが、見えさえすればやりようはある。鋼鉄線の隙間を縫って、左の肘を脇腹へと振り上げる。また避けられる。だけど、見えない攻撃ならどうだよ！

「ガッ！」

男は右肩から血を流して後ろに下がった。肘を放った左手に投げナイフを隠し持ち、自分の体で見えないように投げどころを隠しながら男に投げてやったのだ。胸あたりを狙ったんだが、流石に直撃はしなかったようだ。

「……………いい」

「ん？」

次の出方を注視していると、男の体が震えだした。そこまで深い傷だったのだろうか。

「あんた良いよ。僕が血を流すなんて何年ぶりだろう……。あ、アハハハアハハハハハハア―ッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハ―……我慢出来ないや」

男は今までとは比べ物にならない気を撒き散らした。殺気、いやこれは狂気と言ったほうがいいだろう。死の恐怖よりも、心のどこかが壊れてしまう気がした。これは触れてはいけないもの、見るだけで腐敗と破滅を呼び込むそんな存在。気にあてられているだけで、こっちがどうにかなりそうなほど思考が揺れ動かされる。……始めて、生まれて始めてこの場から逃げ出したくなった。なんだよこれ？　こんなものを人が生み出すことが出来るのか？

「君達、僕に喰われてよ！」

周囲に漏れ出ていた狂気が俺達へと向けられる。

「はい、そこまでね」

そこに新たな声が響き、三人がその方向へと視線を向けた。

第四話 猛る（後書き）

さあシリアス臭が漂いだすよー

第五話 迷走

戦慄が走る戦いの場に響いた先には、二人の人物がいた。異様なほどに筋肉の付いた身長が三メートルに届こうかという巨体の男と、その肩に乗った妖艶な女だった。

「帰りが遅いと思ったら、また遊んでいたのね」

「分かったなら邪魔しないでよ？」

どうやら二人は紫髪の間男のような様子だ。

そして俺は今の状況に少し混乱していた。いくら眼の前の男の圧倒的な気配に気圧されていたとはいえ、目の前に現れた二人の接近に全く気づかなかったからだ。この二人も間違いない化物と呼ばれる部類の間男だとすぐに分かった。なのに気づかなかった。見た目も目立ち、気配が尋常ではないこの二人を、見逃してしまう事などあるのだろうか？

「遊ぶのは時と場所を選びなさいといつもいつてるでしょう？ 仕事に失敗して追われている時にするやるもんじゃないでしょう」

「そうそう聞いてよ！ 僕の『フレイムピラー』を直撃しといて、焦げ目しか付かなかったんだよ！」

「ふふ、帰ったらゆっくり聞いてあげるわよ。その坊や達とも日を改めてなら、遊んだっていいのよ」

「ほんと？ じゃあ帰るよ」

目の前で逃げる算段をしているが、俺は動けないでいた。正直に言えば勝てる見込みを見い出せないでいたからだ。紫髪の男だけでも手に余ったのに、それ以外を同時に相手をするのは……。

「逃げれると思うてか！　ボーゼ沈めてしまえ！」

判断に迷っていた俺を尻目にマイアがしかける。一箇所に集まっていた三人の周りに泥の柱が出現し、三人に襲いかかる。

「邪魔」

紫髪の男が左手を振るうと、泥の塊が切り裂かれた。

「ブオオオオオオ！」

「ボーゼ！？　馬鹿な！！！」

ヤバイ。液体を切り裂くという現象もヤバイが、更になにか来る。

「避ける！」

「ガッ！？」

俺の声に反応して回避行動を取ったが、マイアの右肩が切り裂かれた。

「マイアッ！！」

「あら、本当にこの子達優秀なのね。精霊持ちなのも驚きだけど、私の攻撃まで避けちゃうなんて。再会が楽しみねエツジ」

「でしょ？ フッフ、この国は齒ごたえのある獲物がイッパイで、嬉しいよケープ」

「……望むところだよ……お前たちは俺が仕留める」

傷ついたマイアを庇える位置から、三人を睨みつける。

「本当にいいわあなた。怒りに燃えながらも、それに身を任せて今私達に立ち向かうのを無謀と判断できるなんてね。もうちょっと冷酷さがあつたらスカウトしたところよ」

「ふん、どう転んだって『ルドラの右手』に入るつもりなんてないよ」

一瞬だけ、場に沈黙が流れる。

「……あんた何者？」

苦し紛れに鎌をかけたが、反応からして予想は正解だったようだ。用意周到、計画的犯罪という単語が並んだ時は、高確率で絡んできたからな。

「あんたらの敵だよ」

「フフ、また会いましょう坊や」

微笑を残して、三人はこの場を去っていった。逃げたとも言えるかもしれないが、確実に見逃されたのは俺らだ。最後の微笑だって、確実に獲物を狙う目で俺を見ていたように思えた。

「ボーゼ！　しっかりしろ！」

肩から血を流しながら、マイアが地面に横たわるボーゼに駆け寄る。

「大丈夫なのか！？」

「危険な状態じゃ。しかし物体では傷つけないコヤツが切り裂かれたなど初めての事だ……。とにかく家に戻るぞ！　他の精霊に力を分けてもらえば、まだなんとかなるはずじゃ」

急いでボーゼを抱え上げて家まで走る俺達。

国王暗殺を企てた者たちに、ヒーローとして初めての敗戦を味わった。

瀕死のボーゼの治療は無事に終わることが出来た。かなりの深手であつたためしばらくの療養が必要だ。精霊がここまでの傷を負うことは珍しいというか、普通ならばありえないらしい。魔力で体を構成している精霊は、それさえあれば損傷した体を即座に修復できる。存在の消滅になると霧散してしまうが、そうでなければ軽症でしかないはずなのだ。なのにあの紫男の繰り出した斬撃は、精霊が容易に修復できないというありえない攻撃を繰り出したことになる。しかもボーゼは体が泥で出来た精霊だ。元より物理的な力では傷さえ付くはずはないのだ。

戦力不明に目的不明、正体こそ『ルドラの右手』関連なのは分かっているが、いままでの事件とは桁が違う。

血で服を染めたマイアを子供達が見て、家の中は一時騒然としていたが、街はもつと酷かった。なんせ、国民から愛されている国王様が暗殺されかけたのだ。当然といえば当然だろう。しかも犯人も捕まっておらず、その手がかりすらほとんど無い有様だ。

夕暮れに差し掛かる時間に、フェルダナ男爵が直接俺の家へとやってきた。

「バルナス公爵がお呼びです」

まあ呼ばれるのは必然だろうね。一応説明出来るだけの話はフェルダナ男爵を通じて報告したが、俺とマイアだけが唯一犯人と接触してるわけだし。だが、あいつらが今度は俺とマイアを狙ってくる可能性もある。なので、フェルダナ男爵にはゾナのおっさんに、俺の家に来てもらい護衛を頼むと伝言を頼んだ。さらにコウジン達精霊がいればなんとかなると思う。俺はフリーだけを連れ、バイアス公爵の屋敷へと向かった。

バイアス公爵家の前にも騎士と警備隊の人員が何人が配備されていた。犯人が捕まっていない今は、誰が狙われるかわかったものではないだろうから、要人には全員騎士が張付いているのだろう。今は冒険者を手伝うときの標準的な装備をして訪れていたので、武器などが玄関で全部預けることになった。

「お邪魔します」

公爵の待つ応接室に入ると、いつも豪気な面持ちだった顔が、曇り気味になっていた。

「おう、よく来た」

「……お疲れみたいですわ」

「そりゃあな。建国記念の式典で国王暗殺未遂など、国始まって以来屈指の大事件だ。公爵としても、騎士顧問としても、ギルドの長としても、いつもの三倍は忙しいわ」

葉巻に火をつけ一息つく公爵。

「でだ、お前に上げてもらった似顔絵と、逃げた方向の情報から探つてもなにも出てこんのだ。広場以外での目撃情報すらまばらなものだ。分かったといえば、王を暗殺するために使った魔法のことくらいか」

「そういえば、あのエッジと呼ばれていた男は『フレイムピラー』
と言っていました」

「フレイムは聞いたことがあるが、後半は知らぬ名だな。あれは魔方阵を使つて強化した火の上級魔法だった。不可解な事にその魔法陣は、舞台の設営に使った木の板に挟みこまれて設置されていた。魔力探知の術を持つものが直前に調査したのにも関わらずな」

「まさか内通者が？」

「いや、それはない。あの場には、騎士団が二つと近衛兵の三つの部隊が混成で配置されていた。安全確保の見回りもそれぞれが独自に行っていたのだ。三つの部隊全員が内通者でもないと、隠蔽は不可能だ」

さすがに国の重要人物が集まる祭典。抜かりない警備だったのだ

ろう。だが、それでも犯行は決行された。

「それに、もしも我が騎士団に内通者がいたとするならあやつ、グレイル・ドローをあの場合から引き剥がしてから犯行に及ぶだろうよ」

「あの王様を助けた男ですか？ 俺も聞きたかったんですけど、あの爆炎からどうやって助かったんですか？」

見て取った威力ではあるが、あれを食らえば塵すら残らないだろう火力だった。

「一応秘密事項なんであまり詳しく話せんが、あのグレイルに魔法で殺せることが出来るものなど、この世にいるか怪しい。そんな力を持つ男なのだよ」

「ギフト……ですか……」

「まあそういうことだな」

ギフトの可能性を伸ばしに伸ばした結果、上級魔法ですら受け付けない防御力を誇るようになったのか。つくづくギフトという力は何とんでもないものだ実感するよ。

「とにかくだ。あいつらの正体と目的をはっきりさせねば、今後の行動に大きく差し障りが出てくる。そこで力を貸してはくれんかキドーよ」

「俺としても、奴等を野放しにしておく気はないですけど……。大丈夫でかね、今動いても……」

今のブローナスは嚴重な警戒態勢が敷かれている。下手な動きをすれば、即座に捕縛されて取調べを受けることになるだろう。

「そこは情報収集部隊に任せてくれればいい。お前の知恵さえ借りれば後はこちらでなんとかする」

今回は騎士団が動いているのだ。実力行使の場面ではあちらに任せることになるだろう。しかし、あいつらが俺の想像しているようなやつらだとすると……。

「わかりました。俺も『ルドラの右手』に関しての仮説が一つあります。それを調べれば何かわかるかもしれません」

「協力してくれるか、助かるぞ。騎士団とて無能の衆ではないが、今回の主犯は間違いなく裏の世界でも名のある者なのだろう。真つ当な手段でこちらが戦えるとは思えんのでな」

それはそうだろうな。騎士団は戦うための兵であって、こんな輩を見つけ出したり調べたりするのは、警備隊の範疇だ。しかし、警備隊ではあいつ等と渡り合うには力不足になるだろう。下手をすれば、裏をかかれて術中に嵌ってしまう可能性すらある。

「それともう一つ。俺はこの事態を最悪の形だが予測しておった。この国にはなにやら不穏な空気が漂ってきておるのだ。それも人為的なものだ。これはおそらく何かの準備が整い、最後の仕上げとしての事件だというのが俺の推測とだけ言っておく」

なんとも気の重くなる話を聞いて俺は公爵邸を後にした。

公爵邸から帰るその足で、そのままフクロウ本部へと向かう。この警戒態勢の中でなにも出来ないと思われるのだが、あの歪な三人を眼の辺りにした俺には、嫌な予感で胸がざわついていた。ほぼ確信のように、あいつらはまだなにかをやらかすと思っている。

「フェルダナ男爵！ はまだいないか……。アリーゼちゃんはあるな、全員集まってるかい？」

「あ、キドーさん。フェルダナ隊長と潜入任務をしている人以外は集まってます」

長期の潜入任務に就く者は、どうしても街から離れる必要があるときがあるので、それはしょうがない。

「時間があまりない。フェルダナ男爵が到着次第、作戦を開始する」

「もしかして、犯人の行方を私達も探すんですか！？」

「いや、それはやらない」

「え？ じゃあ何を……」

「俺達がやるのは、ルドラの足跡を見つけ出すことだ」

三十分待ったのだが、フェルダナ男爵が帰ってこないの、先に作戦の概要を隊員たちに説明しだすことにした。

「まずは、この一年でルドラの右手が関わったとされる事件をなるべく探し出してくれ。そこからあいつ等の依頼主を絞り込む作業をするのが今回の目的だ」

「ちょっとまって下さい。依頼主の可能性は前から示唆されていたけど、全く証拠が出る見込みがないから今まで放置していたのでは？」

「確かに依頼主に辿り着くのは困難だろうな。しかし、今まで俺らが扱ったルドラ関連の事件は、奴隷売買に盗賊団、禁止区域での密漁に盗掘行為。どれもこれも金になるものばかりだった。ここから予想されるのは、組織の形は冒険者ギルドに酷似しているのではないかということだ。金を払って犯罪者を雇い、裏で暗躍させるのが奴らのやり方であるのは、ほぼ確かだ。しかし組織として動いているとするには一貫性がない上、活動範囲も広すぎる。依頼主がいると仮定すれば、色々と辻褄は合うと思う。特定が困難だとしても、証拠がないとしても、その容疑者がある程度絞り込むことが出来るはずだと思ったわけだ」

結局絞り込んだとしても証拠がないので捕まえない事になんかわりないのだけだ。

「それをやったとして、今回の件にどういう関係が？」

「今回の暗殺未遂は、今までの事件とは比べ物にならないほどに大事だ。そしてルドラとしてもリスクの高い仕事に違いないはず。なら考えられるのは、依頼者がそれを受けれるほどの上客で、かつ多大な成功報酬があるという事が考えられる」

「あつ！　つまり過去の容疑者から、それに当てはまりそうな人を探すんですね」

「アリーゼちゃん正解！　上客ならば過去に何度もルドラの右手を利用した可能性は極めて高い。国外の奴が依頼主だと分らないかもしれないが、もしも今回の依頼者が国内の者だったとしたら、その足跡から辿れるかもしれない」

「なるほど、協力者がいるのなら居場所の特定もかなり絞り込めそうですね」

「なんとか納得してくれたのか、他の面々も小さく頷いてくれている。」

「今日の朝までには資料を出来る限りかき集めてくれ。特に俺達が扱った最近のやつは入念に頼む」

「朝まで！？」

情報収集というのは時間がかかるもので、今から朝までとなるとそれを集めきる為にはいささか時間が足りない。

「すまんが、本当に時間がない。今回は特別なんだ」

「理由を聞いてもいいでしょうか？」

隊員の一人の男性が質問を投げかけてくる。

「実は俺は主犯と一戦交えている」

「!？」

会議室にいた一同が動揺の色を見せる。

「キドーさんが戦ったのに逃げられたんですか？」

ここにいる面々は俺がどれぐらいの実力なのかをよく知っている。

「俺とマイアの二人がかりでやつと相手の本気を引き出せた。それぐらいの強さがあつた上に、同じようなのが他に二人いた。とてもじゃないがあれがただ雇われただけの下っ端とは思えない」

「つまり……」

「今回の実行犯は『ルドラの右手』自体だと俺は思ってる。そして今日の失敗ぐらいで逃げ出すような奴らでもない事も確かだ」

全員が険しい顔になる。ルドラの右手は、いまだ構成員の一人も捕まったことがない。それが自ら乗り出してきた事自体が異常事態であるし、その予先が確実にこの国プロニアスに向けられているからとわかったからだ。

そんな重苦しい雰囲気の中で、大きな音を立ててフェルダナ男爵が駆け込んで来た。

「キドーさん！ みんな！ 大変だ！」

「どうしたんだ!？」

フェルダナ男爵がこんなに取り乱しているなんて始めて見る。

「隣国のナズラが……国境付近に軍を進軍させているっ!」

第六話 流動の時間

急報に慌てはしたけども、やる事も時間がないのも変わらなかった。で、隊員たちには行動を開始してもらった。部屋には詳細を聞くためにフェルダナ男爵だけが残っている。

「で、ナズラの軍が進行してきてるって本当？」

「はい。なんせ偵察するのは僕の鳥ですから、この眼で確かめました」

フェルダナ男爵の『憑依のギフト』は一度目こそ直接触れていないと無理だが、一度と取り憑いた動物なら、その距離が離れていようと、再び乗り移ることが出来る。それを利用して各方面に密偵としての、鳥達を住まわせているようだ。

ごく稀にだが、情報収集部隊としてではなく、騎士としての任務として偵察任務に当たることがある。隣国の進軍ほどの重要任務なら、その情報を確かめるために、国中から密偵や偵察部隊が放たれたのだろう。

「国王暗殺事件から日が変わらない内に、隣国が攻めてくる……か……。そのナズラって国は強いのか？」

「十五年前に戦争になったことがあります。相手側からの侵攻で、何箇所かの村が襲われました。しかし、はつきり言いまして、プロニアスの敵ではありませんでした。騎士団の錬度の差が歴然でしたので、終戦までに一月とかかりませんでし、おそらくその差が埋まっていることはないでしょう」

「つまり相手にならないほどの差があるのか。けど騎士団がこの街に集まっている今なら、それなりの成果が見込めるんじゃないか？」

「国境付近には、戦争専門の騎士団である『黒斧の騎士団』が駐在しています。彼らを瞬時に攻略できるような部隊は世界中を探しても存在しないでしょう。なんせ十五年前の戦役では七千からの軍の足止めを、近くに居たたった五百名で行い、結局大きな街が荒されることがありませんでしたから」

「なんだよその化け物集団は」

「バイアス公爵と同じ騎士団特別顧問のコーリン・マッケニアス氏は元はその団長だったんですけど、なんとギフトを軍略に組み込むという新しい戦法を導入しまして。その戦法は当代一と言われているですね」

「なら国王暗殺の依頼主は、ナズラ国では無さそうだな」

「なぜでしょう？ タイミングから見ればあまりに良すぎると思います」

「いや、だって暗殺失敗してるじゃないか。もしあそこで王様や国賓なんかをしとめているのなら、混乱に乗じて侵攻すれば効果的だったかもしれないけど、結局誰も死ななかった。なら勝ち目の無い戦を態々するとも思えないし、やるなら改めて何かをやってからにするだろ」

「……確かに言われてみれば、侵攻の旨みは少ないですね。以前の戦乱の影響で、あそこと隣接する国境付近には黒斧の本隊が配備されていますし、人数も以前の三倍はいるはずです。七千で真正面か

ら立ち向かって、接戦どころか敗走すらしかねません」

「依頼主と繋がりがあるだろうけど……まあここから先は資料がそろってからだな。フェルダナ男爵はなるべく街中を見回つといてくれ、動きがあるところをとりあえず見といてくれればいいから」

「了解です」

資料集めを開始して半日が経過し、日が昇りきつたところで、再び会議室へと集合してもらった。

「まず資料の判別をする前に、今朝までにあつた大きな動きがあったと情報ギルドから伝達が来ていますので、この場で報告させてもらいます」

アリーゼちゃんが、資料片手に全員に報告を開始する。

「まずは隣国のナズラ国軍は国境を越える少し前の所で、布陣したままの状態となっております。抗議と共に真意を確かめる使者は出されましたが、まだ返答はないそうです。次に国内で三件の殺人がありました」

「それは今回の件に関係あるのか？」

「それが三人とも式典の舞台設置に関わった人物でして、犯行の協

力者として上げられてたんですが、殺されてしまった為に口封じでは無いかと疑惑が深まっています。その影響で、舞台設置の責任者だった、ウエレス公爵に非難の声が寄せられています」

三大公爵の一人で、確か国営に携わる人物としては最高年齢の人だったか。

「さらに一般市民の間では、今回の犯人は第一王子ではないかという噂が少ないですが流れ始めています」

「は？　なんでだよ」

「王子は式典の前日になって諸事情により、街から離れておりまして、跡継ぎ問題が動機じゃないかって憶測ですね」

王族の跡継ぎ問題できな臭い話があるのは分からなくもないけど、そんな疑問を浮かべているとフェルダナ男爵が、声を上げた。

「それはありえないでしょう。そもそも第一王子は現役の『蒼剣の騎士団』の騎士団長で、王様になるのは嫌がつてるという話ですよ？　財務大臣である第二王子、外交大臣である第三王子のほぅが、王様に向いていると公言するような人がする事ではないでしょう」

「噂だから仕方ないと言いたいけど、早く流れるにすれば信憑性の無い話だな……」

「もしかして人為的な噂でしょうか……」

「有り得るな。情報ギルドに頼んで、噂の否定をして回ってもらうか。ほっとしても混乱を招くだけだし、遺恨を残す場合もありえる」

「他国の国賓の方々は、今だお城の中に滞在中ですが、『蒼剣の騎士団』が帰り次第に、それぞれの国へと護送する予定のようです」

「他国の騎士団も来てますが、せめて国境を越えるまでは、我が国の責任問題になりかねませんからね」

めんどくさい事が目白押しだな。大事件の影響で混乱するのも分かるが、あちらこちらで火の手が上がりすぎだろ。せめて犯人に関する続報の一つでも出れば、少しは納まるんだけどなー。

「よし！　じゃあ早速資料から容疑者を選出していく。犯人というよりも関係していたかもしれない人物も書き出して欲しい。とりあえず全員掛かりで夕方まで頑張りますか」

机に山のように置かれた資料を、俺含め隊員すべてが手に取り目を通していった。

「あー目がしばしばする」

「おつかれさまです」

フェルダナ男爵が、夕方まで資料を漁っていた俺に紅茶をだしてくれる。嬉しいけど、普通そこはアリーゼちゃんの役所じゃないの？　確かに紅茶を淹れるのはめっちゃ旨いけどさ。

「過去二年間のルドラ関連が十一件。そこから疑わしき者でそれなりの財力を有している者が、百三十八名か。一件の事件につき、だいたい十二名ほどなんだけど……多いなあ」

関係していたかも、なんて範囲で候補に上げていくと、それこそ金持ちと呼ばれる人がづらっと並んでしまった。その中にはジーニ―さんや、位の高い貴族の名前だってある。

「疑わしい順に絞込みをかけますけど……それには時間がいりますね」

「どれぐらいかかりそう？」

「詳細にやるなら……五日は必要ですね」

「うーむ仕方ないか……そもそも特定が困難だと放置していた案件だし、これはここが限界だな。」

「じゃあここはフェルダナ男爵に任せます」

「どこかにいかれるんですか？」

「もしもの備えをするためと、一旦家の様子を見に行ってきます。犯人から目をつけられてるかもしれないんで」

「わかりました。緊急で何かありましたら連絡しますね」

「お願いします」

なんだか仕事を増やすだけ増やして、俺だけ抜けるのは心苦しいけど、資料を纏めたりする戦力にあまりならないしな。やれるだけの事をやっとなないと、今回は凄惨な結果が待ち受けているかもしれない。

不安な気持ちで自宅にたどり着いたが、どうやら何事も無かったようで、一旦安心できた。すこし安らいだ気持ちで、晩飯をみんなと一緒に食べることができた。

みんなが寝静まってから、マイアとトウカに事件の経過を説明した。トウカにはヒーロー活動については説明しており、ややこしい事件の時のアドバイザーとして手伝ってもらっている。

「——というわけで特にめばしい情報がないまま、状況はこんながらがつていくばかりだ。そっぴや傷の具合はもういいのかマイア」

「うむ、ミミルに一日付きっ切りで治癒してもらって、すでに完治済みじゃ。しかしボーゼは容態は安定したがしばらくは無理じゃの。人の治癒術では精霊の傷は癒せぬ。最上位のものなら効いたかもしれないが、無いものねだりじゃしの」

「私達のも危険が及ぶでしょうか？」

「予想でしかないけど、今のところは大丈夫だと思う。事件が終結した後になるまでは、こちらに手を出すことは無いはずだ」

「まだ、なにかあるんでしょうか……」

「ある。それは間違いなく確実だ。あいつらの最終目標がどこを指しているのかは分からないが、禄でもないものになるだろうね」

「そうだ、キドーよ。妾の肩の傷についても一つ忠告というか、問題点があるぞい」

マイアが傷を受けた右肩をさすりながら、少し悩んだように話し出した。

「あの攻撃の、全く見えなんだのだ。道具を飛ばしたわけでもないというのに、妾の龍眼には何も映らなかったのじゃ」

「不可視の攻撃……それもギフトの力なんだろうか？」

「十中八九妾もそうだと思うぞ。そして、あのボーゼに傷を負わせた男の、不可解な力もそうなのだろう。兩人ともかなりのギフト使いであるだろうな。恐ろしい話じゃが、あの巨体の男もギフトを使えるかもしれん」

「切れない物を斬り、見えたはずの物を消す力。さらに隠し札が伏せてある場合まであるのか………」

難敵だという覚悟はあったが、今までの敵とは脅威の次元が違う。

それから二日、事件発生から三日後までは何事も無いままに時間が過ぎていった。そして四日目の夜に、ついに大きく事件が動こうとしていた。自宅にフェルダナ男爵の憑依した鳥が急報を知らせに訪れ、俺とマイアはフクロウ本部へと急いだ。

「騎士団がやつらの潜伏場所を突き止めたらしいです。今、封鎖網を敷いて、もうすぐ『紅玉の騎士団』が突撃を慣行すると思います」

「場所は？」

「南東の倉庫通りの方だとしかわかりませんね」

「……………」

妙だな。そこは真つ先に逃走経路から疑いがかかった場所あたりで、最初に調べられた範囲のはずなのに、今更見つかるのか？ そもそもあの食わせ者達が、根城を見つけさすなんて真似をするだろうか……。もしも見つかるとしても、向こうから動き出した時だと予測していたんだけど…………ふむ…………。

「俺達も現場に入れないでしょうか？」

「え！？ 行くんですか？ 今回は騎士団の主力級が行くわけですし、元より実力行使はお任せする予定だったのでは？」

「明確な理由はないんだけど、騎士団がと聞いても悪い予感が拭えないんだよ」

「…………わかりました。紅玉の騎士団はバイアス公の古巣ですから、

名前を使う許可さえ貰えればなんとかなると思います」

「助かるよフェルダナ男爵」

「いいかげん付き合っても長くなってまいりましたし、フェズと読んでくれて結構ですよ」

嬉しいこと言ってくれるじゃないですか。

「……ありがとう、フェズさん」

急いで公爵に許可を得て現場に向かいはしたものの、すでに現場は包囲が完了し、突撃を慣行する直前だった。

「そばに付き添うための交渉はできなさそうだな……フェズさん。何か飛ばして様子を見てくださいか？」

俺の隣でフェルダナ男爵が頷いて、懷に忍ばしていた鼠を取り出した。

「勝手に入ってしまってしまえばいいではないか。これは雪辱の好機じゃぞ！」

「いやいや、俺らはいくまで裏方だし、目的は悪の成敗なんだから、それを騎士団がやるんだっいたら別に直接手を下さなくてもいいから」

現に今まで物的証拠までを入手した犯罪に関しては、警備隊に任せた事件はいくつもある。それに俺とマイアは一応公認とはいえ、非合法的な活動をしているわけなんであり騎士団とかち合いたくない。もちろんこの場にもいつものヒーロー衣装で来てますし。

「それは……そうなのじゃが……面倒くさいものじゃのお」

せつかくの雪辱のチャンスではあったので残念そうに落ち込むマイアだが、ここは堪えてもらおう。

「……もう踏み込むみたいですよ」

「では失礼して『ジョイント』」

「仕方あるまいか……『ジョイント』」

フェズさんの視覚と聴覚を共有し、現場の状況を見守ることにしよう。願うことなら、騎士団が無事に捕縛してほしいところなんだが……。

第七話 手の平

「突撃！」

倉庫の裏手から入る地下への入り口の扉を蹴破り、騎士団が建物内へと雪崩れ込んでいく。それに乗じて鼠に憑依したフェルダナ男爵も中へと進入する。

「いいか、建物内にいるものは問答無用で捕縛しろ！ 抵抗するなら実力行使で捕らえて構わん！」

指揮官であろう女性騎士が、物騒な内容で檄を飛ばしている。次々と部屋を探索していき、最後に残るは大きな扉が設置してある部屋だけとなった。再び扉を蹴破って十五名ほどの騎士が部屋に入り込んだ。

「ようこそ騎士団のお歴々」

かなりの広さをもった薄暗い倉庫に、あのエッジと呼ばれていた紫髪の男と、ケープと呼ばれていた妖艶な雰囲気の花が佇んでいた。

「紅玉の騎士団かぁ。僕の魔法を防いで見せたあの男の人の騎士団だね！ 今日には居ないみたいだけど、君達も楽しませてくれるんだよね？」

相変わらずの歪んだ笑顔だぜ。

「言い繕いすらないか下郎めが。紅玉の騎士団副長であるこのオデット・ポレヴァンヌが貴様らの体に風穴を空けてやる！」

名乗りを上げて、騎士団副長は突き刺すための剣であるレイピアを抜き放つ。

「へえ、君が『貫穿のオデット』かあ。ケープあれは僕ね」

「わかったは、他はいいわね」

十五名の騎士に対峙してなお余裕を崩さない二人。おそらく騎士団の中でもかなりの精鋭であろう者達相手では、俺らだってまともにやってはあつという間に負けてしまっただろう。

「行くぞ！」

「そういうのは口に出さないほうが相手を殺しやすいわよ？」

まるで諭すように言いながら、ケープが腕を振り下ろす。するとマイアの時と同じ何かが、複数兵達へと襲い掛かった。やはり何かが飛んできている筈なのに、視認することが出来なかった攻撃で、次々と兵が倒れていく。

「『ストーンウォール』！」

兵達の前に石の壁が現れる。その壁へと見えない攻撃が突き刺さっていった。

「あら、流石に冷静なのね」

「皆の者！ あいては認識阻害系のギフトを所有しているぞ！ 防御壁を必ず出しながら戦え！ 怪我人は壁の後ろに待機している！」

支持を飛ばすと副長はケープへと一足のもとに飛び掛る。脅威を排除してしまおうという判断なのだろう。

「だーめ。君は僕の相手だよ」

空中にてエッジに迎撃される女騎士。

「チィ！ 子供相手であろうと容赦はせんぞ！」

「ふふふっ、そうこなくっちゃ！」

閃光のような女騎士の踏み込みから、エッジへと攻撃する。その右腕は加速によって目にも留まらぬ速度になっていた。

「うおっと！」

その初激を手に持った短刀で防いでみせるエッジ。突きを放ったはずの女騎士は攻撃を引き戻したと思ったら、すでに数歩ほどの間合いを開けていた。

「よく私の攻撃をかわしてみせたな」

「お姉さんこそ一撃目から必殺のつもりで攻撃するなんて容赦ないね。でも離れて良かったの？ 僕はどっちかというと中距離の方が得意なんだけど」

「よく言う。私がこのレイピアを引こうとした時に、何か仕掛けていただろうに。それにまだこの距離は私の間合いだ！ 『ウインドコート』！」

再び踏み込む女騎士。しかしさっきよりその速度は魔法により加速して、体すら残像を残して進んでいた。

「いただき！」

しかし俺の時と同じように、おそらくその進行方向にあわせてあの鋼鉄系を忍ばせるだろう。

「『ウィンドウォール』」

突然エッジの目の前に風の壁が現れ、その風によって設置した糸が乱れる。女騎士はその壁越しに突きを放った。意表を突かれたエッジだが、なんとか短刀で防いだのだが、

「わっ!？」

触れた所から何かの力が発生してエッジが吹き飛ばされる。壁に激突しそうになるも、空中で姿勢を翻して両足で壁に着地する。

「へえお姉さん『魔剣』使いなんだ」

「……………」

ついに騎士団副長は顔をやや陰しくして沈黙しだした。その心境はすぐ分かる。なんせ必中必殺のタイミングで攻撃を繰り出したと思ったのに、傷すら付けれずに凌がれてしまう現状。しかも命の危機を味わったはずの相手は、余裕綽々で笑いかけてくる。言い知れない違和感が今頃脳裏に走っていることだろう。

やや膠着した状態になったその時、入り口の方で大きな音が鳴り

響いた。視線をそちらに向けると、居なかったはずのあの巨体の男が騎士団の後衛達を刺のあるメイスで振り払っていた。すでに怪我で数名が動けなくなっていたが、今の攻撃で残すは四名となっていた。

「やばい！？ 男爵すみませんけど行きます！」

「あの女は妾が貰うぞ！ なんとなしにギフトの正体も分かったやもしれん！」

このままでは確実に壊滅してしまうと察知し、俺とマイアは現場へと走りこんでいった。

予想通り現場に駆けつけると騎士団は、けが人を庇うために防戦一方に陥っていた。なんとか攻勢に出ているのは、エッジと衝突していた副長だけだった。

「うりゃあああああ」

全力で巨体の男に飛び蹴りをかます。直撃して立てかけられていた木材に突っ込んで瓦礫の下敷きになっていった。すぐさま俺とマイアは並び立つ。

「この世に闇に蠢く悪を」

「この拳にて叩いて砕く」

「シャドーフィスト」

「シャドーハンマー」

「「参上！」」

一応やっとかないとね。

「やあお兄さん達。会いに来てくれたんだ、嬉しいなあ」

俺は全く嬉しく有りません。むしろ会いたくなかったです。

「貴様らがあの……」

瓦礫から巨体の男が何事も無かったように平然と立ち上がる。

「義によって助太刀いたす！ 俺はあの巨体でシャドーハンマーは女な」

俺の言ってみたい台詞第三位をこっそり付け加えて男へと向かう。

「承知！」

早速ケープへと飛びかかっていくマイア。

「雪辱変わりに貴様の力を暴いてくれるわ！」

「動ける奴はけが人を外に運び出せ！ 邪魔だ！」

庇いながらこいつらを相手にする余裕は流石にないよ。そう言っ
て巨体の男に殴りかかる。騎士団相手に無礼極まりないと思うけど、
今は緊急なんで勘弁して頂きたい。

「せい！」

ナックルを握りしめた右手で、巨体の男の腹部に打撃をお見舞い
する。しかし今度は、吹き飛ばず、僅かに身動ぎした程度だった。

「え？」

しかもそのまま、トゲ付きの鉄球を俺に振り下ろしてきた。

「『ストーンウォール』！」

不意を付かれて咄嗟に防御用に壁を出したが、その速度を僅かに
下げただけで、見事に粉碎されてしまう。なんとかその間に避ける
ことに成功したが、なんて強靱な体してやがるんだこいつ。手加減
抜きで、ナックル使って正拳なんて使ったら、岩が爆発したみたい
に粉碎する威力がでるのに……。

だが、よく見ると俺の拳が当たった腹部は、肉が抉れて血が流れ
ていた。だというのに顔色一つ変えずに、力任せに鉄槌を振り払っ
てくる。これを受けるわけにはいかないので、かわしてみせたのだ
が、こういう筋力をしているのか振り抜いた反動を無理やりねじ伏
せて、次々と攻撃を繰り出してきた。俺の体も大概丈夫なのだが、
コレを食らっては良くても防いだ腕が粉碎骨折してしまうだろう。
まともに当たれば即死間違い無し。現に空振りしてしまい地面にそ
れが当たった石畳は、抉り取らていった。

「力押しは通じない！」

大きく振りぬいた槌が方向を反転させるその間に、巨体の男へ瞬時に潜り込む。そしてその踏み込んだ速度をのせた下段蹴りを内膝へとお見舞いする。人間どれだけ鍛えようと、どうしても残ってしまう弱点というものがある。膝の内側もそれにあたり、強い衝撃を与えると全く力が入らなくなってしまう。

片膝を付きながらも、巨人は腕だけで俺に向けて槌を振るおうとするが、倒れたためかその高さは低かった。それを飛んでかわしつつ、男の顎の部分へと飛び膝蹴りをお見舞いする。

「せいやつ！」

全力で放つ膝に、顎の碎ける感触が伝わってくる。大きな音を立てて男は地面へと崩れ落ちていき、俺は油断せずにその場で残心の構えをとっていた。殺す気で叩き込んだ膝だが、どうやらまだ息はあるらしい。ただどさすがに直ぐに動き出せるような傷ではないだろう。

残りの二人のどちらに助太刀するのか見極めるために戦況を見渡す。マイアはどうやら女のギフトの正体に感付いたのか、見えない攻撃に対応しながら戦えているようだ。一方エッジと副長の方は戦ってはいるものの、依然感じたエッジの本領を発揮するまでには至っていない様だ。今のうちにあの底知れない男に傷を負わせておきたい俺は女騎士の方へと向かおうとする。

「なんだか押され気味で面白くないね。エッジ今日はここまでにしようか」

「えーまたこんな中途半端で帰って言うの？」

「そもそもあんたの失敗の尻拭いでしょ……ほらリザード起きなさい！ 帰るわよ！」

エッジがあのだ鉄線を使うやつで、ケーブルが女のはず。ならリザードと呼ばれるのは瀕死の状態で、俺の後ろに倒れている男のことになるのだが……顎が碎ける衝撃を頭部にくらって、立てるわけ無いだろう。そう思ってゆっくり後ろを振り返ると、そこには平然と立つ大男がいた。

「な！？ そんなバカな！？」

よく見るとさっき碎いた顎も、拳激決った腹部の傷も完全に消え去っていた。

「自動回復？ そんな術聞いたこと……」

いや違うな。意識の無い状態では、いくらなんでも魔法を発動することは叶わない。ならば答えは一つ、こいつもギフト使いか！

「この私が見逃がすと思っているのか？」

「ふふふっ私を捕まえられるなんて思うことが思い上がりなのよ」

ケーブルが壁に手をかけると、その一部分が埋まっていく。すると部屋全体が揺れだした。それを申し合わせていたように、中央に三人が一箇所に集まった。

「それでは皆さん息災でありますように」

崩れ落ちだす建物の中で、三人はその場で姿をかき消した。

「逃がすか！　　^{バースト} 広大であれ『ファイヤーブレス』！」

その消えた地点へとマイアが炎を吐き出す。しかし何かに当たるということもなく、ただ炎だけが残っていた。

「チイツ、集まった姿が既に偽者であつたか」

「よくわかんないけど、とにかく外に出るぞ！」

崩れる建物から慌てて外へと走り出す俺ら。あの三人は言動からして最初から逃げる算段だったようだが、いったいどういうつもりなのだろうか……。いろんな疑問を抱えながら外へとなんとか逃げ延びることに成功した俺とマイアは、女騎士から質問攻めに会う前に、混乱に乗じてその場を後にした。

騎士団に踏み込まれても余裕を見せたあの態度。有利だったはずだったはずなのに、あまりに早い引き際。手の平で踊らされる感触とはこういうものかと噛み締めながら、俺は夜の街を走り抜けていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7690w/>

正にその義は煌く拳

2011年11月29日21時08分発行